

---

# 鋼鉄の咆哮～海原の大鷲～

J I N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鋼鉄の咆哮〜海原の大鷲〜

### 【Nコード】

N2293G

### 【作者名】

JIN

### 【あらすじ】

1939年に突如として勃発し、人々に根強い恐怖心を植え付けたウィルキア帝国を発端とする世界大戦。その1年前、まだ国を乗っ取られる前のウィルキア王国首都シュヴァンブルグの軍港のドックで、1隻の最新鋭イージス艦が建艦を終える。彼女の名前は、フリースベルグ。その名は、北欧神話においてあらゆるものを知り、世界中の風を巻き起こすと言われ、畏怖と敬意で崇められた大鷲。そして、艦魂の少女とそのクルー達は祖国のあるべき姿を取り戻すため、海原に航跡を描く……。《これはPS2およびPSPのゲ

≪ ーム、  
“ウォーシップガンナー2 鋼鉄の咆哮”の二次創作小説です

## 第〇話 大鷲の古き記憶（前書き）

これはコーエー発売のPSS2用海戦アクションゲーム、「ウォーシップガンナー2 鋼鉄の咆哮」の世界観等を基にした二次創作小説です。

二次創作などに嫌悪感を抱かれる方の閲覧はお勧めできません。あらかじめご了承ください。

## 第〇話 大鷲の古き記憶

寒流の海に面した首都シュヴァンブルグの港町、今は夜景が彩る港町の一角に海軍が所有する艦船のドックがあつた。

ドリルの甲高い金属音や、バチバチツといった溶接機の音はほんの数週間前には聞こえていたが今はもう聞こえない。

その証拠に、薄明かりの灯ったドックの中には完成された独特のフォルムを持つ軍艦が静かに大海原に繰り出される時を待っている。

いずれの国の艦船設計規格にも合わず、全く新しい船体を持つて生まれた彼女は、まるでどこかの神が作りたもつた船のような威厳を放つても居るが、実際は洪水を逃れたあの神話の船だつてやはり人の手をつくられている。

そんな事を考えて発言しては、昔よく友人に「君は哲学者になれる」などとからかわれたものだと思ひながら、彼はそのドックに入つて来た。

前を閉めていないトレンチコートにサングラスの風貌、まるでどこかのスパイのようだ。

そんなを高い艦橋から見下ろす小柄な人影が、潮風にさらりと長い髪を揺らす。

しかしそれに気づく事も無く、彼はカンカンと艦左舷に続くタラップを踏みしめながら、彼は艦内から唯一明かりが漏れている艦<sup>ブリ</sup>ツ

橋を目指した。

「いやまあ、お疲れ〜い！！ 今日を以て、この艦の工事工程は終了だ。」

「いやいや、技師長こそ！ 俺たち、お世話になりました！」

祝杯を上げながら、豪快に笑う不精髭の職人風貌の男の周りを若い技師たちが囲む。

「私からも、皆本当に御苦労だった。」

その時艦橋に響いた場違いな声の主、先程の彼が艦橋の鋼鉄の扉を押しあけて現れた。

「ち、中佐……！ あ、いえ……ゴホン」

咳ばらいをした技術科の技師長も軍人の端くれである以上、反射神経が作動したように両足の踵を揃えて背筋を伸ばす。

「艦長、到着されました！」

酒の匂いが艦橋に充満している、おそらく始めてもう30分ほどは経過しているだろう。

もう酔いが回って来た技師も居るだろう、しかしそれを感じさせな

いほどに、技師長の掛声と共に彼らの敬礼は士官達のそれと比べても見劣りしない統制が取れたものだった。

それに対して、自分も高級士官らしい対応をせねば佐官の肩書が涙目になるのは間違いだろう。

艦長こと、カイト・A・トライトンもサングラスを外してキリツとした敬礼を彼等に返した。

「時に技師長・・・私は邪魔だったかな？」

「いえいえ、そんな事ありませんが・・・」

「が？」

「むしろ、嬉しいですね。海軍の消えかけた伝統をご存じなんて

」

「艦内の工事が完了した時に、艦長が訪れて慰労する。と言う物ですか？ 実はそれ、バクスター司令に教えて貰ったんですよ。」

「ああ、なるほど、あの司令オヤジなら知ってるでしょうな。」

「“司令オヤジ”、ね・・・。」

「あ、いや失礼・・・第11艦隊司令官殿でしたな。」

酔った勢いであだ名を言ってしまった技師長が、慌てて言い直したのを聞いて苦笑する一同。

「ははは・・・大丈夫ですよ、何も聞かなかった事にしますから。」

「それより艦長、どうですか・・・是非とも、一杯。」

こう勧められて、未成年でもましてや下戸を公言しているわけでもない以上、

こういう時に飲まないのはまさしく愚の骨頂ならぬKYの骨頂。

カイトは未使用の紙コップを手に取ると、技師長が差し出す一升瓶にそれを向けた。

「こいつぁ、日本から直輸入の米焼酎でさぁ。 さあさぁ、お飲みになってください！」

「では、いただきます。」

とだけ言うと、カイトはそれをすぐさま胃の中に流し込んだ。

首都海軍省でデスクワークを終えてきたばかりで疲れがたまっていたが、

この胃の底から湧きあがる熱がそれを吹き飛ばしてくれるようだ。

「諸君、明日は士官だけでなく、艦隊司令官も到着されて運用試験などを行う。」

それに支障がないように・・・」

「おっと、その事なんですがね艦長・・・私も含めて、

ここの技師の半分くらいが明日此处を発つんですよ。」

「ん？ そうだったのか？ 私は初耳だな。」

「ええ、なんでも他国に出張だそうで……。」

「ほう、それは滅多にない良い機会だろう。各員精一杯精進に励むように。」

ところで、行先は同盟国の日本か？ それとも、技術交流の為にドイツとかかな？」

「それが、あつしにもよく分らんですが、行先はアイスランドだそうで……。」

首をかしげて言う技師長、それを聞いたカイトも聞きなれないワードに当然ながら眉を顰める。

「……アイスランド？ イギリス北西の寒い島国に、一体何の為にだ？」

「理由や内容はこつちが聞いても、担当の士官が『造船や設計に優れた君達にまたとない機会だ』の一点張りで……。」

それでも問い詰めると、あのヴァイセンベルガー大将直々に威令なさった任務だと言って、

煩わしそうな表情をして去りましたが。」

「ふむ……ヴァイセンベルガー大将直々に令達された任務か、内容は推し量りかねるが技師長は実は随分と出世してたんじゃないのかな？」

「だと、良いのですがね……。話は飛びましたが艦長、今日だけは……。」

「どうかどんちゃん騒ぎも見逃してやって下さいませんか？ どうか、一つ……。」

「はーっと土下座のようなマネをしつつ、それでいて言っている事に真剣さを帯びさせたまま技師長は語る。

「はは良いだろう、言っておくが私はそこまで堅物じゃない。

「だが間違っても、ミサイルを首都に向けて誤射したりはしないでくれよ。」

「それじゃ、主砲くらいだったらOKですか？ 祝砲として、こも一つ……。」

先程と同じような土下座の構えを見せる技師長、だが……

「私の返答は、もう分かっていると思うが……。」

「はい、分かっていますよ。ほんの冗談であります！」

笑いが取り巻く艦橋。

こんな風に、艦橋が笑いで包まれることはこの先、この艦が廃艦処分される時や想像したくはないが沈没する時に至っても無いだろう。

だが、運命と言うのはいつも残酷か悲劇かハッピーだ。

この場合は、残酷にあたるのだろうか……。

あんな冗談を言い合うような仲だった技師長、しかし彼はこれから先に起こる悪魔の所業を成す兵器を作り出すことになるとは、この

時誰が予想できただろうか・・・

それから1年後、いよいよ大鷲が大海原を飛びまわる日がやって来る。

だが、その日のあの出来事はまるで濃霧の中から現れた氷山のよう  
に突然起こった。

〜続く〜

## 第一話 運命の暗車は回る

「状況は？」

悪者特有の低い声で唸るように尋ねた男。

「はっ、大演習中の近衛艦隊への国防海軍による攻撃及び殲滅の手筈、全て整いました。」

また、閣下指揮下のシエルドハーフェン方面の近衛艦隊迎撃準備も、先ほど……。」

不思議な事に、秘書も兼ねて彼の耳や口として下に働きかけるのは、この国でも有数の艦隊指揮官であるノイド中将。

たいてい、こういう類の男達が居る場所というのは薄暗く暗躍に適したスペースであるが、机でほくそ笑む彼は違った。

壁には大理石の石柱が白く輝き、頭上には幻想的な光を放つシャンデリアまである。

それは、もう隠す必要が無いという男の何物にも侵し難い絶対的な自信を象徴していた。

そして最も水面下で暗躍する者らしくなかったのは、彼の軍服を覆い尽くさんとばかりに張り付く勲章や階級章の数々。

既にこの条件に当てはまる者は、ウィルキア王国の中では一人しか該当しなかった。

「結構だ。時代遅れの政策を進める王やその派閥は、最早古き時代の遺物。この際、海の藻屑と化してもらわねば。」

では、諸君らの働きに期待する。」  
いや、既に彼の頭の地図にはウィルキア王国という名前はどこにも存在しないのだろう。

「はっ、全力を尽くします。ヴァイセンベルガー大将閣下！」

ピシッと敬礼をキメると、ノイドは足早にヴァイセンベルガーの執務室を去っていった。

いよいよ明日は脱け殻のこの国が、そしてやがては全世界へと広がる革命の始まりの日だ。

そして、世界はこれまで歴史上の英雄や名君も成しえなかった究極の形へと進化する。

同時に、それこそが混沌と怨嗟や欲望に埋もれる世界を救済する唯一の方法なのだ。

その中で、自分は人類初の真の統率者となる。

描かれるべき世界の像が実像となるのを、彼は哄笑を上げながら信じて止まなかった。

カモメの鳴く声と汽笛が、自分を誘うように朝霧の中の波止場から聞こえてくる。

中世時代の由緒ある街並みを残しながらも、時代の流れに合わせて良い所はそのままに徐々に近代化して行く港町。

それが、ウィルキア王国首都のシュヴァンブルグ。

港の方からは行き交う漁船や商船の合間を縫って、国防海軍の軍港からボイラーの黒煙を吐きながら大小様々な艦艇が次々と出向していく。

本日3月25日は数年に一度の頻度で行われる、国防海軍および近衛海軍合同の大演習がシュヴァンブルグの沖合とシエルドハーフェンの沿岸で行われる事になっている。

それらの艦艇を遠目に見送りながら彼女は波止場の一角に腰を下ろし、画用紙に鉛筆のみで見事な風景画を描いていた。

「ほう・・・これはまた見事な絵だ。それなら、絵描きとしてもやっていけるんじゃないか、スワロー大尉？」

その声ができるまで全く背後に気付かなかつたりナは、慌てて振り返りすぐさま敬礼をする。

「すみませんでした、トライトン艦長。」

「ははは、しかし意外だなあ。大尉に、絵画の心得があったとは。」

「・・・」

「それ、どういう意味ですか？ あ、それよりも出航準備の時間ですか？」

「ん？ ああ、厳密にはまだ20分くらいは余裕はあるだろうが、大尉の姿が艦橋に無かったから、

通信長に尋ねたらここ辺りじゃないかと言ってたからな。」

「それで、ここまで来たわけですか・・・。」

「ああ、何分・・・暇だったものでね。」

「そうですね・・・。」

ちよっぴりガツカリした気持ち、苦笑いで隠すリナ。

「まあいい、その絵を描き終わってからでいい。 どうせ、近衛海軍の後発艦隊に続く形で本艦も出航するんだ、時間はたっぷりある。」

「そう言い残すように飄々としつつどこか掴みづらい艦長は、ドックの方に踵を返すように自分の針路を変える。」

「あ、待って下さい。 私ももう向かいますよ。 もう、景色は見慣れているし殆ど覚えているので」

「・・・あとは、後ほど艦内の部屋で描きますから。」

「そう言つとリナが画用紙とかの画材道具をバッグにしまう。」

それを不思議そうに見つめるカイト。

しばらくして二人は前後に並ぶように、正式就航を待つみの艦へと歩き出した。

カイトとリナの二人が艦橋に到着し、午後の出航に備えて全クルーが作業をしていた時だった。

突如、CICの内部が騒がしくなったのが艦橋後方に開かれた防水扉から聞こえてきた。

「CIC、艦橋。 通信長どうしたんだ、やけに騒がしいが？」

カイトが真っ先に尋ねたのは、実弟であり部下でもあるバン通信長。「あつ、にい・・・いえ、トライトン艦長！ たった今、シエルド

ハーフェンの近衛艦隊司令部から緊急事態を示す暗号を傍受しました！」

「何？ いや・・・それは、大演習の一環として発せられたものは無いのか？」

「いえ、暗号の末尾に、“実際”と打電してあります！ また、傍受した近衛海軍艦艇宛に無差別に応答を求めています。」

「むう・・・近衛海軍艦艇限定ではあるが、無差別に応答を求めるとは常時では有り得ないことだ。」

「良いだろう、この艦も近衛海軍の艦艇同然だ・・・シエルドハーフェン司令部に向け応答せよ。」

了解しましたと答えるより早く、バンはシエルドハーフェン司令部に向けて返信を送り始める。

「どういう、事でしょうか？」

「さあな、今の状況では何も分からん。しかし、シエルドハーフェンの沿岸部でも国防海軍と近衛海軍の

合同大演習が行われている。破壊工作を行う工作船が、軍港内に

入り込む事や、ましてや大艦隊が侵入することなど不可能に近い。」

カイトが推察した内容を述べるが、彼自身も何が起きているのか皆目見当もつかない。

「・・・艦長、シエルドハーフェン司令部より入電！ 本日1000時頃、国防海軍第3艦隊所属の

フレースベルグ級ミサイル巡洋戦艦“ニーズヘッグ”が、何者かによつて強奪された模様！」

「・・・ごつ、強奪！？ 通信長、それは一体誰が！？」

リナが声を荒げるのと同時に、艦橋に上がっていたクルーに緊迫した空気が漂う。

「わ、分かりません。ですが、受信した内容には確かに・・・ん？ これは・・・」

「強奪にしては、綺麗すぎる・・・。」

カイトが呟きにしてはやや大きい声量で言った次の瞬間、CICが

「またも喧噪に包まれる。」

「方位050、本艦との距離約20kmの海上に所属不明艦隊出現！ 島陰に隠れて、レーダー探知が出来なかった模様。」

「CICのバンの視線の先にはモニターに映し出されたレーダースクリーン、その中に光点がいくつも出現していた。」

「速度約20ノット、反応の大きさから駆逐艦4隻、戦艦1隻の模様。」

「所属と艦種の解析を急げ。」

「了解・・・え？ 所属不明艦艇より小型目標分離、山なりに飛翔して来る・・・これは！！ 艦橋、CIC！！」

「所属不明艦が砲弾を発砲した模様！！」

「なんだと！！」

これには、流石のカイトも驚かざるを得なかった。

「至近弾、着弾まであと5秒！」

「バンの引きつった声が聞こえるのと、カイトが全艦放送に繋いだマイクに手を伸ばすのはほぼ同時だった。」

「総員、衝撃に備え！！」

次の瞬間、雷が近くで炸裂したような物凄い轟音と地響きが、外から隔たれた艦橋をも襲い、ドックの屋根や壁を泥壁のように削り取った。

しかし、支柱は無事であったため建物自体は辛うじて倒壊はしなかった。

「くっ・・・CIC、艦橋！ 被害を報せ！」

カイトの送話にやや遅れて、CICのバンから応答があった。

「艦橋、CIC。 各区怪我人は居ない模様。 また、落ちてきた鉄骨により、通信設備の一部に故障が発生！」

しかし、目下航行および戦闘に支障なし！」

ひとまずそれは良かったと安堵するカイト、だがまだ不安要素が消えたわけではない。

「艦長！ 不明艦より通信！ 発信源は、国防海軍艦艇戦艦シユヴ

「アンプルグです！」

「味方のはずの国防海軍がなぜ！？ いや、そもそもなぜシュヴァンブルグ港に……。まあいい、全艦放送に繋いでくれ。」

「ブツツと言う音が一瞬、スピーカーから聞こえた。それこそ、通信が繋がったいわば合図のような物だった。」

艦内に緊張が走る……。もちろん誤射の可能性もあるが、それは本当に微々たる可能性だった。

だが、出来ればそうであって欲しい、そう思いながらカイトはマイクを握った。

『こちら国防海軍戦艦シュヴァンブルグ艦長、旗艦への出航中止命令が出ている。』

相手の顔がなんとなく想像出来るような野太い声が聞こえる。

おそらく、その表情も野兎を追い詰めて銃口を向ける狩人のように不敵な笑みを浮かべているに違いない。

「こちら近衛海軍巡洋戦艦フリースベルグ艦長、我々は近衛海軍司令部の命令を受けて動いている。」

貴官の出航中止命令を受諾する前に、近衛海軍司令部との連絡を要求する。」

カイトは比較的落ち着いて応答した。

それもそのはず、これくらいで慌てふためくような軍人なら軍艦の全乗組員の命を預かる艦長にはなれまい……。

『残念だが、その近衛海軍は反乱を起こし逃亡した。貴艦も例外でなく、反乱の疑いがかかっている。』

「何！？ 近衛海軍が反乱だと？」

『そうだ、本日1000時の合同大演習に乗じて、近衛海軍が国防海軍の艦艇に攻撃を仕掛けた。』

そしてそのまま、艦隊は南下。シールドハーフェン方面で演習に当たっていた艦艇も同様に反乱を起こし、そして逃亡した。』

「近衛海軍が……嘘でしょう！」

マイクの先の相手に聞こえるようにか、リナが大声で叫ぶ。

『だれかは知らんが、これは虚報ではない。我々は、諸君らの無実を信じたい。そのために、艦から下船せよ。』

「・・・分かった。少し待って頂きたい、5分ほど時間が欲しい。」

通信を終えマイクを元の場所に戻すと、いつの間にか乱れていた帽子をかぶり直す。

「艦長・・・私は信じられません！近衛海軍が反乱など・・・ですが、艦長は信じるのですか？あの近衛海軍が、叛旗を翻すなどと言う事が、有り得ると言うのですか！？」

先程の「わかった」を承諾の返事ととったりリナがカイトに迫る。

そんな彼女や不安がるクルー達に向けて、カイトは何かを見抜いたという表情、薄い笑みを浮かべた。

「安心しろ。裏切ったのは、近衛海軍じゃない・・・国防海軍だ。」

さて、まずは降りかかる火の粉を払わねばならんな。」

そう言って、通信は切れているが全艦放送に繋いだままのマイクを再び握る。

「諸君、今の信じがたい通信を聞いただろうが、安心して欲しい。」

私が思うに、反乱を起こしたのは国防海軍の方だ、そしてもちろん確証はある。もし諸君が近衛海軍と、そして私を信じるならばどうか落ち着いてほしい。だが、もし不信を抱く者がいるならば止めはしない・・・1分待つ、今すぐこの艦を下船することを勧める。」

マイクを置いて、艦橋から外の様子を眺めるカイト。

15秒経過、未だに甲板に一人も現れない。

30秒経過、最後尾に下船希望者が居ればそろそろ・・・と思っていた時だった。

五人ほどのクルーが、甲板の上をかけ足で船首の方に向かっていく。しかも彼らはCICの射撃管制などに携わる、いわば攻撃のスペシヤリスト。

貴重な人材に不信を抱かれたか、とカイトが悔いかけたその時・・・  
彼らは予想外の行動に出た。

なんと、接岸しているドックと艦を繋ぐタラップを取り外し始めたのだ。

その時、CICから通信が入る。

「安心して下さい艦長、全区逃亡者は居ませんよ。先程、CICの何名かをタラップを外しに向かわせました。」

「了解した。諸君の賢明な判断に、感謝する。」  
マイクを片手にひとまず安心といった表情のカイト。

「副長。」

「はっ。」

「CICの方へ向かってくれ。この艦は、敵艦との交戦、ならびにシュヴァンブルグ港からの脱出を図る」

「了解しました！」

敬礼を送ると、すぐさま閉まりかかった防水扉をスルリと軽い身のこなしで潜り抜け、リナはCICへと急いだ。

> i9843 — 1438 <

> i9844 — 1438 <

シュヴァンブルグを脱すれば、北方の海域には所属する第十一近衛艦隊の本隊が居る筈だ。

「これが、本艦の最初の戦闘だ。諸君の働きに期待する、対水上戦闘用意！」

「対水上戦闘よーい！これは演習では無い！繰り返す、これは演習では無い！」

CICのバンの復唱の後に、全艦にサイレンが鳴り響く。  
全クルーに、先ほどとは違った緊張が走る。

その時、無線が再び敵艦と繋がる。

『こちらシュヴァンブルグ艦長、下船の状況を報告せよ。』

「フリースベルグ艦長、残念ながら貴官の命令は受け入れられない。

「なんだと？」

「状況から察するに、反乱を起こしたのは近衛海軍じゃない。国防海軍の方だ！」

「何を訳の分からんことを、命令に従わなければやむを得ず貴艦を撃沈する！ 撤回するなら今のうちだ。」

「確証ならある。貴官等が、反乱を起こした忘恩の輩だと言う確証がな。」

「くつ、言わせておけば勝手なことを・・・仕方あるまい、それまでして死に急ぐなら望みを叶えてやらんでもない。」

だが忘れるな、貴艦はドックを出なければこちらに砲塔を向ける事はかなわんだろうが、

こちらの砲塔の照準はすでに貴艦が入渠しているドックの入り口に合わせてある。」

「艦橋、CIC！ 小型艦4隻がさらに前進、本艦との距離を急速に縮めます！」

無線が途絶すると同時に、敵艦隊前方に待機していた駆逐艦四隻が前方に進撃を始めた。

砲撃では精密に目標に当たらない事実を踏まえ、魚雷攻撃により確実に仕留める事を目論んだのだろう。

それにしても、砲塔がどこを向いているだのそういう事を教えてくれるとは、よほど自信過剰な艦長だとカイトは思いながら艦長席に座る。

「・・・前甲板VLS、突出している駆逐艦に向け対艦ミサイルによる攻撃を行う。」

「待って下さい、ミサイルの発射方向にはドックの天井がありますよ！」

「副長、それは大丈夫だ。あの屋根は、トタンで出来ている。」

軍艦の装甲を貫通出来る性能の弾頭装甲が、突き破れぬ筈があるまい。

『了解しました。 前甲板、VLS121番から124番を開放！』  
その復唱の後、前甲板に埋め込まれた四角いVLS発射機構の無数の蓋のうち、四つがカパッと上を向くように開く。

『目標レーダーロック完了。 対艦ミサイル攻撃準備よし！ 艦長・』

通信機の向こうのリナが少し心配そうに発射の合図を彼に求めた。この合図をすれば、敵艦と見なした艦艇は間違いなく沈むだろう。そして、死傷者も当然ながら出るだろう。

だが・・・今の自分にとっては、自分に命を預けた仲間達の方がはるかに大事だ！

そう言い聞かせて、彼はマイクの送話のスイッチを入れた。

「一番から四番発射用意・・・撃てー！」

その合図を受けて、射手が押したボタンから電流が配線を伝って流れる

そして電流は、前方の甲板内で息を潜めるミサイルの点火プラグへとついに到達した。

その瞬間・・・

グワアツと艦の前方のVLS排煙噴出口から炎が噴き上がる。

発射機構内部のロックと重力の束縛から放たれた合計4発のミサイルが瞬く間に空に舞い上がった。

「ぜ、前方ミサイル接近！ 迎撃急げ！」

「駄目です！ 間に合いません！」

駆逐艦の乗組員の眼前には、白い排煙とロケット炎を噴き出しながら迫りくるミサイルが映る。

そして・・・

「ミサイル命中！ ターゲットキル、繰り返すターゲットキル！」

「よし、機関全速！ 一刻も早くシュヴァンブルグ港を脱出する！」

カイトが艦長席から告げた時を同じくして、遅れて聞こえた爆音。

だが、感傷に浸っている場合では無い。

「全速前進！」

航海士がレバーを操作し推進軸が駆動・・・艦内に出航を待ち望んでいたとばかりにフリースベルグの唸りが響く。

暗車を全速で回転させ、内部の水流を攪拌させながらドツクの壊れかけた開口部から姿を現したフリースベルグ。

フリースベルグの艦橋からは、炎上し傾きつつある駆逐艦から飛び降りる乗員たちの姿がはつきりと分かる。

それは、当然ながら彼にとっては不意打ちを受けての屈辱以外の何物でもなかった。

『おのれ・・・小癩な真似を！ 第一第二砲塔、攻撃はじめ！』

その時、既にフリースベルグをその照準に捉えていたシュヴァンブルグの主砲が、怒り心頭の艦長の合図で一斉に火を噴いた。

「戦艦シュヴァンブルグ、発砲！ その数、6！」

それは、すぐさまCICのリーダーを見張るリナの目にとまった。

「大丈夫だ、この艦の加速力なら交わせる筈だ！ このまま直進しろ！」

カイトが艦橋から水平線の向こうの方に居座る戦艦シュヴァンブルグの姿を確認した。

すると、その上空に一瞬キラリと光るものが見えた。

「主砲の砲弾だ！ CIC、着弾まであとどれくらいだ？」

「着弾まで、あと5秒！」

「総員、至近弾の衝撃に備えよ！」

「あと3秒・・・2秒・・・」

（大丈夫、この艦は・・・私たちの意志は絶対に沈まない！）

正確にカウントダウンをしながら、リナも座っていたコンソールに覆いかぶさるように対ショック姿勢を取る。

次の瞬間、艦を揺さぶる衝撃が彼女たちを襲う。

（艦は・・・！？ ダメージは？）

急ぎダメージコントロールのモニターに視線を移すが、全ての兵装

や船体各部の表示が全て緑で表示されている。

ということ……

「艦橋、CIC。敵艦の主砲弾、全弾回避成功！」

それを聞いて艦内のクルー達は、喜悦の表情や言葉を口にしていた。そして対する戦艦シュヴァンブルグの船員には、常軌を逸脱したものを見つめていると言った表情が浮かんでいた。

「あの距離で全弾回避するなんて……なんて加速力だ！」

戦艦シュヴァンブルグのクルーが双眼鏡をのぞきながら、フレースベルグの加速力に目を見開く。

「ぬうう……こうなったら、先を見越した偏差射撃で仕留める！  
全弾を放つても、あの艦を沈める！」

激昂しながら命令を飛ばす艦長、ついでに唾も飛んでいる。

まだ諦めるには早すぎるのは確かだが、間違ってもらっては困る。最初に攻撃を受けた以上、こちらも当然ながら攻撃する権利を持っている。

「戦艦シュヴァンブルグ、主砲の砲身仰角を下に下げます！」

高倍率望遠鏡を覗いていたクルーが、状況をカイトに伝える。

同時に、マストに取り付けてあるカメラがその様子を捉えており、艦橋のモニターに映し出される。

「諦めたわけでは無さそうだ、おそらく再装填しているのだろう……」

戦艦の砲塔は、約3度まで角度を下げなければ再装填は出来ない。先程の砲撃で上を向いていた砲口が、今ではほぼ水平方向を向いている。

これは何より、まだ相手が攻撃する意思があると言う証拠だった。

「CIC、艦橋。戦艦シュヴァンブルグの攻撃手段を奪いたいが、何か方法は無いか？」

「こちらCIC……三基の主砲に対艦ミサイルを鉛直に近い角度でヒットさせてみたらどうでしょうか？」

「いや、そしたら内部の弾薬庫までを破壊して、最悪の場合あの戦

艦は大爆発を起こして轟沈しかねん。

すでに駆逐艦を四隻も沈めておきながらこういう事を言うのはどうかとも思うが、やはり犠牲は少ないに越したことは無い。」

「そうですね・・・あの艦は射撃の大半を目測に頼るので・・・目測？ そうだ！」

何かに閃いたようにリナが叫ぶと、マストのカメラを遠隔操作する。

「艦長、戦艦シュヴァンブルグの主砲は、艦橋上部の目測を射撃方位盤によって行う事で射撃の大まかな方角や角度を決定します。

それさえ破壊できれば、もう主砲の狙いは定まらないも同然です！」

「よし分かった。だが、ミサイルでは威力が強すぎる・・・よし、AGSの精密射撃で攻撃する！」

前甲板で固定されていたAGS砲塔が、戦艦の巨砲と比べ物にならないくらい的身軽そうな動きでクルリと旋回し、

その砲口に戦艦シュヴァンブルグを捉える。

タンツとこれもまた巨砲と比較して軽い破裂音と共に、今度はフレールスベルグから砲弾が打ち出される。

「測距急げ！」

「目標方位343、距離・・・」

言いかけた瞬間、測距手が覗く測距器に一瞬赤熱した物体が映り・・・

スガアツ！！

戦艦を艦橋上部から激しい揺れが襲う。

「ど、どうした!？」

「艦長！ 主砲測距器が攻撃を受け損壊、主砲発射不能！」

「死者は居ませんが、艦橋上部の照準室に軽傷者がいる模様！」

「くっ・・・ううう、おのれえ・・・！」

怒りに身を震えさせながら、目測での適当な射撃を命じようとも思っただが、彼は一度深呼吸をして自分を落ち着かせた。

「・・・国防海軍本部に連絡しろ、本艦は敵艦より照準装置に攻撃を受け戦闘続行は不可能。」

「これより、漂流する本艦隊の船員を救助を開始する、と。」

戦艦シュヴァンブルグが沈黙し、動き出す気配もないことから、フリースベルグ艦内では戦闘終了

並びに武装納めの命令がカイトの口より告げられた。

「とにかく、本艦隊との合流地点に急ぐぞ。針路変更100、速度そのまま。」

そうはきはきと告げるカイトの脳裏にも、今回の戦闘を招いた原因としていくつものシナリオが浮かぶ。

一体何が起こっているのか、それはこの艦の中の誰一人として正確な答えを出す事は出来ないだろう。

その答えを探す……。

最初の行き先をそれに定め、フリースベルグは大海原にその航跡を描き始めた。

～続く～

「IEN」「ごめんなさい、あとがきは次話にてっ！！」

## 第二話 艦と魂の少女

もともとウイルクア王国沿岸は、寒流の影響でヨーロッパと比べて圧倒的に冬寒く、夏涼しいと言った気候だった。

そして、今彼らが居るのはそのさらに北方の海域。

当然ながら吹き上げる波しぶきが、もう4月になるうとしているのに氷水のように冷たい。

国防海軍突然の急襲から丸4日が経過・・・だが、この数日で全てが変わった。

情報によると、国内では我々は国王を誘拐し、祖国に刃ならぬ砲口を向けた裏切り者扱い。

逃げきれずに捕虜となった近衛海軍の兵士達は、国内で未だに酷い扱いを受けているらしい。

もともと、彼らにとって堪えているのは拷問による痛めつけよりも勘違いをしている国民の言葉責めだったりするわけだ。

近頃、国民主権と言う制度を聖書やコーランのように崇め、政治システムに於いて文化先進国家を名乗るような国が出始めてきた。

しかし、良く見るが良い・・・。

本来自らの確固たる意志を持って国家をあるべき方向に導く国民は、軍部によってリークされた情報をよく考えもせず鵜呑みにし、無知の富豪を詐欺師がいとも簡単に騙すようにコロツとってしまうのだ。

これほど、国民と言う生き物の影響が実に大きく、そして何と愚かな集団かと思つた日は無かつた。

現在原子力で航行しているため、ガスタービンのような振動騒音が無いフリースベルグの艦内。

寝台設備も整っており、古い設備の船員達はこの有様を見た瞬間、

“フリースベルグ・ホテル”だの言うに違いない。

日付が変わる前にカイトは操艦を副長のリナに交代していた。普通に寝るにしても十分な時間はあった。

だが、既に水平線の向こうから朝日が昇って来たが、結局あまり寝付く事が出来ないでいた。

理由は多々ありすぎる。

結局色々な事を考えて、脳が寝させてくれなかったのだ。

それも仕方ない性だと思い、カイトは艦長室の寝台から体を起こした。

周り一面海だらけ……。

海以外に見えるのは水平線から顔をのぞかせ、その神々しい光で世界を照らし始めた太陽だ。

近衛海軍艦隊は蒼穹の空色に染められた大海を、現在のところ二手に分かれて逃避行を演じていた。

一つが、我々近衛海軍第11艦隊を中心とした北方に退避した艦隊。そしてもう一つのヴィルク国王が座艦し近衛海軍旗艦イダヴァルが率いる艦隊。

その艦隊は頼れるある国へと向かっていた。

太陽の昇る国……言いかえれば日が出ずる本の国。

すなわち、日本である。

日本とウィルキア王国は、幾つもの共同戦線を通じての古くからの同盟国だ。

また、共に世界有数の海軍国家でもある。

そのイダヴァルからもたらされた情報では、近衛海軍はもともと国防海軍に対して

圧倒的に少なかった戦力のすでに3分の1を、大演習中に起きた国防海軍のクーデターによって喪失。

現在、同盟国日本に対して保護を求め、横須賀へ航行中とのことだった。

一方の我々は、太平洋北洋のアリユーン列島帯をさらに北上。

ユーラシア大陸の最東端とアラスカのご近所、ベーリング海に進入しようとしていた。

ギィイと艦橋の防水扉が重く軋む音を立てて開き、そこからカイトが姿を現す。

「皆、御苦労。 状況はどうか？」

「おはようございます、艦長。 現在のところ、特に変わった報告等もありません。」

あと一時間ほどで、我が艦隊の合流海域に到達します。」

「そうか、今後も半舷にて休息を取れ。 働きづめの要員は、休んでくれて構わないぞ。」

それを聞いて、やっと解放されたといった表情になったクルーが何名か。

さて、艦長席に座ってゆつくりさせてもらおうかと思っていたカイトの顔を誰かがじーっと覗き込んでいた。

「艦長・・・どうやら、眠れなかったようですね。」

リナがやれやれと言った表情で言うが、傍から見ればそのやりとりはまるで小学校の保険医と生徒のやりとりだ。

「・・・うむ、だがこんな状況だ、眠るには悩みの種が大きすぎて多すぎる。」

「お言葉ですが、艦長は一人で抱え過ぎですよ。 何も、艦長のせいでこんな事になった訳ではないでしょうに・・・。」

それに、体を壊されてはこの先の行動に支障が出かねませんよ。」

「そうだな、それはすまなかった。」

少しばかりではあったが、微笑みかけて二人の会話がこれからと言う時に艦橋にCICから通信が入る。

「艦橋、CIC。 本艦の進行方向に反応、その数7。 うち、大

型の反応が5つ。」

やれやれとカイトとが通信に出ると、彼と同じ時刻に休息に入った通信長のバンからだった。

しかし、彼もまた寝起きであるのに澆刺とした声で状況を告げる。

「おそらく、我が第11艦隊だな。通信士、艦隊旗艦戦艦シエルドハーフェンにこちらの艦名および状況等を打電せよ。」

『了解しました。』

「しかし・・・第11艦隊は7隻全艦が健在か。」

近衛海軍の喪失艦艇の大半は、初弾で同時多角多数の攻撃を浴びせられて沈められている。

それはつまり、この艦隊が不意打ちとも言える国防海軍の初弾を全て回避したという、練度の高さを物語っていた。

と、カイトは思っていたのだが・・・

「買いかぶり過ぎだよ・・・偶然、後方に控えていたから敵と遭遇する機会が少なかっただけの事だ。」

少し話したい事があるが、その前にミーティングだ。」

乗艦した先で熟練を感じさせる白髪のお爺さん将校が放った言葉に、呆然とするカイトの空想艦隊はここで撃沈された。

しかし彼こそがこの第11艦隊を、攻撃を浴びる機会は少なかったものの無傷でここまで廻航させ、

見事に追手の追撃部隊を撤いた逃避行の立役者、ジェラルド・バクスター大佐。

彼の人望の大きさから、他の艦がここまで有無を言わずに彼に従い付いて来たのは、紛れもない事実だった。

艦隊を合流した今、各艦の艦長達が旗艦シエルドハーフェンにおいて今後の艦隊のあり方を協議している最中だ。

その中には、新しく艦隊入りを果たしたフリースベルグの事も議題に上がっていた。

「従来の軍艦のどのスペックをも上回る艦だ・・・。」

「ああ、敵の手に渡らないで何よりだった。」

そう不幸中の幸いを口にする他艦の艦長達は、カイトとは平均で二十歳近く年が離れ、

聞いた話ではカイトと同一年くらいの子がいる老艦長さえもいた・  
。

そんな彼らが出した一応の結論・・・

「この場に於いてミサイル巡洋戦艦フレースベルグを、第11艦隊の旗艦とする。まあ、もともとその予定だったのだが。」

そのバクスター長官の一言で、今後のフレースベルグのクルーの身の振りが厳かな物になるであろうことがカイトには十分予測された。長官在艦となれば、おかげで羽目を外せないと不満をぶちまける船員たちの怒った顔が浮かぶ。

簡単ではあったが旗艦拜命の式典を執り行った後、バクスター長官がいよいよフレースベルグに乗艦した。

そして日も沈み西の空からは夜陰が忍び寄って来たころ、バクスター長官の最初の指令が下った。

それは長官が在艦する旗艦の証明にもなる旗を、他の艦に比べて小さいフレースベルグのマストに掲げるという作業。

もつともその作業自体は下士官の仕事であり、カイト以下艦橋クルー達はただ直立し敬礼を捧ぐだけだった。

「でも・・・直立も意外とキツイんだぞ・・・。」

式終了後、不満をこぼしそうだった若い作業員に、バクスター長官が何気なく囁いたのにはカイトは少しヒヤッとさせられた・・・。

カイトに伴われていよいよ長官が艦橋に上がると、艦橋およびCIの一部の高級士官達が敬礼を以て出迎えた。

「そう堅くなる必要はない。」

「はっ・・・しかし、長官に礼を欠いたとなれば、ウィルキア軍人としての気品が疑われますので・・・。」

申し遅れましたが、本艦の副長“リナ・スワロー”大尉です。」  
相変わらずの堅物ぶりを発揮するスワロー大尉。

「うむ、まあよろしい。さて、艦橋に上がって早速で申し訳ない

が諸君らに調べて欲しいものがある。」

そう言いながら、ボックス長官は年季の入った雰囲気を放つ海軍服から一枚の紙のような物を取り出した。

「そう言えば、先ほど話があると言っていましたか、この事ですか？」

「うむ、そうだ。これは、貴官らがこの海域に到達する三日前の事だった。」

我が艦隊のレーダー機器に異常が発生した。これが、その時のレーダースクリーンを映した写真だ。」

それを見て、カイト達士官が皆首を傾げる。

「一見、レーダースクリーンにノイズが映り込んでいるように見えますね……。」

「……ですが、詳しい事は専門家に見てもらわないと、何とも言えませんね。」

「専門家？」

「ええ、電子戦および電子機器関係のエキスパートですよ。」  
カイトが長官の方を向いて何やら自慢げに語った。

「まったく……何で通信長兼砲雷長の俺が……。」

ダウンジャケットを着込んでいるのに、ベールリング海の寒風にガクガク震えながらマストに登り作業をするバン。

出航時に落ちてきた鉄骨がマストの通信機器を直撃し、さしもの頑丈な通信設備も故障せざるを得なかった。

もつとも、故障したのは送話においてで、受話においては問題無かった。

そんな彼に追い討ちをかけるように、またもや冷氣そのものが激しく吹きつける。

「うー寒いつ……くそう、こんな厄介事押しつけやがって兄貴のやつ……。」

「それは、艦長さんが通信長さんしかこの仕事はできないって信頼

している証拠ですよ。」

妙に高くそれでいて無邪気そうな声が聞こえてきたが、それを聞いてバンは修理箇所を見つめたままへへと笑う。

「そうかい、そいつはありがとよ……ん!?」

ひびの入ったカバーを取り外そうとスパナを取り出そうとして、バンは手を止めて慌てて振り返った。

振り返った先のマストの後部、ちょうど掲揚機の頂上部の辺りに一人の少女を見た。

見た目は14か15くらいだろうか？

清楚な顔つきに一応ウィルキア海軍の軍服、そして長い水色でポニテールで纏めた髪を寒風になびかせながら満面の笑みでこちらを見ている。

(……いかん、幻覚……かな?)

両目をグローブをはめたままの左手の指で、ギュツと押さえつける。数十年前から世界の国々に先駆けて、実力主義のウィルキア海軍は能力のある人なら女性でも軍艦に乗せると言う古い観念にとらわれない方法を取った。

確かに、この国に於いてスワロー副長のように女性が軍艦に居ると言う事は別に珍しくない。

だが、見た感じ士官学校に入学すらしていないくらいの少女がこの艦に乗っているのはいくら何でもおかしい。

何より不思議だったのは、彼女の体が僅かではあるが淡く光っていたこと。

(よし、これで幻覚なんて……)

再び振り返るが、やっぱりまだ居る……。

しかも、いつの間にか取り外した長官が乗艦していることを現す信号旗を掲揚機からどうやってか取り外している。

そしてそれを自分の体に巻きつけてキャツキャやって遊んでいる！一瞬このまま見ているのも楽しいかなとか思ったが、遊んでいるのが国旗よりも貴重な旗と気付いてバンはあまりのことにスパナを落

つことす。

「ちよちよちよちよつと待ったあああ！！ それは、長官が乗艦していることを証明する大事な旗で・・・ん、うわわわああああああつ！！！」

ドシンン！！

「あ、通信長落つこちた・・・。」

数メートル下の艦橋後部の甲板に尻餅をついてしまったバン。

それを未だにマストの上からこちらを見つめている少女が呟き、軽くステップをするように高いマストの上からジャンプして体操選手顔負けの着地を決める。

「あつただだだつツ！！ 腰があー・・・！！！」

「大丈夫？ フツーの人間なら、腰の骨折ってもおかしくないよ？」

「イテテテテ・・・さて・・・。」

むんずつと、おもむろに少女の右手を掴む。

いや、別に何か気があると云う訳では無い。

全然ないといつても、ウソになる気がするが・・・とりあえず、捕まえたのだ。

本当に、変な意味では無いからなっ！！

「君は、誰だ？ アダダツ・・・いつからこの船に居る、ん？」

あくまで相手は感じからいつても子供だ、怖がらせないよう細心の注意を払いながら迷子の子供に尋ねるように出来る限り優しく語りかけるバン。

「えーと、その・・・なんて言ったら良いのかな・・・。」

困惑した表情になる少女を見て、バンは思わず顔を背ける。

言わなくても分かるだろうが、一応言おう・・・とてつもなく可愛いのだ。

（駄目だ駄目だ！ 俺はウィルキア近衛海軍の通信長兼砲雷長だぞ！）

煩惱を払拭するように頭を十往復くらい高速で振って彼女を見据えようとした時だった・・・

「その通信長!！」

遠くから凜とした女性の声がした。

いや、それにしても普通呼ぶなら「その人!」とか「そのお前!」じゃないかと思いつながら、声が出た方向を向く。

遠くでよくは見えないが、腕組をしてキツとこちらを見据える彼女もウィルキア海軍の軍服を纏っているようだ。

しかし、自分が未だに手を掴み続けている少女同様、彼女が立っている場所もまた奇妙なところだった。

そこは、左舷200mくらいに停泊している戦艦シエルドハーフェンの二番砲塔の三連装砲の真ん中の砲身の上だった。

すると、シユバツと砲身の上からドラゴ ボールなみのスーパージャンプを披露して、こちらに飛んでくる!

「お前がその娘を口説こうなど・・・」

「は?」

「10万年早いわつ!！」

飛び蹴りの体勢に入った彼女のブーツがバンの眼前に迫る。

「はいいいっつ?!? ふごっ!?!?」

その一撃は、彼の顔面にモロにめり込んだ。

「あらー、どうしちゃったんですかお姉さま? 派手にやっちゃいましたね・・・。」

ほのぼのとしたお姉さんの声はどこからともなく聞こえるが、目の前は真っ暗。

(これは、初めて聞く声だ・・・またどこからともなく・・・)

「こ奴が、私たちの妹を口説こうとしていたからな・・・。」

「それはけしからんな、このまんま海に投げ捨てたらどうだ?」

続いて聞こえたのは、男勝りな少女の声。

(いえ、それは勘違いです・・・てか、冗談抜きでそんなことされたら死にます。すでに気分的に死にそうだけど・・・)

と言いたかったのだが、既に意識が遠のきそう。

「いや、お姉さま実は・・・」

事の発端の少女が、何かを言おうとした時だった・・・

「君達は・・・。」

老いたが威厳ありといった感じの声で倒れ伏しているバンにも、当然彼女たちにも聞こえただろう。

（ん？ この声つい最近、どこかで聞いたぞ・・・）

「どうしたのだ、シエルドハーフェン。 皆を集めて・・・。」

（は？ シエルドハーフェンツッ!? 人名にしては、なんつうネーミングセンスだ・・・）

「おっ!? トライトン砲雷長!? バン君、どうしたんだ!?」

「長官、その実は・・・」

自分をノックアウトした彼女が、言いにくいことを言うように口を開く。

（長官・・・そうだった、バクスター長官の声だ。）

どうやら、長官がTKO状態の自分を見つけてくれたらしい。

「わけは後で聞く、それよりも誰かおらんか!!?」

「・・・どうしたのです？ 長官？ おや？ 彼女たちは？」

（この声は、兄貴・・・艦長・・・どつちでもいいや、もう。）

「ほう、君にも見えるか・・・いや、それより今は彼を！」

「ん？ バン!・・・一体、何があつたんだ!?」

疑問はいろいろ残っているけど、助けが来たからとりあえず安心かな・・・

そう思った瞬間、バンの意識は完全に闇に落ちた。

（とういふか、なんで俺がこんな目に・・・確か、ほんの数本の配線を直すだけだったのに・・・）

元はと言えばあの子のせいで・・・）

意識が戻り、医務室のベッドに横たわるバンが目を開く・・・

すると、最初に見えるのは白い天井とかいきたいところだが、見えたのは自分を覗き込むあの少女のパチクリした目だった。

「キヤッツ！？」

「うおわっ！？ き、君は！？ イダダダダッツ・・・！！」

いきなり開いた目に驚いたのだろう、少女はバンが寝ていたベッドから転げ落ち、バンも慌てて体を起こしたせいで腰に激痛が走った。「気がついたかね？」

すぐ横の椅子に、バクスター長官が読んでいた本をたたみながら呼びかけた。

「長官・・・あの、この子は？」

「うむ・・・それを話す前に、ちよっとな・・・カイト君、良いぞ。」

『はい。では、どうぞ。』

医務室の扉が開け放たれ、最初に目についたのはその扉を開けた兄のカイト。

そして、次に姿を現したのは・・・

(げっ!?)

先程自分に見事な飛び蹴りをお見舞いした少女だった。

だが、先ほどのように殺気だった表情ではなく少しばかりシユンとしているようだ。

「先ほどは私の勘違いで暴力を奮ってしまい、大変失礼いたしました。」

「は、はあ・・・。」

それしか言えない、まだ状況理解に苦しむからだ。

「それで、あなた方は一体？」

何よりも核心的な事をバンは尋ねた。

先刻もこれを聞こうとして、目の前の少女に蹴り倒されたのだった。

「うむ・・・それは、私から話そうかな・・・。」

口を開いたのは、パイプ椅子をたたんで立ち上がったバクスター長官。



聞いた凜とした声だ。

さすがといふかなんと言つか、様々な改装を施されながら30年近く第11艦隊の旗艦に君臨していただけの事はある……。

「そして私がこの船の艦魂、フリースベルグです。お姉さん達からは、フレスと呼ばれてます。バン通信長、以後よろしくお願いします。」

まだ慣れない仕草で敬礼をする彼女、なるほど……事の発端の少女は、この最新鋭艦の艦魂だったのか……。

その頃、どこからともなく覗く者が約一名。

潜望鏡から得られる映像を見た彼の眼には、ボイラーの煙を落とす海を寝床とする艦艇が静かに眠っているように見えた。

「間違いない、艦形から近衛海軍第11艦隊と思われる。」

「作戦本部より指令、敵艦隊を海の藻屑へ変えよ。貴艦隊の武運を祈る。」

そうか、とだけ呟くと再び潜望鏡を見つめる潜水艦の艦長。

「一隻多いな、それに変わった艦形だ。まあいい全艦、魚雷攻撃

用意！」

旗艦に続いて、次々と攻撃深度に浮上する国防海軍の潜水艦。

深海の狩人、その数2隻。

「発射用意……撃てーっ!!!」

圧縮空気を排出するような音を立てて各艦から4発、合計8発が停泊する第11艦隊向け放たれた。

それは、出航以来暇を持て余していたソーナーにはとんでもないアラームだったに違いない。

すぐさまもう一人が全艦放送のスイッチをいれ、ソーナー室のマイクを手に取る。

「魚雷音、深度50より聴知!!! 方位90度、距離5200、雷速48ノット! 魚雷の数は8、接触まであと6分!

放射状に広がりながらまっすぐ突っ込んでくる!!」

その瞬間、全員がその聞こえた内容に戦慄を覚え同時に凍りつく。しかし、いざと言う時の動きが俊敏な彼は違った。

すぐさま弟たちを残して医務室を飛び出し、一番近くにあった艦内のインターフォンを操作する。

「こちら艦長、全艦クルー、良く聞け。万が一に備えて、動力を原子炉からガスタービンに変更。

機関室クルーは、基機の起動を優先しろ。CICは、敵と魚雷の位置を精密に特定!

艦橋クルーは艦隊全艦に魚雷接近の旨を報告せよ! 僅かな遅れが命取りになるぞ! 総員、対潜戦闘用意!!」

それだけ言っただけでインターフォンを置くと、カイトは艦橋に向かって走り出す。

同時にカンカンカンカンと全艦にアラートが鳴り響き、張り詰めた空気をさらに凍りつかせる。

突拍子もないが、これが戦場だ。シュヴァンブルグの包囲網を脱出して五日目に入る。

だが、彼らはまだ戦場を脱出できていなかった。

〜続く〜

カイト(略:カ)「なあ・・・更新が凄まじく遅くなかったか?」

今回？」

シエルドハーフェン（略：シエル）「まったく、遅延は戦場において命取りになるわ。」

リナ（略：無）「なんでも・・・作者のJINさんが、再編集とかストーリー全体の再構築に時間をかけてたとか聞きましたよ。」

ブローズグホーヴィー（略：ブロ）「それにしても時間かけすぎですわ。一体、何が・・・」

フリースベルグ（略：フリース）「せつかくだから見に行ってみようよ。」

（フリースベルグ、近くにある茶色の扉を指さす）

カイ（素晴らしいな、あとがきのご都合主義は・・・）

キイイイ・・・

（扉を開ける）  
全員

（PS を手に持ったヲタ青年がゲームで熱闘中）

JIN「だあああつ、くそっこいつ強過ぎだろっ！　しょーがねえ、

もっかいっ」

全員

キイイイ・・・ボタン（扉を閉める）

カ「再構築とか言いながら、アレが原因だな・・・救いようが無いな。」

リナ「あんな人に書かれてるなんて・・・（泣）」

シエル「トライトン艦長・・・あ奴に私の43センチ主砲をぶち込んでも良いだろうか？」

カ「良いんじゃないかな・・・。」

フリース「それなら、ご心配なくっ」（えっへん、という表情で）

ズドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンン！

！！！！

「JIN「ぎいいやああああああああ！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・バタツ

ブロ「・・・・・・・・フレースちゃん・・・な、何をしたの？」

フレース「へへへ、巡航ミサイルをプレゼントしちゃいました。」

リナ「・・・・・・・・あれは核・・・・・・・・いやとにかく、死んだんじゃないかしら、彼・・・・・・・・。」

カ「そうかもしれないな・・・しかし、良くやったぞフレース。お前の手柄第5号だ。」

フレース「わーい、ありがとうカーンちよっ」

カ（しかし、あの爆風にビクともしない扉って一体・・・・。）

リナ「そういうえば、流れからいつて次回は戦闘ですよね？」

シエル「そうだな。総員、いつもの訓練通りやれ。そうすれば必ず勝てる。」

ブロ「期待してるわよ、フレースちゃん。」

フレース「はいっ、ウィルキア近衛海軍の名に恥じないように、粉骨細心ががんばりますっ！！」

（ぴゅーっ、と走り去っていくフレース）

ブロ「・・・・・・・・ねえ、お姉さまあ。」

シエル「ん？」

ブロ「『細心』じゃなくて『碎身』じゃないかしら？」

シエル「なんだ、私はてつきり作者の変換ミスだと思ったのだが・・・」

JIN「それは違うっ！！」

（瓦礫の中からいんちき青年登場）

ブロ「・・・・・・・・ですって。」

シエル「そうか、まあ・・・アレはアレだ。その、細かいところまで注意しながら任務に当たる・・・とか言う事じゃないのか？」

ブロ（フレースちゃんに、漢字のお勉強・・・させた方がいいかし

ら)

JIN「そうだな、させても良いが・・・間違っても国会の場でする事じゃない。」

首相に漢字の問題を出していた日本の野党はおかしいと思うぞ。

国会は中学生の教室じゃないんだから！！　ちゃんと審議をしゃがれっ！！」

リナ「何の話よそれ・・・。」

JIN「こつちの事だ。」

リナ「あつそ・・・。」

JIN「それにあれだ！　首相の支持率がり過ぎ、みんなマスクミの情報に操られてるよアレ。」

カ「なんか、そういえば今回の最初にもあつたなソレ。」

JIN「だいたい考えてみるよ！　首相は、悪いことと言えば漢字間違つたり、カップラーメンの値段を400円くらいって

言つたぐらいしか悪いことしてないだろ！　マスクミが、悪いイメージ植え付けまくってんだよ国民に・・・。」

シエル「虚偽の情報では無いが、誇張表現が過ぎると言う訳か・・・戦時下の国々ではそんな生易しいレベルでは無いがな。」

JIN「まあ、そこはアレだ。　平和に感謝だ。」

カ「というか、いつから政治がらみの話になつたんだっけ？」

リナ「彼が・・・。」

シエル「こ奴が・・・。」

ブロ「作者さんが・・・。」

JINとカイト以外の全員「・・・原因！」（指さし）

JIN「あはははは、それはどうも失礼！　それじゃ、また次回にお会いしましょうみなさん！」（逃亡）

全員「待たんか、こらっつ！！　主砲かVLSに装填して飛ばしてやるっつうっつ！！！」

（ん？　そういえば、約370円・・・四捨五入すれば400円く

らいのカップラーメンって・・・昔食べたような・・・。

### 第三話 黒水面に潜む刺客

「艦長！」

「すまない、医務室の方に居たから遅くなった。」

「いえ、それより全艦に通達完了しました。即時回避行動に入つたようです。」

リナの返答にひとまず安心したカイト。

「CIC、艦橋。敵攻撃の詳細を報せ。」

『こちらCIC、敵は2隻の潜水艦。合計8発の魚雷を斉射した模様。接触まで、あと3分20秒!』

「了解。対潜魚雷にて敵潜水艦への攻撃を敢行する、対潜兵装用意！」

攻撃準備は整った、だが最も肝心な準備がまだ出来ていない。そう、機関がまだ起動していないのだ。

今か今かと待っていたその時だった・・・

『こちら機関室、基機全機起動完了！ 起動状況異常なし!』

「こちら艦橋、了解した！ 全速前進、面舵一杯！ 本艦はこれより敵潜水艦との戦闘に入る！」

「艦長、まずは魚雷の射界から逃れてからでは!？」

「ダメだ、確かに本艦だけなら回避することはたやすい。」

だが、本艦が敵潜水艦の射界から逃れると敵は船足の遅い超弩級戦艦に狙いを定めるだろう。」

フリースベルグが続いて、他の艦艇も続々と動き出す。

だが、未だに動きが鈍い船がある。

『困りましたわ、このままではシエルド姉さまに・・・!』

艦隊後方に待機していた超弩級戦艦の甲板上。

クルー達の喧噪が響く中、甲板からおろおろしながら前方に停泊す

る姉の雄姿を見つめるの人影がある。

彼女と同型のシエルドハーフェン級の姉妹艦の戦艦ブローズグホーヴィの艦魂。

いわば、シエルドハーフェンの実妹である。

戦艦ブローズグホーヴィは、後方に控えていたため第一弾の雷撃の射線からは外れていた。

もつとも、このまま居座り続けたら次に攻撃対象にならない保証は無い。

その為、射線からさらに逃れるように機関はいつもと違う方向に回転し、船は機関後進をかけて徐々に後退していた。

だが、シエルドハーフェンの船体前部はほぼ射線上に捉えられており、このままでは5発近くの魚雷が船体に命中する。

ようやくシエルドハーフェンも後ろに後退を始めたが、完全に回避することはできない。

「CIC、艦橋。敵魚雷を、こちらの魚雷で迎撃することは可能だな？」

『はい。水中を航行している以上、迎撃は理論上は可能です。』

「よし、右舷魚雷発射口開け！ 戦艦シエルドハーフェンに一番近い4発を迎撃する！」

自分に魚雷が迫っていることを察知したシエルドハーフェン、だがその表情は落ち着いていた。

「どうしよう・・・姉さまに魚雷が！」

うるたえる“フレースベルグ”。

だが、そんな彼女を“シエルドハーフェン”は優しく抱きとめる。

「大丈夫だ、私は魚雷の一発や二発で沈むほどヤワではない。それより、旗艦の艦魂ともあろう者が、このくらいでうるたえてどうする？」

そう。これから“フレースベルグ”は旗艦の艦魂として船員たちを支え、それどころか艦隊の支えとならなければならない。

そんな彼女が、砲弾や魚雷でうるたえていては駄目だと、“シエルドハーフェン”は彼女に言い咎めた。

フリースベルグの右舷中部の舷側が開くと、そこから魚雷発射機が顔をのぞかせる。

「発射用意・・・撃てーっ！」

バシユツつと僅かに発射口から白煙を放出すると魚雷は水中に飛び込み、ロツクオンした敵の魚雷へと向けてまっすぐ進んでいく。

『初弾命中まで、5秒・・・』

CICからもたらされる情報モニターには、魚雷の位置と敵魚雷の位置が正確にモニタリングされていた。

光点などの表示が、リアルタイムに動いている。

そしていよいよ、最初の魚雷の光点の上の秒数表示が3と表示した。

『最初の迎撃魚雷、命中・・・今！』

CICの管制官が告げた直後、敵魚雷とフリースベルグが放った魚雷の表示が重なり、そして消失する。

スドオオオオン！！

夜の暗い海面の下で突如何かが光ったと思った瞬間、二つの魚雷が作り出した巨大な水柱が空に向かって飛び出した。

「よっしやああ！ そのまま頼むぞ、フリースベルグ！」

巡洋戦艦フェンリアの甲板上で、クルーと一緒に歓声を上げるのは艦魂の“フェンリア”。

艦隊の艦魂の中では、一番の暴れ馬ならぬ暴れ狼。

しかし今の喜びようで分かるように、そんな男勝りの彼女も姉のシエルドハーフェンの安否は心配だ。

だが、問題が起きた。

二発目も三発目も迎撃し、残りは最接近している魚雷のみとなった

時だった。

その最接近した敵の魚雷を迎撃する使命を帯びて発射された魚雷が、突如消えたのだ。

同時に、予期しなかった場所で水中が上がる。

『こちらCIC、迎撃魚雷、目標でない敵魚雷と接触し爆発した模様！』

「なにっ!? くそ・・・このままでは、戦艦シエルドハーフェンが被雷する！ 次弾発射用意！」

『駄目です、装填間に合いません！』

CICからその返答を聞いてカイトは雷に打たれたような表情になる。

それから、十秒ほど時間が経っただろうか・・・

ドゴオオオオオオン！！

巨大な水柱がシエルドハーフェンの右舷前方で巻き起こる。

それは、シエルドハーフェンが被雷したという証拠だった。

「うあっ！！ く・・・うう・・・。」

「何っ!? どうした!？」

「お姉さまッ!？」

“シエルドハーフェン”の脇腹から赤い血が噴き出して軍服を赤く染め、彼女が苦悶の表情を浮かべて医務室の床に突っ伏した。

その光景に、怪我人の筈のバンと艦魂の“フリースベルグ”が絶句する。

『シエルドハーフェン、魚雷一発被弾!』

その放送を聞いてバンはハッとなった。

彼女たちはいわばこの艦隊の艦そのもの。

つまり、艦が受けるダメージは彼女たちに必然的に反映されてしまっただろう。

息を荒げながら歯を食いしばり痛みに耐える“シエルドハーフェン”の姿は、痛々しいもの以外の何物でもなかった。

居ても立っても居られなかったバンは、ついに意を決したようにベッドから立ち上がる。

「フレス・・・ここは頼んだぞ。」

涙ぐんで“シエルドハーフェン”を呼び続ける彼女にそう言うと、自分の痛みなど忘れたかのように医務室を抜け出して、本来居るべき場所に彼は向かった。

「ソーナー、艦橋。敵潜水艦の位置特定は無理なのか？」

「魚雷が多数発射された事、並びに先ほど魚雷を多数迎撃した時のノイズで現在位置特定は不可能です。」

「くっ・・・わかった、ソーナー、位置特定に全力をそそげ！」

（敵潜水艦の第二次攻撃が行われる前に、何としても沈めなければ・・・だが、ソーナーが役に立たない今、どうすれば・・・）

良策が浮かばずに焦るカイトの視線の先には、浸水により艦首方向に僅かではあるが傾斜したシエルドハーフェンの姿があった。

『艦橋、CIC。艦長・・・』

その時、艦橋のカイトを呼び出したコール。

それは、バンからだった。

「砲雷長か！？ 落ちついて寝ていると・・・」

「こんな状況で、のほほんと寝ている訳にはいきません。それに・・・」

「一つだけ、方法があります。」

その言葉に、艦橋クルーが一斉に耳を傾けた。

「艦長・・・ASROCアシロックでの、敵潜水艦攻撃を進言します。」

「ASROCか・・・だが、敵の位置は精密に特定されていない。」

今の段階で発射しては、命中しない可能性も高いはずだ。」

「いえ・・・ASROCには、着水後常に敵艦の位置を探索し続けるアクティブソーナーが搭載されています。」

例えここからでは見つからなくても、ASROCが敵艦近くで着水したならば、命中率は高くなるでしょう。」

それを聞いて、カイトもリナも自分達が陥っていた盲点に気が付い

た。

確かに、これならばやれるかもしれない……。

「よし、発射地点からはそう遠くへは行っていない筈だ。ASR

OCの着水地点を、敵魚雷が発射された地点にロックせよ！」

『CIC了解。前甲板VLA（Vertical Launching Asroc）、2セル開放。』

ギイイイと金属が軋むような音を立てて、前方の甲板に埋め込まれた対潜ロケット魚雷ASROCが発射の時を迎えようとしていた。（これ以上、シールドハーフェンは被弾させない……。）

モニターの光が照明の代わりとなっている薄暗いCIC。

その中でバンの脳裏には医務室で痛みを耐えているであろう“シールドハーフェン”の姿が浮かんだ。

「ASROC、攻撃準備よし！」

「了解。対潜兵装ASROC、攻撃はじめ！」

グワアアアツと閃光がほとぼしり白煙が巻き上がると、ASROC2発が続けざまにフリースベルグの甲板から発射されると、上昇しながら徐々にその軌道を敵潜水艦の方向へと捻じ曲げて飛んで行く。

閃光がフリースベルグの甲板上で起きたのを見た潜水艦の艦長は、それを疑問に思う。

「主砲を発砲したのか？ 馬鹿な、こっちの位置など察知などできもしい筈だ。」

「次弾魚雷装填、完了しました！」

クルーの言葉を聞いて、艦長はニヤリとほくそ笑んだ。

「目標は、先程の魚雷が命中した敵大型艦だ。次の魚雷でとどめをさす。」

そう言っつて、発射の指示を出そうとしていた時だった。

ズゴオオオオオオン！！

突如響いた爆音と艦を揺さぶる衝撃に、艦内のクルー全員がバランスを崩す。

「ぜ、前方700、僚艦ジャックナイフ、撃沈されましたっ!!」  
「馬鹿な! この水測状況では、向こう側からのソーナー探知は不可能なはずだぞ!!」

何が起こったのかを確かめるため、敵潜水艦の艦長が再び潜望鏡を覗き込んだ時だった。

はるか彼方に見える第11艦隊の艦影を遮るように、何かが上がからゆっくりと降って来た。

夜闇に紛れてよくは分らないが、月明かりで一瞬映し出されたそれを見て、艦長は絶句した。

直径2メートルくらいのパラシュートに括りつけられ、海面に向かって真つすぐ降下するそれは……

「魚……雷……!?!」

ザバアアアアアッ!!

海面が膨れ上がり、巨大な水柱が月に向かって真つすぐと伸びる。

だが、まだ分らない……全ては、ノイズがおさまった後のCICの観測で分かる。

皆が、祈るような気持ちでCICからの放送を待つ。

「こちらCIC、敵潜水艦、撃沈! くりかえす、敵潜水艦を撃沈した!」

その瞬間、艦内から爆発的な歓声上がる。

「了解した、皆良くやった。ちなみに、先ほど戦艦シエルドハーフェンのブロード艦長から入電があった。

『ワレ、浸水ノ食イ止メに成功セリ。沈没ノ心配ナシ。』」  
それは、敵潜水艦撃沈に続いての何よりの報せだった。

翌朝、シエルドハーフェンの破損状況を調査した結果、戦艦シエルドハーフェンはドック艦フリングホル二内で修理を受ける事になっ

た。

幸い、予備の部品や機材などは揃っていたため、完全に修理は出来るのだが、問題は時間がかかる事だった。

最短でも一週間はかかるだろうと、ドック艦フリングホルニの整備長がぼやいていたのが聞こえた。

そう言えば、あっちの“シールドハーフェン”はどうなったのかと言っと・・・

暫くは、ドック入りしたシールドハーフェンの艦内で安静にしておかなければならぬらしい。

比較的軽傷で済んだ事は、彼女達が見える船員にとってはいい事だった。

そして、バクスター長官が聞きたい事と言っていた例の写真に映ったレーダーの異常。

答えは、また医務室に戻る羽目になったバンが出した。

ECM電子戦装置により妨害を受けたレーダースクリーンのノイズに似ている、と。

そしてECMを搭載した軍艦は、カイトを含めたクルーの記憶の中では2隻しか存在しなかった。

一つは、この艦フリースベルグが・・・そしてもう一つは・・・

「同型艦、ニーズヘッグか・・・」

やはり、出航時に聞いたあの入電は間違いでは無かったようだ・・・

そして、おかげでもう一つ気がかりな事が出来てしまった。

情報によるとそのノイズが向かった針路にあるのは、アメリカ合衆国西海岸。

アメリカ合衆国太平洋艦隊には、機関には未だボイラーを採用するなど旧式の艦が多い。

第11近衛海軍と違い、ガスタービンを採用していないのだ。

もし、フリースベルグと同じ高スペックの艦が反乱を起こした国防

海軍主導のもと、何かの目的をもって行動しているならば・・・  
「長官・・・我々に、追撃の許可を願います。」  
事態は最悪のケースを予測して動くべきと、カイトは士官学校で習った事があった。

「行つてくれるかね、中佐・・・ならば、私も行こう。」

「はっ、御同行頂き恐縮です。」

カイトも最敬礼をもって、バクスター長官を改めて出迎えた。

～続く～

バン「短かったような気がするが、更新が早くて何よりだ。」

ブロ「そうですねえ。」

フレ「ところで、話変わりますが・・・JINさんはどの超兵器を出そうか迷ってるみたいですよ。」

カ（迷ってるって・・・）

リナ「具体的に、どの辺りから選べば良いんでしょうか・・・？」

フレ「まあ、ウォーシップガンナー2に出てきた超兵器は以下略として・・・何でも前作はもちろん、さらにはパソコン版からも

引っ張ってこようと思ってるみたいですよ？」

シエル「パソコン版？ あ奴・・・やった事あったか？」

JIN（開いた口が塞がらない）（そして下を向いてションボリ）  
リナ「やれやれ・・・でも、プレイ動画とかは見たことあるみたいですね。」

フレ「なら良いや。」

カ「良いのかよ……。」

バン「摩天楼の劣化が痛かったよな。 四国は涙目だったけど……。」

リナ「ヴォルケンの80cm主砲一発で、自艦のHPがガンガン削られる緊張感が売りだったのに、残念だったわ。」

バン「でも、作者はすっげーこだわりがあるらしくて……こういうエピソードがあるんだぜ？」

カ「ほう、どういうエピソードが？」

バン「何か、友達が波動砲を満載にした超卑怯級騒動戦艦でヴォルケンやルフトを沈めたら、ムチャクチャ怒ったらしいぜ？」

シエル「ほう、初めてあ奴に感心したぞ……。 それは、その悪友が悪い。」

バン「どうしてだい、シエルド？ アウトレンジから敵を攻撃するのは、大艦巨砲主義にもあるように立派な作戦だと思っぞ。」

シエル「私が言いたいのはそう言う事じゃない……。 私はただ、どこぞのイスカンドルから技術供与を受けたようないびつな

兵器を、私のように美しくも威厳ある戦艦に載せると言うのに反対なだけだ。

そんなに付けたければ、宇宙飛行ができるようになってから搭載するが良い。 それならば、文句は言わん。」

バン（何のこと言ってるのか丸分かりだな……）

JIN（あのアニメは好きなんだけどな……。マジで。）

カ「それとか……。他にもこだわりがあるらしくて……。船の最大の速さは防御も込みで40ノット“以下”くらいが信条らしい。」

ブロ「まあ、かなり現実的にプレートなさってるんですね。」

カ「しかも、大体巡航速度で航行してプレーしているらしい。 だいたい、29ノットくらいだったな。」

フレ「すごい、こだわりです……。 謎の推進装置とかは完全にお断りなんでしょうね。」

JIN（対摩天楼&屋気楼戦では、やむを得ず、80ノットくらい出せる巨大航空戦艦で出撃しちゃったけど、黙ってよう・・・）

リナ「そう言えば、後々仲間になる日本のヘリコプター搭載可能のイージス艦があるみたいですよ。」

カ「ほう・・・日本のイージス艦か・・・こんごう級は、米海軍の『アーレイ・バーク級』をモデルにしたみたいだけど、

それと比べて艦橋が縦長でスラツとしてるもんな。」

バン「へえ・・・『こんごう級』かあ・・・」

リナ「あ、でも・・・モデルにしたのはどうやら『あたご級』のようですよ？」

バン「『あたご級』かあ・・・となれば、主砲はMk45 Mod 4 5インチ60口径単装速射砲になるわけか？」

リナ「いえ・・・それが、主砲は『こんごう級』と同じ127mm単装速射砲のままのようです。」

カ「・・・『あたご級』にそっくりで、主砲が127mm・・・だとっ!?!? 副長! その艦名は何だ!?!まさか!?!」

シエル「まさか!?!?」

ブロ「まさか!?!?」

フレ「まさか!?!?」

カ「みら・・・」

リナ「いいえ、『きんぼう級イージス艦、一番艦DDH-187きんぼう』だそうです。」

カ「ああ・・・そうか・・・。だよな・・・。」

リナ（艦長・・・何を期待してたのかしら・・・。）

ブロ「艦魂は、どんな子なんでしょう? 楽しみですわあ。」

JIN「ほい。」

（JIN、リナに設定をパス）

リナ「ええと、日本海軍の軍服はもちろんのこと・・・」  
バン「うんうん。」

リナ「セミロングの黒髪に、銀のツンツンした髪飾りに・・・」  
バン「ほうほう」

リナ「黒いニーソックスに・・・」  
バン「うほう!!」

シエル&プロ&フレ&カ（こいつ、アブない・・・!!）

リナ「右手に黒いムチを持った・・・」

バン「うん・・・ん!?」

リナ「きんぼうの艦長やその他男のクルーをまるで雄豚の如く虐げて楽しむ・・・」

バン「・・・（汗）」

リナ「超ドSっ娘だそうです」

バン「いやじゃあああああ!!!!」

カ「バン・・・暗にしか言えないが、良く聞いてくれ!お前には、この艦の全クルーにとつてのドS回避兵装になる義務がある!」

バン「ねえよつ! ってか、軍ヲタならおとりつてすぐに分かるじゃん! あ、他の人にも分かるように言っちゃった!!」

フレ「砲雷長! 私はもちろん、フリースベルグのクルーには平和のための盾となる義務がありますよ」

バン「そんな25歳DM盾いやだああああ!!」

カ「ほらっ、つべこべ言わず挨拶に行こうじゃないか!」

フレ「それじゃ・・・私もちょこっただけ・・・」

シエル「私も、顔ぐらいいは見えて置くか・・・。まあ、同じ女同士なら されることもxxされることもなかるう。」

カ「ほら、立て! いけに・・・じゃなくて、トライトン砲雷長!」

バン「おiiiiiiiiっ!! 今完全に生贄って言おうとしただろ!!」

カ「仕方ない、総員、トライトン砲雷長を連行しろ!」

全員「アイアイサー!!」

バン「やーめーてーくーれー!!!!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

「……」と云はば砲臺長。と云ふ……」

(誰かのため息)

「バクスター長官「私の出番はまだですかいのう……」(しょんぼり)

## 第四話 アラスカの漂流者

第11艦隊の泊地から単独で出航し、丸二日が過ぎた。

現在、艦はアラスカ半島とその先にあるウラニク島の狭い海峡を通り過しようとしていた。

北国らしい相変わらずの寒空だが、特に陸地に積もった大量の降雪がそれを物語っている。

『艦橋、CIC、定時連絡。現在のところ、対空、対水上、対潜水標無し。』

「CIC、艦橋。 了解した。 交代まであと30分だ、最後まで気を抜くな。」

艦長席の横にあるインターフォンを置くと、カイトはおもむろに立ち上がる。

「艦長、どこに行かれるのですか？」

「ああ、外の哨戒係を早めに交代させてやろうと思ってね。 この天気じゃ、特にな・・・。

副長、悪いがしばらく操艦は任せる。」

「はっ、頂きました。」

カイトは艦長席に無造作にかけていたグレーのコートを手に取ると、それに袖を通しながら艦橋後部へと向かった。

後部甲板に続く防水扉を開けはなった時、そこから冷気がヒュウウウウと吹き込んだ。

案の定、その寒風に吹かれていた哨戒係は固定式の双眼鏡にしがみついた様に寒さに震えていた。

「・・・少し早いが、交代しても良いぞ。」

「はっ、ではよろしく願います!。」

余程寒さに耐えかねていたのだらう……。

「いえ、時間までやらせていただきます。」とは言わないのだなとカイトは思いながら苦笑した。

念のためというか馬鹿の一つ覚えのようだが、とりあえずグルリと双眼鏡を覗きながら有視覚範囲を回転させる。

特に不審な物は見られない。

この望遠鏡を用いての哨戒、カイトは意味があるのかどうかすら疑わしく思っている。

艦全体を上から見下ろすような場所から、双眼鏡を使って接近する目標の詳細を目視で確認し、それを艦橋に告げる。

だが、その役割はほとんどがCICが担っている。

それどころか、新深度に潜航した潜水艦や近頃列強が開発中のジェット戦闘機は、接近まで視認が困難だ。

だが、それをもこの艦のレーダーやソーナーは探知してしまう。

そんな新時代の戦闘が主体とするこの艦に、この双眼鏡は必要なのだろうか……？

「必要だと、思いますよ……。」

その時艦橋付近左甲板、ちょうどカイトの真下から彼女の声が聞こえた。

無邪気にこちらに手を振る彼女こそ、この艦の魂である“フリースベルグ”。

「君は……どうしてそんな所に？」

「どうしてそんな所につて、私は艦のどこにでも行けますから。」

まあ、行き来というか艦そのものならクルーたちが彼女の上や中を移動しているような感じなのだろうか。

「そうか……それより、さっき何かが必要だと言わなかったかい？」

「その双眼鏡の事ですよ。」

迷いもせずに彼女が言い放ったその言葉に、カイトは驚くのだが表情にはほとんど出ない。

「なぜ、それを？ 人の心でも読めるのかい？」

「いえ、でも艦長さんが双眼鏡をつまらないものみたいな感じで見ていたので、多分そうじゃないかなあと思いましたから。」

そんな顔で見てたのかと無意識の自分の行動に驚くとともに、彼女の洞察力のすごさに感心する。

「そうかもしれないな・・・わかった、ならば初心に戻って職務を全うさせてもらおうとしよう。」

カイトが再び双眼鏡を覗く。

やっぱり、何も不審な物は見えない。

「・・・ところで、そんな恰好で寒くないのか？」

「はい。私に寒さなんてあまり関係有りませんから。」

先日の襲撃時、赤い血を流した“シエルドハーフェン”を思い出して、もしかとも思ったがどうやら違ったらしい。

しかしあの後、艦内の医務室にこぼれた筈の彼女の赤い血を拭こうとして人を向かわせたが、その床には血のシミすら無かったらしい。まだまだ、不思議な事だらけだ。

現実的にも、オカルト的にも・・・

「・・・ん？」

その時、カイトが双眼鏡の先に何かを発見した。

白銀の光が水面から、曇天の空めがけて飛びだしたように見えたのだ。

双眼鏡を再びその方向に双眼鏡を戻す。

「なんだ？」

しかし、その方角に戻してもやはり何も見えない。

「気のせい・・・あつ!？」

気のせいでは無かったらしい。

再び同じ場所から白銀の光が花火のように打ち上げられる。

「あれは、救難信号・・・まさか。」

さらに高倍率に変えて、その方角を見つめると・・・居た。

五隻程の小さなボートに満載の人々が、必死にこちらに向けて手を

振るなり何か叫んでいる。

曇天に僅かだが霧が出ている、危うく見落とすところだった。

（しかし、なぜCICから連絡が無いんだ？）

すぐさま、近くにあったインターフォンをひったくるように掴むと全艦放送に繋ぐ。

「こちら艦橋後部観測台、艦長よりCICへ。9時方向の高い崖付近に数隻のボートを発見！」

救難信号を発している模様！ 探知は出来なかったのか！」

『こちらCIC、反応が内火艇にしては微弱で静止していたので、てつきり鉱物を含んだ岩の反応だと・・・』

それを聞いた途端にとてつもなく腹立たしくなった、それは探知が出来なかった彼らに・・・？

疑問が浮かんでいたが、とりあえず彼らにも非はあることは確かだ。

「馬鹿者！！ 言い訳をするな！ お前たちの訓練不足だ！」

『す、すみません。以後、気をつけます！』

「機関停止！ すぐさま内火艇を降ろし、救助に向かわせる！」

インターフォンを装置の中にしまい込み、自分は艦橋の方に向かう。

「見つけられてよかったですね。それでは、頑張ってきてくださいね。」

“フリースベルグ”がにっこりとほほ笑んだ様子で彼に語りかけた時、カイトは思い出した。

自分が本当に怒るべき対象。

それは最先端技術を過信して、本来の無ければいけない筈の設備を不要とさえ思っていた自分以外の何物でもなかった。

（フリースベルグ・・・神話では全てを知る鳥か・・・。あなたが、間違っではないのかもしれないな。）

「慎重に降ろせ！ 素早く、だが確実にな！」

カイトよりも年上の伍長が、若手が数人がかりで降ろしている内火艇を見ながら声を張り上げる。



「良かった・・・助かったぞ！」

「大丈夫ですか？ 今行きます。」

その内火艇2隻が彼らの前方すぐそこで停止すると、その片方に乗っていた男が立ち上がってこちらに敬礼をした。

「私は、ウィルキア近衛海軍、カイト・トライトン中佐、ならびにミサイル巡洋戦艦フリースベルグの艦長です。」

若い艦長の言を受けて、彼も立ち上がるうとしたのだがこちらは立ちあがるには安定感が悪すぎる。

仕方なく、座ったままではあるが彼に敬礼を送る。

「座ったままで申し訳ないが、安定感が悪いため許していただきたい。私はアメリカ海軍、マーク・バリストン中佐。」

ならびに、巡洋艦テキサスの副長だった。」

「だった・・・と申されますと、やはり・・・。」

「ああ、アラスカの軍港から出航したんだが、艦はここから10マイル以上南の沖合で沈没しちまった。」

よく分からん攻撃でな・・・。それより、あんた方ウィルキア海軍の方々がどうしてアメリカ領海内に？」

「それについては、任務につき詳細はお答えできませんが・・・我々は、アメリカ合衆国より通航権を得、

現在アラスカを通過してカリフォルニア方面へと向かっています。」

「そうか・・・ちょっと怪しいがな・・・。」

バリストン中佐は、ふんと静かに笑うとそう呟いた。

それは無理もない、いくらなんでも国際艦観式とかで無い限り、同盟国でもない他国の軍艦が自国の領内にいたならば驚くだろう。

ましてや、任務中につき詳細は答えられないと言ったのであれば信用されないのも無理はない。

ならば、どっちかはつきりさせてやろう・・・くれぐれも失礼のない範囲で。

カイトがおもむろに口を開いた。

「どうしますか？ 我々が通信可能範囲に到達次第アメリカ海軍に連絡し、あなた方の救助を要請するという事も出来ませんが？」

「決まってる・・・是非とも、貴艦のお世話にならせてもらおうよ。」

これ以上、自分もだが部下たちを寒風に当たらせるのは心が痛むからな。」

「分かりました。では国際条約にのっとり、あなた方を保護します。」

そのやり取りの後、数往復して漂流者達全員を救助する。

「ありがとう。」

「借りが出来たよ。」

米海軍の兵士達が口々に感謝の言葉を述べながら、内火艇が現場とフレースベルグの間を往復する。

中には、沈没時に怪我を負っていた者も居たようで、彼らは既に医务室で近衛海軍が誇る衛生兵の治療を受けている。

皆若干の衰弱が見受けられるが比較的健康体だと衛生兵からの報告を聞いて、とりあえずカイト達は安心した。

「艦長、彼らが乗艦していた巡洋艦テキサスを撃沈したのは・・・やはり・・・。」

「詳細は彼らの容体が落ちて着いて、衛生兵から許可が出てからだが・・・副長、その可能性は私も高いと思っっている。」

リナの問いかけに、カイトが頷いて返答した。

「一瞬の出来事だったと聞いている・・・おそらく、彼らを攻撃し沈めたのは遠距離攻撃を得意とするニーズヘッグに違いないだろう。」

「特殊弾頭が使われなかっただけ幸いか・・・いや、使う必要が無かったのだろう。」

カイトのその言葉に、艦橋クルー達にも緊張が走る。

ニーズヘッグの目的は不明だが、遭遇した艦をすぐさまアウトレンジから撃沈する辺りから考えて、事態は一刻の猶予も無いだろう。

その時、後部の防水扉から微妙に濡れたライフジャケットの姿のあの伍長が現れた。

「艦長、内火艇全て格納完了しました。」

「了解、御苦労だった。機関再始動、両舷第二船速！」

再び艦尾から水流と気泡を放出しながら、フリースベルグは動き出した。

最初の決戦の地、アメリカ合衆国西海岸へと・・・

～続く～

カ「どんどん仲間が増えていくな・・・大丈夫かオイ。」

リナ「・・・良いんじゃないでしょうか？ どうせ主要で描かれるのは10名にも満たないでしょうに・・・。」

バン「まあ、現実言っちゃえばね。」

カ「そう言えば、読者の皆さん方は疑問に思ってると思うんだけど・・・フリースベルグの艦形は何がモデル何だろうか？」

JIN「ほい。」

(リナにカンペをパス)

リナ「ええと・・・大まかなモデルは、米海軍が2012年に就役予定としている次世代イージス艦、『ズムウォルト級』らしいですね。」

カ「『ズムウォルト級』か・・・。また、凝った艦を。」

バン「しかし・・・何だ。それにしてもデカイな。設定では全長が237メートルに、排水量は4万3000トンって・・・。」

リナ「戦艦並ですね……。それにイージスなのに大艦主義ですか……。？」

JIN「さしより、設定をと……。？」

~~~~~  
~~~~~

【フリースベルグ級ミサイル巡洋艦、艦艇一覧、および兵装等】

フリースベルグ (CGX-1 Hresveigr)

排水量：4,3000トン (満載)

全長：237m

全幅：28m

喫水：8.6m

機関：ウィルキアンエンジニア社 (架空企業) AD6原子炉4基  
4軸

LE1002ガスタービンエンジン4基

速力：最大39ノット（時速約70km）

航続距離：（ガスタービンのみで）約1,200km 巡航速度  
（32ノット）時

兵員：士官18名、兵員200名

兵装：155mmAGS単装×3門

対空ミサイル発射VLS×120セル

対艦ミサイル発射VLS×80セル

対潜ASROC発射VLS×10セル

舷側魚雷発射口×8門

格納式30mmCIWS×6基

RAM発射装置×2基

その他の兵装等：SPY-3フェーズドアレイレーダー

ECM電子戦装置

ECCM装置

バウ・ソーナー

曳航式ソーナー

同型艦

ニーズヘッグ (CGX-2 Nidhegg)

カ「ふむ・・・これだけ巨艦でも、ステルス艦ならかなり隠密性は高いだろうな・・・。レーダーでは見えない戦艦か・・・

プラッタよりこっちの方が断然優秀だな。」

リナ「光学迷彩なのに、レーダーに映りますからねアレ。」

バン「まあ、モデルになった『ズムウオルト級』も、ようやく世界で最初のステルスイージス艦になるわけだ。」

リナ「あれ？ 現役のイージス艦やそうでない艦艇も、ステルス性を高めている艦は多いんじゃないかなかったですっけ？」

バクスター長官「ごっほん、それについては私が説明しよう。」

リナ「きゃああああああっ！！ 出たあああ！！」

バク「コラーツ！ 人を化け物みたいに言いおつて！」

カ「しかし、長官・・・よろしいのですか？」

バク「うむ、『シエルドハーフェン』に仕事を任せてきた。」

リナ「あははは、そ、そうだったんですか・・・。」（最悪だな、このオヤジ）

バク「さて、ステルス艦についてだが・・・この際はつきり言おう、実は現在就役しているステルス艦は全て不完全なものばかりだ。」

バン「マジっすか！」

バク「参考までに『あたご級』を思い浮かべて欲しい。（知らない人は、Wikipediaあたりを参照してくれ）あの艦は、正面から見ればだいたいひし形っぽく見える。」

リナ「確かに、喫水線から甲板までは上に行くにつれて広くなり、甲板より上は今度は上に行くにつれて狭まりますね。」

バク「うむ。甲板より上は問題無い、入って来た索敵電波は、全て上空に捻じ曲げてしまいレーダー発信源に返さないから、

つまりレーダーには映らない。だが、問題は甲板から喫水線にかけてなのだ。」

カ「先程と同じように考えると反射したレーダー波は、海面にねじ曲がって発信源には戻らないように見えますが？」

バク「しかあぁし！それが戻ってしまうんだな。」

リナ「え？一体、どうしてですか？」

バク「うむ。実は、海面は電波を反射したり屈折させたりするのだ、つまり乱反射だな。その乱反射した電波が、発信源に戻ってしまうんだな。」

リナ「それは困りましたねえ・・・全然ステルスじゃないです・・・」

バク「まあ、もちろん反射面積が小さくなるので従来よりも発見されにくいのは確かだ。だが、それではステルス艦とは言い難い。

だがしかし！『ズムウォルト級』の正面から見た艦形は、

喫水線より上に行けばいくほど狭まる！」

カ「なるほど。確かに、そうしてしまえばレーダー波は全て上空に跳ね返ってしまう。発信源には一切戻らない。」

バク「と、言うわけだ・・・ん？この内容は・・・昔海軍士官学校の講義でやった記憶が。」

全員「・・・ギクッ！！！！」

バク「はーん、なるほど。さてはお前たち、私の授業をサボりおったな！！！！」

カ「マズい!!! そ、総員退避!!!」

リナ&バン「コア、アイアイサー!!!」

(!逃亡!)

バク「待たんかあああ!!! 罰としてレポート100枚書いて行けえええつ!!!」

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

フレ「あのさ、お姉さまぁ。私、ステルスってことは発見されにくいってことで、発見されにくいってことは影が薄いってことお？」

(涙目)

ブロ「そんなこと無いわよぉ。馬鹿には見えただけじゃないの

? 裸の王様って知ってる？」

フレ「でも・・・あの話・・・王様の方がバカだったわよ？」

ブロ「はうつ!!!?」

フレ「うわーん、お姉さまのバカアアア!!! フォローになってなーい!!!」

## 第四話 アラスカの漂流者（後書き）

JIN

すみませんが、ここまでパワフルに更新しまくりましたがまたしばらく滞ります。しかし、長くても一週間以内には次の話をアップしたいと思います。

それからコメ欄でもメールでも良いのですが、今後出して欲しい超兵器や艦船を募集します。

（できるだけ希望通りの扱いにはしたいと思いますが、完全でない事もあります。

そこはあらかじめご了承ください）

注意：この先は若干のネタバレが含まれます。ご注意ください！

現時点で後々登場が決まっている超兵器

- 1 ヴォルケンクラツター級超巨大戦艦ルフトシュピーゲルソング
- 2 ヴィルベルヴィント級超高速巡洋戦艦シュトゥルムヴィント
- 3 アラハバキ級超巨大ドリル戦艦アマテラス

## 第五話 十六条旭日旗を覆う暗雲

「日本が、飲みこまれようとしている！」

インカムの向こう側から聞こえてきたその発言を、僕らは一生忘れることは無いだろう。

ウィルキア近衛海軍の残存艦隊がクーデターの魔の手から逃れ、横須賀港に亡命を求めて入港してから約3時間後

“ここは東北地方、三陸海岸沖合約70km、日本海軍特殊巡洋艦“  
きんぼう”艦内・・・”

三陸海岸特有のリアス式海岸のように、刺々しい波が海原を走る鉄の塊に打ち寄せるがどうってことはない。

公試航海終了を目前に控えたこの船もまた、従来の船とは一つも二つ、というか十以上も違う特徴をもっていた。

日本刀のように尖った船首は水面をたやすく切り裂き、新型のガスタービンエンジンは他の艦艇の追隨を許さない加速能力を持っている

る。

そして、乗艦する乗員もまた然り。

「両舷前進半そーく！」

この船の艦長席に座る青年が告げると、スクリュー制御のレバーを操作する士官がそれを復唱する。

「いよつ艦長、声に気合いが入ってるな！」

日本人にしては珍しい短い茶髪の青年がいつもの調子でよいしょをしている。

青年と言つ点でお気づきだろうか？

この艦のクルーは、皆異様に若いのだ。

皆、20歳前後くらい若い士官ばかりだ。

これには、十数年前より軍部の要請で国が始めた政策がある。

当時、国内には多数の孤児院が存在していた。

ロシアとの戦争が起こった事による軍事費の拡大が、日本に長きにわたる貧窮の時代を招いたのだった。

そして、少なからずも大戦で優秀な軍人が殉職していた。

一方で、運営が厳しさを増し始めた全国各地に点在する慈善団体の

孤兒院。

これに日本の軍部が目を付けたのだった。

そう・・・僕がカッコいい軍服を着こなした優しそうなおじさんに連れられていつの間にか軍に入っていたのは、ちょうど今から15年前。

いろいろと親身になって教えてくれたことはもちろんだが、何より閉ざされたこの海原に連れ出してくれた事を、今では感謝している。

そういった経験をした子供達のあつまりなのだ、この艦の乗員は・・・。

僕はこの艦の艦長の、坂上幸樹さかがみ こうき、階級は少佐。

そして隣で補佐するのは副長の宮本宏史みやもと ひろふみ、階級は同じく少佐。

(階級同じだから、さっきも艦長に対してタメ語でか・・・。)

毎回の事になぜか頭を悩ませるが、それはもう置いておこう。

その時、不意に艦長席がグルリと強制回転させられ、副長が突然あわわ顔になってしまう。

艦長より偉い人物(？)が、この艦にはいた。

「アンタ達、何を物思いにふけてるの!？」

艦長席の回転がとまった方向に、仁王立ちで幸樹を睨む10代後半くらいのセミロング黒髪の少女。

同じく白い海軍服を纏い左手には黒いムチが握られているが、階級章は見当たらない。

しかし《階級章が無い＝エラくない》ではない。

何より階級以前に、僅かだが光を放つその体が神聖を帯びている。

彼女はこの艦に宿る魂、すなわち艦魂だ。

「や、やあ “きんぼう” ……どうしたんだい？ ……なんか、表情がコワイよ…?」

「『やあ、どうしたんだい?』じゃない、この馬鹿! “両舷半速”ではなく、“両舷原速”でしょ!! 船足を間違えてるのよ!」

「あ…。」と小声を漏らすのと同時に、航路を記載した紙に慌てて目を通す。

多少汚い字ではあるが、自分の字で確かに“両舷原速”と書かれていた。

振り返るのが怖かったが、もう一度振り返ってみると彼女の瞳の奥でメラメラと怒りの炎が燃えているようだった。

「戦時下でも、戦地でもなかった良かったものの、これが戦地だったら一瞬の油断で沈没よ! 分かる!? ち・ん・ぼ・つ、よ!」

「はい・・・わかってます。」

いつの間にか、敬語になっている幸樹。

「あんたねえ、私を殺す気なの？」

艦の沈没は中に取り残された乗員はもちろんだが、艦そのものが体の彼女の死を意味する。

「いや、そんなわけではない・・・です。」

「だったら、なんでこうなったわけ？」

「ええと、その・・・。」

一番無難な言い訳を考える幸樹。

彼が出した結論は・・・

「集中力が散漫となっておりました！ 以後、反省します！」

艦長席から立ち上がり、最敬礼を以て返答した幸樹。

集中力の散漫と言うのは、誰にでもある事だ。

もちろん、“きんぼう”にだってある。

それに、こちらはもう5時間以上も船務に没頭していたのだ。

それくらい加味して許してくれる筈……。

と思ったのが、運の尽きだったのだろうか。

「ほう……その顔は、集中力散漫という理由なら無難に逃げられる……とても思っただの？」

ギクツとなる幸樹。

冷や汗が背中中滝のように流れるようだ。

「幸樹、それはあんたの鍛え方が足りない……ただ、それだけよ！」

「しかし……以前は……。」

「あのときは、この艦に幸樹が配属された間もないから仕方ないかなと思っただ事もあったけど、今回は別！　っていうか、やっぱり期待してたのね。」

グイツと軍服の襟首を掴まれる幸樹。

一般的に考えるなら、同い年の男子と女子ならば男子の方が力は強い。

だが、人間と艦魂ならどうだろうか？

グイグイと引つ張られる幸樹、どうやら艦魂の方が力は強いようだ。

「よるこんで幸樹、また鍛えてあげるから。」

彼女がドSつぷり満面の妖艶な笑みで振り向きながら、艦橋後部の防水扉をこじ開けて幸樹を連れ出す。

「ま、ま、待ってくれ“きんぼう”！ 僕はこれでも、この艦の艦長だよ！ 艦橋を離れるのは……」

「大丈夫よ。これから先1時間は、針路変更も船速変更も無い。あなたはここに居ても、椅子に座ってるだけのウドの大木だからね。」

「はうつ！！？ そ、そこまで言うのか……」

心にどでかい砲弾を撃ち込まれたように、その一言でズキリと痛む。

「それに、艦を離れない限り法律には違反しないしね。それじゃ、副長……しばらく頼むわね。」

防水扉を閉じるためにそれに手をかける“きんぼう”。

「はい、頂きました！」

緊張の面持ちで最敬礼で返答する宏史。

「いや、頂きましたじゃなくて……誰か助け……」

「……艦長、あなたのことは忘れませんっ！」

言葉を遮るように苦笑いの表情で敬礼を向ける宏史。

他の艦橋クルーに目を向けると、半分以上のクルーが坂上幸樹と言  
う名の死亡確定者へ合掌をしていた。

「お、おまえらああああああ!!!!」

ガシャン!

「ひやくにじゅういち・・・ひやくふたじゅうふた・・・ひゃ  
くにじゅうさん・・・ひやくにじゅうよーん・・・」

「ほらっ、ピッチを上げなさい! 一時間以内に間に合わないわよ。

」

127mm速射砲のすぐ真横で、一人腕立て伏せをする幸樹。

・・・否、させられているのだ。

その証拠にピッチを上げると、艦橋上部から前部に張りだしたアン  
テナの上に腰掛ける“きんぼう”が叱咤する。

「でも・・・一時間以内に・・・さすがに・・・1000回は・・・  
ぐへえ・・・」

「あら? 第二船務科の長瀬君は20分で終わったわよ。」

「あんな、筋肉達磨・・・いや・・・リアル金剛力士像と一緒にす  
るな〜!!!!」

幸樹はいわゆるところの頭脳派、あんまり鍛えているとは言えない体は、はつきり言って華奢そのもの。

海軍服を速射砲の砲身に掛けているため、今の幸樹は一枚のシャツ姿である。

彼の壮士とはお世辞にも言えない細い体つきは、上から見下ろす“きんぼう”にもはつきりと見える。

「……どつちも似たような物じゃない……。しょーがないわね、そんなにキツイなら私が数えてあげるわ。」

よつこらしよつと、数メートルはあろうかという高所からスタツと着地する“きんぼう”。

「それじゃ数えてあげるから幸樹……時計を貸して。」

「あ、ああ。」

この短い間ににじみ出た汗が黒い革のベルトを濡らしていたので、幸樹は慌ててシャツでふき取るとそれを近づいてくる“きんぼう”にパスした。

「あと、45分以内に終わるかしらね……。それじゃ、百二十五からまた始めるわよ。」

「お、おう!」

自身に再び気合いを入れ直すと、幸樹は上腕に再び最大限の力を込める。

「百二十五・・・百二十六・・・百二十七・・・」

カウントをし始めた“きんぼう”。

だがその表情は、特有の毒気に満ちていた。

「坂上艦長・・・すみません、自分がもう少し早く注意していれば・・・。」

祖国では未だに男尊女卑が一般的な中、前甲板で繰り広げられている女尊男卑の光景を見つめる副長の宏史。

その時、不意に通信士の辺りが騒がしくなる。

どうしたのか？と声をかけようとしていると、逆に向こうから声をかけられた宏史。

「副長・・・妙な通信を傍受しました。」

インカムを耳から外し首にかけて宏史の方を向く女子通信士。

「妙な、通信？」

肌寒い位の風が海の方から吹いてくるのに、厳しいノルマを着々と進めている幸樹には全く寒さは感じられない。

いや、むしろ汗が流れ始めて暑いくらいだ。

今の彼なら、季節が半年逆転しても喜ぶに違いない。

「三百五十二・・・三百五十三・・・三百五十四・・・ほらっ、ペースがまた下がってるわよ!!」

「そんなことっ・・・言っただって・・・」

「三百五十六・・・三百五十七・・・ええと、今何分かなあ？ 27分・・・三百二十八・・・」

「ひいひいひいひいっ!!! こ、この鬼女めえええっ!!!」

「ふふふ、何とでも言いなさい。でもお、今度止まったら叩いてあげるわ。」

そういつてムチを取りだすと、骨董品を見つめるようにウツトりする“きんぼつ”。

その時、突然艦外スピーカーから放送が入る。

『艦長！ こちら艦橋、司令部の山下大佐から通信が入っています。急ぎ艦橋までお戻りください。』

これぞ、まさに天の助けよ！

山下誠治大佐は、自分やこの艦のクルー達の父親と言っても良いほど、少年兵の時代からの上官であり良い世話役の佐官だ。

特に、幹部候補の訓練生時代には自ら戦闘技術や精神などを教授してくれた恩師でもある。

もしや、自分が窮地に陥っている事を大佐の第六感が悟ったのだからか？

なにはともあれ、幸樹はすぐさま直立すると軍服を元の通りに着こなす。

それを見ていた“きんぼう”はチヨット残念そうにため息を吐いた。

「・・・仕方ないわね。　はやく艦橋に行きなさい・・・いや、待つて・・・」

すると、“きんぼう”はあれほど痛めつけていた幸樹の手を優しく掴む。

「私が連れていくわ。　その方が早いでしょ。」

山吹色の陽光が真上から照らす甲板が、それとは違った煌めきを放った瞬間、幸樹と“きんぼう”の姿は甲板には無かった。

直後、異空間から突如降って来たように、幸樹と“きんぼう”は艦橋内に現れる。

ズテッ！

“ きんぼう ” の能力を知っているクルー達は特にもう驚きはしないが、見えないクルーは未だに慣れずにいつも驚くばかりだ。

「 いてっ！！ まさか、着地を失敗するとは・・・ 」

腰から艦橋床に落つこちた幸樹だが、高さが無かったためこれくらいどつてことは無い。

「 それより幸樹、通信が入ってるのよ。 急ぎなさい。 」

「 はいはい、了解！ 」

“ きんぼう ” に催促され、幸樹はすぐさま通信士が手に持っている受話器を耳に当て、過度な運動のため荒くなっていた息を沈めながら口を開いた。

「 遅れました、こちら “ きんぼう ” 艦長、坂上です。 」

『 ……こちら横須賀司令部、山下だ・・・坂上少佐、この通信を全艦放送に流してくれ。 』

「 は、はい・・・通信士、全艦放送に・・・。 』

受話器を耳元から放して通信士に告げると、彼女は黙って頷き通信設備のコンソールのレバーをいくつか操作する。

「 全艦に繋がりました。 どうぞ・・・。 」

「 大佐、どうぞ・・・。 」

再び受話器を耳元にあてがった幸樹は、通信の向こうに居る長年の恩人に向けて訓示を促した。

『全クルー、良く聞いてくれ。諸君らは、まだ二十歳にも満たない者がほとんどだが、これまで良く幾度の訓練に耐えてくれた。』

何を言い出すのかと思えば、落ち着いた声で山下大佐はまるで卒業式の祝辞を述べ始めたようだ。

『その諸君らの技量を信じ、独断ではあるが一つの指令を威令したい。何者かの策謀によって・・・日本が、飲みこまれようとしている。』

にわかには信じがたい言葉が、晴れ間からの突然の落雷のようにいきなり飛び出してきた。

副長の宏史につられて、幸樹も艦橋右舷付近の壁にかかっている白いカレンダーを見つめる。

いや、気がつけばかなりの人数がそれを見ていた。

4月1日・・・なるほど、そういうことか・・・

『・・・大佐、今日が四月馬鹿だからと言って、通信を使ってソレは・・・』

艦内からどつと笑い声が上がりかけたその時・・・

『馬鹿っ!! 嘘などでは無い!!』

いつになく鋭い剣幕で怒鳴られた。

通信士がスピーカーの音をかなり大きめにしていたので、数秒経った艦内でも未だにこだましている。

大佐がここまで声を張り上げて怒鳴った事は、十数年一緒に居て過去何度かくらいしかない。

それだけに、宏史でさえもしやと思い始めたその時だった・・・

『ヒュルルルルル・・・！』

大気を捻るような高い音が、スピーカーの向こう側から聞こえてきた。

『大佐！ 危ないっ！！』

幸樹達よりは年上の感じの男の叫びが聞こえた瞬間・・・

ズドオオオオン！！

スピーカーからは腹腔を震わせるような重低音が轟く。

そして、ガラガラとコンクリートや鉄骨が崩れ落ちるような轟音が聞こえてくる。

さらに数秒後にはパラパラと小石が地面を叩くような音しか聞こえなくなり、やがて静寂に包まれた。

静寂に包まれたのは艦橋も同じことだった。

「砲・・・弾・・・？」

宏史が金魚のように口をパクパクさせて呟いた。

艦橋クルーの視線は、全く飾りつけの無い黒スピーカーに今や釘付けとなっっている。

あの気の強い“きんぼう”ですら、目を見開き両手を口の前で合わせて絶句している。

「大佐！！ 山下大佐！！ 応答してください！！！」

通信設備のコンソールには、未だに接続中と表示が出ている。

と言う事は、通信は切れてはいない。

だが、それで大佐が出ないということは・・・！！

聞こえてきた砲弾の落下音、そして爆発音・・・

誰もが最悪の事態を考えたその時・・・

『ゴホッ！ ゴホッ！！ クソッ、売国奴め派手にやりやがって！』

せき込みながら大佐のいつもの声で再び通信に復帰した。

近くで砲弾が炸裂したであろうに、声に全くの震えが無いとは偉丈夫な人だ。

「大佐！ お怪我は！？」

『ああ、かすり傷程度だ。　だが、今ので近くの兵舎がボロボロだ、死傷者も出てるだろうな・・・』

「大佐・・・横須賀で一体何が起こってるのです！？」

『ようやく信じたか？』

流石に山下大佐が、ここまでの演出をしても自分達を騙そうとする演出家とは到底思えない。

『ならば良いか？　全艦のクルー、良く聞け。・・・艦長、ウィルキアでクーデターが起こったと言う話は聞いたな？』

「たしか・・・ウィルキア国王が乗艦されていた旗艦およびその残存の近衛艦隊が二陣に渡って亡命のため、横須賀に廻航して来ると・・・」

幸樹も数日前に海軍本部から知らされた内容は確かに頭に残っていた。

『だがな・・・俺たちはしてやられたんだ。　近衛海軍の亡命艦隊は最初に横須賀に入港したやつだけだ、二陣目はクーデターを起こしやがったウィルキア国防海軍の連中だったんだ・・・』

それを聞いた幸樹には、横須賀で情報を送っている大佐の歯がみする表情が目につかぶようだった。

「しかし、なぜ本部は気付かなかったのですか？　・・・まさか！？」

『そつだ・・・うちの売国奴、君塚大将が奴らを招きいれたんだ・・・』

君塚大将・・・実戦に於いてはムチャクチャな作戦を展開し兵士を無駄死にさせ、旗色が悪くなるとすぐに逃亡等、さらには財界からの賄賂などといい、黒い噂が絶えない將軍だ。

なぜ、こんな功績も無い者がどうして大将までなり上がる事が出来たのか・・・？

一つは、彼の生まれに深い関係がある。

彼の父親、「君塚郷作」はウィルキアと同盟した日本の艦隊提督としてロシアと激戦を繰り広げ、劣勢の数は何するものぞとばかりに果敢に攻めたて、見事歴史的勝利を収めた立役者である。

そして母親は、「君塚はる」旧姓を四矢やしまという。

四矢と言えば、民間軍事問わずたくさんの造船シェアを持つ日本屈指の重工業財閥、四矢重工業がある。

もうおわかりだろうが、「君塚はる」はその財閥の令嬢だったのだ。

そしてその間に生まれた君塚大将が、財界や古参の軍人たちに無駄に高い評価を受けるのは明らかだ。

そして最後の理由、これは幾多の大戦で日本が疲弊したという事だ。

敵を追い払う為の盾や剣となるべく作られた艦や陸上兵器、航空機などは戦争が終わった途端、国民から無用の長物扱いされたのだ。

その身の翻し方に生き残った軍人たちは憤りを覚えるも、それが民主主義と言うものだ。

そして疲弊しきった財政を立て直すため、国は拡大していた軍事費の削減を始め、やがて戦時中の半分にまで減らされた。

しかし、彼が大将となつてからはどうか・・・？

政治団体に献金をする財界の意見を、国は否応にも無視できない。

その献金最大手が海軍大将と密接な関係があるのだ、どうなるかはわかりだろう。

『今、湾内では天城の防衛艦隊が必死に粘っているが・・・売国奴は大和型戦艦を三隻も出して来てやがる、いつまで持つかはわからない。』

山下大佐の情報では、いち早く君塚大将の裏切りを知った海軍の天城大佐が、湾内に手勢の艦隊を展開させて防衛に当たっている。

だが、いかに老練の彼に率いられてきた艦隊と言えど対峙する相手の力も数もが違いすぎる。

戦線崩壊は・・・免れない。

「・・・大佐はどうされるおつもりですか？」

『そうだな・・・最後の一人になっても、と言いたいとこだが、まあいつちよ上手く逃げてやる。やるべき事がたくさんありそうだからな。』

こんな時にも、彼独特の悠長な返事が聞こえる。

しかし、いかなる困窮時にも自身を決して失わないのは一流の軍人の証なのかもしれない。

『お前たちも仲間と合流するために、日本を離れる・・・。』

仲間と言う言葉に、幸樹は眉をひそめる。

特に艦隊指揮を任されているわけでもない山下大佐が、自分達の仲間となる艦を派遣することができるとは思えなかったからだ。

例えそうだとしても、湾内は多数の戦艦によって封鎖されている。

脱出は至難の業の筈だ。

「仲間・・・ですか？」

『そうだ。これは亡命してきたウィルキア近衛海軍のガルトナー大佐からの情報だが、横須賀に廻航した残存艦隊とは違い、ウィルキアを脱出する際にアリューシャン列島方面へと北上した近衛第1艦隊が存在するそうだ。』

逃走経路を二つに分けることは、確かに名案ではある。

二手に分かれる事で、追手の密度を削ぐ事になるからだ。

『だが、向こうとはこっちの近衛艦隊でも連絡が取れないそうだ。現在の彼らの正確な場所は分かんらん。』

危険極まりない目的地の不明瞭な航海。

富士の樹海が比喩物にならないくらいに広い太平洋のどこかにいる仲間を見つける為の航海に出なければならぬのだ。

不安が無いと言えはウソになるが、それでも幸樹の覚悟は決まっている。

「……分かりました。我々は、このまま北上してアリューシャン列島方面へと向かいます。」

『頼むぞ、幸樹……そして、“きんぼう”。』

自身にまるで国を託されたような使命感に燃えるクルー達。

「よし、やってやるんだ！」と今にも聞こえてきそうだった。

その時だった……近くに居た為か、幸樹には微かに聞こえた。

「……メ」

振り向いて彼は言葉を失った。

あれほど気が強く、涙という単語などあった物じゃないと思ってい

た“きんぼう”がぼろぼろと涙を流している。

「きんぼう”・・・君は・・・」

「・・・ダメエエエツ！！！！」

彼女の絶叫に近い叫びと共に、体から何かの光のような物が発せられた。

次の瞬間・・・

ガクンッ！！

「・・・んなっ！！？」

艦が急速に傾いた。

だが、浸水しての傾斜では無い！

そして、艦橋中央の羅針盤がグルグルと回る。

「艦長！　だ、舵輪が・・・か、勝手にっ、面舵を取ります！」

操舵士が必死に舵輪を元に戻そうとするが、まるで始めから固定されていたかのようにビクともしない。

だが、異変はこれだけでは終わらなかった。

不意に艦のエンジン音が高くなり、艦が加速し始める。

艦橋のモニターには、《両舷前進全速》と表示されていた。

「誰が全速にしると……！」

幸樹は言いかけたが、彼の眼には推進制御レバーと格闘する数人の士官が映った。

皆、舵輪と同じように元に戻そうと悶絶しているのだが、こちらも例にならったように全く動かない。

先程の涙と絶叫、加えて人間ならぬ何かでなければできない所業。

幸樹は羅針盤の前に立ちすくむ彼女へと詰め寄った。

「今すぐ元に戻すんだ……“きんぼう”。」

「イヤ……イヤよ！！ 私は、大佐を助けに行く……私たちがら出来るわ！！」

「ここから横須賀までどのくらいかかると思っている！？ それに相手は大艦隊、こっちは俺たちだけ……いくら最新鋭の艦でも、限界ってものがあるだろ！」

「それでも行くわ！！ 大佐達を助けなければいけないでしょう！！？」

“きんぼう”がいつもとは違い、純粹な感情から語気を荒げる。

一向に幸樹の言う事を聞こうとしない“きんぼう”。

おかげで幸樹は悟った。“きんぼう”は山下大佐に何かしら特別な感情を抱いている、と。

しかし、だからこそ彼の命令に従う事が大切だ。

幸樹は、右手を握りしめる。

「……すまない！」

「幸……？」

バシイイツ！！

幸樹の言葉に困惑した彼女の左頬を、彼の右手の平が叩いた。

その光景に、周りのクルーも息をのむ。

意外と勢いが強かったらしく、彼女の軍帽が頭から振り落とされた。

幸樹の平手打ちが炸裂した左頬を押えながら、叱られた子のような上目で幸樹を見据える“きんぼう”。

「……大佐が大切なら……今は彼の言う通りにするのが、正しい選択だ。僕の指示に、従ってくれ。」

「……」

その時、どこからともなく「へへっ」とかすかな笑い声が聞こえた。

だが艦橋のクルー達は皆、笑っている者など一人もいない。

『よしっ、良く言った・・・幸樹。』

答えは、実は未だに繋がっていた通信のスピーカーから聞こえてきた。

その声を聞いて、幸樹が羞恥で赤くなる。

「まさか、大佐・・・今の一部始終を聞いてたの・・・ですか？」

途端にいつもの調子に戻ってしまう幸樹。

『まあな、というか通信は繋がったままだから仕方ないだろ。しかしまあ、音から察するにお前、“きんぼう”（おんな）をぶつたな？ あーあ、後からどうなっても知らねえぞ？』

「ははは、早速問題が増えました・・・。」

幸樹が苦笑いを浮かべながら返答する。

一方、当の“きんぼう”は、未だに悲痛さを露わにしたまましゅんとなつて羅針盤にもたれかかり黙り込んでいる。

『おい“きんぼう”、聞こえてるか！？ 俺はお前と始めて会った時、約束したよな？ こいつらと、この国を守るってな・・・そんな大事な使命を帯びたお前が、そんな取り乱しようでどうする！？』

その大佐の言葉にハツとなったように“きんぼう”がその顔を上げる。

その途端・・・再び艦が針路を変える。

「あつ、艦長！ 舵輪が戻ります！」

「機関も・・・半速に戻っています！」

先程より緩やかに針路を変えた《イージス艦きんぼう》は、再び北へと船首を向けた。

「大佐・・・すいませんでした！ 私とした事が、取り乱すなんて・・・」

恥ずかしそうに顔を赤らめながら、落ち着きをどうにか取り戻した“きんぼう”は大佐に謝った。

「謝るんなら、幸樹達にな。それじゃ、ここにもじきに敵さんが来そうなんだ・・・」

山下大佐がまさにそう言ったその時、スピーカーからパンパンと破裂音が微かに聞こえてきた。

「ちつ、君塚め陸軍の奴らも手籠にしゃがったな！」

十人に満たない陸軍兵士が、電柱の配電盤付近でたむろする山下大佐達一行を見つけたらしく、ピストルで撃って迫って来る。

「じゃあな、みんな・・・良い航海をつー！」

それだけ言つと、山下大佐は木造電柱の配電盤から導線を数本強引に引きぬくと、それを自身のポケットにしまった。

その後の、基地からの逃亡劇は実に華麗だった。

迫ってくる追手の視界から逃れると、輸送船のコンテナを隠れ蓑として潜り込む。

輸送船へ迫って来た追手、そこにある全てのコンテナの中まで調べたが結局山下大佐を見つける事は出来なかった。

実は、山下大佐は甲板にロープが掛けられたコンテナの中に隠れていたのだが、追手が輸送船の中に到着してすぐにそれは巨大クレーンで波止場に陸揚げされていた。

そして基地のへと部下数人と追手からいとも簡単に逃れると、あらかじめ連絡しておいた合流場所に停めてあったトラックに乗り込んだ。

幸樹達に宣言した通り、本当に上手く逃げきれたのだった。

「驚きました。」

「まさか、こんな方法があつたなんて……。」

揺れ動くトラックの風防で覆われた荷台の中、部下たちが感嘆を述べると大佐は照れくさそうに頭をかく。

「まあ、お前たちの海軍士官学校じゃ教えないだろうな……。」

それを聞いた部下達が一斉に眉をひそめた。

その時、その中の一人が何かを思い出したように尋ねた。

「そう言えば、大佐は昔は陸軍にいらっしやったと聞きましたが・  
」

「ん・・・まあな。陸軍の、ちよつと変わった学校を出たんだが、途中で海に憧れてしまつてよ・・・」

この時、この一台のトラックが横須賀海軍基地を脱出したという事実に気付いた者は居なかった。

そして、気付かれていないのは極秘に生まれたイージス艦“きんぼう”も同じだった。

だが、今のクルー達は自分達に重大な何かを託された使命感に燃えている。

(必ず、この国に帰る！ 大佐、ご無事で・・・)

幸樹は自分にそう言い聞かせると、艦長席のマイクを取り全艦放送に繋ぐ。

「本艦は、山下大佐の指示通り、ウィルキア第11近衛艦隊が存在すると思われるアリューション列島へと向かう！」

「了解です、艦長！」

全員が、敬礼をもって彼に勇ましい返答をする。

その中には、あの“きんぼう”の姿さえあり、一瞬だが幸樹を驚かせた。

その表情は、「大佐から任されたんだから、しっかりしなさいよ。」  
と言っているようだったが、少し違うようにも思えた。

「おーもかーじ、両舷前進原そーく！ 針路0 5 0へ転舵！」

こうして、また・・・皇国のさまよえる船乗りたちは海へと駆り出されることとなった。

～続く～

JIN「ぐへえ・・・まさか、一話がこんなに長かったとは！ 4  
話目をアップしてから本当に宣言通り、一週間近くかかってしま  
いました。」

????「それは、アンタに力が無いだけでしょ？ 何？ もうヘタ  
し宣言してるの？」

JIN「げっ、“きんぼう”!!」(三国志的な意味で)

きんぼう「あらこんばんわ、読者の皆様方。私が日本の期待の新  
星イージス艦、きんぼうの艦魂です。これから、どうぞよろしく  
ね。」

JIN(またエライ来客が、来てしまった! OTL)

JIN「あ……今日はどのような御用件で?」

きん「ん? アンタみたいなドヘボ作者に、私が直々に入れ知恵を  
してあげるのよ。感謝しなさい。」

JIN「はあ……」(汗)

きん「そう言えば今、先達の艦魂作家の方々の間で“艦魂”と言っ  
物が見直されているみたいね。」

JIN「そうだね……まあ、読者の意見に真剣に耳を傾けられた  
黒鉄大和先生の考えは立派だとは思っよ。」

きん「で……アンタはどうなの?」

JIN「……は?」

きん「は? じゃないわよ!!」

ギョッ!!

(“きんぼう”が持っていた鞭でJINを首絞め)

JIN「ゲエッ!!?」

きん「アンタねえ、そんな駄作な艦魂小説書いて、黒鉄大和先生様や草薙先生様にどうやってたら合わす顔があるわけ!？」

JIN（駄作ヒドス・・・）（TOT）

きん「だいたい、なんで書き始めたんだっけ？ 読者の皆様になさい!」

JIN「黒鉄大和先生の《艦魂年代史》シリーズに感動したからです・・・。」

きん（キュッ）（さらに絞める）

JIN「ゲッ!!」

きん「最後、なんて言ったのかしら?？」

JIN「ほ、本が出版されたら・・・バイトの給料はたいても買いたいくらいに・・・。」

きん（キュッ）（さらに「Y」）

きん「もういつかい、聞こえなかったわ。」

JIN「せ、先生に・・・で、弟子させてもらいたいくらいに・・・感動しましたっ!!」

きん「ふう。」(RELEASE)

JIN「ハア・・・ハア・・・死ぬかと・・・思った。」

きん「それが聞けたなら、良いとするわ。」

JIN「あれ？ もう帰るんだ。」

きん「当然よ、こんな汚<sup>お</sup>部屋に居たくないもの。」

JIN「だ、誰が上手いこと言えとっ！！？」

ギイイイ

(ひとりでに部屋のドアが開く)

JIN「ん？」

(そこに立っていたフランケンシュタイン(？)2体と目が合う)

JIN「ぎゃあああああっ！！でたあああああああああ  
っ！！！！」

????1「JINさん・・・タスケテ・・・」

????2「何で・・・俺まで・・・」

JIN「だ、誰だ！！？ こんなフルボッコな奴ら、俺は知らないぞ！！」

きん「あら、幸樹に宏史じゃない。」

JIN「・・・はい??」

きん「二人とも、剣道の互角稽古（防具なし）を抜けだしてへボ作者に嘆願？ 良い身分ねえ。」（凄まじい下目で二人を見る）

JIN「互角稽古の防具無しって、竹刀が体にダイレクトに当たるじゃん！！ だから、二人とも顔が・・・」

きん「それだけじゃないわ。日本の国技を、今回の無様ツプリを發揮した罰として防具なしでやらせてるわ。」

JIN「なんとということだ！」（Civilization的な意味で）

きん「アンタも、こうなりたくなかったら一生懸命作品に全精神力を注ぎなさい。」

JIN「は、はあ・・・分かりました。」

きん「言つとくけど、アンタには私はもちろん、パイオニアの先生方の靴を舐める権利すら無いからね。」

JIN（はあ・・・幸樹達の苦勞が分かる。）

きん「さあ、幸樹に宏史・・・次は世界の格闘技に挑みましょうかね。」

幸&宏「嫌だあああああああ!!!」

ボタンッ

「JIN」では、ここまで読んでくださった読者の皆様方に、今日も感謝です。次話は、10日前後かかるかもしれないので、よろしくです。」

ガチャッ

きん「急ぎなさい、ゴミ作者。」

「JIN」はいいっ、ただいまっ!!! (涙目)

「またおこられちゃった・・・」

「ダメぽ・・・」

「ムフッ」



第五話 十六条旭日旗を覆う暗雲（後書き）

コピペしたAAがちょっと歪な件についてはご容赦をWWW

後書き控え室

カイト「まったく、出番なかったな、今回。」

リナ「仕方ないですよ、あの作者ですもん。」

カ「いや、それを言うなら彼らの出番だったからだろう……。

それはそうと、坂上艦長がやらされていたあの腕立て伏せは、自衛隊で本当にあるんだってな。」

リナ「へえ、そうなんですか。」

フレ「あ、感想やご意見まっす。ではまた次回もよろしくです。」

## 第六話 謎解き航海（前書き）

前回までのあらすじ

ウィルキア王国を、クーデターの魔の手から逃れるために脱出した  
ウィルキア近衛海軍第1艦隊のイージス艦フリースベルグ。

その逃亡劇のさなか、アラスカでマーク・バリストン中佐以下、ア  
メリカ合衆国海軍の巡洋艦テキサスのクルー達を全員救助に成功し  
た。

しかしそれからさらに数日が経ち、彼らは針路上にある問題を抱え  
ていた。

## 第六話 謎解き航海

『軍』とは、古来より国が政治的政策などの強要を敵対国に迫るために突きつけられる剣である。

『軍』とは、敵対国を戦闘をすることによって自国の必要不可欠な利益や国土、国民を他国の様々な脅威から守るための盾である。

では、我々はどうなのか？

国と言う枠組みを失った我々は、一体何に剣を突き付け、何を盾で守れば良いのだろうか・・・

「それはっ、本当なのですか!？」

「ああ、最初に見た時は私も信じられなかったが、問い合わせたところ間違いではないそうだ。」

バクスター長官の発表に極度に緊張感が漂う艦橋と、リナを始めとしたクルー達。

それはあまりの衝撃だった。

長年文化交流のあった友好国で、軍事面においてもなんとも心強かった同盟国日本が、反乱軍に屈伏したとの情報だった。

「それで、駐留する我が軍の艦隊はどうなったのですか？」

「被害も決して少なくは無いが、国王陛下を始めとした政府首脳陣は、親王国派の日本軍の方々の助けもあって無事に脱出されたそうだ。

これが起こったのが、今から約2週間前だ。」

「2週間前、となれば脱出に成功した近衛艦隊は今どこに居るのですか？」

「現在、近衛艦隊旗艦イダヴァル以下近衛海軍の残存艦隊は受け入れを表明したアメリカ合衆国ハワイ諸島近海に接近しているようだ。この情報も、アメリカ合衆国を経由でこちらに送られてきた。」

とりあえずの国王および仲間の無事に安堵するも、脅威が拡大した事に誰しも不安は隠せない。

「結局、どちらも行き先がアメリカになってしまいましたね。」

「そうだな。だが、むしろその方が各友軍艦隊への連絡は取りやすい。」

不幸中の幸いを見つけるのがカイトの得意技でもある。

そんな能天気のように何故か重みのある言葉に、リナは苦笑すると

ともに正直に彼をすごいと思った。

「艦橋、CIC。 定時連絡、現在のところ対空、対潜、対水上に  
目標無し。」

『了解した。 そのまま監視を怠るな。 我々も、しばらく後に向  
かう。』

一部以外はあちらも台本通りのような返答。

あちらもと言う事はこちらでもある。

正直、この受け答えを何度反復しただろうか。

だが、それはいい事なのかもしれないと思いながらバンは席から立  
ち上がると、CIC後方にでんと構える大きなデスクに向かう。

そこには、一枚の赤線や青線などが引かれた大きな用紙が置かれて  
いた。

地図のようにも見えるそれは正確には地図では無く、世界の海洋を  
安全に航行するためには欠かせない海図だ。<sup>チャート</sup>

しかも便利な事に、このチャートが置いてあるのは何やらテレビ画  
面のようなスクリーンが上面に付いたデスクの上。

それに合わせるようにチャートを敷いてバンが横のボタンなどを操  
作すると、そのチャートに透けるように一つの矢印が浮かび上がる。

そう、それはこの艦の航行状況を手間を掛けずに一目で知るための技術の賜物だ。

そのスクリーンを見て、バンは表情を曇らせた。

この先のフリースベルグの航路上に、黄色で塗りつぶされた部分があった。

ウィルキア王国海軍では、チャートの海洋部分に次のような塗り分けをしていた。

まず、薄い青色の部分は深い海洋で敵は例外として艦の航行に何も支障をきたさない海域。

続いて黄色の部分は、浅瀬等が広がり航行できるのだが注意を必要とする海域。

さらにオレンジの部分は、浅瀬の中でも岩礁などが存在し、衝突した場合に船を大破させる危険性がある海域である。

今、彼等の80海里ほど先にあるオレンジ色の海域・・・その名はクイーン・シャーロット諸島。

そして彼らには、二つの選択肢があった。

一つは危険ではあるが、このままクイーンシャーロット諸島の浅瀬帯に侵入しアメリカ合衆国ワシントン州方面へと出る事。

もう一つが、クイーンシャーロット諸島を迂回し、再び太平洋方面

へと出てカリフォルニア州ロサンゼルスへ直行する事である。

それから程なくしてだった、CICにカイトとリナが航路決定のために現われた。

「この先約80海里前方に控える海域の通過方法について、君達に判断を聞きたい。」

「艦長、クイーンシャーロット諸島を迂回して航行することを進言します」

兄の艦長に対し、薄暗いCIC内でも顔がはっきり見えるくらいにバンはその兄の顔を見据えて言った。

「・・・理由は？」

「はい、比較的水深が浅く未確認の岩礁が存在する可能性も否定できません。万が一、船底が岩礁に接触するような事があれば・・・」

「うむ・・・確かに危険だな。」

カイトは静かに頷くと決定権を持つ残りの幹部達に視線を向ける。

「では、トライトン砲雷長と同一の意見の者は他にいるか？」

その号令のような彼の問いかけに、挙手する者が5名中4名。

一応これで決まったような物だが、その手を上げなかった人物。

それは、副長のリナだった。

「私はその意見には賛同し兼ねます。」

「副長、理由は？」

「確かに、クイーンシャーロット諸島には未確認の岩礁が存在する可能性は否定できません。しかし、迂回するとなると太平洋側に大きく・・・このような航路を取ることになります。」

彼女がチャートを指でなぞって擬似的に航路を現す。

「それに現在、クイーンシャーロット諸島南方沖では米太平洋艦隊が一部ですが演習を行っているとの報告が入っています。」

岩礁は、本艦のソーナーで察知し十分回避出来るでしょう。ここは多少のリスクよりも、一刻も早く合流を優先すべきだと思います。」

「副長、もしかや太平洋側に敵艦隊が存在すると言う情報でも？」

「それなんですけど、実は空母を中核とした日本艦隊が太平洋で演習を行ったという情報があります。もう、一週間も前ですが・・・おそらく日本に帰港したと思われませんが、もし帰港しておらず、アメリカ西海岸まで我々を追撃して来たとなれば・・・。」

「タイミングが合うと言う事か、確かにそれは厄介だな・・・。」

「もつとも、起こり得る可能性としては低いとは思いますが・・・念を入れるに越したことは無いと思います。」

さてどうしたものか・・・とカイトは頭を悩ませる。

とりあえず、この場は解散として静かに考えよう。

まだ、一時間以上の時間が残されている。

「諸君の意見はわかった。では諸君は持ち場に戻れ、後ほど全艦放送にて針路決定を知らせる。」

それから程なくして、C I C内では交代の時間がやって来た。

朝から働き詰めだったバンも職務からようやく解放される。

自室に向かつても良かったのだが、彼の足はなんとなしに後甲板へと向かっていた。

後部甲板へと続く重い防水扉を開くと隙間から山吹色の光が差し込み、C I Cの薄暗い部屋になれていたバンの目を一瞬眩ませる。

目を細めながら空いていた右手で光を遮ると、そのまま後部甲板へと一歩を踏み出す。

その眩しさの影響は、太平洋の水平線上に沈もうとしていた陽の光が原因だ。

しかしその光の先に誰がいるように見える。

小型の対空ミサイルRAMを格納している甲板上面を通り越し、その向こうにあるヘリポートよりさらに奥の艦尾付近だ。

元から向かうつもりだったのだが、そこへと近づいて行くバン。

艦尾とその人影まであと10メートル程度まで近づいたところで、彼はそれが誰なのか分かった。

一見海軍服を着たクルーのだれかだと思っていたが、それは違った。

この艦の魂、“フリースベルグ”だった。

彼女はずっと艦尾の方向を見つめて佇んでいる。

「フリースか・・・眩しくないのかい？」

「通信長？・・・いえ、眩しくはないですよ。それよりも、夕陽がきれいだなあって・・・ずっと思っていました。」

彼女の視線の方向。

4発のスクリューが高速回転することによって生み出されるたくさんの白い気泡が伸びていく方向に、  
今まさに海面に沈もうとしている太陽があった。

「バンさん・・・やっぱりあの夕陽の向こうでは、また誰かが傷ついたりしているんでしょうか。」

彼女が哀しげな眼で見つめているであろうことを彼は察した。

正体が最新鋭のイージス艦であっても、心は常闇に覆われようとしている世を憂う一人の少女なのだろう。

「多分ね。そして、これからももっと増えるかもしれない。でも、それを一秒でも早く、」

一人でも多くの人々を助けるために俺たちはここにいる。」

すると、彼女も健気にバンに頬笑みを向ける。

「それを聞いて良かったです。ならば私も、頑張らないといけな  
いですね。」

「ああ、是非とも頑張ってくれよ。期待しているぞ、フリース。」

その時、インカムのアラームが鳴り二人とも耳を傾ける。

艦橋の艦長席に座るカイトは、艦長席の横に備え付けてあるマイク  
を取ると彼の後ろに座るバクスター長官を一旦一瞥する。

「では、よろしいですね?」

それを見ると、長官は黙ってコクリと頷いた。

「こちら艦長、全乗組員に告ぐ。本艦の現針路上に問題がある、  
そこで検討した結果針路を一旦南へと  
再び太平洋側へと進み、その後針路を再度変更しアメリカ海軍カリ  
フォルニア基地へと入港する。」

その放送を、バンは特に普通と言った表情でただ聞いていた。

内にある微々たる喜びを内包しながら。

「嬉しいんじゃないですか？」

しかし突如言いかけられたその声に、バンは思わず吹きかける。

“フリースベルグ”がバンの顔を覗き込みながらクスクス笑っている。

「自分が言いだしつぺの案を採用されたから、嬉しいんじゃないですか？ バンさん？」

「な、何を言っているんだ？ 迂回案を出したのは、この船の安全に携わる者として当然の義務だろう？」

ん？言いだしつぺって・・・ことは、まさかこの子！！？

「ちょ、ちよつとフリース！ 君はなんで我々の話していた事を知っているんだ？」

あの場にいたCICクルーが小耳にはさんだとなれば話は分かるが、あの場に君は・・・。」

「居ましたよ。 何言ってるんですか、バンさんは・・・。」

呆れたような顔でじーっと薄くなった瞳でちよつぴり冷たい視線を浴びせ掛ける。

「この艦は私の体のようなものです！ この艦の中私が何処に居たって不思議じゃないです。」

当たり前のように理解ができる気もするが、やっぱり納得は難しい。

「まあ、そうかもしれんが……。」

(そうなった場合、誰かのヒソヒソ話とか悪口とかも聞いているのかこの子は!?)

5、60キロメートル先の潜水艦のエンジン音も聞き取るような凄  
い耳を持っているんだ

、きつと誰かのヒソヒソ話なんて耳を澄まさなくても聞こえている  
に違いない。

「なあ、フレース。」

「はい?」

「君は……いや、何でもない。」

馬鹿げている、こんな質問をするなど……。

そう思いながら、彼は後部甲板を後にしようとして踵を返す。

「それじゃ、またな。そこから落っこちるなよ。」

「……はい。大丈夫です。」

にっこりと笑い、彼に向け軽く手を振る“フレースベルグ”。

その様子は、どこからどう見ても愛らしい少女そのものだった。

「これが、君達の最善の方策だと信じるよ。」

マイクを置いたカイトに向けてバクスター長官が語りかけた。

「はっ、ありがとうございます。長官。」

すると、両手の平を水平に向けてやれやれと言う表情のマーク中佐が目に入った。

「済まないな。本土上陸は、少し引き伸ばしになってしまった。」

「おうおう、今は別に良いが・・・あんまりちんたらしていると、この艦の内火艇を頂戴して本土まで行くからな。」

「はははっ、それだけは勘弁してくれ。さて、我々も食堂に向かうでしょう。」

と言った時だった、CICから艦橋へとカイトが着けていたインカムが鳴る。

『こちらCIC、艦長・・・暗号を傍受しました。』

「暗号？ 発信源は分かるか？」

『現在、発信源の特定はまだ出来ていません。』

「了解した。では発信源の特定と暗号の解読を実行せよ。」

「暗号とな．．．？」

インカムのヘッドフォンを外したカイトに、長官が尋ねた。

「はい。CICからの情報では、暗号を傍受したとの事です。現在、解析が進められていますが．．．。」

「ふむ．．．まあ良い、内容が分からん以上勝手に動く事もなるまい。貴官等は、先に休息に入って置きたまえ。」

「解読でき次第、私が知らせよう。」

「しかし．．．。」

「中佐、働き過ぎは良くないと．．．誰かに言われなかったかね？」  
それを聞いてカイトの脳裏に浮かんだのはリナのちよっぴり怒った顔だった。

（いや、なんで長官が知ってるんだ？ あれは、確か合流前の出来事だったはず．．．。）

まあ、いいか．．．。

「分かりました。長官の御厚意に感謝します。」

「かまわない。ずっと座りっぱなしだったから、仕事が欲しかったところだね。」

そう言うと、歴代の艦長のような威厳ある振舞いでさっと艦長席に

座る。

慣れた手つきでインカムのマイク部分だけを彼は前に持って来る。

「CIC、艦橋。こちら第11艦隊司令長官、しばらく私が臨時で操艦する。」

多分、向こうは相当上ずった声で答えているに違いない。

特に相手が長官とあっては……。

夕食を終え、そのまま交代の時間となりリナに後を任せて艦橋を去ったカイト。

敵地では無いという安心感が、下弦の月が照らす部屋のベッドで横になるカイトをうつらうつらとさせていた時だった。

深夜1時を回った辺りだった、突如部屋のインターフォンが鳴った。

眠りかけていたと言う事もあって、出るまでに7回ほどコールがかかっていった。

「……どうした？」

両目を押えながら、受話機を耳に当てる。

「艦長……暗号の解読が終わりました。しかし、内容が少し奇妙でして……とにかく早く来てくれませんか？」

眠気で鈍っているカイトの脳でも、リナの語気から推測して何かしら大変な事が判明したらしい事が分かった。

「分かった、すぐに艦橋に向かう。」

クローゼットからハンガーにかけていた上着を取りだすと、カイトはそそくさと部屋を後にした。

どうやらこの海域も楽をさせてはくれないようだと思痴をこぼしながら……。

艦橋に到着するとカイトを待ちわびていたように、リナを含め数人の士官達が彼の前に集合した。

「まず、こちらが暗号解読が終了した文章ですが……読み上げます。」

それを聞いたカイトが軽く頷いたのを見て、リナは再び紙面に視線を戻す。

「手筈は整った。Grace<sup>グレース</sup>をシスコ軍港のパーティーに招待する。George<sup>ジョージ</sup>は彼女をエスコートしろ。」

黙って聞いていたカイト、すると解読文を読み終えたりナと目が合う。

「……終わりか？」

「はい、終わりです。」

正直言つて、カイトは何が大変なのかが良く分からなかった。

一見すると、ボーイフレンドの親か何かが、ガールフレンドとその相手である息子に送った電文のようでもある。

ふむ……と考えているようで頭が回転していないようなカイトの表情を見て、リナも自身の説明不足にようやく気付いた。

「実は、これが出てきたのは米空軍の国内救難無線の3番ベースラインなんです。この3番ベースラインは、

1番2番と違って、普段は決して使われません。」

「まあ、確かに……コテコテの航空無線マニアの父親の、顔を拝みたいくらいだな。ところで、発信源は特定できたのか？」

次に大事な質問に冗談を交じえて返すと、リナの表情が曇った。

「こっちは真面目にやってるんですけど？　と言わんばかりの曇り方だ。」

「発信源ですけど……これがまた不思議なところですね。電波の喪失率と方角から計算して、おそらくバージニア州のアーリントン。」

「なるほど……私の知り得る限りあの場所には、そんなレアな航空無線に介入できる施設は一つしか存在しない。」

「アメリカ国防総省、ペンタゴンがある場所じゃないのか？」

「正解です、正確な座標は、北緯38度52分15・87秒、西経77度03分21・49秒、米国防総省に違いありません。」

「そうか・・・しかし、暗号が暗号とはまた厄介な話だ。とは言  
うものの、この艦にこの手の暗号解読の専門家はいない。」

まずはそれぞれが意味する単語を明らかにして行く必要があるそ  
うだ。この解読に、手の空いている者何名かをあてよう。」

これが一番無難な方法ではある。

とは言うものの、カイトの周辺にいたクルーでさえグレースやジ  
ョージと聞いて、人名としか思わない。

バクスター長官さえも5分ほど粘って出した結論は、「わからない。  
」の一言だった。

CICと言うのは、中々暇がない。

ソーナーから、レーダー、そして今回の謎の暗号を受信した通信と  
いい、四六時中目と耳を酷使するのだ。

現在、どのレーダースクリーンも、青と白い線以外何も表示され  
ていない。

ソーナーも、太いグリーンラインがほぼ平行に流れて行くだけだ。

つまりの所、何も異常が無い状態だ。

特に、広い太平洋上なら仕方がない。

だが、それが仕方がないのならＣＩＣの要員達が頭がカツチカチになつてしまふのも仕方がない。

それは・・・先刻に決まつた新航路を、バンはチャートに描いている最中だつた。

突如一時間以上前に艦橋から交代した筈のカイトがＣＩＣに現れた。

「艦長・・・」

バンが不思議そうな表情を浮かべ、他のＣＩＣクルー達は敬礼で彼を迎える。

「諸君等が、先刻に受信した暗号の解読が出来た。だが、困つた事に暗号の中に暗号が隠れている。」

これについて、君達にも意見を聞きたい。」

カイトがリナから預かつた用紙をひらひらさせて皆に呼びかける。

「手が空いている者は、これに目を通してくれ。ここに置いておく。」

そう言うと、カイトは流石に朝から働き詰めだつた体を癒すべく自室へと戻つていった。

その後のＣＩＣでは、その用紙がまるで授業中に回される切れ端手紙のようにひよひよいとＣＩＣクルーに渡り、渡されていった。

「さあ？」

「わからんな……。」

「グレースって、美人な女の子かな？」

「羨ましいっ……！」

何一つ、ストライクゾーンの答えは帰ってこない。

やっぱりか、と自身もさっぱりなバンが諦めかけたその時……

「砲雷長……それ、バリストン中佐達に見せたらどうですか？」

なるほどと、バンは答えとは行かないが大ヒントを得たような気分になった。

アメリカ人では無い自分達には、このアメリカ発の暗号を解くのに文化的な障壁があるのだろう。

だが、本場のアメリカ人である彼らならこの意味不明な単語を解読することができるかもしれない。

一方の自室に戻ったカイトも、暗号を思い返してはそれを頭の中で噛み砕こうと必死に奮闘していた。

用意した紙には、既にいくつもの単語が書き連なれていたがどれも答えとしてはボツのものばかりだ。

だが、そんな中でも一つ閃いた事がある。

エスコートと言うのは、確かに男が女をパーティーなどに付き添って送ることなどを言うのだが、軍事においてはもっぱら護衛の意味がある。

つまり、“サンフランシスコの軍港で起こる何かに、グレースを向かわせ、ジョージはそのグレースを護衛せよ。”と言う意味になる。だが、まだ全然足りない。

これ以上考えても、どうやら答えは出てこないらしい・・・諦めて時計に眠気が刺激し始めた目を向けると、既に2時を回っていた。

そのまま、ベッドに潜り込むと今度こそ彼は眠りの世界に誘われた。

126

翌朝、カイトは本日の最初の仕事として臨時の幹部会を会議室で開くと全艦放送で伝えた。

四枚の絵画が壁に掛かり、長机が面積の大半を占める会議室でフレースベルグの各班から1〜2名程が出席する手筈となっている。

その会議室に、不思議な来客が2名あった。

一人は、いつの間にか紛れ込んだ艦魂“フリースベルグ”。

そして、もう一人はバンにエスコートされて現れた。

「艦長、バリストン中佐は外国の将校です。彼をこの会議に参加させてよろしいのですか？」

彼女が、眉をひそめてカイトへと他には聞こえないように小声で言った。

リナの言う事はもっともだった。

この幹部が集まる会議においては、機密情報を扱う事も少なくない。その場に堂々と他国の将校を招くとなると、情報が漏れても文句の一つも言えないのは当然である。

「副長、それは私が許可した事だ。暗号の解読に、やはり現地人の人々の意見が欲しい。」

「しかし・・・」

「安心しろ、それはどうにかする。」

彼女を安心させるように言った後、周りを見渡すと全ての科の幹部達が出揃ったようだ。

「では、始めよう。」

周りに聞こえるようにカイトが言うと、とたんに周囲の雑談がピタリと止んだ。

「諸君、まずはおはよう。」

「「「おはようございます」「」

まばらではあるがきちんと返事が返ってきた。

「いよいよ、3日後にサンフランシスコの軍港へと入港することになったている。

そして我々より遅れること4日後には、第11艦隊の本隊が到着する予定となっている。

各科、上陸の準備を各員に出来ているかの確認を行え。くれぐれも、米海軍の方々に失礼のないようにな。

まあ、そこ辺りのルールなどについてはバリストン中佐にもお世話になる事があるかもしれない。」

「オフコース、任せときな。」

軽い口調で呟くマークに、頭を下げる方々の幹部達。

「さて、サンフランシスコと言えばなのだが・・・」

立ちあがると、20枚ほどの紙を集まった幹部にカイトは配り始めた。

「昨日、妙な暗号を受信した。それを解読した結果がこれなのだが、見ての通り司令科でも情報中枢科でもわかる奴は居なかった。」

配られた用紙を見て、幹部達からは再び「なんだこれ？」といった具合にがやがやと雑談が始まる。

そして、カイトは遂に彼の横へとたどり着いた。

バンと相談して、カイトが招いたマークの横へとだ。

用紙を置いて、バンが早速もっていた鉛筆で英語訳を書き始める。

その翻訳が完成した頃には、カイトはもとの座席に座っていた。

「なるほど……この為にですか。」

「そうだ、だが今の内は発信源は伏せて置こう。」

二人でそういった会話をしながらも、二人はマークの表情に注目した。

彼は眉を寄せて若干険しそうな表情をしている。

数分たって、彼が出した結論は……両手の平を水平に上げて首を傾げる行為だった。

「あー、駄目か……。」

「みたいですね。」

まるで、サッカーなどのスポーツで得点のチャンスを逃したような喪失感に二人は苛まれた。

ならば、これ以上論議をこのメンバーでやっても無理はない。

そう考えたカイトが、すぐさま立ち上がると全幹部へと告げた。

「では、諸君。今日はこれで解散だ。その暗号だが、受け持ち

の班員にも、一応回してくれ。」

そろそろと他の幹部達が会議室を出る中、カイト達とマーク中佐がまだ残っていた。

「しかし・・・なにか気になる。」

マークが呟いたその言葉に、カイトとリナは思わず顔を見合わせる。

「ジョージにグレース・・・人名以外でどこかで聞いたような気がするんだよなあ・・・。だが、それがわからん。」

「中佐、お願いです、それを思い出して頂きたい。恥ずかしながら、我々にとってそれが最大のヒントになるかもしれないのです。」

カイトの言葉を受けて、ううんと低く唸ったマーク。

すると、立ち上がり座っていた椅子を戻すとカイト達にこう告げた。

「俺は、分からんが・・・もしかしたら、俺たちテキサスのクルーの中には知っている奴がいるかもしれん。」

その中佐の言葉に、一抹の希望が見えたような気がした。

「では、お願いします。もし判ったら、近くのクルーにでも連絡してください。」

「了解。」

そう言うと、バリストン中佐は疲れがたまっている首を動かしながら

ら会議室を出た。

「判ると良いですね。」

「どつだろつな……。」

「どつという事です?。」

意味深なカイトの言葉を聞いて、リナが思わず尋ねる。

「探究しておきながらこう言つのもおかしいが……知らない方がいい事もある。」

フリースベルグには、航空機格納用のハンガーが艦橋構造物の最後に備え付けられている。

もちろん陸上に置けるものや専門の空母のサイズには到底及ばず、最大でも3機が限界だろうという大きさだ。

ハンガーの上部には、後部VLSや57mm速射砲の他、陸上攻撃に主眼を置いた速射砲AGSが一基備え付けられている。

そのハンガーのシャッターにもたれて座りこむ艦魂“フリースベルグ”。

彼女には、今良く分からない事という不安が一つあった。

彼ら　つまり、カイトを始めとしたクルー達がこれから戦う事になる対象についてだ。

古代から軍事行動と言つのは政治の手段や、外貨や資源の獲得といった目的でたくさん行われてきた。

だが、それらのいずれの戦いにおいても怖い物の一つに、敵の正体が判っていないという事があつた。

ヴァイセンベルガー大将は、既に日本をも飲み込むその他の諸外国をも飲み込まんと、その顎を大口に開かんとしている。

あの日本が呑みこまれたのだ、これからも飲み込まれる国は増えていくに違いない。

そうしてどんどんと形を変えていく敵の姿を想像すると、フレースは戦慄を覚えた。

怖い……

恐ろしい敵が目の前に現れるのもそうだが、強大化し続ける不定形な敵がいずれ自分達に立ちふさがると考えるのはさらに恐ろしい。

その時、僅かに震えるフレースの肩を誰かが叩いた。

「どうしたんだ？ 朝からこんな所に一人で……」

「あ、トライトン艦長……おはようございます。」

「ん、ああ、おはようフレース。」

カイトは話の腰を折られた気がしたが、それに構うことなくフレース

スの不安げな表情が気になった。

「艦長・・・艦長は、これから戦うべき敵の姿を考えた時、怖くは無いですか？」

「そうだな・・・フレース、君はそれが怖いのか？」

逆に尋ねたカイトに、フレースは黙ってコクリと頷く。

「そうか・・・だが俺は艦長だからな、怖がっては務まらない。だが、恐れる事は時として良い事もある。」

「へ？ それってどういう事ですか？」

「適度な緊張は、体の動きを活発にする。脳の回転だって早くなる。」

「もう、私はそう言う事を聞いてるんじゃない・・・」

フレースがカイトに反論しようとしたその時だった・・・

「分かってる・・・ん？ どうしたんだフレース？」

カイトが突如として黙り込んだフレースの異変にようやく気付く。

彼女は、左斜め上の空を見つめたまま佇んでいた。

「来た・・・みたいです。」

言葉を絞るようにようやくでた言葉と、直後に聞こえたCICから

のアナウンスでカイトは状況を察した。

『CICより全艦、100度方向、300マイル、高度約1万フィート、対空目標約10機……いえ、更に増えます!』

「遂に来たかつ!」

軍帽をかぶり直し、カイトが慌ただしく艦橋へと駆け上がる。

フリースベルグ3度目の戦闘が、始まるうとしていた。

## 第六話 謎解き航海（後書き）

すみませんね、やたらと時間がかかってしまいました。  
本当は1週間くらいでやるべきだと思ったんですが、この日になつてしまいました。

ちなみに、ペンタゴンが出てきたので疑問に思ったそのアナタ。  
ああ、おっしゃらないで・・・はい、その通りです。

米国防総省ペンタゴンは1939年にはまだありませんね（笑）  
まあ、一応座標とかは正確に調べたんですけどね、時代がモロに狂ってました（汗）

それから今後出してほしい超兵器や、艦船をコメントやメッセージなどで募集します。

ご感想やご意見と一緒に、そちらもお待ちしています。

### 《次回》

## 第七話 パシフィックストーム

P・S

遅れた理由の一つでは無いとは言いきれないんですが先日、短い連載（だいたい5話以内で終わる予定）の艦魂小説をアップしました。

波乱万丈艦魂記《空母フォレストル》〜そして彼女は平和を知った〜

というタイトルです。

空母好きの読者様は、良かったらどうぞ。

あちらの方も、ご意見やご感想をお待ちしています。

まずい・・・！

長官が空気だ！……！！

（ ）（ ）（4月9日追記）（ ）

更新が遅れ気味ですね、申し訳ないです。

とか言いつつ、紹介があります

この度、私JINはブログを始めましたとさ（めでたし×2）

ミリタリーはもちろんのこと、国際情勢や政治に関しての雑記を今後どんどんアップしていく予定です。

よろしかったら、覗かれてください。

青いドックと格納庫

<http://following777.blogspot42.fc2.com/>

## 第七話 パシフィックストーム（前書き）

ウィルキアからアメリカへと逃れるフリースベルグ。

行く手を阻んでいた岩礁を迂回したが、そこに不穏な機影が・・・

そして、暗号の謎がついに明らかになる。

> i 9 8 4 5 | 1 4 3 8 <

> i 9 8 4 6 | 1 4 3 8 <

## 第七話 パシフィックストーム

安全策を取って迂回した先に未確認航空隊とは、どうやらこの艦は天に見放されているらしい。

一瞬カイトの脳裏に「迂回せずとも遭遇していただろう」、更には「迂回しなければ岩礁海域に潜水艦が居たかも知れない」という考えが浮かぶ。

だが、それではイソップ物語に出てくるブドウが取れなかったキツネと同じ言い訳をしているにすぎない。

「とにかく目の前にブドウの木がある以上、実を取る方法を考えなければいけないな。」  
総員戦闘配置についた報せを受けると、カイトはCICと連絡を取る。

「CIC、艦橋。未確認対空目標の詳細を報せ。」

「艦橋、CIC。目標数30、目標群は4、100度方向1万フイート、

距離280マイルに接近！ 全対空レーダー、追尾状況良好！相変わらずSIF応答無し。」

「了解した。所属不明機に、こちらが気付かれた動きはあるか？」

「いえ、目標群の針路から考えて、まだ気づかれてはいないようです。」

気付かれていないのならば、このまま機関停止して不明機がフライパスして行くのを見過ごすのでも良いかもしれない。

フリースベルグの遙か前方上空を通り過ぎ、こちらが被害を受ける可能性はゼロなのだ。

しかしこのまま進み続ければ、発見される可能性は二桁台のパーセ

ンテージにはなるだろう。

カイトが決断に悩んでいた時であった、艦橋へと入る後方の防水扉の向こうが妙に騒々しい……。

一体何が、と黙っていた時、そこから現れたのはグシャグシャになった紙を持つマークの姿だった。

「バリストン中佐、一体何が？」

「トライトン中佐……暗号の内容が……わかったぜ。」

カイトとリナが顔を見合わせる中、マークが全力疾走の影響で上がりきった息を整える。

「ウチのクルーの中に、トミーっていう元々空母に配属されていた奴が知ってたんだ。良いか？ジョージってのは、日本軍の戦闘機、紫電改……そしてグレースは流星という艦上攻撃機の事だ。この暗号は、紫電改と流星の攻撃部隊でシスコの軍港を急襲せよっていう内容なんじゃないのか!？」

これで艦橋が騒然となるのは出港してから何度目だろうか？だが、この空気には残念ながら慣れる事はできそうにない。

「艦長……決断の時じゃな。」

また、カイトの肩に百数十名の命が乗せられる。

「物事がつきりしない以上、最悪の事態を考えて動くべきだ。」

このまま前進し、サンフランシスコ近辺への空爆の恐れを排除する。

対空戦闘、用意……。」

「対空戦闘用意！ 総員、戦闘配置！」

リナが全艦放送で復唱し、艦内にはアラート状態を示すサイレンが鳴り響く。

「通信士、アメリカ本土との交信は可能か？」

「いえ、このままの針路と船速であと30分、全速でもあと20分は進む必要があるかと・・・」

「20分　　その20分プラスの2分が、この艦の明暗を分ける。」

フリースベルグは敵のレーダーには映りにくい船体構造をしているが、さすがに極端に接近されれば映ってしまう。

電子妨害という手段もあるが、視界に入ってしまうえばどのみち発見されてしまうのは明白だ。

だが、それがどうした？

これまでのクルー達の懸命な努力で、ここまで来る事が出来ている

「このまま進もう。　サンフランシスコを火の海にするな！　最大船速！」

二基の原子炉が最大の電力供給を行い、フリースベルグは39ノット　　およそ70キロの高速で海原を走りだした。

「速度、現在50ノット。　補助ロケットモーター、準備完了・・・  
カウントダウンを開始しています。」

大きいものは鈍重であるという摂理は、誰が考えたのだろうか？

それは少なくとも、この超兵器には当てはまらないとこの艦の艦長はそう思っていた。

700メートルの巨体を呈する艦体が、小型の駆逐艦をも凌駕する高速で海上を航行している。

海原をさながら預言者モーゼの所業の如く裂きながら進む巨艦が、疾風のような速さで一路南を目指す。

「全乗組員は、所定の位置につけ。間もなく高速巡航を開始する。」

艦長は艦内のクルーにそう告げると、自身も戦闘機にあるような頑丈なシートベルトを体に巻く。

大幅に機械化された艦橋内、そのうちの一つのスクリーンがカウントダウンを開始している。

そのカウントがゼロとなったその時だった

後ろから押し上げるようにゴウツという音と共に、軽いショックが艦体を貫く。

速度がみるみる上昇し、おおよそ艦とは思えない次元へと達する。

70ノット

80ノット

90ノット

100ノット

艦の後方に搭載された補助ロケットブースターがオレンジの炎を噴き出している。

それが、常軌を逸するこの巨艦の速さを可能にしていた。

「さて、君の初陣だな」

艦長は自身の隣に座るウィルキア海軍制服を着た銀髪の少女に呼びかけた。

しかし、彼女は軍帽を深くかぶっておりその表情も見えなければ何も答えない。

「反乱軍の奴ら、一瞬で殲滅してくれる。そうだろう、ヴィルベルヴィント？」

それを聞いてただ、彼女の口元だけがうつすらと笑った

カイトの決断から20分と少しが過ぎたころ、ようやくアメリカ軍の無線に強制介入し、危険が迫っている事を知らせる事が出来た。

だが、向こうはシスコだけの戦力では抵抗するには不十分で、カイト達にはそのまま直進し敵性部隊の殲滅に当たって欲しいとのことだった。しかも、単艦で

「ふっざけるなッ!!!」

無線連絡が終わった後、バンが艦橋の机をバシッッと叩いて憤慨す

る 当然だろう。

まるで、犠牲になってくれと言われたような物である。

それも祖国にではなく、何の義理や恩義もない国家に言われたのだ。ウイルクアがまとまった勢力ではなくなった事に対して、その足元を見られたような対応だった。

「兄さん！ 何をしているんです！ 今すぐ引き返しましょう！」  
バンだけでは無い、他のクルー達も同感だと言う表情を浮かべていた。

「落ち着けッ！！」

そのカイトの一喝が、電子機器のノイズ以外のすべての音源を黙らせた。

「諸君らの気持ちも分かる だが、今我々は少しでも協力者が欲しい贅沢は言えない状況だ。今、アメリカ合衆国の機嫌を我々ウイルクア王国が損ねたら、どうなる？」

「それは、分からないでもないです。 ですが、単艦で敵機の大編隊と戦うなんて聞いたこと無いですよ！」

「確かに私も、もしこの艦の対空装備が高角砲や機銃程度しかない巡洋艦なら、すぐにでも引き返すように命令する。アメリカが淡く期待している程度の戦果も上げられないのは、目に見えているからな。 だが、この艦は違う」

クルーを前にするカイトの目にはあの時、シュヴァンブルグ港を脱出した時のような自信が満ちている。

「200以上の空、地上、海上、水中の目標を追尾、判別し、さらに14の対空目標に対して同時に対処する事が可能だ。」

カイトが喋ったこの艦のスペック、それはバンでさえ知ってはいるし訓練も行った。

だがそれを実際にやろうとする事はこれが初めてだ。

だれもがあと一步を踏み出せないで居る、その時だった

「 やりましょう。」

カイトに詰め寄った数人の後ろから、意気込みに満ちた声が聞こえた。リナだった。

「 ですが艦長、例えば自動管制発射モードでも、イージスシステムは完璧ではありません。それに、弾薬の量も今後の事を考えると……。」

「 自動か手動かはまだ決めかねているが、直前で指示を出す。しかし戦域を離脱しようとしている機に対しては攻撃を仕掛けない。できれば、犠牲は少ない方がよい。」

敵機の攻撃意志を見極めて攻撃が見逃すかを決めるといっものは実に難題だ。

しかもそれを、命の奪い合いをする戦場でしなければならない。

「君達の実力を信じる。よし、持ち場に戻れ！」

各員が持ち場へと移動し艦内が慌ただしくなる中、フレースは艦橋後部のデッキに一人佇んでいた。

意を決したような彼女の眸、そしてフレースの目の前に二つの光が集まる。

それに手を伸ばすと二つの光がそれぞれ盾と剣へと変化した。

「負けない。」

盾と剣を握りしめ光の点が徐々に表れ始めた上空を見つめ、決意を呟いた彼女は臨戦態勢に入った。

そのとき、艦の前方と後方に合計3基ある57mm砲がステルス性が高いダイヤモンド形状の砲塔から砲身を伸ばし、ミサイル垂直発射管VLS数か所が開け放たれる。

上空を飛ぶ日本海軍機、突然の米国本土空爆の命令にはもちろん驚いたが、その編隊員が何より一番驚いたのは部隊長が何の前触れもなく突然変わった事だった。

気さくな前隊長に対して、唐突に配属された今の部隊長はどこか人を寄せ付けないような雰囲気がある。

前より引き続いて副隊長の松原は、このメンバーで戦地へと向かう事に対して不安と嫌な予感が頭を過った。

「隊長、もう少し速度を落としませんかい？ このままじゃ雲龍に帰る時には燃料がギリギリですぜ。」

『私語を慎め松原、作戦中だ。』

「・・・へい、了解。」

（こいつ、戦場に慣れてないな・・・戦地じゃ何があるか分からねえってのに。）

やれやれと思った彼が、ふとやや左の海面へと視線を落とした時

「ん？」

雲の合間に何かがキラリと光った。

「こちら2番機、隊長　　やや左の海上に何か見えませんか？」

『　　何も見えんぞ。　　松原、私語をするなど何度言ったら・・・』

しかし、その堅物隊長と松原の機がほぼ同時に薄い雲を抜けた瞬間、彼に確信が宿った。

「だから私語じゃ

いや、やっぱり見えた！

左20度ウエーキに航跡

！」

青い海原に白波を立てて進む物体、船だ　それも大きさは200  
Mを超えているであろう大きなものだ。

『まさか　米海軍の艦船か！？　馬鹿な、米海軍の船は抑えて  
あると　』

あからさまにうるたえてしまう部隊長。

だが、そこへフレイスベルグからの通信が割り込み彼の同様に拍車  
をかける。

『警告する。　貴隊はアメリカ合衆国の領海を侵犯しようとしてい  
る、速やかに引き返せ。』

「アルファ目標群AからF、フォックストロット変化無し。　以前南東の方角へ速度200ノッ  
ト、高度6000を飛行中です。本艦との距離、25マイル！」

「北西約320マイル先に7つの艦影あり　先ほどの通信傍受  
から空母雲龍を中核とした日本海軍の空母打撃群だと思われませう。」

薄暗いCICの空気がいつになく緊迫している。

これまでの戦いの相手は潜水艦と戦艦だった。

しかし、今回の相手は空から襲い来る猛禽の如き刺客　魚雷や  
爆弾を多数抱えた攻撃機だ。

航空機が海戦の主流となつてからの定説は、航空機対して艦船はあまりにも無力に近く、有効な対抗手段を持ち合わせていないという事だった。

この場を乗り切る自信をいやでもつけなければならぬのだが、どうやって？

バンが水色に輝くレーダースクリーンの前で頭を抱えていた理由はそれだった。

やがて、最終決心線と決めた20マイルに敵機が到達してしまう。

「警告は　　どうやら無視されたようだな。」

バンが呟くと周りのクルーも複雑な面持ちで頷き、またそれぞれの画面へと顔の方向を戻した。

「艦橋、CIC。　目標群が20マイルを突破、依然針路に変更はありません。」

艦橋でそれを聞いたカイト、淡い期待を抱いていただけにその報告が残念に　　そして悲しく思えた。

「この間までは、同盟国だったのにな　　」

艦橋のクルーの誰かが呟いたその言葉　　あまりにも非情な現実が、カイトの心にも重くのしかかる。

（いや、まだマシな方だ　　）

前方の海原からカイトは下へと視線を落とす。

怒りや悲しみたくさん負の感情が渦巻き、それらが二十三重にもなつて頭の中を反響している。

彼が風防の前の台に置いた拳が、ギュツと握りしめられる

先程のようにスペックではこれだけ上回っているから戦闘をしても大丈夫だと、空論を述べるのは容易い事だ。

だが、相手も自分達と同じ人間　　今更ながら当たり前のテーゼだが、それが怖い事に他ならなかった。

「艦長、CICから　　艦長？」

CICから指示を乞うという返答を受け、カイトに報告しようとしていたリナは見た。

艦橋最前に立つカイトの拳が、今までにないくらい握りしめられていた事を

そして、彼らの末路を予想した彼の頬をうつすらと涙が流れていたのを

そんな彼のそばに、リナはいつの間にか立っていた。

「艦長　　多分艦内の誰もが思っていると思います、彼らと戦いたくは無い、と。」

リナが近くにいたのにこの時気付いたカイトは、伝っていた涙を慌

てて袖で拭う。

「ですが、ここで戦わなければウィルキアは　　そして世界は

」

「それはッ！」

思わず大声を出しかけたカイト。

しかしリナはずっと彼を見つめたまま動かない。

「　　解っている。　　ここで戦わなければ、世界の未来は真っ暗だ。　　だが、いつもだ　　！」

カイトが台に拳を叩きつける音が、艦橋内に響く。

「いつも犠牲になるのは、世界を暗闇に引き込もうとする輩ではなく　　何も知らないまま祖国を憂い、そして彼等に操られるままに戦場に出てきた愛国者！」

熱が昇りきった頭を冷やすように、彼は軍帽を自分の頭から取った。

二度三度と髪を後ろへ撫でつけるようにかく。

やがてカイトは艦長席の上に置いていたインカムを手に取り、リナや通信士官達が見守る中CICに告げた。

「CIC、艦橋。　　ECM作動開始、ミサイル発射管制手動に変更

本艦に一番近い目標群一つおよそ5機を、指示あるまでロックし続ける。」

インカムをそのまま頭に装着すると、続いて操艦手の方をカイトは向く。

「針路、速度、そのまま。敵の雷撃や爆撃も予想される、いつでも回避行動をとれるようにスタンバイしておけ。」

「はっ、了解しました！」

操艦手の返答を聞いてカイトは「よし」と頷いた。

フリースベルグ、3度目の戦闘準備が整った　まさにその時

「こ、こちらCIC！　目標群が散開、目標群<sup>エコー</sup>E高度を下げつつ真つすぐ突っ込んでくる！」

叫びに近い報告がCICからもたらされ、フリースベルグの全艦に緊張が高まった。

## 第七話 パシフィックストーム（後書き）

すいません、遅くなってしまいました。

なんと詫びていいやら      モウワカンネ（え

とりあえず、やっと超兵器が一つ出てきました（といってもほんの  
さわり程度）。

これからも、どんどん超兵器や読者の方々がイメージされた架空艦  
を要望があれば出していきたいと思います！

戦闘突入寸前ですが、今回やここまでの評価・ご感想をお待ちして  
います。

**第八話 乱戦！空から迫る殺陣（前書き）**

多分こんな表示が出ていたかと

一か月以上の間更新されていません  
今後更新されない可能性があります

サークルの論文を呪うしかない（怒）

## 第八話 乱戦！空から迫る殺陣

T e l l m e , F i o l s v i t h !

教えてくれ、フィヨルスヴィズ！

W h e t h e r t h e r e b e a n y w e a p o n ,

ヴィゾフニルをヘルの住処に

b e f o r e w h i c h V i d o f n i r m a y

撃ち落とす武器があるのか？

f a l l t o H e l ' s a b o d e ?

H r e v a t e i n t h e t w i g i s n a m e d ,

その枝はレーヴァテインと呼ばれ、

a n d L o p t p l u c k e d i t ,

ロプトが死の扉の下で摘み取ったものだ。

d o w n b y t h e g a t e o f D e a t h .

I n a n i r o n c h e s t i t l i e s

シンモラが持つ鉄の箱に納められ

w i t h S i n m o e r a ,

a n d i s w i t h n i n e s t r o n g l o c k s

s e c u r e d . そして9つの頑丈な鍵で堅く締められている

ベンジャミン・ソープ訳『北欧神話』より

古来から様々な世界の神話や伝説、それに登場する人物も多彩で

あれば時には伝説になる武具も多彩である。

主人公には勝利を、魔物には敗北や死をもたらす剣。

そしてそれは、剣などでは最早戦わなくなったこの時代にも存在した。

混迷の闇を切り裂いて次代の世界を拓く剣として

潮風にあたって十年あまり、港に停泊するドック艦の艦内、天井には白熱電球という素朴な場所に彼は居た。

エーベルハルト・ヴァン・シュナイダー、父親がドイツ人の有名な船乗りだったことが縁で

ドイツと長年の友好国であるウィルキアへと渡った。エーベルハルトが2歳のころだった。

おかげで生まれはドイツなのに、ドイツの風土や風習なんてものまるっきり知らない。

しかし今、そのドイツに魔の手が伸びようとしている。

だが、それを遠目に悲しげに見えない対岸を見つめるしかない私。

そんな私は、一体この世界で何をなすべき為に生まれてきたのか？

この開発コード“BRANCH”として生まれたこの艦に、何をさせてやるべきなのだろうか？

眼前にナトリウムランプの橙色灯火に照らされた艦影に、今しがた自分が吸った紫煙を

吹きかけるように、嗅覚を心地よく刺激する煙を口から吐き出した。

足元には今日この場所でエーベルハルトが吸ったタバコの吸い殻が散乱している。

その中に、たった今まで吸っていたタバコが仲間入りした。

目の前の最新鋭艦とドック艦の壁との間で波が弾ける音は変わらず、周りも何も変わらない景色が広がっている。

こんなに長い時間をかけても、どんなに考えても、エーベルハルトにはこの後どうするべきか分からない。

当初のシナリオ通り、未来永劫ウィルキアに従うのか？

変わりゆく祖国を見限り、本当のウィルキアを取り戻すために叛旗を翻すのか？

この、目の前に浮かぶ頼もしき剣とともに　だがそれにはまだ、スタート以前に大きな壁がある。

それを考え付くまで、エーベルハルトはこのベンチを占拠し続けているつもりだ。

すると、エーベルハルトはまたタバコの箱に手を伸ばす。

しかし、ここで違和感があった。

いくら指を突っ込んでも、愛おしき白く柔らかい棒に当たる感触が無い。

箱を傾けてみたが、紙巻きタバコが出てくる事は無かった。

ふと、数分前の記憶を思い出して見る。

「そう言えば、最後のタバコでしたね……」

そうエーベルハルトは呟くも、それで落胆する事は無い。

なぜならベンチの右脚には2カートン、煙草の本数にして400本もの在庫があるからだ。

ふとそこを覗いたが、ここでエーベルハルトは滅多に見せない驚いた表情を見せる。

「おや？ おかしいですね……確かにここに……」

「お探しのものはコレ？」

さつきまで誰も居なかったベンチの前に、自分と同じ制服を着る少女が立っていた。

彼女の正体、それは人間では無い　例えるならば、精霊だろうか？

彼女の正体、それは目の前の最新鋭艦“レーヴァティン”の守り神、艦魂だ。

そして肩辺りまでの金髪にやや高飛車っぽさが窺える彼女の右手には、エーベルハルトが探していたタバコ2カートンが

「そう、それですよレティ。 どうもありがと・・・」

それを受取るうとエーベルハルトが手を伸ばしたが、それに合わせるようにレティが後ろにさがる。

「朝から晩までモクモクモクモク、あなた体内にボイラーでもあるの!？」

「あるわけ無いじゃないですか・・・」

「分かつてるわよそんなこと！ 私はただ、艦の長である艦長が若いのに突然ヴァルハラに召されたら困るわけ！」

「ヴァルハラは、戦って命を落とした戦士達の楽園 今ウィルキアと戦っている船乗りが召されても、私は召されないでしょうね。 それよりもレティ、私を心配してくれるのですか・・・それはそれは嬉しい限りです」

含み笑いを浮かべるエーベルハルトが、対レティ用に用意していた言葉を呟いた。

すると突然彼女の表情が、ナトリウムランプで照らされてもはつきり見えるくらいに赤くなる。

「バ、バカアツ！ べ、別に私はそんなつもりで言ったんじゃないからね！

私はただ、艦の長である艦長が居なくなると指揮系統に乱れが生じるといけないと思っただけ！」

疲れているわけでもない筈なのに肩で息をするレティに、エーベルハルトはクスリと笑みを向ける。

「結局言ってる事は変わらないじゃないですか。私が居なくなれば困る。そう言う事ですよね？」

トドメとなったその言葉を聞くや否や、レティは自身の顔を両腕で隠すように覆う

しかし見えなくなったとしても、エーベルハルトには彼女の顔がさらに赤くなっていることくらい容易に想像できた。

そして

「ぐぐぐツ・・・も、もう知らないツ！！ ボイラー艦の煙突みたいに、煤を肺に詰まらせて死んじゃえ！！！！！！」

レティは金切り声のような声をあげて、持っていたタバコのカートンをエーベルハルトに投げつけた。

「死んじゃえ、か。確かに、副長や機関士長はそう思っているかもしれないね」

エーベルハルトが笑えないことを言いつつも笑いながら少し曲がったカートンの紙袋を破る。

すると、後ろを向いていたレティが振り返る。

船出までの壁                   それがその両名およびそのシンパサイザー達のことだった。

「・・・もしもの時は頼りにしていますよ、レティ」

「ならば、少しはタバコを控えなさいよ                   私は先に戻ってるから」

そう言うと、彼女は十メートルほど向こうにある自身そのものである艦へと転移して帰って行った。

ああ、彼女こそ                   私の勝利の剣なのだろうか

黒海沿岸からほぼ正反対、時間にして12時間の誤差があるアメリカ西海岸。

剣では無く、鷲に危機が迫っている。

CICならびに艦橋の天井から吊るす形で存在するモニターが、接近する多数の光点を映し出している。

その目標群<sup>エコー</sup>Eを構成しているのは、800kgの重さがある魚雷を装備した流星艦上攻撃機、その数5機。

その時、艦橋やCICに警告のアラートが鳴る。

友軍では無い可能性の高い物体が、このフレースベルグに異様に接近したことを警告するものだった。

「目標群E、散開を開始。当艦の針路を閉塞する意図だと思われ  
ます」

バンはスクリーン上に映し出される多数の光点、特に本艦に最接近している5機の編隊を注視する。

「この展開の仕方は・・・仕掛ける気だ」

空調が整っているCICの中にもかかわらず、その場にいる殆どのクルーが汗をかいていた。

遠方のそれぞれの方向に飛び去っていく雷撃機を、カイトも視認していた。

(同時多角攻撃か・・・だが、無線を使えない状況でどうタイミングを合わせてくる?)

海軍士官学校で学んだ雷撃機の攻撃パターン、その中の一つに複数機で同時に魚雷を投下し、  
逃げ道をふさいで被弾させると言うものがあった。

しかし、それに必要なのは操縦士の高度なテクニックだけではない。  
無線によるタイミングの合致も、同時多角攻撃の重要な条件だった。

だが、その無線はフレースベルグのECMによって封じられている。

つまり、同時多角攻撃を仕掛ける事は不可能だと言う事だ。

その時5機がそれぞれのタイミングで旋回を始め、ヘディングをこちらへと向けるのを3つのSPYレーダーが捉えた。

するとカイトはそのうちの1機が居る方向で、何かがチカチカと光ったように感じた。

陽光の反射では無い、はつきりと見えるような一瞬の点滅だった。

もう一度、目を凝らして見る　　ちょうどコックピットの辺りから見える。

「8?・・・7・・・6・・・点滅信号でやる気か！」

それに気づいた時には、カイトはすでにインカムのスイッチを入れていた。

「攻撃来るぞ！　CIGS、マイクロフィッシュ、用意！」

カイトのいうマイクロフィッシュは、このフリースベルグに搭載されている対魚雷用の魚雷である。

対艦、対潜用の魚雷に比べてはるかに小さく、一人でも持ち上げる事が出来るくらいの重さしかないが、

それゆえ海中での高機動な動きで迫りくる魚雷に的確に命中させる事が出来る。

弾頭の炸薬も艦を撃沈するのには心細い程度のものであるが、魚雷

を破壊するには十分な威力だ。

心強い切り札を隠し持ちつつ、そのカウントダウンが“0”を意味した次の瞬間……

ザバアアアーン！

ソナーはハッキリと何かが海中に投下された音を聞き取った。

そして、それが何であるのかを知るのにそんなに時間は要らなかった。

『魚雷音聴知！ 12時方向1、4時方向2、8時方向2』

「馬鹿な……一体どうやってタイミングを合わせた!？」

『マイクロフィッシュ、8時方向の目標2、10秒後に発射!』

うるたえるバンだが、カイトの指示を受けて行動する。

白い波飛沫をあげて航行するフリースベルグの右舷の舷側が開き、魚雷発射口がその先端を覗かせる。

「マイクロフィッシュの発射と同時に面舵60、左舷の魚雷と平行に艦の針路を取れ!」

『マイクロフィッシュ発射用意……撃てえつ!』

ボンツと圧搾空気によって前方に吹き飛ばされたマイクロフィッシ

ユが、フリースベルグの右舷に着水した。

そのまま水中を高速で進み、魚雷を迎撃に向かう。

フリースベルグの船体は急激な右方向へのタイトターンのために、左に10度ほど傾いた。

そんな中でも、バンは正確にモニターのカウントダウンを正確に読み上げる。

「インターセプト5秒前・・・スタンバイ・・・マーク・インターセプト！」

その瞬間、海中で閃光が巻き起こり衝撃波で海面が盛り上がった。

戦闘の行く末を見守るフリース。

彼女は巻き起こった水柱が二つであったのを見て、差し迫った危機の一つめを回避したことを知り安堵を浮かべた。

そして艦橋にはさすがに攻撃を受けてまで、攻撃をためらうような超お人よしは居なかった。

「目標、目標群E！」

「57mmCIGS、撃てえっ！！！」

リナの凜とした声がインカムを伝ってCICに届けられた瞬間、待ち構えていた3つの速射砲が一気に火を噴いた。

ファランクスに代表されるCIWSに比べ、一分間に200発前後と遙かに連射速度は劣る57mmCIWS。

しかし、CIWSの特筆すべきはバルカン砲に比べて航空機にとって一発の威力が破滅的に高い事だ。

前部の2基と艦橋建造物の後部に存在する1基がそれぞれ3機を同時に狙い撃つ。

「なっ!!!? や、やられたのか!!!」

「それも、三機同時に!!」

フリースベルグに空襲を仕掛けていた航空機部隊に戸惑いが生まれる。

最新鋭の電子制御の砲塔と、近接信管が装備された砲弾が敵機を逃すことなく撃ち落としたからだ。

人の手でかつ目視によっての対空砲火しか想定していなかった航空部隊にとってみれば、明らかに有り得ない出来事だった。

「こうなったならば・・・数で押し切るのみだ! 全機、急降下爆撃を仕掛ける!」

無謀にもまだいくつもの手を隠し持っているであろうフリースベルグに、急降下爆撃を仕掛けようとする隊長機を見て松原は毒づいた。

「あの馬鹿、待ちやがれってんだ!」

無線が封鎖されていたため、隊長の前では決して使う事のない言葉を口にする。

そして、彼の予想は的中した。

「ESSM攻撃はじめ！サルヴォーsalvo！」

同時に最大の数を斉射するという意味の言葉、サルヴォーとバンが叫ぶと艦橋後部のVLSから6つの対空ミサイルが白煙で弧を描き上空へと伸びて行く。

「ぬあつ！！？　なんだコイツは！！？」

彼の目線では砲弾が曲がり、まるで目でもあるかのように自分達を追尾してくる。

あつというまに周辺で6つの爆発が巻き起こり、6機が粉々の鉄の塊と化して海に落下した。

さらに第二波のESSMにより合計12機がたった数十秒で撃ち落とされた。

言い知れぬ恐怖が彼らを襲う。

それに耐えきれず、部隊長は無意識のままに操縦桿を引いて上昇離脱していた。

だが、数名の勇敢なパイロットは紫電改を駆りなおもフリースベルグに急接近する。

「高度二千・・・もう少しだ！」

パイロットが照準器と格闘しながら爆弾のスイッチに手をかける。

だが、それをフリースベルグは決して見逃さない。

「はあああああっ！！！」

艦橋の上に立つフリースが長剣を上空に振り抜くと、その剣筋に応えるようにRAMが複数発射され、敵機をなぎ倒していく。

無敵の盾、無双の剣　闘争本能をむき出しにした海鷲が無慈悲にも敵機を叩き落としていた。

だが、これ以外にフリースベルグに活路は無い。

「デルタ目標群D、アルファA、本艦より離れていきます！」

「撃ちつ方やめ！逃げる敵機は全て見逃せ」

少しでも犠牲は少ないに越したことは無い。

しかし、それはフリースベルグの全クルーに僅かに心の隙を作りだしていた。

「て、敵機接近！　本艦の真上、直上！2000フィート！」

「なに！？　どこから現れた！」

天井があるため敵の姿を視認できる筈もないが、カイトやリナは真上を見上げた。

松原は生まれて初めて背筋が凍る思いがしていた。

「隊長        アンタの事は嫌いだが、これが俺の仕事なんでね！」

ボタンを押した瞬間聞こえた、ガコンツという音は爆弾が上空からほぼ垂直にリリースされた音だった。

同時に、彼は風防を風の抵抗に逆らって無理やりこじ開ける。

「また会おうぜクソ隊長！」

そう捨てゼリフを吐くと、彼はパラシュートを背負ったまま急降下する機体から脱出した。

「破片です！        落下する破片に紛れて急降下をしたんです、こんなパイロットが        」

松原の大胆な行動に一杯喰わされたカイト達。

「くっ……ESSMを撃つには遅すぎる。        CIGSで迎撃せよ！」

艦橋後部の57mmCIGSが再び火を噴く。

撃ちだされた砲弾が空中で炸裂し、その破片が徐々に爆弾を凹ませ

ていく。

そしてついに

ドガアアアアーン！

上空200Mのギリギリで爆弾が弾け飛び、その破片がフリースベルグの船体を打ち付ける。

『 ツー！ レ、レーダー、ホワイトアウト！一時使用不能！』

『 敵機、尚も接近！！』

爆炎で目が塞がってしまったフリースベルグ、落下してくる航空機にまで迎撃の矛を向ける事は出来なかった。

こうなれば、カイトが出せる指示はあと一つだった。

艦長席の横にある送話機を素早く手に取り、全艦放送に即座に繋げる。

「衝撃に備えっ！」

その場にいた全員が取ってやモニターに掴まる等して対ショック姿勢を取る。

紅蓮の爆炎からその姿を現した紫電改。

それを見たフリースベルグが同時にアレに対する迎撃手段が無い事を悟り、

その表情が恐怖で固まる。

「い、いや、イヤアッ！」

ドップラー効果により高まるエンジン音と、甲高い風切り音が最大にまで高まったその瞬間……

ズガガガアアアアアン！！

「あくつ　　くう、い、痛いッ！」

フリースが膝をつくとき、彼女の後ろ腰と右目から血がにじみ出ていた。

衝突した場所が艦の後部であったため、その衝撃で艦は上下に激しく揺さぶられた。

艦橋の人を投げ出す程度では無かったが、その揺れ、硬いものと硬いものが激しくぶつかり合う音、

その二つでこの艦が何らかの損傷を受けた事は誰しも理解できた。

「各科、各区画のチェック、ならびに被害を報告せよ！」

リナが揺れ動く艦橋内にあるコンソールを操作して、ダメージコントロールモニターを開く。

「曳航式アレイ・ソーナー、損傷！　艦尾損傷、消火活動を開始します！」

それを聞いてカイトはそれだけであって欲しいと願ったが、運命は逆風を彼に吹きつけた。

『こちらCIC、三番SPYレーダー、損傷!』

「何!？」

カイトがリナが操作するモニターを覗きこむと、後部のSPYレーダーに赤い損傷マークが点灯していた。

一刻も早くどこかに入港し、修理する必要があった。

幸い、予備の機材は揃っている。問題はそこまで辿り着けるかであった。

「第二次攻撃隊でも来ようものなら厄介だ。早くカリフォルニアの軍港へと入港したい。」

米海軍カリフォルニア本部に敵性航空部隊撃退の旨と、損傷を受けたと連絡してくれ。」

「了解しました」

「ああ、それから」

戦闘で熱くなった頭を帽子を脱いで冷やすと、もう一つするべき事がカイトの脳裏に浮かんだ。

「周辺に遭難者を見つけ次第、膨張式筏を投下。保護するかしないかは、遭難者の意志に任せると伝えてくれ」

その海に、フリースベルグは火災が鎮火するまでとどまる事になる。

そしてそれは、大空のサムライとの運命的な出会いでもあった。

## 第八話 乱戦！空から迫る殺陣（後書き）

夏休みに入れば、どんどん更新できると思っんですけどよ

まあ、今テスト真っ盛りなんですけど・・・

余談ですが

レーヴァティンと聞いて、某魔法少女のサブヒロインが出てきた人・・・  
安心なさい、私もだ（爆）

7/25追記

フレ「遅いですよ、全くっ！！」

バシッバシッバシッ！

シェ「一ヶ月半！！？ 遅延にも程があるわ！！」

ドゲシッドゲシッドゲシッ！！

JIN「イダダダッ！！ ごめんごめん、でも本当に忙しかったんだ！」

フレ「まあ、論文大会は（お世辞だろうけど）顧問から近年類を見ない良い発表だった

という良い評価だったから・・・」

シェ「許す・・・か」

フレ「でも、こんな事はこれ以降はやめてくださいね（ニッコリ）」  
JIN「笑顔が怖いよ、笑顔が・・・」

シエ「ほら、早く超兵器戦を書いてくれと読者からの要望もあるんだ」

JIN「そうみたいだね。あれはスngoイ嬉しかったよ、マジで  
ということ、感想や評価はもちろん、要望も取り入れたりするからよろしくです」

人物紹介に登場人物を追加しました  
よろしければどうぞ

### 【ひとりごと】

FSX買ったけど、互換性酷くて怒りを通りこして笑顔になった  
そしてシナリーの貧弱さは異常（成田空港がタワー以外更地とかあり得ねえ）

次回

第九話 嵐が呼んだ暴風（前編）

第九話 嵐が呼んだ暴風（前編）（前書き）

ようやく夏休み

ちよこつとイベントがある以外、全くもっての暇人  
よろしい、では更新だ

## 第九話 嵐が呼んだ暴風（前編）

「呪われすぎだろ、つたく・・・」

対策を考えれば裏目に出ると言う事は良くあるが、それがいきなり航空大隊というのはいかなるものか。

ブツブツと愚痴をこぼしながら、バンはCICを交代要員に任せて艦尾へと来ていた。

しかし、良かった点と言うのも幾つかある。

衝突の衝撃の大きさから推測される被害よりも、実際に受けた被害が遥かに少なかった事だ。

そして後方の護りを司る三番SPYレーダーも、予備機材があるためアメリカ海軍の軍港に入港後に修理する事が容易だ。

機体の残燃料が燻らせていた煙も消え、クルーが飛び散った紫電改の破片を片付けていた。

今、フリースベルグは先ほどの激戦の海域とほぼ同じ地点にいる。

周りには先程と同じスカイブルーの空と、その色を取りこんで映し出している360度の海。

また敵が来てもおかしくないのだが、先ほどの場所から離れないのには理由があった。

受けた損害が航行に支障が無いのか　それを確認するためだ。

そしてそれは艦橋の幹部を除いてフリースベルグのクルー殆どで行われる。

その見回りで特に注視しなければならなかったのが、艦尾だ。

艦尾には舵やスクリューといった航行に欠かせないものが集中している。

その艦尾の航空機が衝突した部分には、わずかに数十センチほどの穴が穿たれていた。

立てられた赤いパイロンとテープが立入禁止を主張しているが、バンは艦長に任された仕事をするためにはこれを超えなければいけなかった。

「よいしょっと・・・さてさて・・・」

バンは艦尾甲板の後部柵の左舷側にある埋没したコックを捻り、床下収納のような空間を開いた。

ちようど、破孔部のすぐ右側にあるその空間には深海に潜む潜水艦を探知するための曳航式ソナーがある。

しかし、CICでみた損害状況ではこの曳航式ソナーは何らかのダメージを負っていたらしい。

もしかしたら電気信号の断絶を知らせるセンサーの単なる故障のという可能性もあった。

そんな淡い期待を抱きながら、バンは工具を持って中へと入る。

中は狭く暗いので懐中電灯で照らしながら念入りにチェックするバン。

幸い精密機械の集合体であるソーナー部分には、損傷は見られなかった。

「となると、ケーブルだな・・・」

そして、懐中電灯でケーブル巻き機の上部を照らして見るとあった

「こいつだな・・・」

フリースベルグの曳航式ソーナーには、数本のケーブルが付いている。

最大数キ口にも伸ばせるケーブルの大部分は中央の太い一本だけであるが、末端の部分に僅かに数本に分かれている個所があった。

そこをピンポイントに紫電改の破片が飛びこんで来たのだろう。

末端の細いケーブル一本が綺麗に切断されていた。

「あーあ、センサーの故障じゃなかったか・・・こいつも修理が必要だな」

クルーに怪我人や死者が出なかったのは幸いだ、今後こうい

態に陥った時にまた全員無事とは限らない。

次に対しての決意を秘めながら、同時に次がある事に感謝。

その時、バンは先ほど艦尾の調査を依頼された時の事を思い出していた。

カイトは艦長である自身の責任だと言っていたが、本当にそうだろうか……？

CICのレーダースクリーンには迫りくる敵機が映っていたものの、その対地角度までは分からなかった。

そして衝突の少し前に反応が大きくなったことから、接近しているという事が判明したのだった。

「どうにか出来ないものかな……そうだ、ちょっと試してみるか」

士官学校時代に機械オタクでもあったバンに、ある一つの考えが浮かんだ。

「まさか　　こんな事になるとはな」

その溜息は、本来は誰も立ち入れない場所で吐かれた。

逃げかえらなかつた仲間の中で唯一生き残り、そして唯一鉄壁の大鷲に傷を負わせた男、松原 信哉はそこにいた。

別に高所恐怖症でもないのに、足がすくむ中途半端な高さ

そして時折甲板なりにチラホラと出るこの得体のしれない艦のクルーに、なぜか気付かれないと言う妙な孤独感

自分の周りでは、レーダーらしき機器がクルクルと回転している。

そう、彼がいたのはフリースベルグのマストの頂上部だった。

何故そこに居るのか　理由は簡単だ。

機内から運良く脱出し尾翼にもぶつからず、パラシュートも壊れて無くちゃんと開いた　だがツイていたのはそれまでだった。

そのパラシュートと信哉は風に流されてまるで木に引っ掛かるように、フリースベルグのマストに引っ掛かっていたのだった。

「参ったな　これじゃまるで斬首された後に槍に突き刺された首が市中引きずり回しに遭ってるみたいじゃないか」

どうにかして、片方のロープを外そうと信哉が懸命に頑張る。

しかし、結構頑丈に絡まっているようだ・・・どうやらもつと長い時間、この特等席でオーシャンビューを眺める羽目になりそうだった。

同日、同時刻、バンクーバ島沖合200km・・・

春の到来を感じさせてくれる温暖な風、しかしそれは流石に極地に近いカナダやアラスカまでは届かなかったようだ。

寒気と暖気、二つの空気が入り混じった海域には薄い霧が立ち込めている。

第11近衛艦隊の本隊である船団が、フレーズベルグを追うようにバンクーバ島沖を航行していた。

距離にして約4日程の遅れになったの理由　それは姿が変わったシエルドハーフェン級の二隻である。

シエルドハーフェン級　艦の種類を表す記号は戦艦の「BB」ではなく「BX」

この「X」　その意味はexperimental（実験的）  
という意味の「X」だ。

そしてこの「X」を付けられた物には、様々な方向に飛躍する可能性が秘められている。

改装を終えたシエルドハーフェン級の二隻の甲板は、まるで両舷方向に鉄板を繋ぎ合わせたように広くなっている。

その広くなった甲板には、グイグイというプロペラが湿度の高い空気を切り裂く快音が響いている。

プロペラ　そう、シエルドハーフェン級の本当の姿は航空戦艦であった。

しかしこの形になるには幾多の思考錯誤があった。

従来の前方が戦艦、後方が空母という形態では航空機の発艦に多大なリスクが課せられる。

中には、発艦はできても着艦が出来ない航空戦艦も存在した。

だが、このシエルドハーフェン級はその配置を縦に行うのではなく横に行うと言う奇抜な発想により生まれた。

中央部に戦艦の主兵装などを配置、そして両舷に航空機用のフライトデッキを配置した特異な構造をしている。

これにより、戦艦としてのメリットも空母としてのメリットも十二分に生かすことのできる航空戦艦となったのだ。

霧の中を全天候型の哨戒機が数機、甲板作業員の合図を受けてシエルドハーフェンの甲板上を飛び立っていく。

攻撃機や爆撃機も運用可能なのだが、さすがにドック艦フリングホルム二でさえ艦載機までは補充してくれない。

哨戒機を数機、シエルドハーフェンと二番艦ブローズグホーヴィに配備するのが限界だった。

周辺の空気の湿気は以上に高く、飽和水蒸気量を超え湿度の高い空気が艦体のあちこちに纏わりつくようにそして流れて行く。

それは、彼女自身もそうだった　腰まである長い髪がしっとり

としていて重く感じられる。

だが、思い空気が辺りに立ち込めているのは何も湿度だけではないのだろう。

彼女は、曇った眼鏡を丁寧に拭き取る妹の方を向く。

「不安か？ローズ」

内に抱いていた不安を誰かに託すように、シエルドハーフェンは妹のブローズグホーヴィに尋ねるも、それは笑いと共に返されてしま

う。

「クスツ、姉さまこそ・・・」

二人はちょうどシエルドハーフェンの三番砲塔の辺り、それぞれ立ちと座りという体勢で右舷側を見つめていた。

「これからどうなるのだろうか・・・」

「うーん、とりあえずアメリカのお世話にならないといけないんじゃないかしら」

能天気つぼさを含んだような口調でローズが答える。

「それもあるが、これから誰が敵になるのだろうか・・・少し考えてしまう」

「日本海軍の　　ことを言ってるの？」

シエルは息を吐き出して、黙ったまま頷いた。

シエルドハーフェンはかつて同盟国日本との合同演習にも幾度も参加している。

その為、日本海軍艦艇の艦魂には多数の友人や姉妹のような関係にある者までいた。

特に、シエルは日本海軍のある戦艦には特別な思い入れがある。

それは、航空戦艦シエルドハーフェンの前艦橋が教えてくれる。

シエルドハーフェンが建艦される際、日本海軍で建造が中止された戦艦があつた。

大和型戦艦6番艦、因幡

その本来解体される筈だつた因幡の前艦橋を、ウィルキアがシエルドハーフェンの前艦橋に欲しいと名乗りを上げたのだ。

もちろん、そのまま流用されたのではなく多機能レーダーの追加や内部の改装などあちこちにウィルキアの手が加わっている。

しかし、大和型戦艦の前艦橋の威容はシエルドハーフェンとなつても同じだつた。

今から20年前、まだ妹が生まれる前だつたころにはシエルドハーフェンはまさに孤独そのものだつた。

特にウイルクアの艦魂達からは、46cm砲を15門も持つシエルドハーフェンは敬遠の対象。

そんな中、ウイルクア海軍と日本海軍の合同演習。

これがシエルドハーフェンにとって最初の合同演習であり、最も尊敬する彼女と出会った時だった。

（それも仕方ないかな　でも、これくらいで挫けては）

諦めかけていたシエル　艦内に戻ろうと前甲板から踵を返そうとした時、そっとシエルの肩に優しく手が置かれた。

「あなたが、シエルドハーフェン？」

シエルが振り返った先に居たのは、長く艶やかな黒髪に純和風の顔立ちの美女　そして着ているのは日本海軍の制服。

「・・・は、はい。ウイルクア海軍特装戦艦シエルドハーフェン級一番艦、シエルドハーフェンです。」

あの、あなたは？　見たところ、日本海軍の　　」

「そう。日本海軍戦艦大和型一番艦、大和　そのまま、大和で良いわ。」

あなたの名前、ちょっと長いからシエルって呼んで良いかしら？」

大和と言えば世界の戦艦の中では知らない者が居ない程の有名人。

いきなりの大御所の登場に戸惑うシエル、質問をされていたのが危うく頭から滑落するところだった。

「は、はいッ！！　そう呼んで構いません、大和　　さん」

「“さん”は良いって、だって私とあなたって前艦橋見ても分かる通り姉妹のような感じでしょ？」

「う　　ですが・・・」

大和の事を大和と呼ぶことが出来ないでいるシエル。

すると、大和はやさしく微笑みかけるとシエルの手を取った。

「まあ、何事も慣れが必要ね。　それじゃ、私は他の人達にも合っ  
て来るから

とりあえずこれからよろしくね、シエル」

「よろしく　　お願いします！」

この時に思いがけず起こった大和との出会い。

彼女の凜としつつ優しさを携えた表情、手のぬくもりはシエルはま  
だ覚えている。

「まあ、まだ青かったころの話だ　　」

妹に聞かせているようで実は自分に言い聞かせていたその言葉。

「へえ、姉さんにもそう言う頃があったんだ」

「・・・どういう事だ？」

「ふふっ、何でもない」

それをローズが呟いた時、彼女たちは異変を感じ取った。

「ッ!!? な、なんだ!？」

「あ、頭が 痛い!？」

頭の内部に響くような まるで頭の中に電気が流されているような苦痛だった。

それに耐えかねて、ローズが思わず膝をついて座り込んでしまう。

異変は当然彼女たち自身である艦内、その艦橋でも起こっていた。

「ブロード艦長! 近距離レーダーに異常反応! ノイズのような物が見受けられます!」

「敵の電子戦機か？」

「いえ、この反応は海上です。 速度、およそ120ノットで接近中!」

「海上で120ノットだと! 何かの間違いじゃないのか？」

120ノット およそ毎時220キロメートルで海上を疾走す

る物など、この艦の誰の脳裏にも存在しなかった。

「何かが来るッ！」

倒れ込んだ妹の腕を掴みシエルは彼女に呼びかけた。

その呼びかけに答えるように、何も無い空間から突如誰かの声が響いた。

「何か」って、間違いじゃないけど・・・失礼な子ね」

それは、少女の声であったのは確かだった。

ただ、一つ違ったのはその声にはシエルでさえ一瞬臆しかける程の殺気がこもっていたことだった。

目の前に青白い稲妻のように電気らしきものが流れ、続いて黒みを帯びた紫の穴のような物が開く。

そしてそこから、黒いドレスを纏った少女が現われた。

不気味な笑みを浮かべた彼女の眼光は、しっかりとシエルとローズを見据えたまま赤黒く光っている。

外見を見ると、まるでどこかの国の王女のような出で立ち。

しかし、シエルには彼女が人間では無い事はもちろん 自分達のような艦魂とも違うように見えた。

「こんにちは、儂くも美しい　　大海のヒロイン達」

身構えるシエル達に構うことなく、彼女は優美な礼をする。

「お前　　何者だ?!」

「今は答えられないわ、ごめんなさいね」

威圧を込めた筈のシエルの問いかけにも、動じずにその少女はまるでからかうように答えた。

しかも、シエルの左手には軍刀がある。

初見の一般人なら、軍人にこんな風に問い詰められたら嫌でも自ずと口が開いてしまいそうになるものである。

相手は自分達と同じ艦魂とは違う、ましてやワープをしてきた未来の人間などでもない。

異質の存在　　それ以外に彼女を表現する言葉はこの場の誰にも思い浮かばない。

「でも、いつだったかしら　　民族は忘れたけど欧州人のだれかは、私をこう呼んだわ

マキナ・インコグニタ、とね」

「マキナ・インコグニタ・・・」

「名前などどうでも良い！　　要はお前が何であるかだ！」

シエルが遂に軍刀を抜いてマキナ・インコグニタと名乗った彼女に  
対して敵意を向ける。

その瞬間　　三人を包んでいた空気、殺気、諸々全てが変わった。

「やれやれ　　仕方ないわね・・・あなた、規律には厳しい方？」

「だからどうした!」

ゆっくりとではあるが、少女はシエルの向けた軍刀がまるで見えて  
いないかのように気にすること無く、  
確実に二人の方向に歩み寄っていた。

「それ以上近づくな！　近づけば、斬る!」

「ふふっ、やってみれば?」

悠然さを見せつける少女のその言葉に、シエルもついに吹っ切れた。

「・・・その言葉、後悔させてくれる!」

シエルの鋭い居合斬りが秒単位ではカウントできない程の速さで、  
少女を真っ二つにする　　筈であった。

「　　ば、馬鹿な。　　お前、何をした!」

シエルの放った一撃が少女に届く事は無く、斬撃は少女の右手の僅  
か手前で何かに阻まれるかのように止められていた。

「・・・あなた、規律に厳しいってことは上下関係に厳しいってこ

とでもあるのよね？

「だったら、どっちが上でどっちが下か、いい加減理解すれば？」

呆れたように言い放った少女。

その右手に赤い光を灯らせ、それをシエルに向ける。

「ちょっとお仕置きね」

「なッ                   ！！？」

次の瞬間、まるで戦艦クラスの主砲を放ったかのような閃光と衝撃が巻き起こり、轟音が辺りの大気を吹き飛ばした。

しかし、この衝撃を艦橋に居たクルー達が感じる事は無かった

まさに、超常現象の中の超常現象。

第三主砲塔の根元部分、もうもうと立ち上る煙が徐々に晴れて行く。

そして殆ど煙が晴れた中には、主砲塔の円形外壁に叩きつけられてグッタリとしたシエルの姿があった。

「ね、姉さまあッ！！！！」

「ぐ                   くッ……」

ローズが駆け寄り倒れているシエルを抱きとめるも、彼女は傷つき

気を失っているようでローズの呼びかけに反応しない。

カラカラツと音を立てて甲板上にシエルの軍刀が落ち、戦う力は一瞬で奪われた。

「姉さま！しつかりして、姉さまあッ！！」

「大丈夫よ」

必死に呼びかけるローズの後ろから、冷やかな口調で少女が語りかけてきた。

「いくら艦魂は痛めつけられても、艦体が損傷しない限り平気ですよ？」

姉を痛めつけられた悔しさ、自分では敵わない現実に対する悔しさが合わさり、

ローズはその少女をキツと睨みつける。それが精一杯の抵抗だった。

「彼女が起きたら伝えてね、またきつと近いうちに会う事になると」

それじゃ、「ごきげんよう」

そうメッセージをローズに託すと、少女は来た時と同じように消えて行った。

一瞬の静寂、すると今度は前艦橋の望遠鏡を使って周囲を監視する監視員達が騒ぐ声が聞こえてきた。

「右舷、後方　　何かが来ます!!」

霧の中から姿を現したものの、それは一見すると軍艦のようだった。

だが、それを見てローズは目を見開いて一言呟いた

「大き・・・すぎるわよ」

それは500メートルはあろうかという大きさの、海に浮かぶ軍艦だった。

かつて、弩級戦艦の登場の際　　人々はその大きさに畏怖と敬意を抱いたことだろう。

それから数十年、その弩級を持つ事が先進国にとって当たり前となっていた。

海軍先進国のウィルキアや日本は当然のように、そのはるか上をゆく超弩級戦艦を建造。

その一つであるシエルドハーフェン級は、そのさらに幾つもの上をゆく大きさを誇り、全長331メートルの超々弩級航空戦艦だ。

しかし右舷を通り過ぎたそれは、超々弩級戦艦の乗組員にさえ押し並べて畏怖を抱かせるような大きさ。

更に、先ほどまでは艦首部分しか映っていなかった筈のそれはあつという間に中央部分を通り過ぎていく。

航空機並みの超高速で、それは悠然と過ぎ去ってゆく。

まるでシエルドハーフェン級二隻と護衛の巡洋艦などで構成される艦隊に対して、「お前たちはいつでも沈めれる」という余裕を見せつけるように。

その時、ローズはその不明艦の左舷に先ほどの少女がこちらを見て不敵な笑みを浮かべているのに気付いた。

マキナ・インコグニタと名乗った少女は、長いスカートの裾を掴み西洋風の愛らしい挨拶を決める。

その後、呆然とするシエルドハーフェンのクルーやローズ達へと向き直る事もなく、濃霧の中にその艦ごと消えて行った。

凄まじいインパクトを与え、あっという間に過ぎ去っていく何か  
そう、まるで暴風だろうか。

「彼女は　　あれは、艦ふね・・・なの？」

ローズの呟き、それはシエルドハーフェンのみならず艦隊の全乗組員が抱いた気持ちそのものであった。

シエル達後続する本隊が謎の巨大艦と接触して数時間後・・・

フレースベルグでは艦体の損傷個所の把握の殆どが終わり、予定ではあと10分で再び機開始動。

カリフォルニアの海軍基地で修理や逃げ伸びたウィルキア海軍の仲

間に連絡を取るため、フリースベルグは航行を始める予定であった。机に無造作に積まれたログへの書き込みもあらかた終わり、カイトが艦長室で一段落付いた頃

ノックも無しに突如ドアが外れるように開け放たれ、何事かと振り返ったカイトの視線の先に呼吸を整えているリナの姿があった。

「艦長！ ウイルキアで                    ウイルキアで、ヴァイセンベルガーが声明を出しました！」

全世界へ中継されてテレビに流れています！」

「なんだと！                    すぐに                    待てよ」

その時、カイトは小型のテレビが艦長室に備え付けてあったの思い出した。

つついっいつもの癖で、危うく艦長室を無駄に飛び出していく所だった。

再び革張りの椅子に腰掛け、カチツとテレビのスイッチを入れる。

画面が明るくなった後、チャンネルをリナが伝えたチャンネルへと合わせる。

砂嵐の先に映し出されたもの、それは我々を亡国の民へと追いやった張本人だった。

『・・・いた、世界不況、貧困、民族差別、戦争！                    無くそうとしていると、どの国の政治家も口をそろえて言う！』

だが、なぜ無くならないのか？諸君は疑問に思った事は無いか？

敢えて言おう！世界が国と言う物に分かれている以上、

そんなものは絵空事でしかない！下らぬ利権争い、領土の奪い合い、エスノセントリズム、それが戦争の原因なのだ。

つまり、幾つもの国家が地球上にある限り、戦争は無くならない  
『！』

テレビの向こうでマントを翻し全世界に力説するヴァイセンベルガーを、リナはテレビ画面を睨みつけるように見つめる。

「国王を廃する事が、世界平和のためになると言う事なの・・・？」

『全世界を救済するには、ただ一つ・・・今日ここに、私は元首として・・・ウिल्キア帝国の樹立を宣言する！』

高らかに言い放った後、フラッシュの乱舞と彼の信奉者たちが雄たけびのような声を挙げて万歳を叫ぶ。

彼の姿に、兵士が絶対的忠誠を誓う国王の姿を重ねた者も少なくないのだろう。

クーデターは、成功してしまったのだ　　国王派を取り逃がした  
と言う唯一の弊害を除いて。

艦内が不気味に静まり返っている。

機関を停止していると言う事もそうだが、扉が開け放たれているのに誰の話し声も聞こえない。

聞こえているのは、ついに元首へとなり上がった男の声だけ。

艦内の一人を除いて、ヴァイセンベルガーの宣言によって完全に言葉を失っていたのだ。

「世界を救済するために新国家を樹立する　　矛盾しているぞ、ヴァイセンベルガー」

4月22日　　カイトが、フリースベルグが、ウィルキア解放軍が、この男を祖国奪還の最終目標とした瞬間だった。

そしてそれが、本土に残る同胞たちと袂を分つた日であった。

そしてそれは遠く離れたアメリカ領、横須賀からの脱出後ハワイ諸島にいた彼らにとっても同じだった。

だが、狂気の布告はそれだけにとどまることは無かったのだ。

## 第九話 嵐が呼んだ暴風（前編）（後書き）

シエルドハーフェン達の前に現れた異世界からの使者。

だがそれは、これからの世界に起こる変化のほんの序章第零話にすぎなかった。

損傷から立ち直ったフレーズベルグ、その艦内に全世界へ向けた戦慄の布告が流れる。

次回 第十話 「亡国の鷲<sup>イーグル</sup>」

次回を後編にしたかったのですが、ちょっと内容が長くなりすぎて分けた方がいいかなと思って・・・

つまり・・・

9話 前編

10話 亡国の鷲

11話 中編（仮）

12話 後編

と言う事になりそうです

彼女をパーツ輸送艦って呼んじゃダメですよ（笑）

## 第十話 亡国の鷲（イーグル）（前書き）

“ きんぽう ” ファンの皆様、お待たせしました  
ようやく彼女に出番が……！！

文体を変えてみました、と言っても一行詰めただけです  
ぶっちゃけ、どっちが見やすいかなんて書いてても読んでても分  
りません（汗  
もしよろしければ、感想評価の方で御指南いただければ幸いです

## 第十話 亡国の鷲（イーグル）

いつだって人間は欲の塊であると、同じ生物である人間から言われる。

誰もがなり上がることを目指す。

農民は貴族へ、貴族は領主へ、領主は国王へ　そして、国王は神へ。

だが、それを考えた時にカイトは違う疑問を感じた。

「何故だろうか、副長　」

「はい？　何が、ですか？」

「私は、この男からは欲という物を感じない。だが、間違っているのは確かだ」

フリードリヒ・ヴァイセンベルガー、一国の主へと変貌を遂げた彼だが、不思議とカイトは

そんな彼から欲望という物を感じ得なかった。

むしろ、使命感に似た物をカイトはこの男から感じ取っていた。

ただ問題なのは、その使命感がカイト達にとってはどう見ても誤った方向であるという事だ。

そんな中、彼の演説第二幕が始まった。

『だが、一国が変わっただけでは何の解決にもならないと諸君には話した筈だ。』

そう、ウィルキア帝国は世界を変える！　この世界を、戦いと涙を必要としない世界にする！

そのために、世界の国々に私は協力を促したい』

パンツと檀上のマイクが拾った音は、彼が右手を檀上に強く叩きつけた音。

続いて彼は何かを宣言するかのように左手を斜めに掲げる。

『諸君は知っているか？ 大国が利益を守るために、小国にどのような事をして来たか？』

諸君は思い知ったのではないか？ 世界がバラバラである以上、戦争が必ず起こることを！

ここで、我々ウィルキア帝国から全世界の諸外国へ向けて、一つの提案がある。

我がウィルキア帝国の傘下へと入るか、さもなければ亡国への道を選ぶか・・・

日本国に関しては我々の提案を受け入れてくれたことを、非常に感謝している』

ヴァイセンベルガーの途方もない提案を聞いた瞬間、カイトは飲みかけていたお茶をこぼしそうになった。

我が傘下へと入るか、さもなければ亡国の道を選ぶか・・・そんなもの、どこの世界の元首ですら言えるセリフではない。

つまりは、ヴァイセンベルガーは全世界に対して我が国の属国になれと言った訳だ。

かつて地中海に覇を唱えたローマ帝国ですら、パックスローマーナの時代から全盛期を経て、

やがては東西に分裂し、それぞれがゲルマン民族とオスマン帝国に滅ぼされ、世界征服はならなかった。

ユーラシア大陸に大帝國を築いたチンギス・ハンですら、一大帝國を築いたもののその子孫によって国が分裂。

やがては、歴史の闇へと消えて行った。

数多くいる歴史の英雄が成し遂げることがなかった世界征服

それは実現不可能な虚言とすら現代では思われている。

だが、目の前で演説するこの男は  あるうことか、それを成し遂げると全世界に言ってしまったのだ。

それも、アメリカやロシアといった大国ではなく、ウイルクアという小国家が……  
アメリカの大統領ジエームズ・フォーヴァーがこれを聞いていたならば、きつと鼻で笑ってコーヒーでも啜っているに違いない。  
なにを戯言を……と言わんばかりに。

ヴァイセンベルガーも、おそらくはそれを感じているに違いないかった。

そんな彼は、そのアメリカに向けてこんな布告を発した。

『しかし……諸外国の中には既に我々に敵対しようとする国もある。

そのような国には、我々が持つ絶大かつ確固たる力で徹底的に武力行使を行うまでである。

特にアメリカ合衆国は、我が国の叛徒を匿うという許し難い行為を行っている。

願わくば、その叛徒をこちらへと引き渡し、我々の傘下に入ると  
いう勇断を行ってほしい。

そして世界に 無用な争いが起きぬ事を、ウイルクア帝国の  
元首として切に願う！』

『万歳！ ヴァイセンベルガー閣下、万歳！！！』

『ウイルクア帝国、万歳！！！！』

ヴァイセンベルガーの演説に、かつてない程の大きさの万歳の声と  
カメラのフラッシュが焚かれる。

狂信的國家 今のウイルクアはまさにそれであった。

テレビに映った方々の傍聴人たちが、一斉に万歳三唱をとなえている。

そして壇上には、まるで高い塔の上から占領した領土を見渡すような誇りを含んだ笑いを浮かべるヴァイセンベルガー。

テレビのスイッチをオフにし、カイトは艦長室の椅子にどっかりと

座りこむようにして溜息をついた。

「まさか、あのヴァイセンベルガー将軍が　　反乱の首謀者だったなんて」

「うすうす分かってはいたがな　　あの行動力、集まった戦力、そして反乱の秘匿性。」

あんな事ができる人間と言ったら、ウィルキアには彼くらいのも  
のだろうと予想は出来た。

「スワロー大尉、みんなの様子を見て来て欲しい。」  
「わかりました」

重苦しい空気の中、カイトがリナに艦内のクルーの様子を見て来て  
くれと頼んだ。

リナはどうやら空気を察してくれたらしい　　少し涙を浮かべて  
いた彼女は数秒後にはそこに居なかった。

クルーの様子と言えば、大かた絶望に打ちひしがれているというのが  
大半だろう　　別に見て来てもらう必要は無いのだ。

『アメリカ合衆国が匿う叛徒　　』  
それは反乱の首謀者であり国王に対して許し難い罪を働いた男の言  
葉。

しかし、その『叛徒』という言葉がカイトの心に重くのしかかって  
いる。

豪雨の中のエコーサウンドのように、脳内に響いている。

そしてそれらが合成波となり頭を駆け巡った時、カイトの頬を二筋  
の雫が流れた。

「ついに　　我々は、国を失ってしまったんだな　　」  
虚しさや悔しさ、国を守れなかったという軍人としての責務不履行  
にさいなまれる。

誰に向けたわけでもなく、艦長室のどこかに吸い込まれていくはず  
だったその言葉。

しかしそれは、彼女が拾ってくれていた。

「艦長さん……」

「……フレイス、その傷は　　そうか、あの時に」

この間シエルドハーフェンが被雷した際の事を思い出し、彼はフレイスが傷を負っている事を理解した。

悲しげな笑みを浮かべた彼女の右目には血が滲んだ眼帯、腰には何重かの包帯が巻かれていた。

「はい、でも砲雷長が手当てをしてくれました。今はこれが精一杯と言っていましたけど……」  
それもそうだ。

艦魂の怪我は艦体の損傷から来るものだ。

つまり、艦の損傷個所を修理しない限り怪我は治らない。

それにしてもバンはその事を知っているのだろうか……

いや、彼の事だ　　治らないなんて分かっているけど、傷ついたままの彼女を

放置しておくことなんて出来やしなかったのだろう。

「すまなかつたな、フレイス。　　これからカリフォルニアの米海軍基地に向かう、そこへ着いたら

　　一早く修理をすると、約束する」

「わかりました、ありがとうございます。」

「礼を言うのはこちらの方だ。君の力がなければ、我々は今頃この世の存在ではなくなっていた」

「皆さんの奮戦のおかげですよ。私こそ、こうしてまだ浮かんでいられる事を感謝するべきなのですが……」

「ん……そうか……」

その時、ふたたびあの慌ただしい足音がこの艦長室目掛けて接近してくるのが聞こえた。

良からぬ可能性を秘めた、何か起きた証拠だった。

「艦長！　CICから連絡です！　針路270から接近する艦船あり、それと……」

「それと・・・どうしたんだ？」

小さな紙切れを読み上げているリナが言った「それと」というワードがなぜか気になった。

「艦橋上部のマストにて、先の戦闘での敵軍パイロットとみられる兵を確認、投降を求めてきたのでそのように・・・」

マストの上には、また奇妙な場所に辿り着いたものだ。

しかし、先の交戦から数時間も立つ。

ずっとあんな場所にいたとは、少々その投降兵の事が気の毒に思えた。

「それから接近する艦が、こちらへと無線交信を求めています・・・送られてきた相手の名前は、日本海軍巡洋艦“きんぼう”

とのことです。 どうしますか・・・？」

なんということだ、相手は味方に非ず

それも日本海軍ときたら、ついさつき乱戦を演じた相手じゃないか

・・・！

マストにて投降したパイロットが、良い証拠だ。

接近する艦船・・・さては、こっちが一隻と知って降伏勧告でも・・・

「他には艦船の影は見えるか？」

「いえ、ただ一隻だけです。 それ以外にはソーナー、レーダー、ともに反応ありません」

「そうか わかった、出よう」

多少疲れているのは確かだが、それでも急ぎ足で艦橋に到着した時には、待ちつけていたクルーからインカムを受け取った。

「こちらウィルキア王国海軍第11近衛艦隊旗艦、フリースベルグ・・・」

『ホッ・・・出航から丸21日やっと応答があった。 あ、いえ、こちらの話です』

一見すると、出たのは通信士の話では向こうの艦の艦長らしい。

しかし声の高い低いはともかく、声の主は青いと言うか何かしら幼い感じがした。

自分も他の艦長から見ればそうだからとやかくは言えないが、ともかくそれが彼の声を聞いた第一印象だった。

『こちら、元日本海軍誘導弾巡洋艦“きんぼう”艦長』

「待ってくれ、“元”ということは、貴艦は今は日本海軍所属で無いと言う事か？」

『はい。我々は先の4月1日に、上官の日本国より脱出せよという命令により』

日本海軍を離脱しました。』

「四月一日……横須賀が帝国親派の内通者によって攻撃を受けた時か」

『ええ……それをいち早く察知した山下大佐が、当時三陸海岸沖で単艦で演習中だった』

我々にそれを報せてくれました。おかげで、こうして無事ウィルキア近衛艦隊の貴艦と合流できたというわけです。

願わくば国を取り戻すため、貴艦隊と行動を共にしたい。我々も、国を奪われた身　あなた達にも分かる筈でしょう』

向こうの考えてる事も分かる……どうやら敵性艦では無いらしい「それは、分かる事は分かるが」

「艦長、待って下さい！　あの少し、代わって頂けますか？」  
カイトに呼びかけたりナノの表情は、僅かだが疑念を浮かべたようであった。

「私は、当艦の副長です。　一つ、尋ねても宜しいでしょうか？」

『あ、はい……』

突然相手が変わった事に、一瞬だが戸惑った幸樹。

「向こうの副長さんは女の人か……美人だったりして……」

その時、氷のような視線が場違いな台詞を吐いた宏史に向けられた

のは言うまでもない。

「フリースベルグ、どうぞ」

『“きんぼう”でしたね・・・なぜ我々の場所が分かったのです？』

「それは・・・」

『世界で最も広い海、太平洋・・・そのどこにいるか分からない艦を的確に見つけるなんて、』

事前に情報が無い限り天文学的確率になってしまいわ。』

カイトが「分かるが」の後に続けようとしていた言葉を、そっくりそのまま彼女は言い放った。

もつとも、日本人特有のようになりソフトに言うか英国系の血が流れる彼女のように単刀直入に言うか、それくらいの違いはあるのだが

『それにあなた達は元とは言え日本海軍を名乗った。本艦はほんの4時間前に、その日本海軍と戦闘状態に入り』

どうか無事に切り抜けたのよ。合流したいといきなり言われども、こちらがそれを受け入れるには』

『それじゃ、会ってみたらどうだ？』

おそろくりナが持っているであろうマイクが拾った小さめの声は、小さいながらもはっきりと聞こえた。

この声は、あの最初に話した艦長の声だろう。

「会ってみるって、艦長・・・4時間前の戦闘をお忘れになった訳では無いでしょう？」

艦橋では突拍子もないカイトの言葉に、リナが彼に詰め寄る。

「忘れるわけ無いだろう。確かに、あの時我々を襲った敵機は・・・

・紛れもなく敵だ。

だが、彼らが敵であるという確証は無い。それに、我々がヴアイセンベルガー率いる軍勢に遥か劣る戦力

であると言う事を、君こそ忘れてる訳ではあるまい？」

カイトの的確な反論に、リナは俯いて黙り込む。

「それは、そうですが……」

「よかるう、許可しよう」

振り返ると声の主であるバクスター司令がこちらを見据えていた。

「ありがとうございます、司令。では、私が……」

「いえ、艦長それは私が……」

「トライトン艦長……何を言っている……ここは私が行くべきだろうが」

その言葉に誰もが「え？」と声をあげると、既に長官は席を立った頃だった。

「長官、しかしもしかしたらと言う事もありますし……」

「それなら尚更……艦長は艦に危険が迫るなどの異常事態が発生した場合を除いて、艦を離れてはならん、と

士官学校で習ったはず……違つかね？ よもや、シユルツに続いて二位で卒業した君が忘れる訳あるまい？」

「そ、それはそうですが……」

微かに恥ずかしさがこみ上げる……特に学校時代の成績なんて

「ちなみに……艦隊司令長官が、離れてはならんとは書いてない。

」

リナやまわりのクルーとも顔を合わせるが、皆「いいんじゃないか？」という表情で頷いた。

好きにさせたらと言う投げやりなものではなく、司令長官を信頼しきった感じの瞳で

「分かりました。しかし万が一と言う事もありますので、武装班から二名程を同行させてください」

「……良いだろう。内火艇で向かう」

「副長、先方に司令長官が向かうとの旨を……私は武装班に連絡する」

「はっ、了解しました！」

少し待つように言われて5分が過ぎた。

もしや、全く信用されずにいきなり対艦ミサイルという事も考えられなくもない。

幸樹はCICに対空警戒を厳と成すようにとの言明はしていなかったが、“きんぼう”もそれをとがめる事はしなかった。

12時方向の遙か遠方に小さく肉眼でなんとか見える距離に、フレースベルグはあった。

（もし撃ってきたならば、最後の砦はこのCIWS20mmバルカ  
ン砲・・・）

幸樹がフレースベルグからの返信を今か今かと待ちながら、艦橋眼下の白一色のレドームを備え付けたCIWSに目を向ける。

「心配し過ぎなんじゃない？」

「ん・・・そうだろうか」

「アンタねえ、こっちは信用してもらおう側なのよ。こっちがピリピリしてたら、信用されるのもされなくなるわよ」

“きんぼう”の言う事も分かるのだが、向こうは当初から今に至るまでリーダー照射を止めていない。

つまり、こちらが何かしら不審な動きでもしよつものなら、いつでも撃てる体勢であると言う事だ。

「そりゃ、分かってるけどさ・・・」

すると、無線通信士が「はい・・・はい」と応対する声が聞こえた。「フレースベルグからです・・・」

幸樹は不安要素を拭えないまま、通信士から受話器を受け取りそれを耳に宛がう。

「どうぞ・・・」

『こちらフレースベルグ、そちらに当艦に乗艦していた艦隊司令長官を向かわせたいと思うのですが、宜しいですか？』

てつきり内火艇でこちらから向かう必要があるのだろうと思っていた幸樹は、正直面喰った。

それも副長辺りだとの予想は外れ、ここへ来るのは艦隊司令長官というビッグなお客さんだ。

「は、はい・・・了解しました」

「ほら来た、しつかり頑張りなさいよ」

“きんぼう”や艦橋クルーに励まされるように向かおうと彼が防水扉の所へと差し掛かる。

その時、幸樹はふと一人では心細くなった・・・

「宏史、お前も来い」

「え〜！ マジですかい・・・」

「艦長命令、拒否しないの」

“きんぼう”に言われて、渋々宏史も艦橋を後にするのだった。

数日前、日本、東京都内・・・

日光がさんさんと輝き、春過ぎの良い日和となっていた。

そんな中日光を遮る広葉樹の下に、一台のマイクロバスが休日の人出で賑わう公園内の駐車場に停まっていた。

普通のバスとは違い、内部は計器や様々な機器類で埋め尽くされていた。

それこそが、無事に君塚の手から逃げのびた山下の今の城だった。

車内には他にも、横須賀脱出時に行動を共にした仲間が集っている。

「大佐、今頃幸樹達は合流しましたかね・・・？」

「鈴木・・・心配には及ばんだろう。ああ見えて、意外と出来る奴らだ・・・非常事態に陥ってもきつと、な

・・・お、聞こえ始めたぞ・・・！」

山下が無線機器のような物进行操作し、ヘッドホンから聞こえてきた無いように少しばかり笑みを浮かべる。

「今日は何処です？ 横須賀ですか？それとも、ウィルキア王国・・・じゃなくて帝国海軍本部？」

「ん、ウイルキア帝国海軍本部のようだが・・・相手は艦のようだ・・・ニーズヘッグという名前らしい。」

沖田あ！無線発信場所の特定は出来るか？」

「3分ほどかかります！」

「よし、頑張れ！」

数分後、相変わらず山下は無線に集中し時折メモを取っていた時だった。

沖田が機器から出てきた紙をレシートのように千切り取って持って来る。

「大佐、発信源の特定終わりました。」

同じくして山下が大きめのヘッドホンを置き、その受け取った紙を見つめる。

「北緯9度57分21秒、西経80度59分2秒・・・」

山下が視線を壁にかけてある世界地図を見つめ、問題の地点を特定する。

「大佐、パナマ運河ではありませんか？」

「らしいな・・・ニーズヘッグと言やあ、ウイルキアのクーデーターで国防海軍に奪取された最新鋭艦じゃないか？」

「ええ、確かにそうですね・・・」

「敵に先回りをされたか？ アメリカも挟み撃ちだな・・・敵が多いとは、御苦労なことだ」

山下が奥に引つ込むと、彼は礼服へと着替えを始めた。

「今日は政府関係者の？」

「ああ、財界と官僚の懇親会・・・良い情報仕入れれると良いけどな」

そう言いながら山下は車内天井付近の金属製のカバンを取り出した。その中には・・・

「出来るだけ、隠密にお願いしますよ。この間のようにアクション俳優顔負けのような銃撃戦はホント勘弁して下さい。」

RPG（対戦車ロケット砲）ぶっ放したり、小銃を乱れ撃ち、迎えに来るこちらの身にも……」

「分かつてる分かつてる……今回も、その“つもり”だ」  
ガチャツと乾いた音を立ててスライドさせた拳銃を、彼はタキシードの懐に忍ばせる。

その懐の拳銃の反対側には、拳銃の破裂音を抑える減音器サブレッサーを備え付けた。

艦橋からの連絡を受け、甲板に降りた幸樹達。

ブイーンという音と白波を後方に立てながら、内火艇がこちらに向かつて近づいてくる。

ここからでも確かに見えるのは自分達とは違い、青と白を基調にしたウィルキア海軍の制服。

引き連れていた船務科の数名と共に、接舷した内火艇へロープを渡しステップを取り付ける。

一人の老人に見える人物が話にあった艦隊司令長官なのだろう。

彼は煩わしそうにライフジャケットを内火艇の中に脱ぎ捨てると、そのステップできんぼうへと乗艦した。

「ウィルキア海軍中将第11近衛艦隊司令長官、ジェラルド・バクスター。乗艦の許可、感謝する」

「元日本海軍誘導弾巡洋艦きんぼう艦長、坂上幸樹です」

「同じく、宮本宏史であります」

お互いに海風が吹き抜ける中、敬礼を交わす。

「バクスター長官、ここで立ち話もどうかと思うので、艦内に場所を用意しておりますが……？」

「うむ」

その時、バクスターは内火艇の護衛の二人が心配そうな表情を浮かべているのに気付いた。

「君達はここで待ってるように……何、大丈夫」

「は、はっ！」

二人は慌てて姿勢を正し、肩に小銃をぶら下げているため反対の腕で敬礼を送った。

（あれは、フェーズドアレイレーダー・・・それに艦橋やマストの傾斜、あちこちに見えるステルス志向の艦体）

バクスターは艦内へと向かう最中に、きんぼうの艦橋やその他各部にフレースベルグと似たような共通点が多い事に気付いた。

艦内の整い方、これもフレースベルグとは似ているものが多かった。しかし原子炉があるフレースベルグの方がやや機器類が多いせいか、このきんぼうに比べて狭く感じた。

「こちらです。どうぞお座りになってください」

案内された先は、人が10人ほど入っても大丈夫なような広さと快適性を備えた応接間のような部屋。

日本海軍服を着た女性士官が出したコーヒーをバクスターは啜る。

口の中に広がる苦味とその奥にある旨味、これだけでも彼等に好感が持てそうだ。

人は何も行動が全てなわけではない。バクスターはそれを熟知していた。

そして彼らとこれからパートナーシップを結ぶに値するか、その話し合いは始まった

## 第十話 亡国の鷲（イーグル）（後書き）

JIN「艦長！北朝鮮から、納豆キナーゼが発射されました！！」  
カイト（らしき人）「・・・は？」

JIN「着弾まで10秒！駄目だ、間に合わない！」

カイト（ry）「え、いや待てよ・・・納豆キナーゼってお前・・・」

JIN「もう迎撃不可能です！ もうあきらめるしかないですよ！  
ハッハッハッハッ！！」

カイト（ry）「ちょ・・・なんでコエンザイムQ10じゃなくて納豆キナーゼなんだ!？」

リナ「それが問題かy・・・」

！！ずど〜〜〜ん！！（特殊弾頭ミサイル並）

JIN「酒を飲んで帰って寝たら、こんな変な夢を見たんだが・・・」

フレ「なんですか・・・いきなり納豆キナーゼって・・・？」

カイト「その前に、なんで爆発する？」

リナ「もう、酷い以外に言葉を掛けられないですね」

JIN「納豆キナーゼって確か、納豆に含まれて血液の固まるのを防ぐ効果のある有効成分だ」

リナ「そうなんだ・・・ネバ〜ってしてるからってつきり血液ドロドロになると思ってました」

シェ「だから、なんでそれが爆発するんだ？」

ブロ「ニトログリセリンじゃあるまいし・・・」  
フェ「アルコールって恐ろしいな・・・」

JIN「酔ってもほとんど記憶はあるんだが・・・眠ったら何故か変な夢をみてしまった」

フレ「眠ったのは何時頃でした？」

JIN「朝方4時」

フレ「きつと、通販のCMでも見てたからその内容が夢となって出てきたんじゃない？」

JIN「その可能性は高いな・・・でなきゃ納豆キナーゼっていうワード、出てこないもん」

フレ「通販の能力、侮りがたしッ！」

・

・

・

きんぼう「と、まあ滅茶苦茶な作者だけど、感想とか待ってるわ。

それじゃ、次回もよろしくね」

次回 第十一話「それぞれの出会い」

・

・

・

・

始祖鳥「出番まだ？」

JIN「も、もう少しだからね・・・」

## 第十一話 それぞれの出会い（前書き）

これくらいの間隔で更新し続けることが出来る能力を誰かが授けてくれるなら・・・

一万円くらい払っても、良いかも（笑）

すいません、予想に反してまた長くなりました

これも、エーベルハルトという主人公よりも好きなキャラが出てきたせいです（お

某機動戦士のアニメを再び見ていたら・・・

武装に名前をつけたくまりました・・・

現実でもミサイルとかに付いているからと

自分を強引に説得して・・・

武装の一部に名前が付きました（笑）

対艦ミサイルとか、対空ミサイルとかいう名称は鋼鉄ではメジャーな事ですが

・・・やっぱり名前は大事（笑）

・・・と、思いたい

## 第十一話 それぞれの出会い

双眼鏡の向こうに見えるきんぼうの艦影を、カイトは艦橋から見つめていた。

右舷側には、こちらが差し向けた内火艇と退屈そうに待つ護衛兵二人の姿も見受けられた。

リナがスクリーン上にあるデジタル時計を見ると、既に時刻は昼の12時を回るところ。

長官がきんぼう艦内へ向かうとの報せを受け取って、既に30分が経過していた。

「なにも仕掛けてくる気配は無いですね、艦長」

「そうだな、だが念のためまだ警戒は・・・」

双眼鏡を外してみると、艦橋から見える景色に水色の何かが映った。艦前方に二基並ぶAGSヴィエイラ、その左舷に傷の癒えないフレースが海風に水色の髪をなびかせていた。

そしてただただ、向こうへ停泊するきんぼうを見つめている。

こちらの気配を感じたのか、カイトが向けていた視線に気づくと彼女はこちらへゆっくりと首を振った。

「いや、もう・・・いいだろう、あの艦は撃つて来ない。警戒態

勢解除、280mmAGSヴィエイラ、57mmCIGS、RAM格納」

「はっ、280mmAGS、57mmCIGS、RAM格納。イェローアラート解除。」

リナの復唱の後、ようやく緊張状態を解除できたカイト達。

ヴィエイラの長い砲身が水平よりさらに下に傾き、砲塔内部に完全に隠れると右から蓋をされるように完全に閉じられた。

コンコンとノックをする音で、三人の会話は中断されざるを得なか

った。

「お話の途中、失礼します。 艦長・・・」  
女子士官が幸樹に耳打ちをし、何やら小声で喋っている。

だがバクスター長官はそれを気にするでもなく、会話の内容をメモにまとめていた。

「分かった、ありがとう。」

「はっ、失礼します」

彼女がその部屋を立ち去ると、幸樹は会話を中断した事を詫びた。

「すみません、中断してしまいました・・・」

「構わんよ、おそらくこちらの艦が武装を格納したんでは無いかな？」

「えっ？」

「どうして・・・それを？」

「一応、あの艦長とは昨日今日の付き合いでは無いのでね・・・」  
その言葉に、幸樹と宏史は顔を見合せて首を傾げる。

「トライトン艦長は、撃てと言っても護りたいものならば決して撃たず、撃つなと言っても守りたい物の脅威ならば撃つ、

そんな艦長だ・・・あまのじゃくという訳では無いのだが、ともかく私は彼を信用している」

「そうなんですか・・・ちょっと、自分達では良く分からないのですが」

すると、長官が部屋に僅かに響く程度に笑いだした。

「まあ、君達がいるいろんな事にもう少し経験を積みれば分かる事だ。

おお、そうだった・・・それはそうと、

最後に一つ訊かなければならないと思っていたのだが

「はい、何でしょう？」

「この艦は ドイツと日本、そして我が国ウィルキアとでの高機能巡洋艦共同開発計画にあった、

計画艦のうちの一隻ではないかな？」

「待って下さい、それは軍機漏洩になるので

「

「しかし、君達はもう日本海軍では無いのだろうか？」

長官に反論されて宏史が黙り込んでしまう。

「確かに、ドイツ連邦共和国からの技術が利用されているとは聞いたことありましたが、計画艦の

一隻だとは 自分達も聞いた事はありませんでしたので、本当かどうかは分からないのです」

「そうか ならば良い。 思いすごしかもしれない」

「いいえ、思いすごしじゃないわ」

その時、部屋のどこから声が響いて来た。

それを聞いて幸樹と宏史はギクリとなり、そちらに振り向いた。

白い光が集まり、スラツとした美女がそこへ舞い降りた。

「私は一騎当千ならぬ一艦当千の概念のもの開発された、高機能巡洋艦計画の中の一隻

日本海軍誘導弾運用巡洋艦としてね・・・」

「君は」

バクスター長官がきんぼうへと問いかけようとしたその時、きんぼうの口を幸樹と宏史が押えた。

「馬鹿っ！！ 知らない人の前にいきなり出るなとアレほど

！！」

「地縛霊ならぬ艦縛霊とかだと思われたらどうするんだ！」

「艦魂ではないかね？」

「へ？」

その声に動きが止まった二人は長官の方を見て目をパチパチとさせる。

「あ、あの ご存じなんですか？」

「うちにもおるからな それに、艦魂という存在と付き合い始めて伊達に40年生きてはおらんよ」

「そ、そうだったんですか・・・道理で」

幸樹が苦笑いを浮かべながら、ふうとため息をついて落ち着きを取り戻した。

「そうだったのか！」

すると、ポンツと宏史が何かを閃いたように両手を叩いた。

「ドイツ由来だから、誘導弾射撃演習の後にドイツ製のビールをそんなに飲みまくって、修羅と化さ」

ドゴオオツッ！！

鈍い音が部屋に響き渡り、澄ました顔できんぼうが突き出した正拳突きは宏史の顔面に綺麗にめり込み、

部屋の隅へと吹き飛ばされ積み上げられていた段ボールがガラガラと崩落した。

「フフツ・・・ごめんなさい、全然聞こえなかったわ」

怖い笑顔を浮かべてきんぼうが振り返り、幸樹もドキッと硬直するが、すぐにやれやれと頭を抱える。

そんな幸樹やきんぼうを見て、バクスター長官が軍帽をかぶり席を離れる。

「あちらには、楽しくなりそうだと伝えよう　とにかく、合流の件は了解したとクルーには伝えてくれ」

「ありがとうございます。それでは、また後ほど」

「うむ、後で連絡をよこそう」

幸樹に伴われて長官が応接間を後にした。

「艦長！　内火艇より発光信号！」

席に座っていたカイトは、監視していたクルーの言葉が聞き取りやすいようインカムをその場に置く。

「キ・ン・ボ・ウ・ゴ・ウ・リ・ユ・ウ・ニ・イ・タ・ル、きんぼう合流に至る、だそうです」

「了解したと返答を。それからきんぼうへと通信回線を開いてくれ」

「了解」

通信士が周波数などをコンソールで操作し、カイトの方へと再び向

いて合図を送る。

「こちら、フリースベルグ。 きんぼう、応答せよ」

『こちら、きんぼう、どうぞ』

「合流を歓迎する。 本艦の左舷側を航行し随伴、一路米海軍カリフォルニア基地へと向かう」

ホツとした表情で向こうに映るきんぼうを見つめると、そこから波が白い筋となってこちらへと向かって来る。

長官が内火艇でこちらへと戻って来るところだ。

『了解しました、きんぼう。 航行再開後、貴艦の左舷側に付きま  
す』

「総員に告ぐ、長官が帰還される。 艦橋クルーの一部を除き、登舷礼にて出迎えるように」

カイトはキャプテンシートに置いていた軍帽をかぶり身なりを正すと、リナや数名のクルー達と共に甲板へと向かった。

午後へと突入し日差しが海面に煌めく、それを切り裂くようにして内火艇は帰るべき場所へと帰る。

「長官、間もなくフリースベルグへと接舷します」

「ん？ あれは・・・」

「どうした？」

「長官、クルーが登舷礼を！」

長官が目にした時には、青と白のウィルキア海軍の制服を着た人波が右舷側にずらっと並んでいた。

その中には、照れくさそうに敬礼を向けるフリースの姿もあった。フツと含み笑いとつつむくように視線を下げ、長官はカイト達に向けてそつと呟いた。

「ありがとう、諸君 だが、これからだぞ。 年寄りに出来る

のは、これくらいだからな」

長官の帰還、およびきんぼうの合流はフリースベルグのクルーの士気を爆発的に高める事になった。

「機関、前進半速・・・針路そのまま！」  
そしていよいよ、二隻以上となったフリースベルグらの先行艦隊はカリフォルニアへと針路を取った。

今から12時間前・・・

黒海沿岸、ウイルクア帝国海軍駐留基地、21番ドック

地中海を通り抜けた温暖な空気が、黒海にも吹き抜ける季節になった。

だが、レーヴァティンはドック艦から出でて、海に浮かびながらも未だに一海里たりとも進んだことは無かった。

彼女にとってみれば進むとか進まないとか、そんなのはどうでも良かった。

何より屈辱なのは、任務を与えられていないと言う事　軍艦としての彼女の存在意義を見失いかねない日常だった。

「一体いつになったら・・・私って何の為に」  
艦首の右舷側の柵に寄りかかり、特に活気あるわけでもなく行きかうクルー達の姿を見つめる毎日。

「はあ・・・まったく、私がこんなに悲しんでいるのに、艦長アイツと来たら・・・！」

「いやいや、悪いですね航海長」  
そんな事知らないと言わんばかりに、能天気な声が聞こえる。そしてゲラゲラと何やら楽しそうな会話が聞こえてきた。

「何、余ってた小麦粉とパン粉、それに魚のすり身で急ごしらえしたダンゴ。」

きつと良く釣れるわ」

30代後半くらいの女性が右舷のタラップで息子を送り出すように何かを渡していた。

その息子のように見えた男こそ、このレーヴァティンの艦長なのだ。だが、彼の姿はいつもの制服姿では無かった。

つばが前に張り出した帽子に、網目にポケットがたくさん釣れたグレーのベスト、長靴、

彼が担いでいるのは大きいクーラーボックス、そして釣竿。

誰がどう見ても、釣り人だ。

誰かに教えてもらわなければ、絶対にこの人が軍艦乗り、それも艦長だなんて気付かない。

「それじゃ、頑張つて来てね」

「はい、それじゃ」

イーベルハルトが口笛を吹きながら、タラップを降りた直後、甲板から自分呼びとめる声がした。

「いつ戦闘に巻き込まれるかもしれない軍艦の艦長が釣りだなんて、良い身分になったものね」

「ええ、いちおう私は大佐ですから・・・まあ、なかなか上の方の身分ではないでしょうか？」

「そんなこと言ってるんじゃない!!」

イーベルハルトの返答にレティが雄たけびを上げた。

「それともアレですか？ 離れて欲しくない・・・とか？」

「ぐっ・・・も、もう良いわよっ!! 波止場でも南極にでも行っちゃいなさい!! フン!!」

ツーンとした態度のまま、レティは艦内へと姿を消してしまった。

「まあ、おいしい魚釣つて帰りますからね」

さてと、とイーベルハルトは一路ドックの外へと向かう。

すると、途中でレーヴァティンの副長と機関士長と目があつた。

お互いに冷たい視線で牽制し合う時、エリアス副長が口を開いた。

「魚釣り？ 良いのですか、艦長・・・艦長は艦が危険にさらされたり許可がある場合を除いて、

艦から離れてはならないとありますが？」

「もう少し、職務に忠実な方であると思っていましたか？」

続いてゴルト機関士長も、嫌味な笑いを浮かべてエーベルハルトに詰め寄る。

この男達からは、自分の粗を意地でも探そうという・・・そんな感じのものが窺える。

「それはたしか、第二章にあつた法規ですね・・・ではエリアス君、ウिल्キア海軍法規第二章第一条第二項には何と書いてありますか？」

「第一条？」

「最初の方・・・か？」

「お前・・・分からないのか？」

「そういう副長だつて・・・！」

二人が、唐突に突き付けられたエーベルハルトからの挑戦状に困惑する。

「やっぱり、最初概念的部分つて疎かにしがちですね・・・」

ウिल्キア海軍法規第二章第一条第二項、“第二章では就役艦に適應される法規を定める”ですよね？

つまり、未だに就役していないレーヴァティンの艦長である私が釣りに行くために艦を離れてはいけないとは、

どこにも書いていませんよ？ 嘘だと思つたら、艦内のどこかにあつた海軍法規条文集でも見ると良いですよ。

それでは、私は釣りに出かけますので・・・」

エーベルハルトの姿がドックから離れて行くと、エリアスは悔しそうに拳を握りしめる。

「アイツめ・・・いつか、必ず・・・」

殺意の渦巻くドックをよそに、エーベルハルトは鼻歌を歌いながら波止場を目指すため

海軍士官用の公用軽トラックを一台拝借して行つた。

その時、怒りが覚めたエリアスは時計を見つめるとある事を思い出した。

「ゴルト、海兵たちを武装させて集める。 時間だ・・・」

それから、奴を監視しろ」

「了解です」

不敵な笑みを浮かべたエリアスがゴルトへと謎の命令を出した。

波止場へと到着すると、カモメが宙を舞い青空にさらなる広さが与えられている。

だが、この日は少し違った。

青い色に染められている筈の海に、無数の異色の塊が多数浮かんでいる。

それらを気にしながら、エーベルハルトは折りたたみ椅子に腰かけて早速釣り糸を垂らす。

白いチャートの切れはしのような物、そして黒い色に染まったグリーンの軍服らしきもの。

「ドイツ連邦共和国軍・・・か」

それを見つめると、エーベルハルトは心ばかりの祈りを捧げた。

それで犠牲者が少しでも報われるなら　　きつと、意味不明のまま亡くなったに違いなかったのだろう。

敵が判らないまま、反撃も出来ないままやられる

あの流れ着いた軍服の持ち主同様、その艦の艦魂も同じように決して報われることなく、今は暗く寒く深い海の中で

そんな事が、あのレティの身にも起こったらと考えると、胸が痛む。

そついう彼の姿を望遠鏡で眺める影。

「副長、艦長は普通に釣りをしていますが・・・」

「余計な思ひすぎだったか、まあ深夜に本国から秘匿回線で送られてきた内容を、アイツが知るわけも無いか・・・」

よし、じゃあ良いだろう！　指示があつたとおり海兵たちを向かわせる！

漂流者が居るかもしれん見つけ次第、始末せよ」

その指示を受けて、一隻の内火艇が軍港を飛び出していった。

「うーん、まずまずですね・・・」

釣り上げた20センチ台の魚を眺めて、エーベルハルトが満足そうに頷く。

「とりあえず、この調子で行きましょうか」

航海長から貰ったダンゴを釣り針に付け、再び海へと放り投げる。放り投げてしばらくした時、不意に釣り糸がグイッと引かれた。

「来ましたね！」

エーベルハルトがグイッと竿を引いた時だった、乾いた音を立てて竿がポツキリと折れてしまった。

不思議に思ったエーベルハルトが波止場の下を覗くと、そこにあつたのは・・・人の顔?!

「・・・!!」

何か言葉を発するより早く、彼は波止場横の海面まで至る階段を使ってその場に向かう。

それは女性のもようであった。

オレンジ色の目立つライフジャケットの下には、グリーンのドイツ連邦共和国軍の制服。

引つかかったままの釣り糸で彼女を手繰り寄せ、階段の所まで引っ張り上げる。

エーベルハルトはまず彼女の首筋に右手を当て、脈の有無、続いて呼吸の有無を確かめた。

「大丈夫みたいです」

ホッと一安心したようにエーベルハルトが呟くと、苦しそうに彼女は呻いた。

「お願い・・・です・・・殺さないで」

空気を吐き出すようにうわ言のように呟くと、ガクツとうなだれた気を失ったようだ。

何日も漂流していたらしい、汗や海水でベタついた額を横に傾け彼

女はグツタリと憔悴していた。

「大丈夫ですよ、私は漂流者を殺したりなんかしませんよ・・・」  
エーベルハルトが言いかけた時、不意にどこからか内火艇のブイーンと唸る音が聞こえてきた。

港に小型ボートが行きかうのは別段不思議なことでは無い、というよりむしろそれが普通だ。

だが、この時ばかりは少し違った・・・

こういうのを第六感というのだろうか、この時はそのボートから隠れなければならぬような

気分にエーベルハルトはなっていた。

すぐさま彼女を抱きかかえて、どこか彼女を隠す場所はないかと探す。

しかし、エーベルハルトが乗って来た軽トラックがあるくらいで、他には360度何も視界を遮る物の無い場所だ。

すると、ボートの音が百メートルほど離れた沖合で停まったようだった。

軽トラックの荷台に彼女を寝かせ、エーベルハルトは波止場の壁の影からその様子を窺う。

見るとどうやら荷台に残した彼女同様、他3名程の漂流者がいたようだ。

「来たようですね・・・」

潜入したスパイのような仕草で、時折姿を隠しながらその様子を監視し続ける。

すると漂流者を引き上げようとウィルキア海兵の一人が手を差し伸べる。

「ありが・・・とう・・・ごさい・・・」

その手をまるで天使が差し伸べた手のように感謝の言葉を述べながら、

漂流者の一人が引き上げられかける・・・

カチャツ・・・

額に当てられた硬質かつ冷たい金属の感触、漂流者は最期に知った。その差し伸べられた手は、天使では無く真つ黒な悪魔の手であったと言つ事を・・・

「・・・え？」

ズガアアアアン

「クツ・・・」

思わず顔を逸らしてゆがめるイーベルハルト。

「許して下さい・・・今の私には、どうする事も出来ない」

直後に間髪置かずに二発ほどの銃声が聞こえ、やがて完全に静かになった。

もう一度見ると、ボートの上の男が周りの男たちに何やら指示をしている。

言葉は聞こえないが、ジェスチャーなどから辺りを探せとでも言っているようだ。

（こちらにも、来るかもしれませんが・・・しかしどこに隠せば？）  
その時、彼は足もとに放置していた魚を見つけ、それを見て閃いた。  
・・・

「そうだ、確かこのクーラーボックスは・・・」

いや、迷っている時間など無い、今回は思いついたら即実行。

急ぎ足で戻り、漂流者の彼女を抱きかかえると大きめのクーラーボックスを開き、

どうにか彼女を押し込んで入れた。

最後に水を抜くための弁を開いて空気穴として蓋を閉じた。

「ちよつと狭いですけど、死にたくないなら我慢してくださいね・・・」

海兵たちは軍港の入口である波止場に、バタムツという音を確認に聞いた。

階段から上陸して見ると、一人の男が軽トラックの扉を閉めているところだった。

確かにこの場所までなら民間人でも許可なく入れる事になっている。だが、自分達には漂流者を全て始末すると言う使命が与えられている。

「おい！ その男！ 待ちなさい！」

「なんですか？」

呼び止められたエーベルハルトは振り返ると、二人の武装した男が自分へと近づいてきた。

「ここで何をしている？」

「見ての通り、釣りですよ」

「釣竿が無いようだ？」

「大きい魚を釣り上げた時に、折れてしまいました」

エーベルハルトが助手席に乗せていた折れた釣竿を二人に見せつける。

「少し、車内を調べさせてもらいたい。近くにスパイが逃げ込んだという情報があるんだ」

「良いですよ、別に・・・」

二人が助手席と運転席を探るが、狭い軽トラックの車内だ。

一目見れば別段変わった物は無い事が分かる。

「もう良いですか？」

「ん、ああ。特に不審な点はないようだ」

エーベルハルトが頷いて車に乗り込もうとした時、海兵の一人の目に荷台に載せられている

異様に大きいクーラーボックスが目に入った。

「ま、待て！ そのクーラーボックスを調べさせてもらう！」

「クーラーボックスを？」

表情を変えぬまま、エーベルハルトはズボンのポケットにある何かを握りしめた。

「良いですよ」

「おい、調べる」

一人が顎で合図をして海兵がクーラーボックスの蓋をあける。

すると・・・

ビチビチッ!!

「おわっ!!!?」

差し込んだ光に過敏に反応したのか、エーベルハルトが釣り上げた魚が勢いよくはねた。

そしてそれがクローラーボックスを覗きこんだ海兵の顔面にモロに直撃した。

「イテテテ・・・なんだ、魚と氷じゃないか」

「そうか・・・だが、どうも怪しいな・・・」

「確かに、こんな所で釣りをする人なんて見たこと無かったぞ」  
尚も食い下がろうとするようだ。

(ならば、強制的に終了させますか・・・)

「いえいえ、実はこの間この海軍基地に赴任してきたばかりです  
てね・・・」

「どこかで見たと思ったら、この車・・・公用車じゃないか」

「ならば、海軍の身分証を持つてるだろう? 見せてくれ」

海兵の指示通り、エーベルハルトがポケットに入れていた身分証を  
差し出す。

「第3外洋戦闘艦群・・・ああ、この間出来たやつか・・・

エーベルハルト・ヴァン・シュナイダー・・・ドイツ系か、読み  
にくいな・・・

「って、アレ?」

「どうしたんだ? この釣りバカだったんだ?」

小声でいろいろと失礼な言葉ばかりを並べていた男が  
どンドン顔面蒼白になっていくのが面白いほどによく分かった。

「シ、シュナイダー・・・たい・・・さ?」

「は!?! 今なんて・・・」

ひったくるようにエーベルハルトの身分証を取り上げて、マジマジ  
と見つめると

その男も突然死刑を宣告された死刑囚のような顔になっていた。

「た、たたたつた大佐あ！！！？」

「しっ、失礼しましたあああつ！！ 任務に戻りますっ！！」

「はいどうも」

二人から身分証を受け取ると、海兵達は化け物から逃げる村人のように一目散に退散して行った。

「上手く行きましたね・・・コレを使う事にならなくて良かった」

イーベルハルトは、ダッシュボードの上にゴトリと二発の実弾が装填されたデリンジャーを置き、  
軽トラックを発進させていった。

「あ、帰って来た・・・」

ほんの二時間程度で切り上げてきたらしい。

レティはイーベルハルトを見送った場所と同じ所から、向こうからゴロゴロとキャスター付きのクーラーボックスを転がしてくる彼の姿を見つけた。

「あら、早かったわね・・・ちよつと不調だった？」

後甲板から航海長が帰ってきたイーベルハルトに声をかけた。

「いえ、かなり釣れましたよ。」

「それは良かったわねえ、でもそれだったらもう少し居れば良かったのに？」

「いえ、何せ・・・ちよつと“人魚”が釣れてしまいましたね」

「はあ、人魚？」

イーベルハルトの言葉に航海長は首を傾げる。

そりゃ、おとぎ話でしか聞いたこと無い名前を現実の会話で聞いたら誰だつてそうなる。

「航海長、少し重たいのでコレ手伝ってくれませんか？ それから簡易医療器具と女性ものの寝巻きも」

「え、ええ。良いわよ、って人魚って何よ？それに簡易医療器具に女性ものの寝巻きって・・・」

「後で話します」

駆け付けた航海長と一緒に、異様な重たさになっているクーラーボックスを艦内へと搬入する。

一番苦労したのは最初で、傾斜の大きなタラップは特にきつかった。「ちよつと、一体何釣つて来たのよ？」

二人が苦勞しているのを見て、不思議に思ったレティがエーベルハルトに駆け寄る。

するとエーベルハルトが周りを見て、レティに一言囁いた。

「それは、艦長室で話しましょう。それと、レティ・・・砲雷長を呼んできてください。」

くれぐれも、副長達に気付かれないように・・・」

「それなら大丈夫よ、さつき基地本部に向かうって言うって出て行つたから」

「そうですか、それは好都合です」

（本国に始末成功の報告でしょうか？　しかし油断しましたねエリアス、今回は私の勝ちです・・・）

希望を絶やさぬよう、そのクーラーボックスを艦長室へとエーベルハルトは運んで行った。

「どうしました艦長？」

「砲雷長も来ましたね・・・では、早速見てもらいましょうか・・・」

「エーベルハルトがクーラーボックスの側面の四か所のロックを外し、二段目を開けた時・・・」

「あつ・・・！！」  
「あら、やだ・・・」

海で救出した漂流者の彼女が、4人の間に姿を現した。

「航海長、救急医療資格・・・持ってましたよね？　お願いします」「わ、わかつたけど・・・この娘どうしたの？」

「制服を見る限り・・・ドイツ軍の制服だ。それに大佐、何か隠れてする理由が？」

「実は、今日の目的は本当は釣りでは無かったんですよ・・・」  
すると、エーベルハルトが数日前に知ったある出来事の事から話  
始めた。

「4日前、ドイツ海軍とイタリア海軍がエーゲ海沖で合同演習をし  
ている最中に消息を絶つたと聞きました。

すると、ウイルクア本国からこの艦へ驚くべき命令が発せられま  
した。流れ着く漂着物の始末、漂流者の・・・“始末”です」

「なんですって!?!」

「漂流者を、殺せ・・・本国はそう言ったのですか!?!」

「そして現に、彼女以外の漂流者は湾外で殺されました。私はそれ  
を影から見えていたのですが、

どうこうしようにもデリンジャー一丁じゃどうしようもありません。  
それに、下手に騒ぎを起こせば

折角の計画が・・・無に帰してしまう」

先程の起こった事をありのままに話した。

漂流物の内容、海兵たちが国際法上助けるべき漂流者を銃殺してい  
たこと・・・

それらは今近くに迫っている異変を、嫌でも自分達に認めさせるの  
に十分であった。

「しかし、副長達に秘匿回線で送られた内容ならなぜ艦長が知るこ  
とができたのです?」

「それはですね・・・」

「私が教えたの」

ツインテールの毛先を触りながらレイティが答え、砲雷長はその返答  
に納得した。

「そうか、艦魂ならレーダーだけでなく入電して来た無線の内容も  
知ることができる。」

秘匿だろうが、特定人物に宛てたものだろうが関係ない・・・」  
すると、航海長が漂流者の制服のポケットからある物を見つけた。

「コレを見て。ドイツ軍の身分証よ・・・アンネリス・フリーゲ

ルって読むのかしら？」

「そのようですね」

航海長がアンネリスの肘を抑えると、彼女が「うっ」と軽く苦痛を訴える。

「右肘を痛めているみたいね・・・でも、それ以外は一見外傷はなさそうね、あとは・・・」

二人の方を見て目で合図をする。

「ああ、そうでしたね・・・では航海長よろしく」

イーベルハルトと砲雷長は、艦長室を後にした。

閉じる扉の隙間から最後に見えたのは、航海長がアンネリスの上着を脱がすため手をかけているところだった。

艦長室を出て、長い艦橋構造物の上で二人は話を続けていた。

「それで、どうするんです？ 万が一、副長とかに見つかったら・・・

・厄介な事になりますよ」

「そうですね、とりあえず怪我が治るまではこの艦長室を彼女の寝室としましょう。

滅多な事じゃ誰も入ってきませんし・・・私に用があつても私が他の所に居れば良い話です。

普段はレティと航海長に見えてもらいましょう。二人とも、暇を持って余している筈ですしね・・・

それから、そう言った理由から随時艦長室は施錠するように」

「わかりました・・・しかし、向こうにはヴァイセンベルガー率いる本国の後ろ盾があります。

艦長、くれぐれも気をつけられてください」

数か月以上の付き合いで、イーベルハルトの信頼が厚い砲雷長は彼の指示に頷いた。

「そうですね、砲雷長                    どうやらこのレーヴァティンの初戦の相手は彼らのようです」

エーベルハルトが向いた先に、本部から帰還したエリアス副長とゴルト機関士長の姿があった。

「魚は釣れましたか？」

「ええ、思ったより大きなものが釣れました。よろしければご馳走しましょうか？」

「いえ、結構です。艦長と違い、これでも結構多忙なものですから……」

心を刺激する嫌味を、クスリと軽く笑い受け流すエーベルハルト。

「それは大変ですね……でも大丈夫ですよ」

その時、エーベルハルトの声色微かに変わったのに、エリアスは気付いた。

まるで金管楽器のように美しい音色から、研ぎ澄まされたサーベルのような金属音へと変貌したかのようだった。

「やがて、暇になりますから」

「……ッ!？」

「副長？」

「な、何でもない……行くぞ!」

言い知れぬ恐怖を感じたエリアスは、エーベルハルトから急いで遠ざかるようにその場を後にした。

出港前の艦船……その中でも、また一つの戦いが始まるうとしていた。

## 第十一話 それぞれの出会い（後書き）

次回こそ、99%カリフォルニア基地に行けるはず

そして、お披露目からなかなか活躍なんてしなかった彼女も出てくるはず・・・です

感想・評価、エーベルハルトへのファンレター（笑）

お待ちしております

（後者は無視してください・・・ん？ な、何をしてお前らああああ・・・）

カリフォルニアへと到達したフレイスベルグを待ち受けていたのは、不気味な影と幾重もの理不尽な現実。

そして、空と海から暴風が訪れる・・・

次回 第十二話「嵐が呼んだ暴風（後編）」

第十二話 嵐が呼んだ暴風（後編）（前書き）

長い、長すぎるわッ！！

でも読者の皆様の期待を裏切らないように、

今回でかならず を！！

というわけで、長くなりましたがご了承ください

## 第十二話 嵐が呼んだ暴風（後編）

翌朝、延々と続くように感じていたコバルトブルーの旅路は、ここへ来てようやくやくしばしの終わりへと至った。

米海軍基地の近くに到達し、基地との交信を取りながら指定されたスポットへと艦を持って行く。

大部明るくはなり始めたが、海軍基地はちょうど日陰、おまけにカイト達にとって日光が逆光となるため

上手く海軍基地を視認できないでいた。

すると・・・朝日が町並みの遠くに見える山から昇り、目的地にしていたカリフォルニア、サンディエゴ基地が徐々に見え始める。

「これは・・・」

思わずカイトは感嘆の言葉を漏らした。

スーパーキャリアーの空母に浮かぶ城、戦艦も数えきれんばかりにある。

目の前には総勢百近くにも上る艦艇で辺りの海域を支配する、アメリカ太平洋艦隊の堂々たる偉容。

あちこちに設けられた砲台陣地や対空砲、さらには航空機発着用の滑走路といった施設までを備えている。

基地というより、それはもう要塞に近いものであった。

「58番ドックに入渠、フリースベルグ、オーバー」

通信士が受信した内容をカイトに告げ、それを元に彼は操艦手的に確な指示を出していく。

ハワイで一足先に王国派首脳達が尽力してくれた事もあり、とりあえず燃料と必要物資の供給は

アメリカ側のまずまずの厚意によって満たされることとなった。

ただし、武器の補給に関しては無いと言う事になった。

というより、最新鋭艦フリースベルグの機密保持や外交上の友好度

合が良でも悪でもない国から

武器調達を行うのは政治的に少し問題がある　　そういつた背景から、むしろこちらが断つたに近いものだ。

しかし現にフリースベルグには多数の予備弾薬、それと交戦で使用した弾薬の少なさ。

さらに、きんぼうに至っては一発たりとも機銃弾を撃っていないと言ふ事で、同盟国イギリスまで

充分持つのではないだろうかという結論に至つたのだ。

『フリースベルグ、タグボートを向かわせます。機関を停止したら知らせてください』

港湾のちようど中央まで微速で進んだ時、ベースコントロールから無線が入る。

「こちらフリースベルグ、タグボートは要りません。自力で入渠できます」

フリースベルグは艦首の艦底部に横方向に推進力を得るためのスクリュー、

“バウスラスト”が装備されている。

そのため、真横への移動も可能であり自力での接岸や入渠が可能なのだ。

指定されたドック内には、水泡をたてながら真横に移動する艦を目をパチクリさせながら佇む米海軍の多数の水兵たち。

そんな彼等に向けて、ドック内へとゆっくりと移動するフリースベルグから多数のロープが投げ降ろされる。

そのロープを見て我に返つた水兵たちが、掛け声とともに艦を手繰り寄せるようにロープを引く。

最後に船体を傷つけないように、艦と埠頭壁の間に緩衝材を挟み込む。

こうして、フリースベルグの接岸および係留が完了した。

「艦長接岸完了しました。」

「よし、では私たちはバリストン中佐達とともに、ここの基地司令殿との面会に向かうとしよう。」

整備班は艦の損傷個所の修理、それ以外の者は整備班を手伝うように。」

「了解しました、それでは行ってらっしゃいませ」

船務長がカイトにリナそしてバンの三人に敬礼を送って見送る。

途中、艦内中央の第2大会議室に立ち寄った。

既にバリストン中佐をはじめ、多くの米海軍水兵たちが下船のための準備を終えていた。

「バリストン中佐・・・我々の準備は整いましたが」

「あ、ああ。しかし、この艦ともお別れか・・・君にもいろいろと世話になったな、トライトン艦長」

バリストン中佐が握手を求めてきたので、カイトもそれに応じて固い握手を交わした。

「ありがとう、無事に祖国に帰してくれて」

「いいえ、中佐もお元気で・・・それでは行きましょうか」

アラスカ沖で合流して以来半月以上を共に過ごしていたバリストン中佐達。

彼らを伴って下船し、白一色の埠頭を歩き一度曲がると向こうに米海軍服を着た一団が目に入った。

カイト達もそして米海軍の士官達も立ち止まり、しばしの沈黙ののち双方の間に海風が流れる。

その沈黙を破ったのは、姿勢を正し敬礼をしたカイトだった。

「ウィルキア王国海軍第11近衛艦隊旗艦フレーズベルグ艦長、カイト・トライトンです」

「同じく副長、リナ・スワロー」

「同じく砲雷長の、バン・トライトンです」

すると、あちらの一団の中から一人の女性が前に出てカイト達を敬礼を以て迎えた。

「この度は、我が海軍士官の救助、ならびにサンフランシスコ港湾

への日本海軍の攻撃阻止に御尽力頂き、まことに感謝します。

申し遅れました、私、米海軍サンディエゴ基地副司令、フォレストル級空母5番艦アトランティス艦長、セシリア・クリスター、よろしく」

柔らかな笑みを浮かべた彼女の、アメリカ人にしては珍しい長い黒髪から肩章がチラリと顔を覗かせた。

黄金の四本線に五画星、さしずめ彼女はクリスター大佐というところだ。

アメリカとわが国では階級が共通でないため少しばかり違う点があるのだが、

それでも彼女がカイトよりも上級の佐官であることは事実だった。

「こちらこそ、この度の受け入れ体勢に深く感謝します」

「こんなに艦があるんだもの、二隻くらいどうってこともないですよ。そちらはバリストン中佐、でしたよね？」

「は、はっ。アラスカ基地所属中佐、マーク・バリストン、以下巡洋艦テキサスのクルーであります」

美人を前にしたせいかわ、それとも上級の相手であるためか、またはどちらともか・・・

バリストン中佐の低音さが響く声が妙に上ずっており、緊張しているようだ。

「艦は沈んでしまったけど、貴方達の命があって何よりよ。クラウド、彼らを隊舎まで連れて行って」

セシリアが横に連れていた眼鏡の男性へ声をかけると、彼は彼女の横に出てそれに答えた。

「了解しました、クリスター艦長。では中佐、こちらへ・・・」  
クラウドと呼ばれた男性士官にバリストン中佐達は伴われて、海軍基地の隊舎へと案内されていった。

「今のは私の副官で同じく空母アトランティスの副長、クラウド・バルフォア。

本隊との合流までしばらく滞在するなら、後で彼に基地内の設備

とかを教えてもらつと良いわ」

「はっ、ありがとうございます。・・・しかし、本当にものすごい数の艦ですね。」

これだけでも、十分に敵を威圧する事が出来るでしょう。我々のような少数艦隊では、考えられない事です」

セシリアと並列で歩きながら、カイトは港湾に並ぶ艦艇の威容を改めて感じる。

「ふふっ、それはやっぱりここがアメリカ太平洋艦隊の中心だから・・・昔から軍つて、

自分達を大きく見せたり、強く見せたりするのも大事つて言つじやない？」

「それは軍に限らず、我々人間・・・いや、どの生物でも同じでしょう」

「そうかもしれないわね・・・でも」

戦艦などが並んで停泊する埠頭を見つめ、彼女が一瞬見せた表情は少し物哀しそうな笑みだった。

「物量の神話にも、限界はあるのよ。私は、ある意味貴方達やドイツが羨ましいわ」

「・・・どう言つ意味です？」

「さあね」

その問いは、見事に風に巻かれてしまった・・・。

その頃、バクスター長官は兵士が交代で見張りに立っている部屋の前を訪れていた。

部屋を開けると、そこには捕虜としてフレースベルグが捕えた人物。胡麻をばら撒いたような不精ひげを生やしつつも、空を飛び交う猛禽としての精悍な顔つきは全く損なわれていない。

「君とこうして会うのは、これが初めてだろう。ウィルキア王国海軍第11近衛艦隊提督、

ジェラルド・バクスターだ。わだかまりとかあるかもしれんが、とりあえず……」

「……」

寝そべっている松原はバクスター長官が手を差し伸べても、最初は動く気配がなかった。

「……駄目かね？ やはり、信条が許さないかね？」

「……いや、失礼しました提督殿。少しばかり驚いただけでして」  
先の戦闘での唯一の生存者、松原 信哉はガツチリと彼の手を取り握手を交わした。

「驚いた？ 苦痛を伴う尋問でもされると思ったかね？」

「少し……その時は舌を噛み切るなりで、潔く死んでやりましようと思っていました」

「そう言えば、君の名前を聞いて無かったな」

「松原……松原 信哉です」

「ミスターマツバラ、君は少し勘違いをしているぞ」

「え？」

「本当に腕の立つ者が尋問を行うと、捕虜に決して苦痛を与えることなく、

捕虜が自ずと情報を吐きたくなくなるようになるそうさ。幸いこの艦、フリースベルグにはそんな奴はいないがね」

長官が彼のベッドの隣に腰掛けると、信哉は士官室の壁から天井、そしてその反対側の壁をグルリと見渡す。

「フリースベルグ……と言うんですね、この艦は」

「ああ、そうさ」

「あの攻撃……アレは誘導弾では無いですか？」

先の戦闘で自分達の部隊を壊滅させたフリースベルグの攻撃について、信哉は言及した。

「知っていたのかね？」

「ええまあ、その誘導弾を搭載した巡洋艦が建艦される予定だと言ったのを聞いた事があったので」

長官は彼の言うその艦が自分達と隣接するドックに入渠した、きんぼうの事であると気付いた。しかしだからと言って『あの艦もこちらの味方になった、君も協力しろ』とは、

単刀直入すぎる言葉を言う事は出来なかった。

それに、決定的な違いもある。

きんぼうのクルーは、ウィルキア帝国に飲み込まれる前に自らの意思で日本海軍を離脱して合流に至った。

しかし、信哉はウィルキア帝国の傀儡となった日本海軍の命令を受けてフレースベルグを攻撃してきた。

つまり、彼はウィルキア帝国傘下の軍人であると言う事になる。

もっとも、彼自身それを重々承知で攻撃を仕掛けてきたとは思えない。

あの突撃は、自機を犠牲にして他の仲間を守ると言う意志から行われたものだ。

「ならば、なぜ『撤退しましょう』と隊長に進言しなかった？ 初弾で気づいていたのならば、

彼らの犠牲はもっと少なく済んだはずだ」

「生憎あの隊長は数日前に変わったばかりの、歳ばかりで腕はひよこ並のオッサンだった。

そんなオッサンに、『高射砲が我々を追いかけてきます。我々では敵いません』と言っても、

絶対に分からなかっただろう・・・だから、俺はアイツが決断を下すまでの時間を稼ぐために

この艦に脱出後の体当たり攻撃を仕掛けた、それが俺の正義だったからです。」

ふくむ、と軽く唸ると長官は腕を組んで何かを考え始めたようだった。

「正義か・・・しかし、正義というものは見方によって全く異なる。ある者は勇猛な行為ととり、ある者は悪意ととる。」

国や民族、さらには時間によって・・・正義と言う物は形を大きく変えていく。私が嫌いな言葉、ベスト5の入る物だ」

とは言うものの別段怒っているわけでもなく、長官が彼を見据える。軍人とは、国の威信、プライド、それらを一寸の汚れもない正義と教え込まれる筈の兵士や士官。

信哉自身、自分もその一つにすぎないと考えていた。

しかし、だとするとこの老人は一体何なのだろうか・・・

統一の思想に染まっていない、これが近衛艦隊の提督なのか・・・？

「さてもうこんな時間か、ここで少し真面目な話をしよう松原君」

バクスター長官が向き直り、それに合わせて信哉も思わず姿勢を正した。

「これから君には、二つの選択肢がある。日本へと帰るか、我々と共にヴァイセンベルガーの手から君の祖国を解放する戦いに身を投ずるか。

私は思うが、ヴァイセンベルガーの言っている事は100%間違いとは思えない。それ故、彼の意志に賛同する者が少なからずいても不思議では無い。もし君が彼の意志に賛同するのであれば、それは構わない。君がまた戦闘機を駆って我々の前に現れた時、

その時はお互いに戦い合うまでだ」

膝元に置いていた軍帽を長官はかぶると、スツと立ち上がり彼の方を向く。

「ハワイから解放軍の本隊が予定ではあと5日後に到着する。合流次第我々は同盟国イギリスへと向かう。」

その時まで、どうするか決めておきたまえ」

それだけを言い残し、長官はその場を後にした。

いつもならガチャツと施錠する音が聞こえるタイミングに、扉越しにバクスター長官の声が聞こえた。

「それは、もういいだろう・・・」

カツカツカツと靴が廊下の床を叩く音が徐々に遠ざかっていく。不意に、信哉は心細さに襲われた。

これは一体何だ・・・？  
たった十分程度話した相手、なのになぜこれ程までに・・・！？  
スウウ〜とタバコの煙でも吐くように息を吐くと、彼はまたベッド  
へと寝そべった。  
「考えてもしよ〜がない・・・寝るか」

少し薄暗い部屋には幾つものモニターやランプがたくさん光って  
いた。

照明はほとんど点灯していないに等しいのに、これだけの明るさ  
があるのには少しばかり驚いた。

外も中も、本当に要塞のようだった。

「少し、待っててちょうだい」

そう言うと、セシリアは大画面モニターの前に座る一人の男の側  
へと詰め寄った。

「司令、トライトン艦長以下ウィルキア海軍第11近衛艦隊旗艦の  
副長、砲雷長をお連れしました」

「クリスター、後でしろと言ったであろう！ それになぜ此処に連  
れてくる？機密が漏れいしたらどうするんだね！？」

「司令！それは失礼にあたるかと申し上げました。それに・・・ここ  
にいると聞いたものですから！」

いきなり司令らしき中年男とセシリアが険悪なムードになり、カイ  
ト達は一瞬たじろいだ。

「今忙しいのだ！ 東洋の小国の客将くらい、外で待たせておけ！  
！」

実際アメリカ人の中にはそういう風に思っている人もいるだろうと  
予想した事は、  
ヴァイセンベルガーの演説時然り幾度となくあった。

しかしそれを生で聞いた瞬間、流石にカイトですら腹の底に沸騰す  
る何か程度は出てくる。

バンに至つては『なんだとこの野郎』と小声で怒鳴りながら、そのままズンズンと歩いてあの司令を殴つてしましそうだつた。そうならない為にも、カイトの右腕が彼の左肩をガシツと掴んでいた。

だが、我々の気持ちをしりやがダイレクトに代弁した。

「司令！言葉が過ぎますッ！！ 彼らがいなければ、サンフランシスコの軍施設や人々に被害が出ていた

その事をお忘れになつたのですか!？」

司令と副司令という立場の格差があるにも関わらず、セシリアも負けじと猛反駁する。

「黙れいっ！！ クリスター、いくらお前にメキシコ紛争時の大きな実績があつたとしてもこの司令は私だ！

それに今忙しいのは事実なのだ！ ハワイへ救援と偵察を目的として向かわせた艦隊からの通信が途絶えたんだ！」

「なっ……！」

「……またハワイ基地陥落時と同じだ。 巨大な艦、そして謎のノイズ、そういう報告が来たと思つたらもうコレだ！」

インカムを悔しそうに床に叩きつける司令。

セシリアが見上げるモニターには、通信途絶を意味する“Comm unication Disrupt”の文字があつた。

「戦艦2隻に空母1隻、巡洋艦2隻、駆逐艦3隻 それが一瞬でやられたと言つのはまさか」

暫くの後、ずっと佇んでいたカイト達のもとにセシリアが帰つた来た。

「盗み聞きしたようで悪いですが、ハワイ基地が陥落したと聞こえましたか？」

「その事も含めて、申し訳ないけど外で話をしましょう」

本来ならもう少し留まる予定だつた基地司令部を後にする。

外に出ると陽気な日差しの下を沢山の海兵たちやトラックが、忙しそうに駆けまわっていた。

「実は、今から一週間ほど前にアメリカ太平洋艦隊のもう一つの中心地である、ハワイ基地が陥落したらしいのよ」

「なんですって！ それじゃ、国王陛下」

「大丈夫、ウイルクア近衛海軍の本隊は、無事に脱出したと聞いているわ」

「そうですか。それは良かった・・・」

それを聞いて一瞬安堵するが、少し身の毛のよだつ事を思い出した。ハワイと言えばカリフォルニアに比べて規模こそ小さいものの、米太平洋艦隊の一角を担う程の軍港がある。

それが一瞬で壊滅させられたとなると　この基地だって。

「敵は・・・やはり？」

「ええ。急襲の一時間前、ウイルクア帝国の名で、正式に宣戦布告があったわ。」

再三にわたって、こちらがウイルクア国王を始めとした首脳たちの身柄の引き渡しに応じなかった。

その報復として、遺憾ながら武力行使を行う、とね」

「ついに、始まったんですね」

カイトは後ろでバンが拳を握り締めたのが分かった。

これからは、やはり同国人同士の戦いになるのだろうか・・・？

「同民族である貴方達は辛いでしょうけど、私たちはアメリカ海軍としてウイルクア帝国を敵と認識して戦わなければならない」

「いえ、むしろ我々が戦わなくてはなりません」

覚悟を秘めたカイトの言葉に、セシリアが少し動揺を浮かべる。

「で、でも敵は貴方達のかつての仲間、親友や兄弟かもしれないのよ？ それを、撃てるの！？」

「だからこそ、我々が撃たなくてはならないんです。敵が誰なのかを知っているからこそ。」

「同国人だからこそ、止めなくてはならない」

「そっか・・・なら、大丈夫ね」

安心したといった表情のセシリア。

「あ、それでね・・・そのハワイがそんなに簡単に壊滅するとは思えないし、仮にそうだとしたならば

私たちの常識を覆す何かがあるって言う事。それを確かめさせるために、一個艦隊を向かわせたのだけど・・・」

「やられた・・・のですか？」

「一個艦隊がそんな簡単に？ 我々と同じくらいの規模の艦隊が？ シェルドハーフェン級航空戦艦2隻に巡洋艦数隻、そしてフレースベルグ。」

するとリナの言っている事だが、正規空母があるだけ、まだハワイに向かったと言うその艦隊の方が規模は上かもしれない。

4人を沈黙が包んでいると、遠くからバリストン中佐達を隊舎へと案内したセシリアの副官クラードが戻ってきた。

「艦長、バリストン中佐一行の案内を終わりました」

「御苦労さま、クラード。休んで良いわって言いたいけれど、今度は彼らの事を頼める？」

私、一回アトランティスに戻ってみるわ」

申し訳なさそうにセシリアが、カイト達の事をクラードに依頼する。

「なんか・・・お姫様と執事って感じが　グフツ！！？」

言い終わる前にカイトの肘鉄がバンの鳩尾を直撃していた。

「了解です、艦長。ではトライトン艦長に副官の方々、どうぞこちらへ」

クラードに伴われてカイト達が行こうとするが、バンだけは未だに動けずにいた。

「ほら副官2号、さっさと来ないか」

「俺は2号か！　ってそうだな、順列的に・・・」

カイトとバンのやり取りをみて、セシリアはじゃれる子供達を見守る母親のようにクスツと笑いをこぼした。

自身が艦長として乗務する艦アトランティスへと向かおうとしたそ

の時、彼女は少し先に停泊している空母の  
右舷エレベーターから誰かが泣き叫ぶ声が聞こえるのを感じた。

泣き叫んでいるのはセシリアのような女性士官でなく、姿形こそ  
人と同じ海戦の女神たち“艦魂”。

良く見ると、その空母艦魂の少女の周りには彼女を慰めに来た多数  
の仲間達がいた。

ひたすらに姉の名を叫んでは、周りの手を振り払おうとする少女。  
その大型空母艦魂の少女の姉は、数時間前にハワイ近海で消息を絶  
つていたのだった・・・。

「オイ！ いつまでメソメソしてんだ！ 退役間際の奴が、戦いで  
死ねたら本望じゃねえのかよ！」

「ひ、酷いです！ ゲティスバーグ司令！！」

「いつもそうだけど、今回くらいは彼女の気持ちになってみてくだ  
さい！！ 絶対にそう言う事は言えな」

「うるせええっ！！！！ てめえら格下が俺に指図してんじゃねえよ  
！！！！」

「・・・なんだ、その目は、反抗的な態度はよ！」

「くっ・・・」

周りにいた駆逐艦クラスの艦魂達は、上官に当たる戦艦の艦魂であ  
るゲティスバーグを睨むしかできない。

「やるなら来いよ！ もれなく懲罰の対象にしてやるがよ！！」

「ッ  
」

巡洋艦や駆逐艦の少女たちが黙り込んでしまった時・・・

彼女達はゲティスバーグの後ろに立つ凜とした少女の存在に気付い  
た。

「それじゃ、同格の私ならどうなるのかしら？ ゲティス」

「お、おま　　グハッッ！！」

言い終わるより早く少女の拳がゲティスの顔面にめり込み、甲板の  
上に投げ出されるように飛ばされた。

「それが司令の言うセリフ？　いくらなんでも、不謹慎すぎるんじゃない？」

「ア、アトランティス司令　　！」

「ラン司令だ　　」

周りの少女たちが口々に呟く中、一瞬で無様な姿を晒されたゲティスが立ち上がる。

「ラン　　てめえと叫びたならあああつ！！！」

鼻血を出したままのゲティスがランに飛びかかるが、ランは咄嗟に横に避ける。

そしてゲティスの足を引つ掛けると、そのまま背中を押しこんで彼女を転倒させた。

「それはこっちのセリフよ！　　錨にでもつかまって、海水で頭冷やしてきたらどうなの！？」

「チツ　　覚えてろよツ！！」

悔しそうに吐き捨てるとゲティスは姿を消した。おそらく、自分の艦へ戻っていったのだろう。

「ラン司令　　助かりました」

ホツとしたような笑みを少女達はランへと向ける。

「良いのよ　　私にとってみれば、当り前の事だから。彼女　　まだ？」

「ハイ、みんなで慰めてはいるんですが・・・ずっとお姉さんと一緒だったこともあって、まだ・・・」

「そう・・・悪いけど、頼めるかしら？」

「ハイ、なんとかしてみます」

それを聞いて少し悲しそうな笑みで軽く頷くと、ランも自艦である空母アトランティスへと戻っていった。

まだ・・・時間が必要だった。

出会いがあり、別れがあり　　涙が海へと落つ。

今日もまた、陽がサンディエゴに沈む

その方角から近衛艦隊と、そして誰にも気づかれずに巨大な影が忍び寄り始めていた。

同日夕暮れ、ハワイ諸島より北東500kmの海上

また運良く逃げ伸びる事が出来た　　あんまり喜ばしい事では無い。

しかし、このすっかり馴染みになったメンバーの皆が無事であると言ふ事は艦長としても喜ばしい。

何より　　次がある事に感謝しよう。

そつえば、それは友人でもありライバルでもあつた彼の台詞だった。

今はサンディエゴへ我々より一足先に辿り着いているであろう彼も、沈みゆく夕陽を眺めているのだろうか？

その夕陽を背にするように、我々は一路カリフォルニアのサンディエゴへと向かう。

「……長……艦長！」

不意に自分をしきりに呼ぶ声がしたようだった。

いや、厳密には少し前からなされていたらしい。

「ん、ああすまない。　ナギ少尉、何か新情報が入つたのか？」

「入つたも何も……この先の海域で戦闘です！」

不満さと焦りが混じつたように彼女はきつぱりと答えた。

「どこの所属か、確認できるか？」

「情報によると、ヴァイセンベルガー率いる国防軍と米海軍の模様です。」

米海軍はその戦力の既に半数を消失、壊滅は時間の問題と思われるます」

シウルツは前方に広がるオレンジの大洋を見つめ、軍帽を被り直し

た。

「敵艦と米海軍の編成はどうか？」

「敵艦隊は駆逐艦、巡洋艦で構成された水雷戦部隊、米海軍は戦艦、空母で編成された艦隊です」

状況を察するにハワイを脱出した米艦隊の状況は、あまり思わしいものでは無いらしい。

「なるほど、確かに懐に入りこまれたならば、戦艦よりも水雷戦主体の艦艇の方が優る。」

このまま進み続けて本隊の艦艇に被害が出てはいけない・・・

よし、我々は先行しよう。全速前進、敵水雷部隊に攻撃を敢行する！ 総員、警戒態勢！」

そうだ、我々は一刻も早く伝えなくてはならない。

第11近衛艦隊に、カイトに ヴァイセンベルガーの確固たる力が何であるのかを・・・！  
ハワイを襲った巨大な怪物艦の容姿が、シユルツの脳裏を何度もよぎった。

それやその類のモノがもし、サンディエゴに現れたとしたら

これ以上はもう考えたくは無かった。

何にせよ、今は目の前の敵に集中 シユルツは自身にそう言い聞かせてアレの事を思い出すまいとしていた。

サンディエゴの3日間が、何もなく過ぎた

実際には軍港を行きかう人や艦はせわしく動いて、出て行く艦や新しく入港する艦などもあった。

しかし、そんなこと米海軍でない我々にとってみれば蚊帳の外の出来事ではない。

これがシュヴァンブルグの母港であったならば、兵員は訓練に幹部はペーパー作業や艦内の執務等といった管理。

そして、その後は上下の階級入り乱れての飲み会と言う事もあった。しかしここはウィルキアでもない為、別段職務が与えられているわけでもなく、

また苦行の後の美酒に酔いしれる事もない。

つまりウィルキア海軍の我々にとってみれば総じて、酷く皆暇だったと言う事だ。

だが、おかげでフリースベルグの修理は全て完了していた。

そう考えると、暇では無かった整備班の連中もいるのだが・・・彼らは彼らで大好きな機械いじりが功を奏して今に至るメンバーも多い。

「忙しいけど・・・楽しいです！」

と言っていたのを聞いたと、後部SPYレーダーの具合を見に行つたバンが聞いたらしい。

ついでに彼は、艦体の各部が修理されていくにつれて・・・

「お？ 治つた〜！」

と一人で叫びながら包帯やら絆創膏やらを剥がしていくフリースを見たとの事だった。

そう言えば彼女は、ほんの一時間前に「治りました。良かったです〜！」と、フリースが整備班や我々に感謝の言葉を言って回っていた。

すると、通信士からの呼び出しでほのぼのとした空気から一気に呼び戻された。

「艦長！ サンデイエゴ司令部より、出頭要請です」

「出頭要請・・・要は呼び出しと言う訳か？」

「はい。副長と砲雷長も来られたし、との事です」

不安なまま三人とも顔を見合わせる。

かくして20分後には我々は初日とは別の、軍人には不要に思える家具やインテリアが置かれた司令官室へと招かれていた。

「なんですって!?! 我々に指揮下に入れ、そうおっしゃりたい訳ですか!?!」

だがほんの数秒後には、3人の中に怒りが渦巻いていた。

「指揮下では無い、保護下だ。明日には君達第1艦隊の本隊と、ウイルキア国王乗艦の近衛艦隊旗艦イダヴァル他、十隻程の

艦艇がこちらへ到着すると聞いている。彼らと合流後、貴艦らには帝国反攻作戦に参加してもらいたい」

「しかし独自の行動及び攻撃決定権がない事や、補給に艦隊司令の許可がいること

それだけを聞く限り保護下というのは、指揮下の単なる美称ではありませんか?」

「それでは貴官は・・・」

いやらしい笑みを浮かべた基地司令、またあの時のようだ。

「単独でウイルキアを取り戻せると思っっているのかね?」

我々を頼ってここサンディエゴに辿り着いたのは、一体どこの誰だね!?!」

「それは」

流石のカイトも、それに言い返す言葉は無かった。

「独自行動権がないと言う事は、一定期間の間ですか?」

我々は次に国王陛下乗艦されているイダヴァルと共に、イギリスへと向かう予定なのです。

2日程度の一定期間ならともかく、そのような御命令は本隊の意向に反します」

リナが相手のあげ足を取るように、的確にその部分をついたはずだった。

「行く必要は無い!」

その一言に一蹴されたばかりでなく、彼は本隊の意向　つまりウイルキア国王の意向を蔑ないがしろにしたのだ。

「なッ　!」

「待って下さい!　同盟国イギリスへと針路を取る　それは本

隊、つまり国王陛下の御意向でもあるのです！

それを貴方は、“行く必要が無い！”とはどういう事ですか！？  
貴方にそのような権限が

「ホワイトハウスからの命令なのだッ！」

カイトの滅多に見せない怒りを込めた抗議を撥ね退けたのは、超上位コマンドの名前だった。

（ホワイトハウス 合衆国大統領が・・・！？）

「それにここはウिल्キアでは無い。ここはアメリカ、米太平洋艦隊の中心港サンディエゴだ。」

ここで勝手なことをされても困るのだよ」

「だったら尚更、我々がイギリスへ行ってしまえば良い話ではないですか！

しかしそれでも保護下に置きたがるのは、何が目的ですか？

・祖国解放の悲願が叶えば、見返りをウिल्キアへ請求する、

そういう魂胆だろう！そうやってまた、人の悲しみを利用してどんどん大きくなっていくつもりか、この国は！！」

「い、いい加減に黙らんか！！」

「艦・・・長・・・」

リナは彼女自身見た事の無い彼の気迫に、圧倒されて思わずたじろぐ。

バンも負けじと、もし乱闘にでもなるうものならスグにでも飛びこめるように構えていた。

だが、そうはならないようにカイトはちゃんとセーブをかけた。

「・・・分かりました、いくら言葉で言っても分からないなら、それは諦めましょう。」

確かに我々は合衆国に恩がある だからそれを仇で返すこと

は決してしません。

御命令に従いましょう、司令殿」

降伏宣言を聞いたかのように、司令官も元の椅子にどっかりと座りこむ。

「ふんっ、まったく最初からそう言っていれば良い物を」

「ですが、司令殿」

部屋を後にする直前、カイトは後ろ目で彼を見据える。

「了承したのはフリースベルグの全クルーのみです。これはウィルキア近衛艦隊本隊の了承ではありません。」

もし国王陛下から御命令があれば、我々は例え誰に砲塔を向けられようが

ホワイトハウスの命令よりもウィルキア近衛艦隊の命令を第一に優先します。それを、お忘れなく」

カイト自身無意識のまま、ガチャッと司令官の部屋のドアをほんの少し荒く閉めたように思えた。

「ぬうう、青二才が　又ケ又ケと！」

カツンツとドアに何かが当たる音が少し歩いた先の廊下のカイトの耳にしつかり聞こえた。

大かた卓上のペンでも投げつけたのだらうとカイトは考えた。

だが、投げつけたのがペンでも花瓶でも、有名画家の絵だらうがどうでも良かった。

ウィルキア王国海軍としての何物にも代えがたい誇り、それに対してNOを投げつけられたのだから

頭の中で、彼と正反対とも言える副司令の彼女　セシリアが何度も謝っている姿が浮かんだ。

「ん？」

隊舎の地下にある防空司令部。

レーダースクリーンなど、空の目は年中無休24時間営業中だ。

その南側の一角を監視するレーダースクリーンが、航空機と思わしき反応を捉えた。

「どうした？」

「いや、まさかね　多分故障か、ノイズだな」

レーダーノイズと言うのは、レーダースクリーンに良く発生する現

象で、稀に光点となって

レーダースクリーン上に現れる事もあった。

それは高性能のレーダーになればなるほど多くなり、スクリーンを監視する人の目には選別の能力が必要とされた。

「いや、一瞬現れたけど消えました。それにしても、あんな大きな反応見たこと」

ポーンという音が聞こえ、またしても光点となって何かがレーダー上に出現する。

それを見て防空司令部の面々は言葉を失った。

いつもなら、本当に小さい点　　大きくてもマカダミアナッツくらいの大きさの光点となって現れる筈だ。

しかしその時現れたその点は、異常なほど大きかった。

「なんだ、これは・・・故障・・・だよ・・・な？」

故障だよと言うより、誰もが故障以外の結末を望まない。

光点の大きさはソフトボールくらいの大きさになっていた。

「レーダースクリーンの影から、時速2000km、翼長の推定

500mを超えます！」

「500mだつて!!!? B-52の10倍以上の大きさじゃないか!!!　それに、そんな超高速の航空機など」

防空司令部にかつてない緊張が走る。

正体のわからないものに対する恐れが、その場を全て支配する。

「その後方から、多数の航空機の反応!　SIF応答、ありません

!!!」

「た、ただちに全部隊に通達!　空襲警報!」

誰かが叫んだ　　だがもう遅すぎた。

それはフリースベルグに帰るため、居心地の悪すぎる基地司令部を後にしている最中だった。

「頭に来る　　まったく!!!」

バンは先程から、何度壁や床を蹴るなりしていたことだろうか。

「バン抑える 仕方ない事だ」

「っていう艦長も、さっきはああだったじゃないですか？」

「ん・・・ま、まあ・・・そうだが」

恥ずかしそうにカイトが思わず顔を俯かせる。

「でも・・・」

突然リナが立ち止まる。

言い出しにくい何かを話そうとしているようだった。

「あの時の艦長・・・私は・・・その・・・」

先程の自分のように今度はほんのり頬を赤めたりナが、俯き加減に何かを言いたげだった。

続きが気になるほど間の空いた彼女のセリフは、突如けたたましく響いたサイレンによってかき消された。

『空襲警報発令！ 空襲警報発令！』

「な、なに！？」

『総員、空襲に備えよ！ 高速の国籍不明機40機、それと一機の・・・超・・・大型機？』

いや、こつちに聞くなよと思わず突っ込みたかったが、そんな悠長なことを考えている暇では無かった。

裏を返せば、それほど防空司令部は混乱していると言う事だ。

一体彼らは、何を見たのだろうか

すると突然、港の一角にパツとオレンジの光が差し込んだ。

それは紛れもなく、観たくない花火 爆炎だった。

誰が、こんな始まり方を予測しただろうか

いや、奇襲と言う物はそう言うものだ。

だが・・・あれは、一体なんだ！？

司令部の建物から飛び出した時に目にしたのは、悠然と大空を飛び廻る鋼鉄の鳥。

巨体とうたわれるB-52爆撃機でさえ霞んで見えるような大きさ

の航空機から、地上の米海軍  
基地へと向けて夕立の激しい雨のように多数の爆弾や砲弾をまき散  
らす。

『警報！警報！ 総員に告ぐ！これは演習ではない！繰り返す、こ  
れは演習では無い！』

「分かっている！高射砲隊、前に出るおッ！ うわああああああ  
っっ！！！」

『ベースコマンド！ 司令部、応答せよっ！！ っクソッ、  
だれが指揮を取ってるんだ！！？』

また一つ、また一つと地上に火球が膨れては火炎が舞い上がる。

誰かがやられればやられるほど、米海軍基地の兵士や部隊に混迷が  
生まれてくる。

その混迷が兵士達を狂気の中に叩き落とす

そしてあの巨大爆撃機は、それを見て楽しむかのように舞っている。  
まさか、アレがヴァイセンベルガーの言った“確固たる力”なの  
か！？

「リナ、バン・・・無事か！？」

「はい！ ですが、艦は・・・」

カイトが振り返ると、フリースベルグが停泊しているドックからは  
煙は上がっていない。

「まだ大丈夫だ！ 急ごう！」

「ああ、艦はまだ傷ついていない！」

基地のあちこちに熱風が吹き荒れる中、カイト達の隊舎は無事であ  
った。

だが、グズグズしていればいずれ焼き払われる。

カイト達がまさに駆けだしたその時だ

ヒュルルルルルルル

「危ない、伏せる！」

音が止んだと思った瞬間、それまでいた司令部の屋根が吹き飛び辺  
りにコンクリートなどを吹き飛ばす。

「きゃああつっ!!!」

反射的にカイトは隣にいたリナを抱え込むように地面に飛び込んだ。

「危なかったな、大丈夫か？」

「はい、なんとか・・・」

「ふう・・・兄さん、もう少し出るのが遅れていれば・・・」

「ああ、あのコンクリートと運命を共にしていただろうな」

おそらく、この様子じゃあの最上階にいた司令官は・・・

上を見上げると、ちょうどあの巨大爆撃機がジェット排気を大気中に靡かせて通り過ぎた後だった。

「よし、今だ！」

紅蓮の炎を上げる隊舎を後に、三人はフリースベルグへと急いだ。

それは戦いの最中の混戦した無線であったかもしれないし、困惑した誰かの叫びだったかもしれない。

それで後に誰かが言った言葉　ああいう存在は、兵器を超えた兵器。

すなわち、アレは超兵器というものであると。

第十二話 嵐が呼んだ暴風（後編）（後書き）

読破お疲れ様でした

長すぎですね、書いてて思いました

なのにまだ前哨戦でも無いorz

次回はバトルメインでお送りしたいと誰よりも願っています（笑）

次回 第十三話 旋風止むべし（前編）



### 第十三話 旋風止むべし！（前編）

「！？ 始まった！」

カリフォルニア海軍基地へ三百キロと迫った海域を航行していた彼女は、すぐさまその異変に気付いた。

人を遥かに凌駕した視力が、その全てを捉える。

いつもなら漆黒の闇に塗りつぶされている筈の夜天が、禍々しくも鮮やかなオレンジ色に彩られている。

時々巻き起こる光の点滅 何かに米海軍基地が攻撃されている事は明らかだった。

その異変を、シエルは艦橋上部の旧防空指揮所からいち早く察知した。

「艦長！ サンディエゴ基地で敵襲です！ 敵の数は不明・・・ですが、見た事もない巨大爆撃機が

基地を攻撃しているとの情報もあります！」

「なんだと・・・？ 米海軍基地が？」

ブロード艦長の決断は早かった。

艦橋越しに遠くで燃え盛るサンディエゴ基地を一瞥した後、彼は口を開いた。

「機関全速、米海軍サンディエゴ基地へと向かう！ 総員戦闘配置ならびに対空警戒！」

米海軍ならびに先行している我が艦隊の僚艦の救助に向かう！」

「はっ！ 総員戦闘配置、レッドアラート発令！ 対空警戒！」

「全艦に通告！ 本艦に続き、サンディエゴ基地救援に向かえ！」

「艦長！ 僚艦ブローズグホーヴィより入電！」

通信士が入電した内容、それは彼等にとっては二度目となる遭遇を意味していた。

「当艦の左舷30kmを通過する高速の水上反応あり！ 警戒されまし！」

「カナダ東海岸の時の奴か！」

「おそろく！」

「くそつ　　こんな時に・・・いや、こんな時だからか。」

3、4、5番主砲塔に対艦用徹甲弾装填！　1、2番に対空焼夷散弾装填！奴は後方から来るはずだ　　！」

けたたましくサイレンが鳴りクルーが戦闘配置へと急ぐ中、依然シエルは展望台と化した旧防空指揮所にいた。

「今度は、私が勝つ　　」

そう呟き、彼女は自らの刀を握りしめた。

どうにか五体満足のままフリースベルグのドックへとたどり着いた。あちこちで巻き起こる爆発が、ドックの屋根や薄い外壁をギシギシと揺らす。

待ち構えていた整備長にカイトは話しかけた。

「もう動かせませぬ？」

「ええ、もちろんですよ。さあ早く、ブリッジへ！！」

カイトとリナすぐさま艦橋に、バンはCICへと向かおうとしたのだがその時カイトを呼びとめる声が聞こえた。

「艦長！大変です！　日本海軍の捕虜の姿がありません！」

「何！？　見ていなかったのか！」

「すみません。　爆音があちこちで聞こえてきたので、何事かと目を離れた際に・・・」

逃げてしまったか　　だが今探しに行くほどの余裕などは無い。

「居なくなってしまったなら仕方ない。　それより、事態は急を要する。フリースベルグ、緊急発進する！」

「りよ、了解しました！」

艦橋に到着すると、全員がライフジャケットとヘルメットを着用する。

カイトは艦長席、リナはモニターと艦橋コンソールという所定のポ

ジションにつく。

艦橋越しにはドックの出入渠口の限られた視界しかないので、地上施設や停泊していた艦艇がどんな状況なのかは俄かには想像しにくい。

だが頑丈な筈のフレースベルグの艦体を揺さぶるズシンという振動、そして幾つもの防水壁を貫通して聞こえる爆音が、

自分達にとって非常に好ましくない状況であることを教えてくれた。

「係留ロープ外せ！ 時間が掛かるようなら、切断しろ！ もたもたするな！」

船内や要人警護などに活躍する武装班の兵達が、フレースベルグとドックを繋ぐロープを外そうと格闘している。

加えて状況は混迷を極めている。

「ああっ、くそうっ！ こんなことなら、堅く縛っておくんじゃなかつた！」

係留した時にロープを結んだ船務士の一人が焦りを浮かべて独り言を呟いた。

「そこ！ まだ外せないのか！ なら仕方ない、切断しろ！」

「無理です！このロープ、内部にワイヤーがあります！ なまくらこんな鈍の斧じゃ切れませんよ！」

するとそれを聞きつけた武装班長が駆け付ける。

「どうした！？ 急がないとやられるぞ！！！」

「分かっています！ ですが、このロープ切ろうにも中にワイヤーが！！！」

「よし、ならばどけっ！！！」

船務士を強引にはねのけるようにどかすと、彼は懐から黒光りする拳銃を取り出した。

「そ、そんな無茶な！」

「無茶でも紅茶でも、やるしかないだろう！！ 危ないから離れておけ！！！」

周囲に注意を促した直後、パンツパンツと数発の銃弾をロープの結

び目に向けて放つ。

バシツという木の枝を折ったような音がしたと思ったら、結び目を失ったロープが千切れてスルスルと外れていった。

「ふうっ・・・艦長に伝える！ 係留ロープ、全て外しましたとな  
！」

奇襲の予想は出来なかった訳では無かった。

しかし、自分達がまるで赤子のようにあしらわれ次々と海の藻屑と変えていかれることだけは、

考えたくもなく、また認めたくもなかった。

だが、目の前で起きている状況はまさにそれだった。

だが、これ以上やらせないという意味のもと今数隻の艦が立ち上がろうとしている。

セシリアの指揮するアトランティスは、米海軍残存艦のその中核だった。

「状況を確認！」

「はい！ アトランティス出航準備完了！ 艦載機は現在発艦準備中です」

アトランティスの広々とした艦橋、セシリアの表情にも困惑が見て取れた。

奇襲を受けたことに加えて時折紅蓮の夜空を雄大に駆け抜ける巨大爆撃機の姿が、彼女にもアトランティス全体にも混乱を与えていた。

「総員、よく聞いて！ 敵はおそらくウィルキア帝国よ。ただ、

あの超大型の爆撃機の正体はいったい何なのか、私にも分からない。でも今、私たちが攻撃を受けていることだけは確かよ！ 日頃の

訓練の成果を、十二分に発揮できるように努めよ！

艦載機発艦準備急げ！ また本艦に接近する敵航空機や爆弾等は、シースパロー、CIWSで迎撃します！」

「イエス、マム！」

多数のAAMをマウントしたトムキャットがカタパルトから一気に弾き飛ばされていく。

しかし相手は対空対地両方に対応したF-15Eストライクイーグルで、性能差でかなり突き放されている。

だがそれに構うことなく、アトランティスから発艦した艦載機は果敢に敵攻撃機や超大型爆撃機へと向かっていく。

「シーガル1、エアボーン（離陸）確認！」

「シーガル2から4、エアボーン。幸運を！」

アトランティスCICでは次々と発艦する艦載機と、地上の艦艇や基地施設に甚大な被害を与えて行く敵機が入り乱れて戦闘を繰り広げる様が

レーダースクリーン状に映し出されている。

ポツポツと輝いてる光点が消える度、家数個分くらいの値段がするジェット機の機体と、最悪その搭乗員の命が散っている。

「艦長！ 元基起動異常なし！ 係留ロープ、全て外しました！」

クロードが無線士から得た情報をセシリアへと伝える。

「わかったわ。通信士、損傷を受けた機体はすぐに下がらせるように言って！ アトランティス、前進微速！」

「前進微速！」

セシリアの指示により操艦手の一人がレバーを前に倒す。

クロードが良く見ると、舵輪を持つもう一人の操艦手の手が微かに震えていた。

その時、空母アトランティスから遠く離れた沿岸部の施設で火球が膨れ上がったのを艦橋のほぼ全員が見つめていた。

「艦長！ 航空隊基地が！！！」

「くっ……あそこには海軍の最新鋭機が……！ 基地航空隊司令部と連絡は？」

「駄目です、通信不能です。おそらく、今で……」

「スクランブル発進は、間に合わなかったようね……それじゃ、無い物を嘆いても仕方ないわ。」

両舷1、2番発射機、敵が離れた時には味方機の援護を！ 間違っても、味方機を落としたりしないで！」

「はいっ！」

ようやくアトランティスが動き出した頃、三分の一くらいの数の艦艇が動き出していた。

しかし湾から出ようとしてあたふたと動くうちに、犠牲になっていく艦艇も後を絶たなかった。

アイオワ級戦艦ゲティスバーグの甲板上では、ようやく整い始めた対空戦闘の構えを取る兵士であふれかえっていた。

「巨大爆撃機接近！！」

一体どうやって作ったのか全くもって不明な巨大爆撃機が、巨体故にゆっくりと見える機動をしながら、こちらへ向かって来ていた。

血走った眼で甲板の上を指さしたりして、来るなど叫びながら設置されている機関銃を撃ちまくる兵士達。

「ば、馬鹿者！ まだ撃てと命令は来てないぞ！」

「しかし隊長！ 今撃たねば我々がやられます！！」

日頃の訓練はどうした？

まるで指揮系統が混乱し、兵士達はそんな事も知らずにただやみくもに敵機に向かって出来る限りの抵抗をしている。

「あんな化け物相手にする訓練なんて・・・誰も受けちゃいねえよな。アナポリスでも・・・」

誰かが、弱気な発言をしている・・・

いつもならそんな事を抜かした奴にはもれなく鉄拳や罵声を浴びせるのが自分の仕事だが、

今日はそんな奴を叱る事も・・・励ます事も出来ないでいる。

そして眼前に迫るかのように急接近した巨大爆撃機の下部で、何か駆動している。

「航空機に大砲・・・！？ マズイ、隠れるおっ！！」

彼は叫びながら積み上げた土囊の影へと滑りこむように駆け込んだ。だが土囊の壁に隠れる瞬間彼が見たのは、その場で立ちすくみ身動

きを取ろうとしない部下たちの姿、

そして音もなくパツと光った奴の速射砲の咆哮だった。

(バカ・・・野郎供・・・!!)

ガガガガガガツツ・・・グオオオオオオツツ!!

甲板上を徹底的に何かが叩きつける音と、急降下攻撃を終えて上昇する巨鳥が乱気流を巻き起こしていく。

「ゴホゴホツ・・・ペツ！」

粉塵と破れた土囊から噴出した砂を吐き出しながら、彼は恐る恐る立ち上がった。

「おい・・・お前たち・・・」

土囊の向こうを除くのが怖い・・・

「ジョンソン・・・デイヴ・・・居ないのか？」

帰って来て欲しい返事はなく、遠巻きに聞こえる高射砲の破裂音と航空機の爆音のみが聞こえる。

(これまで敵に決して負けることの無い勇気を持つと、どんな奴にも教えてきた。

なのに俺は・・・向こうの様子を見る、それも怖くて出来ずにいるのか?)

「ええいっ！」

全てを振り払うように大声を出し、自分を奮い立たせると　　生  
存者を見つけた時のセリフを

胸にとどめておきながら、飛びだすように彼は土囊の影から出た。

「な　　なんだ、この・・・？」

何も無い　　そう、何も無かった。

男の記憶では、ほんの十秒前くらいにはここに自分の部下とそうでない者も合わせて30人くらいは居た。

だがそこにはねじ曲がった金属の破片と穴のあいて黒く焦げ跡が付いたゲティスバーグの甲板、

あるのはそれだけだった。

更に不思議だったのは、最悪の光景

広がる血の海や分割され

た人だった物など、仲間を失った事を実感できる物すら無かったことだ。

もう一度周りを見渡しても、生存者も仲間の遺体のどれも見つからない。本当に消えてしまっていたのだった。

がらつと自分の上に落下して来たトタンをどかすと、思いつきり咳をした。

近くに爆弾が落ちたらしいが、どうやらフレイスベルグとの戦闘でまだ運は使い果たしていなかったようだった。

おかげでこうして生きている。とにかく、戦場は御免だった。

もう撃つのも、そして撃たれるのも。とにかく抜け出したかった。

そんな信条で彼は見張りが手薄になった隙を狙って、信哉はフレイスベルグを抜け出していた。

「あの爺さんには、悪いが・・・」

とにかくここから離れよう、そう言い聞かせて見慣れぬ建物をいくつも通り過ぎた時だ。

「え〜ん、え〜ん！」

誰かが泣いている。基地建物の路地と路地の間に一人の女の子、そして倒れている人影があった。

「君！」

信哉がその少女のもとに駆け寄ると、彼は悟った・・・

その少女のそばで倒れていたのは、軍服を着た彼女と同じ髪色の女性、おそらく少女の母親なのだろう。

「くっ・・・」

するとその時、攻撃機がジェットの轟音を響かせて接近して来た。

おそらく隣の基地施設を狙ったの急降下だろうが、信哉達から見ればまるで自分達に迫って来ているかのようにだった。

そして、その下部にマウントされた涙滴型の爆弾が空中に投げ出されて紅蓮の火影に映えた。

何も言う事は無かった、一瞬で女の子を抱きかかえて安全そうな建物の影に背中からスライディングした。

火球が近くで膨れ上がり、鼓膜をビリビリと激震が襲う。

「大丈夫？」

目に涙を蓄えたまま頷いた少女は、未だに母親の遺体があった場所を見つめている。

ただ今の衝撃でその場には彼女の母親の遺体でなく、隣の建物の瓦礫が山を作っていた。

まっさきに、安全な場所へと少女を連れていかなければならない、信哉は少女を抱えたまま走り始めた。

どれくらい走っただろうか・・・不意に見慣れない建物を見つけた。ちょうど航空隊基地の一角であったようだ、二本ある滑走路のを挟んでメインとなる施設のちょうど反対側にあった。

後に知ることになるが、航空隊基地からはすでに危険に伴い退去命令が出ていたのでガランとしていたのである。

入口に差し掛かると、信哉はそこが鋼鉄の支柱で支えられたかなり頑丈な物であることに気付いた。

試しに指ではじいてみても、軽く押し見ても当然ながらビクともしない。

こんなはずれの場所に　　これだけの建物が？

中を覗く、ここなら当分居ても安全だろうか？

暗闇でよく見えないが足音の響きから、中は相当広そうだった。

手探りで照明のスイッチらしきレバーを押し上げる。

しかし、何も反応がない。

「そうか、電線がやられて・・・」

信哉が諦めの言葉を吐いた直後、カチャツとスイッチが入り照明が点灯した。

室内で響きだした音、どうやらディーゼル式の非常用発電機だった

ようだ。

更に蛍光灯によって映し出されたソレ　　信哉はそれを食い入るように見つめた。

「これは・・・機体？　それも、ジェット機か？」

しかもそれを信哉はどこかで見たことある

日本でも導入が始まったジェット機に対応するために、日本海軍の航空科の訓練学校にいた頃に見た雑誌。

そのこのトップを飾っていた、次期戦闘機としてアメリカが計画しているという機体。

既に空軍に配備されているF/A-22ラプター。

だが、その前方のAエインタークやコクピット、二枚の傾斜した尾翼等は同じように見えるも、

その機体の横に移動した彼はその目を疑った。

そこには大きな面積を有するラプター特有の形状の翼ではなく、トムキャットやトーネードのような可変翼のようだった。

「F/A-22NATF？　聞いたこと無いぞ、模型・・・か？」

金を豪快に使うと決めたら使うアメリカなら、実物大の模型なんてよく作りそうだ。

日本のようにケチって儉約なんてしないだろう。

サイドのハードポイントを開くコックがある、これだけ精巧なモックアップも珍しい

だが、書いてある英語表記を頼りにハードポイントを手動で開いた彼は息をのんだ。

これは空対空ミサイル“サイドワインダー”　　本物だ！

どこにも演習を意味するDRIILLの表記は無く、代わって製造番号らしいものまであった。

「いや、だが待て・・・」

つついっ忘れていた　　俺はもう戦場には戻らないと決めたんだ。でも待てよ　　それって、ただ逃げてるだけじゃ？

不意に後ろを振り返ると、あの少女がずっとこっちを見ている。

心配そうに　自分に助けを求めよう。

「ぐっ……」

信哉は拳を握りしめる　否定したかった。

自分が生きるべき世界が、戦場そこしかないことを。

でももし、あの爺さんの言っている事が正しいなら　世界には

これから戦場しかなくなるんじゃない？

「ああっ！！　アレコレ考えても仕方ない！！　ここで待ってるよ」

信哉は少女にそう言い聞かせて駆けだすとアラートハンガーのシャッターを開くスイッチをいれ、そしてタラップを駆けのぼる。

自分でも驚くくらいの身の翻し方。

もつとも、それが良い方に翻したと心の底から思えた事だけは彼にとって大きな救いではあった。

操縦席に置いてあったヘルメットを乱暴に掴みとり、慣れた手つきでそれを被った。

全てがアメリカ人の体形に合わせてあっても、頭の大きさだけは何人も一緒らしい。

対Gスーツも欲しかったが、本来ならアラート待機所や搭乗員の口ツカーにあるような代物だ。

ヘルメットとは違い、ここにある筈もなかった。

となると、高い重力加速度での急旋回や急上昇などは対Gスーツが無い状態では、遙かにブラックアウトを引き起こして意識を失う確率も高い。

（自身でどうにかするしかないか……）

発進を何よりも急ぐ信哉にとって対Gスーツは、諦めれることのできる物だった。

「コックピットはラプターとほぼ一緒だな。ならば……」

バッテリーやイグニッションスイッチをオンにすると、エアインテーク内に隠れたファンが回り始めたようだ。

鈍速のレシプロ機よりもっと速い飛行機に乗りたい、前から思っ

いた事だった。

こんな風に、叶えたくは無かったことだけが残念だし、しかし心地よさを感じてくれるわけでもなく、武器や燃料の確認を急ぐ。燃料や残弾が無いのであれば、飛んでも意味がない。

アナログ計器からデジタル計器メインのグラスコックピットでは、その確認も一人で出来るものだった。

「確か、250km先の敵までを感知できる筈だったよな」  
「信哉が思い出しながら呟いているのは、数年前に雑誌で見たラプターのスペックだった。」

明らかに不確かな情報だが、今はあの雑誌に載っていたことだけが唯一の頼り。

不意に機体の震動が軽くなり、甲高い音と轟音が聞こえ始める。ヘルメットのサイレンサーを付けていても、ターボファンジェットエンジンの轟音は此処まで聞こえる。

右に目をやるとあの少女が隅の方で轟音により耳をふさいでいた。そこで待っていてくれ大丈夫だから、と彼女に合図を送るとキャノピーをクローズ。

「化け物め　待っている」  
「信哉は左手が握りしめるスロットルレバーを少し押し込み、タキシングを急いだ。」

着陸灯を点灯させ、管制と交信をしようとしてその手を途中で止めた。

（何やってるんだ俺は・・・端から見れば泥棒そのものの俺に、管制がグッドラックなんて言ってくれるわけ無いだろ！）

航空機に於いて敵味方を識別するIFFも、この機体はおそらく未調整だろう。

下手をすれば、敵ではなく味方に撃ち落とされるといふ醜態をさらす危険さえあった。

「可変翼、エクステンド　滑走路上に障害物・・・多分無し」  
仕方ないだろう、本来なら自分をサポートしてくれる管制官も滑走

路上を照らす照明も何一つ無い。

分かるのは、最低でも自分の50mほど前方までは白線が引かれた路面。

「フラップダウン・・・」

最後の誘導路を回折しながら、機体はいよいよ滑走路上へと進む。  
補助翼、昇降舵、方向舵、それらすべてが満足に動くことをサイドスティックを操作して確認する。

ミラーに移る影から、問題は無いようだった。

「スロットル全開、アフターバーナー・点火！」

V-Tノズルの噴射口が目一杯広がり、後方に轟音とともに紫の炎を吹き出す。

夜闇の中に伸びる剣の輝きのように。

「テイク・オフ！」

ブレーキを解除した瞬間、一瞬機体はガクンツと前方に激しく下がるように上下する。

アフターバーナーの轟音、ギアが滑走路を走り始めた振動音が全て信哉の耳に入る。

速度も順調に上昇し始めた時、突然聞きなれないアラームがコツクピット内に響き渡った。

「レーダー・ロックト・・・くそっ！」

背後から二基のイーグルがこちらへと迫っている。

仕方ないとは言え、あれだけのんびりと離陸をしていたからか・・・さらに前方には、月の残光に照らし出された小高い丘が・・・！

「くそったれ！ この滑走路、工事中だったのかよ！！」

決まりとはいえ一回も部屋から出してくれる筈もなかったフリースベルグクルーを怨むより早く、一か八かの賭けに出る。

「上れっ！」

グイッとサイドスティックを引き、スロットルをグイッと押し込む。まだ140ノットにも達していない機体は、低速ながらハイレートクライムの要領で機首を高角度に上げる。

一瞬ふわりと浮かんだ機体、おかげで滑走路上に無造作に積まれた砂の山は飛び越えることが出来た。

(だが、万事休すか！ 失速するぞ！)

上昇のための運動エネルギーを機体がい果たし、ガクンと下を向いて墜落する様を信哉は思い浮かべた。

だが、その瞬間はやってこなかった。

それどころか、70度の高角度に機首が上がっていることを前方のHUDでも自身の体でも感じていた。

それなのに、速度はゆっくりと上昇している。

「なんてエンジンだ・・・」

だが予想をはるかに上回るスペックに、感心している場合では無かった。

機体を水平に戻した途端、先程から断続的になり続けていたアラームが、突然大きくそして高くなった。

ミサイル接近を知らせるミサイルアラートだ。

まだ距離はあるが、このままでは・・・！

ミサイルの命中を防ぐための攪乱剤を撒こうか考えていた矢先、下の方できらりと光る物があった。

月光の反射・・・あそこは海か、そうだ！

機体を急激に傾けて今度は対地角度60以上の高角度で海面へと急ぐ。

スロットルも全開のまま、地面へと突っ込んでいく機体、衝突を避けるには腕以外にも高度計が頼りだ。

アラートの音の間隔が狭まる　ミサイルはすぐそこに接近している。

海面へと接近したため、信哉の駆る機体のジェットストリームが蒸気の噴流を巻き起こす。

巻き上げられた水分がセンサーに付着し、前方にまとまった熱源を感知できなくなったミサイルはそのまま迷走し海面にボチャン。

「アイツ・・・なんて避け方を！ あッ！」

「しまった!!」

続いて信哉機を追っていたパイロット達は、眼前に後姿を急接近させた信哉機に驚く。

ぶつからないように華麗にロールで二機をオーバーシュートさせた信哉は、遂にマスターアームを点火させ反撃態勢へと移った。

「夜間は距離感を喪失しやすいと・・・学校で習わなかったのかよ!!」

ブォーンという重低音が響きコックピット右後方で閃光が煌めいた。放たれた機銃弾はイーグルの主翼に点線のような穴をあけ、主翼は煙と炎を上げて機体から引き裂かれた。

もう一機が右方向に旋回、HUDから逃れようとしている。

だがエレベータとVTノズルが生みだす旋回能力は、まるで小鳥に喰らい付こうとする猛禽のように易々と敵機をHUD中央に再度捉えさせた。

「ぐうつつ、流石に対Gスーツ無しじゃちよつとキツイか・・・」  
少し顔をゆがめ、スロットルレバーに付随する武器選択スイッチを切り替える。

「悪く思っなよ・・・怨むなら、こんな任務を与えたお前らの上官をな」

ビィーという音が先ほどとは逆にあちらの熱源を感知して、コックピットのアラームがリーダーロックした事を知らせる。

「フォックス2!」

カパツと開いたサイドのハードポイントからはじき出されるように、サイドワインダーミサイルが空中を飛翔する。

そしてそれは向かった先で僅かな閃光を発生させ、それがオレンジ色の炎と黒煙を上げて墜落して行く残骸を生み出した。

「2機・・・そしておそらく2人」

溜息をマスクの中に吐くと、信哉は未だに巨大爆撃機が主導権を握り続けている湾内を目指した。

走って10分以上の距離だが、戦闘機では一瞬だ。

中距離ミサイルで敵機を狙おうとした矢先、合成音声でアラームが聞こえた。

《OVER SPEED! OVER SPEED!》

「ハア? 戦闘機に速度制限なんて・・・」

言い終わるよりも早く、着陸ギアを上げていないことを発見した。ギアを下ろしたまま、300ノットを越えていたための警告音だった。

トンデモなく恥ずかしい、幸いなのはおそらく誰にも見られていなかったであろうこと。

地上では畏怖を以て自分達を見ているに違いない。

悠然と空を舞い続けて死の雨を降らせる巨大な鳥の内部は、航空機とは思えないほど広かった。

「あまり気の進む任務では無いが、これも後の世界の為だ。しかしこの戦いの犠牲・・・」

これまで人類が重ねてきた屍の、一体何千分の一くらいだろうね。この機体、アルケオプテリクス・・・

世界の始まりに飛んだ鳥・・・そう、我々は新しく生まれ変わる時代の幕開けとして飛んでいるのだろう」

眼下で燃え盛るサンディエゴを見つめ、男は強く笑みを浮かべた。どんな方法であれ、戦争が無い世界。

自分達軍人が必要としない世界を、あの方は作ると仰った。

そのために、我々は軍人と言う生き物を地上から抹消せねばならない。

彼の脳裏に浮かぶ論理は、単純明快かつある意味的を得ていた。

「また仕掛けるぞ、射撃室」

『こちら射撃指揮室、どうぞ』

巨大爆撃機型超兵器“アルケオプテリクス”の構造は意外と複雑だ。並の航空機とは比べ物にならないくらい重装をするために、様々

な箇所にスラスタールや補助翼が追加されている。無論、それだけ機体のコントロールは複雑化する。

また反対にもコックピットは存在し、左側が操縦室、その反対側が火器を制御する射撃指揮室であった。

航空機故に艦船より遙か劣る脆弱さが心配された機体も、多重構造の隔壁により艦船以上の頑丈さを持つ機体となっている。

さらに、その機体を飛ばすには従来と同じようなエンジンをいくらか積もうが出力不足であった。

だがその機関の事については、機長にも知られることは無かった。知っていたのは、特殊な電磁波のような謎のノイズが発生していると言う事くらいであった。

しかし彼にとつて余計な事を教えられない事は、それはそれで別に良い事であった。

自分には、翼さえあればそれで良かった。

民間施設への攻撃　ただそれだけの過失でかつて自分から翼を奪った王党派への復讐のため、そして自分に

翼を返してくれたヴァイセンベルガー大将への恩返しのため

「艦船に攻撃を集中するぞ」

『了解です。　ところで機長、先ほどから近衛艦隊の姿が見えません。』

もう到着していた筈では？」

「ドックに隠れているのかもしれない・・・艦船をある程度攻撃し終えたら、もう一度基地施設に火力を集める」

そのドックに、確かに彼らはいた。

だが、アルケオプテリクスの予測とただ一つ違っていたのは、もう反撃準備が整っていた事だった。

「艦長、基機起動異常なし！　射撃指揮システムFCS-S、索敵システム、航法システム、全て異常なし！」

「よし！ 総員ただちに戦闘配置！ 前進微速！」

カイトの号令でアラームと乗員が行きかう足音が艦内に響き、ついで武装が展開される。

「Mark 81、Mark 31 VLS、ESSM装填。RAM、CIGS全門展開！」

リナが次々とアルケオプテリクスに向けるこちらの武装を読み上げて行く。

モニターに映し出されるそれらの武装を眺めていたカイトは、ふとCICに連絡を取る。

「CIC、艦橋・・・AGSヴィエイラも展開だ」

「え？ 艦長、それは対地攻撃砲では」

CICからの応答より早く、リナが異論を唱えた。

そう、彼女は正しい。これが艦船や地上施設など自分達にとって既知の相手であれば。

「本来は、な。だが、あれだけ大きな機体なら、砲下部のカメラを使った目視射撃でも十分な効果が期待できるだろう」

「分かりました。ですが、最低でもCICから2人はそれに人員を割くことになりましたが、大丈夫ですか？」

「それくらいは仕方ないだろう」

それよりも、おかげで全滅なんて事の方がもつと頂けない。

「中佐、海へ出るぞ。覚悟は良いか？」

「はい、長官。前進強速、フレイスベルグ発進！」

グオオオオンという咆哮をあげて、フレイスベルグの艦橋上部からガスタービンの回転数が上がった事を意味する白煙が上がった。

その号令は一時の休息への別れ、そして巻き起こった白煙はこれからの未知との戦いの始まりの狼煙。

朱に彩られた湾内へ二つの鷲が進み出た。

それぞれの覚悟と守るべきものを背負い

今また大海原に・・・

第十三話 旋風止むべし！（前編）（後書き）

なんという空戦小説WWW

コレって、海主体じゃなかったっけ？

いや、そうだ、そうだった・・・そうだった、筈・・・

次回は皆活躍しますよ～乞うご期待！

前々のように、また前編と後編が離れますがご容赦を・・・

次回 第十四話「Like a sea-gull」

今回のタイトルの、由来が分かった人は是非お友達になってください（笑）

第十四話 Like a sea-gull・・・(前書き)

いやはや、遅くなって申し訳ないです(いつも言ってる無いか、コレ orz)

それはそうと、なんとウォーシップガンナー2(鋼鉄の咆哮)がPSPで蘇るそうです!!

アドホックでの対戦や協力プレーもあるとか?

これはもう買い決定です(JINの中での話です)

ちなみに、11月に発売予定らしいですね

これから更にゲーム本編とストーリーが絡み合う予定なので、ゲーム本編を深く知りたいけどPSPは持っててもPS2は持ってなかったというそのアナタ!

この機会に是非!

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あの〜コーエーさん、宣伝料はおいくらでっ? (嘘です)

第十四話 Like a sea-gull . . .

そういえば、小さい頃に親父に野山のとっぺんに連れて行かれた  
っけ . . .

ちよつと申し訳程度に舗装された登山道      その頂には卒塔婆が  
あるくらいだ。

はつきり言つてそこは子供があまり好んで近寄るような場所ではな  
い。

「信哉、見る . . .」

親父に言われて白い卒塔婆の先つぽを見上げる。

「鳥 . . . ?」

「カモメだな」

しかし、この山自体はそう海岸線から離れていなかった、カモメが  
居るのは別段不思議では無い。

キョロキョロと、辺りを少し寂しげに見渡しながらそのカモメは夕  
暮れの空間に浮かんでいるようだった。

やがて、カモメは何かを見つけたようにバツと翼を広げて朱の空へ  
と舞い上がった。

そして飛んで行った先で、もう一羽のカモメと番の二つの翼を成し  
てどこかへと飛び去る。

「しっかし      いいよなあ、あいつらは」

振り向くと親父が目を細めて、言葉通り少し恨めしそうに空を見上  
げていた。

「好きな時に、好きなことをして      風に身をまかせて飛んで行  
く。」

それでも、ちゃんと目的地には不思議とたどり着ける . . . 信哉  
にも、そうなって欲しいな」

「父さん . . . 鷲とか鷹の方が良いよ、強そうだし。      カモメとか、  
ちよつと可愛いけど弱そう . . .」

「はは〜ん、お前・・・カモメの凄さを知らねえな？」  
イジワルそうに笑う親父の方を、俺は確かに振り向いた。

「カモメはな、雛に与える餌や雛・・・守りたい物を守るためなら、時に驚以上に凶暴になるんだぞ。」

なんせ俺はお前みたいにガキンチョの頃、この辺りでクマタカとカモメが空中で戦っているのを見たことあるからな」

別に自分が戦ったわけでも無いのに、カモメなわけでも無いのに

親父は自慢げにカモメの自慢話を始めた。

きつと、それに洗脳されたに違いない

その夏休みの宿題で何かの絵を描くという課題があつた時、不格好なカモメを描いていたのは俺だけだった。

“カモメ”と言われなければ、絶対にその絵をカモメだと気付かないであろうくらいの画力しかなかったのは、残念だったが・・・

「自由に生きているようで、信念を持っている。そのためならば、穴のあいて飛べなくなった翼でも広げて、諦めずに守りたい物を守る。」

人間つて、本当はああ生きるべきなのによお〜。 誰も分かりや

しねえんだよなあ・・・そんな簡単な事が」

確かこのころ、親父は町議会議員の一人として頑張っていた。

あれやこれやと金のしがらみや問題、党の言う事だけを聞いて町のことなんてコレっぽっちも考えちゃいない老議員。

そんな裏事情を知らないで、ムチャクチャな要望ばかりを一票の代償として求める町民。

思えば、あれはそんな事から解放されたいという親父の願望だったのかもしれない・・・

そして、俺に自由に・・・格好よく生きると・・・

(俺は今・・・カモメのように、空を舞えているのか?)

不意にリーダー上に映っていた敵機の機影が二つ、ちょうど航空隊

基地の滑走路近くで消えた。

「どういうこと・・・？ あそこに味方部隊は居ない筈よ」

セシリアが不思議そうに艦橋のモニターを覗きこむ。

「こちらCDC、アンノウン1機捕捉。これは・・・？」

「どうしたの？」

「いえ、トランスポンダーの応答はあるのですが・・・機体がレーダーに映りません」

「IFFは？ 味方なの？ それとも・・・」

「IFFは見慣れない数値です。今の状況では、友軍か敵なのかまでは・・・」

状況を考えれば、一機でも多くの味方が欲しい所。

だが敵と友軍を見誤れば、それは即破滅を意味している。

「アトランティスCDC、念のため複数のチャンネルで呼びかけてくれる？」

「はい、やってみます！」

想定外の事態が発生しているのだが、それに集中してもならない。

セシリアは再び、艦と港湾施設の防衛にあたるべく任務に集中した。

「ESSM撃ち方始めえッ！」

フレースベルグと並列で航行するきんぼうから、対空ミサイルが白煙をひいて上空に舞い上がる。

「ミサイル！？ どこから！！？」

レーダーに映らないステルス艦であるフレースベルグから放たれたESSMに、対応できた敵機は少なかった。

何機かは後方にチャフという金属片をばら撒き、それによりレーダー波を攪乱しミサイルから逃れるが、

半数以上は爆炎に叩き落とされ、またさらにそのうちの半分からはパラシュートが開いたのが見えた。

「坂上艦長！」

カイトは通信回線を開き、きんぼうへと通信を試みる。

『こちらきんぼう、フリースベルグどうぞ』

「坂上艦長、きんぼうは先行して湾内へ脱出してくれ」

『しかし、それではフリースベルグは・・・』

「ハワイと西海岸北から、本隊が向かっている。一刻も早く状況を知らせる必要がある。」

通信能力に長けた本艦が貴艦が先に湾内に出た方が良い」

至近弾の衝撃で艦が左右に揺れる中、カイトがきんぼうの離脱を促す。

今回は開けた視界の艦橋ではなく、一面にある電子機械やモニターの光のみを唯一の光源とするCIC。

カイトは艦橋からCICへと移動し、今は敵機を退ける事を第一に考えている。

どちらかが作戦に集中し、もう片方が敵機をけん制しながら本隊との通信を試みる方が良かった。

『わかりました。では、後で必ず・・・』

「もちろんだ。針路130、前進半速！」

通信を終えるとフリースベルグは湾内中心へ、きんぼうは湾外へと転進する。

「トラックナンバー117から122、インディア目標群I、123から12

8、スミ目標群L、転進！本艦へ向かってきます！」

「まとめて撃破する！ESSM再装填、ターゲットインディア目標群I、リマ目標群LはCIGSで牽制しろ！接近を許すな！」

バンの指示に合わせてCICクルーも機器を操作し、次の攻撃に備える。

「撃てえーっ！！！」

断続的なCIGSの砲撃音と、遠雷のような轟音を木霊させ再度数発のESSMが発射される。

「あの艦、ロックが出来ない！」

ESSMによるミサイルアライトと、いくら接近しても誘導爆弾のロックが出来ない事に焦るパイロット。

「落ち着け、レーダーに映らないだけで、そこにはない訳じゃないんだ」

「そうか、ロックが無理なら無誘導爆弾で・・・！」  
チャフを空中にばら撒きながら、数機のストライクイーグルが上空から爆弾を投下する。

「右回頭30！回避！」

操艦手が目一杯に舵輪を回し、急な回頭で艦が左へと傾斜する。間一髪、左舷の十数メートルの海面に黒い塊が2つ飛び込んだ。直後、貫通爆弾特有の遅延信管が作動し艦底部の遙か下方で爆発を引き起こした。

「あぐツ！くっ・・・！」

下から突き上げる直下型地震のような衝撃が、フレイスベルグを襲う。

艦橋に居るリナは必死にモニターにしがみ付く。

「今だ！後部VLS開放、ESSM撃てえーっ！」

発射された状態でその直線上にいる二機にチャフの残量は無く、避けられる筈もない。

二つの尾翼と主翼の一部を破壊され、紅蓮の火を噴く機体から2つづつ白いパラシュートが飛び出した。

「更にもう一機だ！左30、回頭急げ！」

カイトの命令が飛んだ時には、敵の高度は500mも無かった。

「高度1400、貰っ・・・なッ！！？」

余裕から逆転、突如コクピットにミサイルアラートが鳴り響く。しかし、フレイスベルグからは閃光や白煙の迸りは見られない。

「どこから・・・うっ、うわあああああっっ！！！」

最期に見えたのは、閃光と白煙をひいて自機の真上から飛び込んでくる細長い鉄塊。

上空で爆発音と光、そしてモニターから迫っていた敵機の反応が突如消えた。

「今のは、きんぼうか？」

「いえ、上空に機影！」

もし敵機ならとカイトがレーダー照射を指示しようと思っていた矢先、艦内に聞いたことのある声が聞こえた。

『俺だ！間違つて撃たないでくれよ！』

「松原大尉か！？ 一体なぜそんな機体ものに！？」

『悪いが、説明している暇がない！ 上空から援護する、誤射だけは止めてくれよ！』

「艦長、どうしますか？」

バンがカイトに、松原機への対応を迫る。

畏であれば、松原機が攻撃してこないとも限らない。

「・・・いや、畏であれば敵機を攻撃したりはしないし、される事もないだろう。」

上空の松原機の識別は出来るか？」

「はい。バツチリです！」

レーダーを監視するクルーが威勢よく答えた。

「よし、友軍機と認識しろ！ 残存するウィルキア、米海軍の艦艇に通達！」

「はっ・・・いえ、しかしそれを米海軍が了承するかまでは・・・それを聞いて、一瞬カイトも考えた。

きつと、ちゃんとしたやり方である機体に乗った訳じゃ無いのだろう。

ましてや彼は日本海軍のパイロット。自分達にとって敵勢力の一端を担っている。

「一機でも多くの味方が欲しい・・・我々だけでは無い筈だ」

「はあ・・・」

「米海軍米海軍が了承しなかったら、私が直に話す。おそらく今指揮を執っているのは、クリスター大佐だ」

彼女なら、分かってくれるだろう」

エスノセントリズムに走る事無く、他国に対して深い理解がある

彼女なら・・・それがカイトの考えだった。

「こちらサンディエゴ基地司令部、“ゲティスバーグ”貴艦の出航の指示はしていない！」

その頃、地下司令部は近隣の艦艇から受けた報告の対応に追われていた。

艦長不在・・・おそらく戦死しているであろう艦長が居ない戦艦ゲティスバーグが、勝手に動いているのだ。

「今動くと、他の艦艇の行動に支障をきたす恐れがある。ただちに停船せよ！」

ゲティスバーグ艦橋、聞こえないのか？」

「・・・おそらく無線封鎖しているな。おい、前方を塞がれているのはどの艦だ？」

「クリスター大佐が指揮する空母アトランティスです！」

「ああくそつ、空母は貴重品だというのに！」

コンソールに両手をバンと叩きつけて、言いようのない怒りを露わにする港湾管制官。

非常時に於いて、このような乱れは艦隊全体の士気の低下に直結する。

いや、圧倒的な力を目にして米艦隊に士気なんてもう無いかもしれない。たった一艦の空母を除いて。

問題の発生は、ゲティスバーグの巨体が前方に展開しているアトランティスでは、言うまでもなく明白に理解できた。

「通信は出来ないの？」

「はい、サンディエゴ・コントロールから呼びかけても応答しないようです」

好ましくない事態の発生に、セシリアが毒づく。

「ただでさえ、一刻を争うのに・・・ああっ!!!?」

その刹那、左舷で火球が舞い上がり、船体を激しい震動が襲う。艦橋からも数多くの悲鳴や怒号が吹き荒れた。

「ナ、ナンバー2エレベーター被弾!大破!」

ダメージコントロールからもたらされた情報を、クロードがセシリアへ伝える。

「第二エレベーターは、元から使わないわ。各員、損害は軽微、防空戦闘に集中して!」

(速度を落とした事がいけなかったわ。でも前には戦艦、急がないとこの艦も・・・!)

「仕方ないわ、ゲティスバークを先に行かせて。こんな事で争ってたら、かえって時間がかかるわ!」

苦渋の決断を下し、セシリアは前方のゲティスバークを先行させるため艦の速度を落とすよう指示した。

「3時方向より戦闘攻撃機、6時の方向に巨大爆撃機です!」

「迎撃する。シースパロー、撃てーっ!」

数発のシースパローミサイルが、艦尾に近い発射機から閃光と共に夜空に舞い上がる。

そして接近した戦闘攻撃機数機を爆散させることには成功したが、艦尾方向から迫るアルケオプテリクスには

かすり傷程度のダメージすら与えられていなかった。

「退避!」

着艦信号士官(LSO)が向かって来るアルケオプテリクスを目にして咄嗟に叫んだ瞬間、アルケオプテリクスが下方に向けた速射砲の砲口が、音より早くピカリと光った。

凄まじい轟音、震動と砲弾と甲板の破片が辺りに小さな暴風を生む中、それを避けるようにLSO達は一斉に甲板端に設けられた、半八角形のネットボックス“LSOエスケープ”へと滑りこんだ。

「ーーーーッ!!!」

左肩に続いてランの小さめの背中が瞬く間に朱に染まった。

痛みを通り越して激痛、苦痛

圧力で折れそうなほどギリリと食いしばった歯が、彼女が受けた痛みを顕著に表していた。

それでも決して上げない悲鳴、上げられない弱音。

何が起きても諦めないと誓ったあの日から、それは絶対に変わらない。

「早くっ・・・被害の、状況を・・・」

自力で立っているのも苦になり、手すりにつかまっていたランが次の手すりへと手を伸ばすがそれが届かない。

（決して膝をつかないと・・・誓ったのに！！）

危うくランが倒れ込もうとした時、彼女の体を誰かが支えた。

「司令！しっかりしてください！！司令！！」

「貴女・・・ヒューストーン？」

虚ろになりつつある目でランが見つめた先には、自分の事を必死に呼びかけるプラチナブロンドの髪の少女。

ミサイル巡洋艦ヒューストンの艦魂であるヒューストーンだった。

「申し訳ありません。私が馳せ参じるのが遅れたばかりに、司令に・・・こんな」

「貴女のせいじゃないわ・・・この状況なら、無理もないわ」

涙ぐむヒューズに、ランが力なくも優しく言いかける。

「まだ動ける子たちを集めて。臨時戦隊を・・・編成しなくちゃ、いけないから」

この時、ヒューズは一種の恐怖と、そして一種の畏敬を抱いていた。恐怖は、ランの背中から流れ出ている赤い血。

自分が回した右手の平にも、それはべつとりとくつついていた。

生物とは違うけれど、命ある者の証拠。

命ある者が傷ついた証拠。

いつ自分がそれを流す者になるか、それよりも前に流させる者になるのか？

ヒューズの恐怖には、ありとあらゆるものが凝縮されていた。畏敬・・・というより、それは高レベルの尊敬。

こんなに傷ついても、まだ戦おうとしているラン。

これがメキシコ紛争を戦い抜いた英雄　　伝説の島アトランティスの名前は、伊達じゃない。

同時にヒューズは比較対象として、ものすごく取り乱していたゲティスバーグの事を思い出してもいた。

ランをキャットウォークの中に連れ戻ると、ヒューズはランの体を再び手すりに任せて支えていた自身の手を放す。

「司令はここに。　私が集めてきます」

それだけ言うと、自分がやると言いそうだったランに抗議をさせないような速さでヒューズは転移して消えて行った。

「ひよ～～っ！！　危ねえ危ねえ！！」

同じころ、ようやく煙が晴れたアトランティス艦上。

LSOはコンマ数秒でも遅かったら、蜂の巣どころじゃないミンチになってたところだった。

「デイビット、ギル、みんな生きてるか？」

「な、なんとか・・・」

士官達が自分や自分の仲間達の無事を確かめあう。

そしてLSOエスケープから這い出た彼らは、愕然となった。

「ワ、ワイヤーがっ！！」

「なにぃ！？」

後から這い上がった士官が、着艦機を急激に減速させるためのワイヤー敷設装置へと駆け寄る。

「こいつぁ・・・無理だな。　敷設機がやられた。　4つとも全部だ

！」

「スタンション緊急着艦装置を使えば？」

「そりゃ、2〜3機は収容出来るだろうけどよ・・・今20機ばかり上がってるんだぞ。」

「全部はとても無理だ」

甲板端の側溝“キャットウォーク”へと男は走り、艦橋への連絡を急ぐ。

「CIC、艦橋。空母アトランティス、甲板損傷！艦載機着艦不能とのことです」

これまで大きな損傷を受けていなかったアトランティスが、甲板を損傷したとの報告はフレーズベルグにも

既に湾口へと差し掛かっていたきんぼうにも伝わった

「アトランティスが！？クリスター大佐……」

これ以上米艦隊を沈ませるな！ E S S M、S M - 2、照準トラツクナンバー113、敵巨大爆撃機！」

あの人は失ってはいけない……何かがかイトに訴えかけていた。

「アイサー！」

「グイエイラからも撃て、このままだと艦隊壊滅まで時間の問題になる！」

「E S S M、S M - 2、撃てーっ！！」

既に前方に墨を流し込んだような漆黒の大海が広がっているきんぼうの艦橋。

湾口へと差し掛かり、これから大海原から接近中のウィルキア艦隊の本隊と交信をするべく以前前進する。

しかし、クルー達は傍受した無線から次々にやられている湾内の友軍艦隊の状況に、焦りを浮かべていた。

「後甲板VLS、S M - 2発射用意！」

そんな切迫した事態を打開するため幸樹も逃げの一手から、逃げながら攻撃と言う手段へと戦法を変える。

「幸樹！それじゃあっちの艦長のせつかくの……」

「もし彼らがやられたら、次は僕らだ……。そのためにも、前進しながら攻撃をする」

敵の注意がこちらに注がれる事になるかもしれないが、その時はその時だ！」

脱出時のような決意を込めた目で、彼は口をはさんだ“きんぼう”に言い聞かせた。

「それに、誰も失いたくは無い。失ってはいけない……」

「艦長、SM-2発射態勢よろし！」

宏史がやや緊張気味の表情で、対空ミサイル発射の準備が整った事を告げた。

「SM-2、撃てーっ！！」

「機長！ 4時方向、10時方向からミサイル多数！」

「ミサイル……なるほど、どうやら話に聞いていた王党派の遺物どもか？」

「分かりません、しかしうち一隻はレーダーに映りません。ステルス艦のようです！」

「そいつだ！ 報告にあった奴だ。今日こそ仕留めるぞ、王党派を根絶やしにするんだ！」

フリースベルグの発見に、アルケオプテリクス機長は狂喜する。

こうして王党派などとレッテルを貼られた者たちを、一つ一つ海に沈めて行く事が最早彼の生きがいでもあった。

「射撃室、B11地点フレイクへ向けて乱射しろ！ 巡洋戦艦くらいの大きさなら、たくさん撃てば当たるぞ！」

アルケオプテリクスが急降下し、次なる目標をフリースベルグに定めた時だった。

対空警戒用のレーダーには何も映らなかったが、乗組員達は前方からバルカン砲の激しい火花を散らしながら迫りくる機体を視認した。「なにっ！？」

急激に左に傾けた機体は、回避のために射撃のコースを外れた。

「米海軍の艦載機か？　しかし、ステルス機とは……」

機長が攻撃してきた機体を疑問視している時、射撃指揮室から連絡が入る。

『こちら射撃指揮室、風防に銃弾が命中し減圧が起きているが、けが人なし。酸素マスクをして作戦続行は可能！』

「りよ、了解した……」

（今は偶然か……それとも……！）

「射撃指揮室、上部の速射砲を接近してくる航空機に照準。　ロッ

クオンできない時には目視でも良い、撃て！」

『了解しました』

アルケオプテリクスが回避機動から通常の旋回を始めたのを見て、信哉は先ほどの攻撃の手ごたえの無さを改めて感じていた。

既に10機……いや20機くらいは落としたか？

ミサイルはすでに全弾撃ちつくし、残るは20mmのバルカン砲のみ。

しかし、ミサイルですら蚊程も痒がらないようなあの爆撃機に通じる攻撃オプションはあったのか？

爆撃機の弱点　それは確かにあった。

ミサイルの主な誘導方法は赤外線かレーザー反射を利用する。

しかし、それではエンジン口や機体の中央部しか狙う事は出来ない。どうやらあの巨大爆撃機は、その点を考慮してその部分はかなり頑丈に作ってあるようだった。

だが、どうあっても頑丈につくれなかった部分があったのだ。

コックピット、その風防である。

強化ガラスで作られているとは言え、バルカン砲のタングステン弾からすれば紙ペラに等しいくらいしかない防御力だ。

おまけに、コックピットにはあの機体を操作している乗組員達がいる。

外道かもしれない戦法だが、これも大切な物を守るためだ。

再びバルカン砲の射線軸を取った信哉の機体は、真っ直ぐアルケオプテリクスへと突っ込んでいく。

「おらああああっつー!!」

ブオオオオオンというバルカン砲が、咆哮をあげる。

さつきとは反対側のコックピットへと、機銃弾が突き刺さっていた。

「やったか!？」

だが信哉の期待も虚しく、アルケオプテリクスは未だ安定した飛行を維持している。

「くそつたれッ!!」

悔しさの余り信哉はキャノピーを激しく打ち付けた。

あれだけ撃つたのだ損傷はしているかもしれないが、あと一歩……わずか一歩が足りなかった!

既に万策尽きた自機、信哉は涙ぐむしかなかった。

《自由に生きているようで、信念を持っている。そのためならば、穴のあいて飛べなくなった翼でも広げて、諦めずに守りたい物を守る。》

かつて自分に説いた父親の言葉が、信哉の心の中で何回もバウンドする。

「ちくしょう、ちくしょう……オヤジ、俺もう無理だよ。せめて火災でも起きてくれれば良かったのに……」

ヘルメットの中に涙がこぼれ、目の前のHUD表示が歪みかけたその時だった。

(待てよ、俺今なんて言った……火災……そうだ!!)

武器は無くても火ならば、そこにあった!

思わず後ろを振り返ってみて、信哉は頷いた。

(やれる……これなら! この方法なら! いや、やるしかない) 信哉のスロットルレバーを握る左手に、思わず力が入った。

「どうやら弾切れだな。途中で奴の射撃の手が止まった」  
脅威の喪失に、アルケオプテリクス機長の男が不敵に笑みを浮かべる。

「そのようですね」

「仕上げだ！ さつさと奴らを沈めて、基地へ帰るぞ・・・いい加減疲れたわ！」

自分の肩を揉みほぐしながら、席に深々と座った時だった。

「機長、上空から先ほどの機体が！」

ステルス機と言えど、極度に接近したらレーダーに映る。

もつとも、鳥くらの大きさでレーダーロックはできない程度の微妙な反応であるが

「速射砲、迎撃！」

カメラの目測でアルケオプテリクスが信哉機を迎撃するが、信哉のトリッキーな回避機動に照準を中々合わせられない。

加えて自分達の発見を遅らせるためのこの夜空の闇が、命中率低下に拍車をかけていた。

だが、攻撃を受けるかと覚悟したものの信哉機はアルケオプテリクスの前方を低速で追い越す（オーバーシュート）。

いつまで経つても、攻撃に転じる気配は無かった。

「ふん、やはり弾切れだったようだ・・・攻撃を再開し・・・」

「機長、敵機速度を落として接近してきます」

「なんだと？」

信哉は体を捻り、進行方向とは逆方向の後ろを向きながらアルケオプテリクスまでの距離をゆっくりしかし確実に詰める。

まるで車のバックを行うような感覚。

そう言えばどこかの国のエースが言ってたっけ、《車はバック出来る分、戦闘機よりマシ》と。

本当にバックしているかのような感覚に見舞われて十秒ちよっと。

僅かにスロットルを押して、機体の速度とアルケオプテリクスの速

度を同じにする。

「こ、こいつ・・・まさか!?!?」

「う、撃て!! 前の機体を撃て!!」

「駄目です!! 射角外です!!」

眼前に迫りくる信哉機を見て、射撃室のクルー達が悲鳴に近い叫びをあげた。

「これで焼き鳥になりやがれっ! 食べないけどな!」

エアブレーキ・マックス、フラップ・ダウン、スロットル全開、アフターバーナー点火!

口で喋るよりも早く彼の体が全てを動かしていた。

その瞬間、ゴウツツという轟音がサイレンサー付きのヘルメットの  
中まで響き始める。

だが機体は急激な加速をせず、展開したエアブレーキやフラップの  
減速作用のおかげで速度をある程度維持していた。

アフターバーナーの紫の炎が伸びる先、それは・・・

「や、やりやがった・・・あの野郎! ひぎゃあああああつっ!!」

「ああああああああああああああつっ!!」

損傷した射撃指揮室の風防を突き破り、信哉機のジェットエンジン  
から約二千の業火が噴火のように射撃指揮室に流れ込む。

“熱い”      そこにいた全てのクルーが思った事はそれであつた  
だろう。

『射撃指揮室! どうした? 応答せよ!! 射撃指揮し      プ  
ツツ』

だがその一言も言わせないように、火炎の濁流が彼らに押し寄せた。  
そして操縦室からの無線の配線も、日本刀の前の生糸のように易々と  
火炎で切断される。

そこは炎の世界<sup>ムスヘルヘイム</sup>      天誅として虐殺者に吹き荒れる嵐は、まさに

劫火と化した怒りだった。

「し、射撃指揮室火災！応答無し！ 消火設備、作動しません！」  
「何が起きたんだ!?」

機内に響き始めたサイレンと、異常事態を知らせる赤色灯。

しかし機長は何が起きたのか未だに把握できていない。

ただ確かなのは、射撃指揮室で火災が発生していること。そして射撃指揮室のクルーがやられた事。

そして、アルケオプテリクスが攻撃手段を失った事

武装は全て使い果たしていた筈の信哉機。

それがどうしてアルケオプテリクスに大損害を与えたのか、彼は理解できなかった。

そしてその答えは、風防近くにいた操縦要員が出した。

「機長、ジェットブラストです。敵は損傷して穴のあいた風防の前に機体を・・・そこから高熱のジェットブラストが入り込んだんです！」

「損傷した、風・・・防・・・？」

それを聞いて機長の男から、血の気が失せていった。

損傷した風防は、自分達の前にもある。

しかも射撃指揮室がやられた今、アルケオプテリクスに攻撃手段は残されていない。

「さ、作戦中止！ 全速でこの空域を離脱しろ!!」

これ以上居ても、攻撃手段を失った機体はただの大きいだけの航空機。

もし射撃指揮室と同じように、前方に居座られでもしたら・・・末路を考えるよりも早く、とにかくこの場を離脱しないといけないと・・・誰もが思った。

大出力のエンジンにアフターバーナーの火が灯り、大型機とは思えない超高速で高高度へのぼっていくアルケオプテリクス。

「敵巨大爆撃機、撤退します!!」

右側のコックピットから黒煙を上げながら遙か上空に消えていくアルケオプテリクス。

その様子をフリースベルグのクルー達は船外カメラから眺め、喜びを口に出さずも歡喜の表情を浮かべていた。

映像には可変翼を目一杯に広げながら、カモメのように舞う白い機体が見える。

(機体が見える・・・?)

その時、カイトはハツとなりこの数時間誰も見さえしなかったCIの時計に目を向けた。

朝が来ていた・・・また朝を迎える事が出来た。

暁の空に鋼鉄のカモメが舞っていた・・・

我々は生き残れた　　のか？

まだ終わっていない　　カイトの胸中に言い知れぬ不安が残っていた。

第十四話 Like a sea-gull . . . (後書き)

最初の登場時からやらせてみたかった信哉無双 . . .  
いや . . . NOBUYA COMBAT (笑)

そのため暴風やシエルドハーフェン達には、ちょっと足踏みをして  
もらいました(爆)

ええとですね . . .

今日は、ちょっと重い？

というかシリアスな話を一つ . . .

先に言っておきますが、

海原の大鷲中止 . . . とか、私JINは執筆活動をやめますとか、  
そう言う話ではありません

実はですね、九月の下旬にメッセージでお便りをいただきました

某大佐さんからです

いろいろと質問や議論しがいのある内容を送ってこられた方でした  
が、  
後半部分を要約するとつまりはこういう事でした

『JIN先生は、どうして艦魂会に入られないのですか？』

. . .

.....

.....

.....

うん、うん.....

なんだろう・・・？

「・・・お誘いが来なかったから？」

いやいやいやWWW

確か申請しないとイケなかったのに、しなかったのは私JINでありますから・・・

そしていざお誘いが来ると・・・

「そ、そんなに言うなら入ってあげなくもないよっ！でも勘違いしないで！」

べ、別にあなた達のために入るんじゃないんだからねっ！」

・・・

なんというツンデレ作家（男ですけどねWWW）

嘘ですよ（笑） 分かってますよね（再確認）

うん・・・

まあ、ここから真面目な話をしますけど・・・

作家を始めてすぐは小澤先生の勧めもありまして、艦魂会に入会の申請をしてみました・・・  
艦魂会が再編中で、しばらく待つてくれと黒鉄先生に言われましたが（笑）

ところがちょっと黒鉄先生をはじめ他の先生方の作品を見て、自分の作品との大きな相違点に気付き始めました。

何と言うか・・・

他の先生方は、艦魂をメインとして海戦等の描写で喜怒哀楽を描かれている方も多いです。

それによって、艦魂が傷ついたりと戦火の悲哀を見事に表現されて

いたり、  
または一度は想像してみたい乗組員と艦魂のファンシーストーリーを描かれている方もいらっしやいました。

もう一度言いますが、いずれの先生方の作品も“艦魂がメイン”なんです

ところが自分の場合は、見ても分かる通り・・・

他の先生方のストーリーの源：史実を元にしたフィクション等

JIN：鋼鉄の咆哮<sup>ゲーム</sup>

まずここで何かが違います！！

それから

艦魂の登場が圧倒的に少ない！！！！

これは黒鉄先生が掲載されてらっしゃる“真十連合艦隊極大権限保有最上級艦魂会”

その中の、“緊急報告 艦魂の現状について”の中の一文です。  
(一部補足文あり)

《まず第一に艦魂がメインとして作中に出ている事。艦魂がサブに  
なっているような作品は（艦魂会入会は）ちよつと考えさせてくだ  
さい。》

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ですよね〜

これはちょうど、自分が作品を書き始める少し前くらいに黒鉄先生  
が書かれたのだと思いますが・・・

そして自分もこれを読んだ記憶があります。

「よし、艦魂をサブにしてしまうようなダメ艦魂作家にはならない  
ぞ」とその時心に決めた自分が居ました

↓  
子供のころ、なりたくなかった父親に、なっている自分がいた↓  
（某クレジット会社のCMより）

なるまいと思っていた作家に、JINはなっていました（泣）

ええ、さて・・・

まあ見ての通り私の作品は、艦魂よりも情景や人の描写が圧倒的に多いです。

そして、完全に艦魂がサブキャラと化しているという事実を認めざるを得ません。

出る回数が相対的に少なくても、物語の構成上重要なスタンスに居るのであればメインと言えらると思います。

ですが自分の場合、残念ながらそういう訳でもなさそうです。

というより、サブキャラの定義が難しいです。

人によっては、フレーズ達も十分メインキャラだという人もいるかもしれませんがけどね・・・

悩むところではありますが・・・

(フォレストルの長編では、メインになってはいますが・・・)

もし早々に自分が艦魂会に入会していたとしても、やがてこの事実気付いたと思います。

むしろ、こうして早々に自分に対してアラームを鳴らして下さった黒鉄先生に感謝です。

一時は艦魂メインに修正しようとも考えたんですが、それは出来ませんでした。

どう考えても、主人公が人である必要があるからです。

そんな主人公である人を、支えるヒロインキャラに持ってこようとも一時は考えましたが、

やはり人を支えるのは人じゃないかという風に考えてしまいました。

何と言うか自分の描く作品では、艦魂は艦全体を守る存在と言いますか……

なんかそんな感じがします

自分は、それでも良いかなと思います

つまり、此処までいろいろ複雑な心境を言ったりしたりとかしながら何ですが……

針路変更はしません、このまま行きます

なので、そんな自分には非会員の称号がちょうどいいと思いました。艦魂の設定も、他の先生方とかなり似てはいますが違う所もあります。

さて長くなりましたが、以上が私が艦魂会へ入会の申請を辞退した理由です。

誘われてすらいらないのに辞退とか（笑）

非会員かつ艦魂がメインとは言えないような私の作品ではございま

すが・・・

それでも宜しければ、読者の皆様や他の艦魂作家の先生方には今後ともお付き合いのほどをよろしくお願い致します。

感想や評価、このレビューに対してのメッセージなどもお待ちしております。  
います。

始祖鳥アルケオプテリクスを退け、次回はいよいよアレとの決戦  
そしてやっとの事で彼も登場します！

次回 第十五話 旋風止むべし！（後編）

9/17 追記

タイトルを変更しました

海原の大鷲 鋼鉄の咆哮〜海原の大鷲〜

内容は変わりません

今後ともよろしくです

第十五話 旋風止むべし！（後編）（前書き）

今回は戦闘メインとして書いたので、なんか淡々としているという  
か・・・

文の書き方がちょっとワントンポな気がしています。  
もしかしたら、加筆修正とかするかもしれません。

そして長らくお待たせしました。

15話目でお待ちかねの超高速 艦との戦いです

## 第十五話 旋風止むべし！（後編）

信哉の活躍で、なんとか湾口に無事辿り着きアルケオプテリクスを退けることには成功した。

だが、同時に米海軍が受けた傷は深く、それは相当なものだった。

「半数、いやそれ以上か・・・」

レーダー上に移る米海軍艦艇の数は、カイト達がこのサンディエゴに来て視認した数の半数以下にまで減少している。

戦闘部隊に於いて半数の戦力の喪失　それはすなはち部隊の壊滅を意味していた。

そして本来は目では見えない戦意の残量に至っては、この時ばかりは残り僅かであることが明白だった。

本当ならここ辺りで停泊して、損傷を負った艦の修理と行きたいところだ。

しかし予断を許さない事態が続いている事を、先行していたきんぼうが発見した。

レーダー上に南方から迫る十数個の光点が映った。

解放軍本隊がそんな方向から来るとい話は聞いていないし、米海軍もまた同じだった。

友軍では無いというのならば、自ずとその正体が何であるかは理解できた。

「・・・このまま第一種警戒態勢、レッドアラートを維持する。」

総員、戦闘に備えよ」

巨大爆撃機を相手にする時よりも緊張は幾分か解れるカイト。

だが、それは油断では無いのは確かだ。

「艦長、米海軍は何と言ってきていますか？」

「まだ何とも・・・先ほどの戦闘で、アトランティスが損傷、艦載機を降ろせなくなったらしい。今、近くに降ろせそうな場所がないか探しているそうだが、見当たらない場合、基地上空でパイロットた

ち全員を緊急脱出させる可能性もあると。  
ペイルアウト

今は、その対応に必死らしいな」

随分と下火にはなったものの、依然として炎を上げて燃える基地を見つめてカイトはクルーに告げた。

その時、CICからの連絡が風雲急を告げた。

『艦橋、CIC。艦長、レーダーに新たな反応1。島陰で発見が遅れたようです』

何かまた大事件が起こる・・・そう言う事なのだろうか？

「増援か？ 反応は水上か空中か？」

『反応はかなり大きいですが、水上です。北方より接近・・・それが、速度が・・・』

「どうした？」

何か言いにくそうな事をのど元に痞えさせ、黙りこんでしまうバン。

『速度が、120ノット。方位0-0-2より急速接近！』

「・・・もう一度確認しろ。反応は間違いなく水上なのか！？」  
航空機なら120ノットという速度は普通に有り得る。

最近注目されているジェット機では遅すぎて難しい速さだが、未だに世界中に普及しているレシプロ機ではどうと言う事は無い速度。カイトは出来ればレシプロ機のような低速機であることを願った。

(しかし待てよ・・・反応はかなり大きいと言わなかったか？)

疑問がカイトの頭を逆流した時と、CICの回答がもたらされた時とが同じであった。

『反応、間違いなく水上です』

「・・・了解した。引き続き、警戒を・・・」

カイトはCICに接近する超高速艦の警戒をするように指示、加えて自分はその事を米海軍に知らせる為通信回線を開かせた。

相手はクリスタ大佐の指揮するアトランティス、だが損傷で忙しかったためか呼び出しに対する応答が中々遅い。

『こちら、アトランティス。フリースベルグ艦長、悪いけど用件を1分以内でお願いできる？』

艦載機への対応で忙しいのだろう。

損傷したのは甲板の表面で、内部には損傷はさほど見られないものの艦載機の運用機能を奪われた空母は、時に主砲を撃ち抜かれた戦艦よりも痛々しいものがある。

だが、この事は伝えなければならぬ・・・

「クリスター大佐、先ほど僚艦が南方から所属不明艦が接近していると報告はしたと思います」

「ええ、もうこちらのレーダーにも映っているわ。何か、新しい動きが？」

「いえ、今度は北方から新たな反応です」

「まさか、挟み撃ちに？ でも、それなら米軍の西沿岸レーダーが発見する筈よ」

「いえ、数は1つです。しかし・・・」

カイトの表情が曇る。

この時のカイトの心境は、先程おそらくバンが抱いたものとそう違わないだろう。

「水上の反応が120ノットでこちらへ接近してきます」

「ひゃ、120ノット!？」

水上の反応120ノットという情報に、セシリアだけでなく周囲のクルー達も驚愕する。

さつき自分がバンからその情報を聞いた時とほぼ同じ反応を、セシリアもしたようだ。

「そ、それは・・・何かの見間違いじゃないの？」

「・・・と、先ほども自分はそう思っていました。ですが、レーダーは間違いなく、

海上に120ノットで疾走する水上艦があるのだと、そう告げています。

反応を見る限り、大きさはアイオワ級よりも一回りも二回りも大きいです」

「そんな大きなものが・・・そんなことって、あるの？」

「俄かには信じがたいですが、兵器を超えた兵器ならば有り得ない事は無いかと」

言った本人のカイトも・・・そしてそれを聞いたセシリアも先ほどの巨大爆撃機の事を思い浮かべた。

ああいうのが、まだ沢山居たとしたら・・・確かに有り得ない事じゃない話。

空想でしか考えたくない事が、だんだんと現実味を帯び始めている。「でも、艦載機が！・・・艦載機の殆どが、もう戦う力は残っていないのよ。」

彼らを下ろせる場所だって・・・」

セシリアの懸念は、戦力不足だけでは無かった。

もし来たのがあの巨大爆撃機のようなモノだったら、今度こそ本当に皆やられるかもしれない。

駄目押しを増援・・・その時、長官がカイトの受話器を無言で奪った。

この人・・・言うてはいけないのかもしれないが、やる事が突然な時が多々あるようだ。

「空母なら、ある」

「え？」

「長官？」

セシリアはもちろんだが、ウィルキア近衛艦隊のカイト以下フレースベルグのクルーでさえそんな事は初耳だった。

「正確には航空戦艦ではあるが、北方より第11近衛艦隊のシエルドハーフェン、ブローズグホーヴィの両艦が接近している。」

おそらく、もうそう遠くは無い所に来ている筈だろう」

シエルドハーフェンとブローズグホーヴィ、確か超々弩級戦艦として建艦されたはずではなかったか？

「有事の際には、戦艦と空母の両方の性質を兼ね備えた艦がウィルキアには必要だった。」

あの二艦は、僅か一週間程度ドックに入るだけで航空戦艦として機能するようになる。

この事は、ウィルキア海軍でも一部にしか知られてはおらんがね。もう隠しておく必要もなかるう艦長、彼らの位置は分かるかね？」

「は、はい・・・CICに尋ねます」

すぐさまカイトは置いていたインカムを手に取り、CICへとコンタクトを取った。

「CIC、艦橋。北方に友軍艦隊の姿は確認できないか？」

「こちらCIC、超巨大爆撃機の時と同様にレーダー上にノイズが発生しています。しかし、方位3・5・5に微弱な反応あり。」

数は不明、速度約30ノット以上、大型と中型が入り混じった編成のようにも見えます。ですが、レーダーノイズにより正確さに欠けます」

（レーダーがそれなら、おそらく通信もあまり期待できないな・・・）

「分かった、引き続き監視を」

先程と同じような事を言つて、再度カイトは長官の元へ戻る。

「長官、レーダーノイズの影響で第11艦隊であるかどうかまでは不明ですが、方位3・5・5より接近する反応があるそうです。」

数は不明、速度は30ノット以上」

速度が30ノット以上、もしこれがシールドハーフェン級二隻が率いる第11近衛艦隊の本隊ならば、

かなり全速に近い速度で航行していることになる。

長官が顔を歪ませて唸り、そして考える。

敵である可能性も、充分に有り得るから迂闊に着艦のために接近せよとは言えなかった。

「長官、米海軍に協力を仰ぎ、AEW（早期警戒機）で第11艦隊本隊の存在を確認してもらつと良いのでは？」

リナの明晰な頭脳が、こういう時だからこそすぐに的確な解決策を導き出した。

それに対して長官も無言でうなずくと、再びセシリアとの通信を再開する。

「クリスター大佐、そちらのA E Wをお貸し願えないだろうか？」

「ホーク・アイを、ですか？」

「接近しているのが本隊か否かを確かめたい。もし本隊のシエルドハーフェン級が確認されれば、貴艦の艦載機の着艦場所が見つかる」

本隊の接近を確認したいウィルキアと、艦載機を下ろせる場所を見つけない米海軍の利害は一致した。

「わかりました。A E Wに連絡、そちらへ向かわせます。ですが、あまり時間はありません・・・」

最短であと30分ほどしか飛行できない機さえあります。間に合うのでしょうか？」

スピーカー越しに彼女の心配そうな声が聞こえ、同時にどんな表情になっているのか大体の想像ができた。

「大佐、心配には及ばない。シエルドハーフェン級には、使用可能なデッキは一艦あたり二本、計四本ある。」

全機の着艦にそんなに時間はかかるまい。もっとも、接近しているのが本隊であればの話だが・・・」

長官がセシリアとの会話を終わっていないその時、C I Cのレーダースクリーンを静かに監視していたバンが不吉な影を発見した。

ノイズの発生源となっている巨大艦の近くから、小型の光点が分離した。

地上では無い、空中の反応・・・最初は一つかと思えばどんどん数を増やしている。

「3つ、いやもっとだ・・・速い！ 警報！ 接近する小型飛翔体あり、数は15以上！」

「C I C、ミサイルか！？」

だがそんなはずは無い・・・レーダー照射も何も受けていなかった筈。

だとすれば……!

「艦長、ロケット弾です! 全部で18発、こちらへ向かってきます!」

「取舵一杯! 回避!」

警報が響き渡る中、その音に決してかき消されない大声でカイトは叫んだ。

多連装のロケット弾が、鉄の雨となって息も絶え絶えだった艦へと襲いかかる。

フリースベルグのCIIGSから放たれた砲弾が空中で炸裂し、振り撒いた破片のシャワーがロケットを貫き……

きんぼうからは20mバルカンファンクスが唸りを上げて、秒間60発と言う超高速連射でタングステン製の弾丸が撃ち出される。夜空が煌めき、オレンジ色の爆炎が空中で広がった。

「最初からわかってはいたが、やはり敵だな……」

「敵巨大艦、本艦との距離30kmに迫ります」

「よし……ヴェイエーラ、照準、目標敵巨大艦」

通常弾を装填したフリースベルグ主砲の射程距離に、早くも敵巨大艦が差しかかろうとしている。

120ノットの超高速の船足が、遠距離から近距離へ一気に飛びこむことを可能としているようだ。

「撃てーっ!」

フリースベルグの主砲が一斉に火を噴き、それに合わせるかのよう  
に米海軍の戦艦も主砲を斉射した。

カイトはこの時、どこへ逃げようとも必ずヒットする絶妙な角度へ  
砲弾を放っている。

それに米海軍の主砲斉射も加わり、敵巨大艦が逃げることのできる  
エリアはさらに狭くなる。

「着弾、今!」

しかし海面より舞い上がった水柱を見て、カイトやリナ、CIICか

らモニターで様子を見ていたバンは絶句した。  
上がるのは水柱のみ、爆炎が全く見当たらない。

それはつまり、一撃も命中していないという事を直に見せつけていた。

そしてそれは正しく、霧雨のように海水が舞い上がっている海上からあの巨大艦が姿を現した。

「避けたのか・・・全て!？」

さらに、米海軍ミサイル巡洋艦が放ったミサイルさえも、巨大高速艦はロケット砲で叩き落としていた。

その時、前方の遙か遠方に見える巨大艦の前後に光が見える。

それは自分達の攻撃を信じられないような俊足でかわし、次は自分の番だと言わんばかりに放たれた巨大艦の砲だった。

「発砲炎だ！目標は!？」

「こちらCIC、目標・・・湾口部の米海軍艦艇と思われまます!」

あそこには傷ついてやっとの事でサンディエゴを脱出した艦艇が！カイト達よりも先に、より着弾点に近かったアトランティスから数発のシースパローが放たれるも全弾を迎撃するには至らなかった。

破壊音が湾口周辺一帯に轟き、火球が舞い上がる。

「駆逐艦ブローヴァ！艦中央部に被弾！機関停止、航行不能!」

「巡洋艦ラングレイ・・・本艦はもう駄目だ、沈没する!!」

駄目押しの一撃を受けた艦が次々と海面下へとその姿を没する。

あの艦の象徴、命でもあつた艦魂達・・・時に反発しあい、時に喜び合い、昨日も語り合つた筈の戦友。

その友たちが、消えていく、命を落としていく・・・

「戦艦ラシユモア、大破！艦傾斜、後方に8度、左へ32度!」

「残念ながらこれまでだ・・・総員退艦！繰り返す、総員退艦!」  
舞い上がる黒煙と暁の海に流れ出る艦の生血、黒い重油が艦の死をその場にいた全員に嫌でも悟らせる。

直後、浸水が増大した戦艦ラシユモアは横転して大爆発を引き起こした。

「ラングレイ・・・ラシユモアさんまで・・・そんな、そんなッ！  
！嘘よ！」  
甲板の傍らでミサイル巡洋艦ヒューストンの艦魂ヒュースが非情な  
現実に泣き崩れた。  
助けられなかった友人の死に、彼女は打ちひしがれていた。  
艦と共に死んだのは、なにも艦魂だけでは無い。  
救援もままならぬうちに、爆発を引き起こした艦の周辺には多数の  
浮遊する物があった。  
その中の大半が、乗組員の遺体・・・  
次は自分達だと・・・残存艦のクルーの脳裏にその悪夢がよぎった。

その頃、離れること北方に40km。  
米海軍の早期警戒機やRF-18偵察機を向かわせ、シエルドハー  
フェン級の発見に全力をあげていた。  
アトランティス艦載機の早期警戒機、ブルーテリアでもヴィルベル  
グイントの影響で

感度が悪くなったレーダーでは無く目視で発見しようとしていた。

「マークス、そっちは見えないか？」

「何も無いね・・・お前こそどうなんだ？」

副操縦席のマークスが傾いた機体から眼下に目を凝らす、雲に阻  
まれてよく見えない。

「こつちも何も無い、やべえぞ早いとこ見つけないと全機ガス欠だ」

「あの爺さんの言ってたこと、本当なのか？」

「本当かもしれない・・・」

「かもしれないが？」

「・・・途中で全部やられたっていう可能性もあるぞ」

二人の脳裏に基地を襲った巨大爆撃機や、今なおサンディエゴの沿  
岸で戦闘を繰り広げる巨大艦が浮かぶ。

そんな敵に襲われたなら、確かにここに来るものが、来るはずだっ

たものへと変わってしまうだろう。

その時、随伴する偵察機がリーダー上に何かを発見したと報告が入った。

「マークス、右40度に何か見えないか？」

後方の通信士が副操縦士のマークスに呼びかけた。

「右にか・・・？」

その時、雲の切れ間から海面に白く伸びる何かが見えた。

「ん？ あれは、まさか！」

そして雲が切れた時に現れたのは、大小合わせて7隻の隊列を組み、白い航跡を後ろに伸ばして航行する第11艦隊本隊だった。

「発見！ 全部で7隻、間違いない・・・ウिल्キアの中将が言っていた北方から来る本隊だ。」

「うち二隻は飛行甲板らしき設備を持った航空戦艦です。 あれが

シエルドハーフェン級、アイオワより大きいぞ・・・」

本隊の発見に、歓喜の声が上がる艦載機部隊。

ところが、サンディエゴの戦闘はあまり好ましくない状況となっていた。

その頃、ウिल्キアと米海軍の残存艦に向けてあの巨大艦から勧告が発せられた。

『アメリカ太平洋艦隊の残存艦、ならびにウिल्キア近衛艦隊の残存艦に告ぐ。』

本艦は超兵器、超高速巡洋戦艦ヴィルベルヴィント。

ご覧いただけたか、これが我々ウिल्キア帝国の“力”だ・・・

もはや、諸君らの戦いの常識が通用などはないのだ！

10分だ、10分だけ時間をやる・・・今降伏するなら命の保証はしよう。』

圧倒的な戦力差 絶望的な破壊力。

既に戦意を喪失しかけている友軍艦艇の今の状況は、まさに正視に

耐えることのできないものだった。

あれだけあつた艦が、難攻不落と思われていた米海軍太平洋艦隊が見る影すら無い。

『こ、こちら米海軍駆逐艦ブローヴァ・・・本艦はこれ以上の戦闘は不能と判断、貴艦に降伏する』

出港前にアルケオプテリクスの速射砲攻撃でかなり酷くやられていた艦だ。

新手が現れたとなれば、降伏も無理のない事だった。

屈辱にまみれた無念の叫びが、共通チャンネルを通じてヴィルベルヴィントへとつながる。

そしてそれは、その回線を使用できるフリースベルグも傍受した。

『米空母サンアンドレアス、我々も貴艦の申し出を受け入れたい・・・降伏する』

『米戦艦ゲティスバーグ、無念だが乗組員達の命には代えられない・・・ウィルキア帝国に降参する』

太平洋艦隊旗艦までもが！  
いや、あんな次元的な違いを見せつけられたら無理もないのか。

米海軍が次々とあの悪魔の艦にひれ伏している中、沈黙を守り続けた艦がある。

ウィルキア近衛海軍第11艦隊  
彼らはの瞳には、まだ戦意の火炎が燃え続けていた。

どうやら敵さんもそれに気付いたらしい。

ずっと無視し続けていたこちらに対して、ヴィルベルヴィントが交信を求めてきた。

「艦長、どうしますか？」

「とりあえず、全艦放送に繋げ」

「はっ、了解しました！ どうぞ」

一瞬の間を空けて、向こうの艦長が呼び掛けてきた。

『帝国に反旗を翻す叛徒の諸君、諸君は勇敢に戦った。ヴァイセ  
ンベルガー閣下も、

諸君の事を高く評価していた。だが、物事には限界と言う物がある。

これが最後だ、ウィルキア帝国へ降伏せよ、第11近衛艦隊」

降伏　確かに降伏すれば我々幹部はともかく、他のクルーは平穏な生活に戻れるかもしれない。

だが、そうすればもうウィルキアの暴走を止めれる者は誰も居なくなる。

艦橋の左へと視線を向けると、不安そうにこちらを見つめるフレースの姿があつた。

彼女だつて、そんな国の手先にはなりたくないに違いない・・・強気のリナは、そんなことになるうものなら自害でもしそうな勢いだった。

彼女達の頷きを確認すると、カイトは立ち上がる。

そして、艦長席の後方のバクスター艦隊司令長官の方を向いた。

「長官　我々の覚悟は出来ています。返信は如何いたしますか？」

「うむ・・・」とだけ呟くと、長官は軍帽をかぶり直して絶妙な間を空ける。

そして、白髪と白眉の間から老人とは思えないような男の視線が艦橋越しに小さく映る敵艦を捉えた。

「艦長、ならば私の決断も君達と同じだ。通信士、『馬鹿め』だ」

「は？」

今なんて言った？という表情で通信士がインカムをおさえてこちらを覗きこんだ。

「『馬鹿め』だ。返信は『馬鹿め』と送ってやれ！」

「は、はっ！」

慌てるように通信回路を開く通信士、それに僅かに笑みを浮かべたリナと視線を合わせるとカイトは

来るべきもう一戦に備えて、もう一度艦長席へと深く座った。

「こちら第11近衛艦隊旗艦フリースベルグ」

『近衛艦隊旗艦か・・・降伏するかね?』

その野太い声が艦橋に聞こえた時に、もう幹部達の中にはクスクスと笑い始めた者までいた。

「こちらの返答を伝える　『馬鹿め!』、繰り返す『馬鹿め!』、以上!」

『ぬっツ!!ぬっっっっっっっっっっ!!　ば、馬鹿にしやがっつて!!!』

大熊にも勝るとも劣らないような唸り声が聞こえてきた。

『よ、よかろう・・・ならば単艦で貴様ら全艦、海の藻屑と変えてくれる!』

接近中のウィルキア帝国艦隊、手を出すな!　こいつらは本艦の獲物だ!』

鼻を折られたヴィルベルヴィントの艦長、するとフリースベルグでも当然のことがレーダー反応となって表れる。

『艦橋、CIC、敵巨大艦航行を再開!　こちらへと向かってきます!』

「CIC、艦橋、了解した!　全速前進!180度回頭!」  
激昂した猪が直進して突撃してくるように、ヴィルベルヴィントもまたまっすぐに突っ込んで来る。

主砲が方向を上げながら全速力で迫るが、怒りで手元が狂っているのか直撃コースの砲弾は飛んで来ない。

「しかし、艦長・・・何か手が?」

怒らせて自分達だけに注意を引くのには成功したが、それでなおかつ敵を撃破するには巧妙な罠が必要だ。

「手なら、ある・・・」

そう言うつと疑問符を頭に浮かべるリナを横目に、カイトはCICとの連絡を取る。

「CIC、敵巨大艦の速度を計測、それから短魚雷の照準を・・・」  
彼は前方で沈みゆく戦艦ラシュモアの両断された船体を見つめる。

「前方、戦艦ラシユモア、その底部10m以内で合図とともに遠隔爆破、いくら高速艦でも巨大な鋼鉄の漂流物に

行く手を阻まれれば、船足は落ちる。その瞬間に、主砲で敵艦中央部の煙突を狙う」

「煙突？」

モニターの後方に移るヴィルベルトの煙突を見て、リナはあ  
る事に気付いた。

煙突と艦を繋ぐ部分辺りの鋼板が、異様なほど赤く赤熱しているよ  
うだ。

「これは私的見解だが、あれだけ大きな艦をあれだけの速さで動か  
すならそれに見合った大出力の機関が必要だ。

もしかしたら、あの艦・・・あれだけの煙突じゃ排熱機構が足り  
ないんじゃないのか？」

煙突を破壊して排熱能力を著しく低下させれば、機関がオーバーヒ  
ートするかもしれない・・・

その時CICが、巨大艦から何か放たれた事を察知した。

『敵巨大艦、魚雷発射！ 探信音、多数確認！』

探信音が放たれているという事は、誘導魚雷！

「デコイ、一番、二番、発射！」

フリースベルグの艦尾から二つの球体が放たれ、放物線を描いてポ  
チャリと海中に落ちる。

その球体からはフリースベルグのエンジン音に似せた音が発せられ  
ており、魚雷はそれを目標と誤認して追尾してしまうという仕組み  
だ。

そしてそれらはカイト達の目論見通り、デコイに命中した魚雷は爆  
発して大きな水柱がそびえ立った。

ちょうどその時、水柱を目隠しと耳栓にするようにフリースベルグ  
から多数の魚雷がラシユモアへと放たれる。

『現在敵艦約100ノット、本艦まで20秒の距離です』

「よし、ラシユモアの分断面を通過後、10秒後に取舵30、その

さらに10秒後に魚雷を爆破！」

まるで渓谷を通過するように、フリースベルグは戦艦ラシュモアの裂けた船体を潜り抜けて行く。

それと同時に、バンが発射のタイミングを見計らい始める。

「奴らめ、大口を叩いておきながら逃げの一手とはな・・・このまま浅瀬まで追いこめ！」

艦橋でヴィルベルヴィント艦長が吠える中、黒い服を纏い日傘をさしたあの少女は左舷の艦首部に佇んでいた。

(逃げるだけ・・・本当に逃げるだけかしら?)

フリースベルグの行動を疑問視しながら、ふと彼女がゆっくりと沈みゆく戦艦ラシュモアに目をやると・・・

「あ・・・！」

先程自分達の魚雷で気泡だらけになっている海中、戦艦ラシュモアよりわずかに深い地点、そこに細長い何かが飛び込んでくる。

「・・・あら、意外とやるじゃない」

自分達の危機を察したにもかかわらず、彼女の表情には傷つく事への恐れでは無く笑みが浮かんでいた。

「今だ！」

取舵により左へと針路を変更し始めたフリースベルグの艦橋に、カイトの声が響き、それはCICにも鮮明に伝わった。

「爆破！」

バンが復唱しながらタッチパネルで魚雷爆破の操作を行うと、それは米海軍戦艦ラシュモアの底部で大爆発を引き起こす。

その盛り上がった海水に押し上げられ、左右の底部で爆発が起こったラシュモアの船体が重力に逆らえずに中央へと引っ張られる。

そしてそれは分断面を通過しようとしていたヴィルベルヴィントをうまい具合に挟み込んだ。

ちようど両開きのドアに挟み込まれたように、ヴィルベルヴィント

はその動きを停めてしまった。

超高速で移動するために座席にシートベルトがついているヴィルベルヴィントだが、この時はそれが干切れそうになるくらいの振動が乗組員達を襲った。

「ぎ、魚雷か!？」

「いえ、船体のあちこちで浸水!? 馬鹿な、魚雷だけでこんな事になるとは・・・!？」

「確かに魚雷は使ったけど、原因は別よ・・・」

その時、混乱を極める艦橋内に彼女が現われた。まるで女王が謁見の間に現れたかのように、艦橋内は瞬く間に静寂に包まれる。

「ヴィルベルヴィント・・・」

「ああ、言って無かったかしらね・・・私はヴィルベルヴィントであつて、ヴィルベルヴィントじゃないの。」

それより、まんまと彼らの罠にひっかかってくれたじゃない？」

数か月前に自分はヴィルベルヴィントの艦魂だと告げられ、実は違いますと突然の宣告を受けた艦長。

そんな彼に、少女はずいつと詰め寄る。

「あーそうそう、本国のヴァイセンベルガーからの命令を伝えるわ・・・」

失態をおかした場合一番聞きたくないであろう名前を聞いて、思わず艦長の表情が固まる。

そして妖艶に彼に寄り添うように少女は耳打ちでその内容を告げた。その途端に、男の目が見開かれその表情が恐怖一色に染まる。

「か、艦長?」

「・・・つだ・・・」

「え?」

「殲滅だ!!! この艦の全力を以て、敵艦を全て海中に沈めよ!」

まるで狂気に取りつかれたかのように、突然艦長は大声で無茶な命令を飛ばす。

「そ、そんな・・・浸水で艦の船足はかなり落ちています。」

「一度撤退するべきでは!？」

部下からは突撃命令を諫める声も上がるが、それをはねのけるように彼は叫ぶ。

「奴らを殲滅せぬ限り、我々に退路は無い! このヴィルベルヴィント、これだけで沈むほどヤワでは無い!

主砲照準、目標は我々を姑息な畏へと誘い込んだあの艦だ!」

ヴィルベルヴィントが航行を再開し主砲塔が左へと旋回、砲口が取舵をとったフリースベルグへと向けられる。

望遠カメラを応用した照準器で主砲の照準を合わせようとしていた時、その画面をのぞいていたクルーは

向こうに見えるフリースベルグの前部と後部でキラリと光が煌めいたのを見た。

そして次の瞬間・・・

ズガガアアアッ!!

その光の正体が何かを悟る前に、フリースベルグから放たれた主砲弾がヴィルベルヴィントに全弾命中した。

「被害個所を報告!!」

その時、またしても振動と爆音がヴィルベルヴィントを揺さぶった。

「な、何だ? また命中したのか!？」

「い、いえ・・・これは・・・」

「どうしたのだ?！」

「先程の攻撃で、煙突が破壊! ダメージを受けた機関部の一部が爆発を引き起こしたようです!」

「な、何だと!!!？」

「艦の速力低下・・・限界出力60%まで低下します!」

巧妙なカイトの畏とフリースベルグの精密な射撃能力によって、ヴィルベルヴィントは俊足を失った。

『やった！やりました！ 敵艦、機関部を損傷した模様です！』  
砲雷長という役職を忘れたかのように、バンが歓喜の声を上げているのがフリースベルグ艦橋にも聞こえた。

本当なら自分もここで飛びあがりでもしたいところだが、肝心のヴィルベルヴィントはまだ

浮かんでいるだけでなく戦闘意志をも未だ併せ持っている。

「よし、本艦は少し接近し過ぎている。今のうちに来るだけ距離を稼げ！」

「艦長！ 敵巨大艦の後部主砲塔、こちらを向きます！」

リナのモニターには、ゆっくりと重たい旋回をするヴィルベルヴィントの主砲塔が映っている。

遠距離ならレーダーを見て回避する暇もあるが、近距離で撃たれたら命中する可能性はぐんと高くなる。

「思ったより頑丈だな・・・全速前進！ジグザグ航行で回避！ 総員、至近弾に備えよ！」

この時カイトは至近弾・・・いや、フリースには悪いが一発くらいの命中弾を覚悟していた。

だがヴィルベルヴィントの砲口から発砲炎が噴き出すより早く、CICがレーダー上に何かを発見した。

『艦橋、CIC・・・方位3-5-5より何かか飛んできます。』

数は・・・10、11・・・13です！ 砲弾！？』

「どこからだ？」

『北方から・・・これはまさか！友軍艦隊！』

この時の“まさか”は、明らかに聞いていて悪いものではないように思えた。

別れること数週間、また無事に再会する事が出来たのだから・・・

「主砲、発射用意！」

フリースベルグを沈めた後に、残りの艦も沈めようというシナリオを脳内に描く艦長。

超兵器という神の武器を与えられた自分の顔に泥を塗ったあの艦を、沈めないことには彼の怒りは収まらなかった。

「レーダーに反応！ 数13・・・これは！」

どうしたと艦長が聞く前に、ヒュルルルと水笛のような甲高い音が艦橋内にも聞こえる。

ズガツズガツツ！！

そして、何かがヴィルベルヴィントに突き刺さり爆発を引き起こした。

「ぐぐつ・・・こ、今度は何だ！！？」

下を噛みそうになるくらい大きな振動が艦を揺さぶる。

「艦長！ 後部主砲塔にダメージです！ これでは、もう・・・」

モニターには、後部の主砲塔が使えなくなった事を意味する赤いランプが点灯していた。

「くうう、全速を出せ！ とにかく速度を出すんだ！」

舷側に突き刺さっていた戦艦ラシユモアが与えた損害は大きく、ヴィルベルヴィントは本来の速力を失っている。

これは、失いかけていた友軍の戦意を回復させるには十分すぎる報告だった。

「初弾で命中なんて、さすが姉さん・・・」

「自分でも少し驚いたが、腕は落ちていないみたいだ」

シエルドハーフェン艦橋上の防空指揮所から、着弾の様子を見ていたシエルとローズ。

彼女の主砲が放った46cm砲弾がああヴィルベルヴィントに突き刺さった。

「フリースも大分奮戦したようだな・・・見る、機関部をやられている」

「うーん、さすが期待の新人っ子は違うわ。 あーんか弱そうな

子だったのに、なかなかやるじゃない？」

「フリースもだが、乗っている人間もなかなか腕なんだろうな。」

「長官が彼を艦長に薦めた理由も分かる」

彼女たちが戦闘の成り行きを見守る中、艦橋では次なる行動を始めようとクルー達が忙しく行き交う。

「全艦、左右に展開開始！ 巨大艦の退路は北方、それを我々が押さえ込む！」

前方の主砲から未だに砲煙の残滓が立ちのぼるシエルドハーフェンとブローズグホーヴィの二隻が、

面舵と取舵をとりそれぞれ左右に展開する。

ブロード艦長の指示により、ヴィルベルヴィントの包囲網が出現した瞬間だった。

「止むを得ん、一時パナマの泊地まで撤退する」

このままではやられる、そう悟った艦長が先ほどの少女の囁きをも忘れて撤退しようと南方に針路を変える。

その様子をカイト達もレーダー上で視認した。

「逃がしてはいけない、また戻ってきますよ！」

「分かっている。だが、本艦の速力では損傷したとはいえあの高速艦の足には追い付かない」

このまま逃がしてしまうのか・・・？

また襲撃に遭うという嫌な予感がしていた時、急にヴィルベルヴィントが転進した。

そして次の瞬間、ヴィルベルヴィントがあのまま進んでいたら到達していたであろう地点に多数の水柱があがった。

それを察知してヴィルベルヴィントは急に針路を変えたりしたのでろう。

となると砲弾を放ったのは友軍の艦艇か・・・！

「あの水柱は、砲弾・・・今度は誰が？」

「艦長！ 南西より友軍艦隊、ハワイを脱出した本隊です！！」

高倍率の光学映像には、堂々と先頭をきる巡洋艦の容姿。

潮風が吹きつけるそのマストには、白い鳥が描かれたスカイブルー

基調のウィルキア王国の国旗がなびいていた。彼らと再会できるのをどれほど待ち望んだことか。

先頭を切っている人物の事は、大体知っている。

ある時は大親友、ある時は不倶戴天のライバル・・・そして今は最も頼もしい援軍。

「遅いぞ、シウルツ・・・仕方ないチエックメイトは譲る」

その時のカイトの表情には、まるで最悪の事態から生還した人のような安堵の笑みがあった。

これで勝てる・・・そうカイトが心の底から確信した瞬間だった。

巡洋艦ウンディーネの主砲から放たれた砲弾は命中こそしなかったが、敵巨大艦に退路がない事を示すには十分であった。

しかしクルーの多くは命中しなかった事に対する落胆より、残存する艦が予想よりも数多く残っている事に対する喜びがあった。

リーダー上に米海軍やウィルキア近衛艦隊の艦船が映っているのを確認して、シウルツはクルーと同じく一抹の安堵を浮かべていた。

サンデイエゴ基地急襲の報せを聞いて間に合わないかもしれないという思いもあったが、それを振り払うように

全速前進でここまで辿り着いた甲斐があった。

「フリースベルグ、シエルドハーフェン、空母アトランティス以下多数の友軍艦船の残存を確認。」

よかったあ、間に合ったみたいですね・・・」

「ナギ少尉、安心するのはまだ早い。それに、おそらくこれだけ残存艦が居るのは彼のおかげだろう」

そう言いながら、シウルツは10時方向からヴィルベルヴィントを追尾しているフリースベルグを見据える。

「以前仰っていた、友人の方・・・ですか？」

「まあ、そう言うところですよ博士」

シウルツは後ろを振り返ると、グリーン基調のドイツ軍服に白衣を

纏った女性にそう告げた。

「艦長！ 第11近衛艦隊旗艦フリースベルグより入電、敵巨大艦は艦中央部の船体と機関部を損傷しているとの事です」

そういわれると確かに、事前に聞いていたよりも速度がだいぶ落ちているようだ。

「なるほど、少佐これはチャンスです。超高速という敵艦のアドバンテージが無くなった今、アレを沈めることができかなり容易になります！」

それに、敵艦はかなりダメージを負っているものと見られます。」

「なるほど、チェックメイトを譲ってくれるという訳か・・・」

博士と呼ばれた女性、エルステイーネ・ブラウンの言葉にうなずきながらシュルツは無線送話機を握りしめた。

「本艦はこれより、敵巨大艦との戦闘に入る！ 各員の奮闘に期待する！」

各区から「やってやるぜ」等と威勢のいい声が上がると、シュルツは控えめに笑みを浮かべて再度艦長席に座る。

再び軍帽をかぶり直し、シュルツが見つめる前方の海原には後方から黒煙を上げるヴィルベルヴィント。

そしてタンブルフォームの細く華奢に見える船体からは想像もつかないような火力、そしてその名に恥じない英知を以て

巨大な敵を単艦で追い詰めつつあるフリースベルグ。

これが二人の最初の共闘だった。

## 第十五話 旋風止むべし！（後編）（後書き）

超高速 艦を超兵器っぽく書いた結果がこれだよっ！

（何逆ギレしてんだか・・・）

思えばヴィルベルヴィントって高速ということ以外は、他の雑魚艦と大して変わりませんね。

本文最後の方でも博士が言っていました。ヴィルベルヴィントから俊足を取ってしまうと最早ただの大きいのです。

「返信は『馬鹿め』」

ネタは有名な日本のSFアニメから拝借しました。

今でもつべで見たりしますが、カッコよさは全時代共通と思う今日この頃。

また大学の新学期が始まってしまいましたが、これくらいの更新速度なら維持できない事は無いかなと思います。

それから、タイトルが変更になりました。

「海原の大鷲」

「鋼鉄の咆哮〜海原の大鷲〜」

うん、俄然鋼鉄っぽくなりましたね！（自画自賛）

タイトルは変わっても、内容やストーリーは変わりません。

これからも、「鋼鉄の咆哮〜海原の大鷲〜」をよろしく願います。

感想・評価、お待ちしております！

次回 第十六話 「暴風鎮まる時」

## 第十六話 暴風鎮まる時（前書き）

遂にこの時が来た！！

みなぎってきたWWW！！

ヴィルベルヴィントといよいよ決戦です！

更新を早くしましたが、前回の半分くらいの短さです。

更新を慌てた理由（？）は、これから宮崎に行ってくるからです  
ノシ

悪いのは宮崎です（嘘）

文句なら東国原知事にでもよろしくです（大嘘）

### 《注意》

今回は一部に、人によっては原子爆弾を思い浮かばせる描写がある可能性ががあります。

そういう描写が苦手という方の閲覧は、ご注意くださいるか御遠慮願います。

別に大丈夫と言う方は、どうぞご覧ください。

## 第十六話 暴風鎮まる時

ここにきて、形勢は一気に我々に有利となった。

頼もしい増援、敵の大幅な弱体化。

しかし黒煙や時折紫電を散らしてもなお、巨大艦は航行を続けている。

それでもまだ60ノットという通常艦では考えられない速力を保っている事は流石と言えよう。

・・・この機会を逃がせば惨劇は繰り返される。

例えこういう兵器がまだ沢山あるとしても、一つでもそれを減らす事は祖国解放を願う我々にとって大きな一歩に違いない。

ヴィルベルヴィントを撤退では無く撃沈させると、カイトは決意した。

あんなものは、この世に存在してはいけない物だと・・・

「敵艦に対し、我々は遊撃を仕掛ける。 きんぼうへ、本艦への随伴を指示」

シユルツ達の解放軍本隊の船団が南方への退路を絶ち、シエルドハーフエンを主力とした第11近衛艦隊本隊が北方への逃げ道をふさぐ。

その間速力と機動力があり、誘導弾や魚雷などの火力の高い多数の兵器を搭載しているフリースベルグときんぼうが

ヴィルベルヴィントを攻撃しつつ、友軍艦艇をその砲火から守るという作戦だ。

良い言い方をすれば臨機応変、悪く言えば行き当たりばったりだが、この時はこれがベストだ。

30ノットの速力でフリースベルグと、その左舷100mのポジションにきんぼうがつく。

まるで大魚を追い込むために意気込む漁船のように、その包囲網を狭めていく。

先程のシールドハーフェンの砲撃により大破した後部主砲塔からは、流石に砲弾が放たれる事は無い。

だがその周辺に設置されていたロケット砲台のいくつかははまだ健在であり、流星のように多数のロケット砲をこちらへ放って来る。

「面舵10、トマホーク撃てえーっ！」

前方の大型ミサイル用のVLSから、固体ロケットに点火したミサイルが垂直に飛び上がる。

一定の高度に達したトマホークは、後部のブースターを切り離して主翼を展開してヴィルベルヴィントへ向かっていく。

「ハーブーン発射準備よし！」

「一番発射用意・・・撃てーっ！」

同じころきんぼうの管中央部に交差するように組まれた対艦ミサイル発射機からも、閃光と白煙を巻き上げて対艦ミサイルが飛翔する。二筋の白く伸びる白雲が、黒煙を上げるヴィルベルヴィントの後部に吸い込まれていくように消えていく。

本来の半分以下に迎撃能力が落ちたヴィルベルヴィントに、避けきれだけの余力は無かった。

ポツポツと二つの火球がヴィルベルヴィントの艦尾で膨れ上がる。

その爆発は傷ついていたヴィルベルヴィントの後甲板の鋼板を粉碎し、それらを空へと巻き上げた。

「後部に二発被弾！ 推力低下します！」

あちこちに艦のダメージを知らせる赤いランプが点灯し、それらが危険域であることを報せる。

後部で発生した火災は収まるどころか更に延焼し、黒煙が僅かに艦橋内にも流れ込んできた。

「こっとなってしまつては、ただの大きいだけの艦です！」

「分かっている！！ ならばさっさと・・・ぐぬっっ！！？」

くぐもつた音と振動が発生したと思えば、ヴィルベルヴィントの右舷に三本以上の水柱があがった。

「ぎ、魚雷です！ 破孔部を狙われました、浸水域が拡大します！」  
艦長自身分かっていた、これ以上の戦闘継続は危険であることは。  
だが超兵器という超常識的存在の示威のために半ばデモンストレーション要員として送り込まれた自分達が、

多勢に無勢とは言え通常艦に追い込まれて撤退などしたらどうなる？

「何度も言うが、我々に退路など無い！ ダメージコントロールおよび前甲板主砲により敵勢力への攻撃を継続せよ！」

焦りと汗を浮かべ、艦長が吼えるが周りのクルーの戦意は減退の途をたどる。

ウィルキア近衛艦隊と米海軍の連合艦隊の戦意が上がるにつれて、  
ヴィルベルヴィントの戦意はどんどん下がって行っていた。

その様子は、まるで天秤のようだった。

「一番二番、撃てーっ！！」

右に旋回し二十度ほどの仰角をとるヴィルベルヴィントの主砲から、  
爆炎が舞い上がり砲弾が放たれた。

「至近弾に備え！ 全速前進！」

ヴィルベルヴィントから砲弾が放たれたのを見て、シュルツは訓練  
通りの回避方法でなく加速による回避を試みた。

魚雷の発射によって右舷側をヴィルベルヴィントに対してさらけ出  
していたウンディーネ。

回頭では十分な回避行動が取れないとシュルツが即座に判断したた  
めだ。

「着弾！」

レーダーを見つめていた士官から声が上がると、直後に後部から船  
体を激しく揺さぶるような衝撃が襲う。

「くっ……こちらも撃ち返せ！ 速射砲用意！」

艦橋付近の速射砲がクルリと旋回し、立て続けにヴィルベルヴィン  
トへ向かって連射した。

その時、ヴィルベルヴィントの艦橋上部を狙って放たれた砲弾の一

つがヴィルベルヴィントの測距儀を破壊する。

「敵艦、測距儀大破！」

「良くやった！ あれではもう主砲の狙いは定まるまい……面舵を取れ！」

ブラウン博士の推測通り、これではもうヴィルベルヴィントは目視で主砲を撃つ以外に方法がない。

だがそんな目測で砲弾が命中するほど、艦砲射撃は甘くは無い。

「か、艦長！ 右舷は敵巨大戦艦の針路です！」

「大丈夫だ、敵巨大艦の後方に回り込む！ 魚雷と主砲の斉射で、奴の足を完全に止める！」

その後、あの巨大艦の乗員に降伏勧告を行う……受け入れてくれればいいが」

攻撃しておいて言うのもどうかと思うが、犠牲は少ないに越したことは無い。

自分も、そして彼も艦橋を狙わなかったのはおそらくその為でもあるのだろう。

特に、相手が運命の渦中に巻き込まれた哀れな同国人であるならば、なおさらだった。

前方に急速に距離を縮めるヴィルベルヴィントを見据え、シュルツは転舵のタイミングを計る。

しかしその時、ヴィルベルヴィントの艦中央部で何かが駆動していた。

「あれは!？」

ヴィルベルヴィントの甲板上で旋回していたのは、かなり大型の魚雷発射管だった。

さっするに、相当な数の魚雷を連装しているようだ。

あれでは左右からの接近は困難だ、だが後方からは速度が速いため追いつけない……シュルツが思わず立ち上がりどうするべきか迷う。

しかし次の瞬間、キラリと上空で光った物体がヴィルベルヴィント

に突き刺さり、爆発を引き起こした。

「これは・・・カイト、君か！」

遠くに見えるフリースベルグのAGSが、高角度に仰角をとった砲身から誘導砲弾を放っていた。

その砲弾が正確にヴィルベルヴィントの魚雷発射管を撃ち抜いていたのだ。

（やっぱり、君も考えていた事は同じか・・・）

犠牲を最小限にという友の自分と同じ思いを実感し、シュルツはいよいよ攻勢に出た。

「面舵一杯！ 魚雷、主砲、斉射用意！！」

ウンディーネが左に船体を傾けて右方向へ急激に回頭し、その艦首をヴィルベルヴィントの方へと向ける。

それでも接近を許そうとしないヴィルベルヴィントから速射砲やロケット砲が放たれ、ウンディーネはその嵐をかくぐり進む。

ヴィルベルヴィントが起こした波がウンディーネを襲い、艦首から水飛沫が津波のように舞い上がる。

そしてついにウンディーネの射界が、完全にヴィルベルヴィントの後方の推進機構やブースターを補足した。

「撃てーっ！！」

シュルツの号令を舞っていた主砲が爆炎を噴き、魚雷発射管からの白い圧搾空気と飛び出した流線型の魚雷が海中に向け射出される。

一瞬の静寂後、ヴィルベルヴィントの後方で鋼鉄の塊が炸裂し、カイト達の攻撃でダメージを負っていたブースターの息の根を止める。続いて多数の魚雷が白い航跡を海中に描きながら、逆V字の白波の向こうへとゆっくりと吸い込まれるように消えていく。

そしてヴィルベルヴィントの船底で一瞬煌めく閃光、直後に両舷から高い水柱が発生した。

ヴィルベルヴィントの足が完全に止まった瞬間、それはこの艦が両

足を棺桶に突っ込んだも同然だった。

既に電気系統の異常から艦橋の照明は落ち、モニターも動くものと動かない物の数が半々となっていた。

その動くモニターのうちの一つが、推進機構の喪失、つまり航行不能となった事を表示した。

「補助ロケットブースター、推進機構をやられました！ 航行不能です！」

艦の船速が落ち、今は慣性によって徐々に速度を落としながら海面を漂っている。

「艦長、近衛艦隊より本艦に向け降伏勧告です・・・黙殺しますか？」

シユルツ達からの降伏勧告を受け取った女性副長が、艦長へと告げる。

今までの成り行きから、彼女は艦長は黙殺か勧告を蹴るであろうと考えていた。

このまま艦と共に北米の波間に眠ることになっても、それは軍人になる道を選んだ自身の責任と・・・そう思っていた

「そうか・・・いや」

士官の航行不能の報せに対して、ヴィルベルヴィント艦長はなぜかそれを既に覚悟していたかのように落ち着いた様子で呟いた。

「ならば仕方あるまい・・・」

「・・・艦長？」

周りにいた全員が狂気に取り付かれたかのように戦闘継続を叫んでいた彼の、著しい変化に気付いた。

「・・・総員退艦せよ。 20分以内に作業を終了し、できるだけこの艦から離れよ！ 皆、本当によく頑張った。

少佐、クルーの脱出を頼んでも良いか？」

「え？」

「ま、待つて下さい・・・か、艦長はどうされるのです！」

「最後の仕事があるからな、エクルース少佐、後は頼む・・・」

ここまでヴィルベルヴィントの副長を務め上げてくれた彼女にクルーの脱出を託すと、艦長は艦橋からゆっくりと去ろうとする。

「少佐・・・きつと未来と平和は、力で作る物じゃないんだろっな・・・」

重たそうな足取りで照明が落ちた廊下へと出ると、暗さと火災の煙のせいで艦長の姿は瞬く間に見えなくなった。

彼を止める事もできず、エクルース少佐は薄暗い表情のままただ艦長を敬礼で見送るだけでしかできなかった。

ヴィルベルヴィントの停船を、カイト達もフリースベルグの艦橋から双眼鏡で確認した。

「やった・・・あとは向こうのクルーがライナルトの勧告を受け入れるかどうか・・・」

「もう戦闘継続の能力は無い筈です、諦めてくれればいいのですが・・・」

船外カメラの映像を食い入るように見つめ、リナが祈るような表情で呟いた。

艦橋ではクルー達が双眼鏡をもって、ヴィルベルヴィントの動向を監視する。

「艦長！」

その時、高倍率の船外カメラをモニタリングしていたリナが何かを発見した。

艦橋につりさげられたモニターにその映像が流れ、直後に安堵したような呟きが広がる。

ヴィルベルヴィントの船内から乗組員と思しき人影が多数、甲板上へと集まり脱出艇を下ろし始めた。

クルーが少ないせいか、海面に救命胴衣をつけ飛びこむものはおらずヴィルベルヴィントの脱出艇にほぼ全員が収まったようだ。

「よし、本艦も脱出艇を送る・・・」

後部からの浸水によりヴィルベルヴィントは後方にやや傾いてはいるが、当分の間は浮かんでいそうであった。

その様子を確認したカイトは、余裕をもって救助を指示していた。

全員の脱出が完了した頃、ヴィルベルヴィント艦長は無線室のマイクを握り締めていた。

そしてその無線を聞き取る相手は、遙か南方の海域に展開していたリーダーでも確認するが、ヴィルベルヴィントは航行不能となっているようだ。

しかしこれも、一番艦とその艦長の事をよく知るからこそ注意した事を、ヴィルベルヴィントの艦長が聞き入れなかったからだ。

悲しくもあり、少し呆れもあり、そして彼等に対する評価が自分の買いかぶりでは無かった事に一抹の安堵を浮かべる彼女。

ディアナ・アズナヴールは、ニーズヘツグの艦長席でその事を思い返し、ヴィルベルヴィントからの最後の連絡を待った。

『・・・もう良いぞ、ディアナ。脱出は完了した』  
自分が諫めた時と違い、随分落ち着いた敗軍の将の肉声。

「私が以前申し上げた事、ご理解頂けましたか？」

『ああ・・・あの機転に、判断力、君の予想通りだったな・・・』

「できれば、あの時に気付いて頂きたかったです、大佐殿・・・」

『・・・そうだな』

アズナヴール中佐は、処刑台を登り終えそこから見える済んだ街並みを見つめるような表情の彼を思い浮かべる。

「脱出なさっても良いのですよ」

『馬鹿を言うな・・・死ぬ時は家のベッドか艦の中と決めている。』

「さあ、やれっ！」

「分かりました。」

『すまない・・・』

ディアナは肘掛の位置にある受話器を取り、CICへと内線を開いた。

「リンドブルム発射用意、目標ヴィルベルヴィント」

『了解、リンドブルム発射用意・・・目標、ヴィルベルヴィント！』  
『発射、T-30秒』

クルー達がヴィルベルヴィントの正確な位置をレーダーで測り、座標を正確に打ち込んでいく。

そして前方のニーズヘッグの大型ミサイル発射管の蓋が開き、僅かに三角錐のようなミサイルの先端部分が見えた。

「撃てーっ！」

ディアナが叫んだ次の瞬間、甲板からトマホークよりも大型のミサイルが轟音と金色の閃光をまき散らしながら垂直に飛翔して行った。「こういうの気に入らない？ニーズ？」

飛翔していくミサイルを見つめながら、ディアナは後ろにいるシヨートヘアの少女に尋ねた。

「・・・別に」

全く無表情のままそう答え少女は絶えず前方の海原を見つめている。「味方を撃つ事もだけど、あなたの場合はお姉さんと戦うことになるのよ」

「うん・・・でも会ったこと無いし、知らないから・・・」

「そう、戦う相手を知らない事って、幸せなのかもしれないわね・・・」

ディアナが優しく告げた言葉に、ニーズはただただ首を傾げるだけであった。

「これより本艦は、パナマへ帰還する。針路1-7-5、前進半速」

ニーズヘッグを先頭に小規模の艦艇で構成された艦隊は、踵を返すように針路を変更し、基地のあるパナマへと帰還して行った。

周囲の艦艇にヴィルベルヴィントのクルーを収容し終えた時、フレースベルグCICのレーダーが不穏な影を捉えた。

「これは、ECM？」

南方の海域に超兵器とは違うノイズがレーダー上に発生している。しかしその発生パターンには、バンは見覚えがあった。

フレースベルグやきんぼうに搭載しているECMを作動させた際に生じるリーダーノイズその物だったからだ。

「艦橋、CIC。南方約120海里を基点とし、ECMによる電子妨害が行われているようです」

「・・・了解した。対空警戒を厳となせ！」

まさにカイトがそう言った瞬間だった、レーダー上に高速で動く小さな光点が映り込んだ。

「待つて下さい！ 方位1-9-7より高速で接近する小型飛翔体あり・・・これは！」

「CIC、どうした？ 何を見つけた！？」

超高高度から秒速数キロの超高速で動く物体、バンの脳裏にある兵器が思い浮かんだ。

「弾道ミサイルです！ 弾道ミサイルが接近！！」

「何だと！？ 周囲の艦艇に連絡！ 迎撃間に合うか！？」

ヴィルベルヴィントと最初に遭遇した時のように、艦内が再度極度の緊張状態になる。

「無理です、ECMで発見が遅れました・・・既に弾道ミサイルはターミナルフェイズに突入、着弾まであと30秒程度です！」

フレースベルグの頭脳とも言える高性能のコンピューターが、着弾までの予想を即座に弾き出した。

同時に、既に迎撃できない段階にある事を知りカイトは毒づく。

「機関全速、面舵一杯！ CIC、着弾予想はどこだ！？」

「着弾予測・・・艦長！ 目標は敵巨大艦と思われまます！」

「何っ！？ くっ、総員衝撃に備え！」

カイトの声がフレースベルグ全艦に響き渡り、それに合わせてフレースベルグや周囲の艦艇は皆ヴィルベルヴィントから離れる。

艦橋の外に出ていたクルー達を艦内に収容し、もし核弾頭だった場合に備えて放射線防護のシャッターが艦橋の窓全体を覆う。

『5・・・4・・・3・・・2・・・着弾、今!』

一瞬、キラツと光る物がヴィルベルヴィントの上空から差し込み、直後に見た事もないほど大きな青白い火球を発生させた。

衝撃で艦内がシェイクされないように、カイト達は身近なものにかまって振り飛ばされる事を防ごうとする。

「し、CIC! やはり核か!？」

「い、いえ・・・核パルスの電磁波や放射能は確認できません、しかし膨大な熱量です!」

一瞬ホワイトアウトした船外カメラが、もうもつと湯気を上げる海面を映し出す。

朝日を何十倍にも増幅したような光だった。

だが不思議な事に、膨大な熱量が発生したのはヴィルベルヴィントの周囲のみだったようだ。

その証拠に、フリースベルグの周囲の海面からは蒸発した海面は見受けられなかった。

「い、今のは何だ・・・?」

『艦長! 敵巨大艦が!』

弾道ミサイルが直撃したヴィルベルヴィントは艦尾が折れ、船体を後部に急速に傾けたまま海底へと引きづり込まれていく。

「これが、彼らの覚悟だったという訳か・・・」

カイトが艦橋のモニターを見つめながら、辛い表情で呟く。

同時に彼はその時に悟った

同国人だからと言って撃つ事にためらいを未だに持っているのは、自分達だけだと・・・

ウィルキア帝国はその躊躇を超える覚悟で、全世界に対する先端を開いたのだと

足りないものは力でも実力でもない　それを教えてくれた沈みゆくヴィルベルヴィントに対し、カイトは自ずと敬礼を送る。

そして、彼女の安らかな眠りを祈った。

多数の鉄塊が海中に没していく中、その中に黒衣をまとっていた彼女もいた。

だが彼女はフリースなどの艦魂とは違い、船体が死を迎えたにもかかわらず消滅するどころか傷一つすら負っていないかった。

そしてその表情には、海の中で遊泳を楽しんでいるかのように余裕すらうかがえる。

（あーあ、やられちゃったか・・・せつかく私の一部を分け与えたのに・・・）

いや・・・でもまあ、試作艦にしては良く出来た方じゃないかしら・・・）

その表情は、まるでこの結果を最初から予見していたかのようだ。

（さて、次はどこで会うのかしらね・・・楽しみにしているわ、近衛艦隊の大鷲さん）

自分を打ち負かした艦やクルー達の事を思い浮かべ、少女は黒い雷球に包まれるとその場から消えていった。

## 第十六話 暴風鎮まる時（後書き）

今回は文の量が少なめだったので、携帯でご覧になっている方にとって少し楽だったかもしれません。

どうやら携帯の機種によっては、改行がおかしかったりするようですが、パソコンで作っているのでそういう不具合が生じているのかもしれない。

そう言えば、この間JINはおいしいお酒を手に入れました。

アブソルート・ウォッカ、つまりウォッカですね。

40度と割と強めですが、無味無臭が原則のウォッカはジンやウイスキーとは違い匂いが強くなく、焼酎や日本酒が好み、だけど強いお酒を飲んでみたい！

という方にはピッタリかもしれませんよ。

お酒が苦手な方は・・・やめといた方が良くかもしれません。

飲み口があっさりしているので、思ったより飲めてしまい・・・あんなことや、そんなこと、とかをやってしまう可能性も出てきます。充分にご注意を！

ちなみに、アブソルート・ウォッカは大体1200円ほどで買えました。本当はシロツクのウォッカを狙ってたんですが、3600円！！！！貧乏大学生には、とても手が出ないものでした。

余談ですが、アブソルート・ウォッカは本来、果汁とか他の酒と割ってカクテルとして飲むのに最適なようです。

なんであとがきで酒の話を・・・orz

次回 第十七話 「暴風一過し名医登場!？」

## 第十七話 暴風一過し名医登場！？（前書き）

宮崎から21日に帰ってまいりました。

太平洋の海は激しかった！

何せ、ずっと有明海の内海ばかりしか見たこと無かったので・・・  
波が申し訳程度に押し寄せせる内海とは、大違いの大迫力でした。

唯一の心残りは、「おぐら」（チキン南蛮発祥の店）のチキン南蛮  
を食べられなかったこと？

市内の本店と支店には、長蛇の列がずらりと・・・

二時間待ちですとか言われても納得できる長さでしたwww

その間にクレしんの作者様はお亡くなりになり（厳密には本人と断定された）、

別人という奇跡を願ってましたがそれも虚しく・・・

（でもそれだと、他人だったら良いのかと言う不謹慎さもあり・・・

何とも言えませんね）

とにかく

御冥福をお祈りします。

「新キャラ紹介」

フリングホルニ

実年齢&見た目：18歳

髪型：銀の長髪

国籍：ウイルクア

好きなもの&好きなこと

ウイルクア王国

第11近衛艦隊の艦魂達の世話をすること

嫌いなもの&嫌いなこと

ウイルクア帝国

ゴキ  
リ

戦闘

戦闘発生時、そこから逃げるだけしかできない自分

第11近衛艦隊が保持するスキズブラズニル級大型補給ドック艦の  
二番艦、フリングホルニの艦魂。

現在の第11近衛艦隊では最も古参のメンバーで、艦隊内で逆らえ  
るものが居ないと誰からも思われている

シエルが、唯一頭が上がらない人物でもある。

長官からは「リン」と呼ばれ、またシエル達からも“くさん”付け  
ではあるがそう呼ばれている。

軍服の上に白衣で、ナースのような帽子をかぶっているが別段深い  
意味は無い。

リン自身が、自分は艦魂にとっての医者のような存在であるという  
自覚の現れであると言えよう。

友軍艦艇が損傷を受けて艦魂が傷ついた場合には艦内に収容して、  
その艦艇の修繕、艦魂にとつての治療が行われる。

修理が必要と判断したら、その対象艦の艦魂がきっぱりと拒絶した

場合、性格が凶暴化して艦魂に麻酔針を打ちこんで眠らせ、  
そしてそのまま強制連行と言う癖があるようだ・・・。  
それには下士官クラスの駆逐艦から将官クラスの戦艦や空母の艦魂  
といった差があるが、  
リンにとっては全く関係ない様子。

## 第十七話 暴風一過し名医登場！？

やがて五月になろうとしている・・・

祖国解放と言う大望を抱きつつも、それに近づくどころか、かえって遠ざかって行っているような・・・そんな気がしている。

あの時から早1ヶ月半の月日が過ぎ、世界には暗雲が立ち込めようとしていた。

その暗雲の中に見え隠れする大いなる敵と、私達はどう戦っていけばいいのだろう・・・

今の私に出来る事は　艦長のトライトン中佐を信じて祖国解放に仇成す存在を薙ぎ払うよう、

彼の命令を復唱し、彼を補佐することくらいことなんだと思う・・・

艦艇の修復作業や生存者の発見や遺体の収容作業は、この三日間夜を通して行われた。

ヴィルベルヴィントは沖合二キロの浅い海底に沈み、辺りには浮遊物と重油が流れ出ている。

ここまですべつとりとした嫌な潮風は、誰も体験した事もないほど酷いものだった。

翌日の朝にはその酷さは更に増し、海には黒い重油が幾多もの筋を作っていた。

この景色をどこかの環境保護運動家でも見ようものなら、怒りを通り越して卒倒モノだろう。

しかし今は環境の事よりも、ウィルキア近衛艦隊と米海軍太平洋艦隊の今後の針路が重要であった。

こんな時に海の生物がどうだとか、近隣で漁業を営む漁師たちの明日を考えてあげられるほどの余裕は無い。

自分達も明日が来るのかどうか、それすら怪しかったからだ・・・米海軍参謀部は海路による支援助物資の輸送は危険と判断し、トラックで陸路による輸送を試みた。

いつもなら陽気な水兵達の夜の憩いの場であつた繁華街のストリートには、今はそのトラックが長い列を作っている。

そして今、こんな惨劇をもたらしたアルケオプテリクスやヴィルベルヴィントの事をスーパーウェポン、つまり超兵器と呼ぶ事がウィルキア近衛艦隊や米海軍の間に、着実に広まりつつあつた。

最前線に出ているにもかかわらず、損害を被らなかつたフレースベルグは他の艦艇や乗組員達に怪我人の手当や給仕という人為的なサポートに力を注いでいた。

その間カイトは思いつめた表情でリナ、バン、そして十人ほどの工兵達を引き連れて艦内のある場所に向かつていた。

前部VLS装填室を通り過ぎ、二基の主砲弾薬庫を通り過ぎると、前方に鍵がかけられた重そうな鉄の防水扉が現われた。

カイトは首から提げていた人差し指大の長さのカギを差し込むと、ロックを解除してその防水壁をこじ開けた。

中は真っ暗で封じ込められていた空気には、微かにシュヴァンブルグ港の匂いが残っていた。

二基のAGSよりもさらに艦前方ということ、そこは艦首部にある最先端の空間であるという事だ。

足音の響き具合から、空間の広さは十メートル四方くらいの広さはあるようだった。

そしてうつすらと、その暗闇の中に黒光りする何かがあつた。

「確かこの辺りにあつた筈だ・・・」

手探りでカイトはこの室内の照明スイッチを探す。

数秒でそれは見つかり、彼がレバーを下げると照明が隠されていたフリースベルグの爪の全容を映し出した。

「ついに、使うんですね・・・」

「使わざるを得なくなつた、と言つべきだろうな」

リナの言葉を補足して、カイトはその前方にある構造物を見つめる。カタパルトのような敷道の上には、多数の太いパイプや配線で見つなされたダークブルーの鋼製の機械。

ちょうどその前方は、砲身のようになっているがその形状は長方形か角を取って丸くしたような形。

そしてその変わった筒状の砲身は、横から眺めると向こう側が見えるように中空状となつていた。

「設計をドイツ連邦共和国が行い、製造はウィルキアが行つたもので・・・おそらくこの艦の超兵器に対する切り札だ」

カイトが説明を加えながら、その周りを一周しながら彼は構造物を見て回つた。

「305mm半固定型電磁砲ジークフリート、30cm大の徹甲弾を毎秒3500m以上の初速で撃ち出す事が出来るレールガンだ」カイトに続いて、二人もその周りを歩いて回りながら封印されていたレールガンを見つめる。

そのレールガン前方の床には、薬莖の色がそれぞれ黒、赤、青に塗装された電磁砲弾が置いてある。

「その運動エネルギーは凄まじく・・・世界でも最強の防御力を誇ると言われる対46cm防御壁でも、船体ごと貫通出来るくらいだ。

最大仰角は5°、計算上最大射程距離は200kmを超えるが、実用的な有効射程距離は数十キロ、対艦使用では長くて100km程度だろう。

弾頭は3種類ある、まず黒の徹甲弾・・・これはまあ、通常の砲弾と用途は変わらないとして説明は省略する。

続いて赤、これは内部に1000個以上の子爆弾を搭載した散弾

弾頭の砲弾。対水上用にも使えるが

主に地上の戦力に対して使用する事に主眼が置かれている。

次に青だが、これは熱放射弾頭・・・先日の巨大艦との交戦時、最後に打ち込まれた弾頭がほぼこれと同じだ」

その説明を受ける二人が、あの巨大な火球を発生させた敵艦の弾道ミサイルを脳裏に浮かべる。

「・・・なるほど、それじゃそれを使っていればあれほど苦戦はしなかつたんじゃないか？」

懐かしい声のした方を振り向くと、フレーズベルグへと乗艦したシユルツとブラウン博士、そしてガルトナーの三人が博覧会の展示物を見ているかのような表情でそこにいた。

「残念ながら、見ての通り調整中だね・・・」  
早速作業を始めた工兵達を尻目にカイトがシユルツへと答える。

続いて国王脱出の立役者であるアルベルト・ガルトナー司令へと視線を移し、

彼の方を向き直るとカイトは姿勢を正し静かに緊張した面持ちで敬礼を送った。

「御活躍は何っております、ガルトナー司令。 国王陛下が御無事であらせられるのも、単に司令のご活躍あつてこそと・・・」

「ははは、脇腹がむず痒くなるような世辞はよしてくれ・・・それに、陛下や我々がここまでたどり着けたのは、私より少佐のおかげだと思ふな」

「それは初耳、では無いような気がします・・・しかしそれならば我々も、負けてられませんね」

続いてカイトはシユルツと話そうとして、偶然その奥に居るブラウンの顔が目に映った。

見たところ、白衣の下から覗かせるのはウィルキア海軍の服装では無いが、カイトもその服装は何回も見た事はあった。

技術交流や、黒海などで開かれる合同演習などで一緒になったドイツ軍の士官の服装と同じだ。

「貴女は、ドイツ軍の？」

「はい。ドイツ連邦共和国軍、技術科連隊所属、エルネスティーネ・ブラウンです。」

ウィルキアから脱出の際、偶然にも近くを通りかかった少佐達の艦に助けていただきました。」

以後、本国からの指示で少佐が艦長を務められている巡洋艦ウンディーネで、戦術補佐官としてお手伝いをさせていただいています」「そうでしたか・・・ライナルトは私と士官学校の同期なんですが、時折無茶をしてくしそうになる時がありました。」

しかし、貴女のように冷静な方が傍にしていると私としては安心ですね」

「カイト・・・君はいつから私の保護者になったんだ？」

「なる気は無い・・・それにしても」

カイトが一步前に進み、シウルツと固い握手を交わした。

「久しぶりだな、ライナルト」

「ああ本当に、君が敵にならなくて良かったよカイト。 変わり無  
いようでもよりだ」

ウィルキア領沿岸最北端に展開していた第11艦隊本隊は別として、国防海軍の本隊にいきなり砲撃されたシウルツも・・・

そしてまだ進水式を迎えてすらいなかったフリースベルグに乗艦していたカイト達も、下手をすれば捕獲されていた可能性もある。

こうして、この場で再会する事もなかったことだろう。

もしかしたら、敵としてかつての友と戦場の海で出会っていたかもしれないなかった。

彼女のように・・・撃ちたくない敵として。

フリースの表情が暗い。

超兵器を撃沈したものの、決して勝ったと声高らかに言えないこの場で、明るかったら逆に問題だ。

しかし、それを差し引いても彼女の暗さは他の誰かの表情と一線を画すものだった。

カリフォルニア半島の南に伸びていく海岸線に押し寄せる波濤と、その向こうを眺めながら……

「……う……」

時折何かを思いついたように顔を上げるが、また意気消沈したように俯いてしまう。

艦橋上部のマストは眺めは良いものの、既に遠くへと去ってしまつた妹の姿はさすがに見えない。

存在する事はわかつていたけど、敵艦として出現した妹……そう認識せざるを得ない事が、彼女にとっては苦痛以外の何物でもなかった。

「どうしたんじゃフレース……まあ、大体理由は分かるが」

ドッキリとしたようにフレースが慌てて振り向き、零れそうになっていた涙を袖で拭う。

ぎこちない動きで艦橋上部からマストに上がる急な階段を上つて来たのは、表情に疲れが感じられるバクスター長官だった。

長官はこの数日間、フレースベルグを降りて米海軍の艦艇に乗艦し、また帰ってきたりと大忙しだ。

今後の近衛艦隊と米海軍の足並みをそろえるため、随時彼らと綿密な話し合いを行っているからだ。

「大方、ニーズヘッグのことじゃろう……？」

「……」

「ん？ どうかな？」

「……はい」

吹き付ける海風にかき消されそうなほどか細い声で、フレースは落ち込んだ表情で答えた。

「まだ顔も見たこと無いけど、やっぱりあの子とは姉妹ですから」

「それじゃ、戦えないと」

「そういうことかな？」

「いえ　それは！」

《それは！》の後の言葉で裏切りともとれる気持ちを否定したいフレースだが、完全に首を横に振る事が出来ない。

ますます自分が嫌になったのか、そういう自分の運命を呪ってか、彼女は目に涙を溜めて下を向き黙り込んでしまう。

「そう思うのは仕方ないだろう・・・今はそれで良い。

しかしね、君と似たような気持ちになっているのは何もフレース、君だけでは無い。

近衛艦隊と国防海軍、今はウィルキア帝国海軍と名乗っているが元は同じ国に所属し、その国を守るための同志として

生まれた筈だ、シエルもローズもみんなそうだ・・・戦乱の歴史は古いが、かつて親しかつた者達と戦わなければならぬという

苦境を強いられたのは、その中でも極僅かだろう。我々は、そんな極僅かの中の一人・・・」

「はい、それは解ってるんです。　どうしてか　　シュヴァンブルグを脱出する時に国防海軍の艦を沈めても、ベーリング海で

潜水艦を沈めても、みんなを守ろうという事だけを考えることが出来ていました。　でも今回は　　妹が、敵艦なんて

シュヴァンブルグの時に、分かっていた筈なのに　　今になると、戦えるかどうか分からないんですッ！！

怖いんです！妹を自分が沈めてしまわないかと思っで！！」  
ついに耐えきれずに泣きだしたフレース、長官は彼女の頭をそつと撫でる。

「ヒグツ・・・だ、だって・・・敵なんて・・・おかしくないですか！！し、姉妹なのに・・・！」

「それを言うなら、国防海軍と我々が敵になるというのもおかしい話だな」

「・・・」

「そういえばフレース、以前下の食堂で数人が殴り合いの喧嘩をするという事があったのを覚えているかね？」

そう言われて彼女は記憶を思い返して見る。

該当する記憶はすぐに思い出された、あれは確か　　ヴァイセンベルガー將軍によってウिल्キア帝国の樹立が宣言された日の夜だった。

この艦のクルーにも祖国に想い人や家族を残してきた人もいれば、敵となるウिल्キア帝国海軍に親しい間柄の人間がいるクルーもいた。

その時誰が言い始めたのかは分かっていないが『彼らと戦えない』と、とにかくそうぼやいたのだ。

ただでさえピリピリしていた上官から『この根性無し！』と、鉄拳が飛んで来たのは言うまでもなかった。

いつもなら哀れな奴という視線が周りから降り注がれるのが、定番となる筈だった。

しかしこの時ばかりは彼に対する同情、そしてその不満はその殴つた上官だけでなくカイト達幹部にまで広がっていった。

こうして双方入り乱れての乱闘になるかという具合の時に、騒ぎを聞きつけたカイトが現われたのだった。

「先任伍長から聞いたがこの時に、トライトン艦長はこう言ったそうだ……」

“『同じウिल्キア人と戦いたくないという気持ちは、私にもある。我々幹部は君達と同じ、好きで彼らと戦おうとしている訳では無い！』

だが、今のウिल्キアがやるうとしてるのは暴拳以外の何物でもない。彼らと戦いたいかわりたくないか以前に、君達はその暴拳を

許せるのか！？　そしてその暴拳を、一番正さなければならぬのは誰だ？　イギリス人か？　ドイツ人か？　またはアメリカ人か？

彼らな筈がないだろう　それは何を隠そう我々ウिल्キア人だ。そして彼らを敵としてではなく、正さなければならぬ間違いを

おかしそうになっている仲間として見れるのは、我々だけじゃな

いのだろうか　　？』”

彼の言った事はクルーを知らず知らずのうちに取り囲もうとしていた心の闇を、綺麗に突き崩し取り払ったのだった。

その後、異論を唱える者もいたかもしれないが事態はひとまずの収束を得たのだ

「そんな事が・・・」

「最近の軍隊には、敵と見なしたものをゴミ同然に扱い、余計な感情を抱かせないように訓練させる国すらあるそうだ。

だが、あの瞬間　　私は判ったよ。　トライトン中佐が、フレースベルグの艦長に指名された理由が、少しな・・・。」

バクスター長官の口から話されたついで先日のお出来事を聞いて、フレースはカイトに対する尊敬の念を深めていた。

「・・・と、噂をすれば何とやらだなフレース」  
「え？」

ふと長官が覗きこむように視線を向けている眼下に、フレースも覗きこむとそこには二人のウィルキア近衛艦隊士官の姿があった。

一人はフレースが見慣れない茶髪の人物、そしてもう一人は紛れもなく先程までの話の主人公であったカイトだった。

「長官、あのもう一人の方は？」

「うむ、おそらくライナルト・シュルツ少佐じゃな。　ハワイから近衛艦隊本隊に随伴して、あの巨大艦を倒した立役者

そして聞いた話じゃ、トライトン中佐とシュルツ少佐は士官学校時代からの友人らしいぞ」

艦橋上にでる左舷側の扉の横に二人がいるので、彼等に聞こえないようにとヒソヒソとフレースの耳に耳打ちをする。

やがて二人が話を始めるが、並みの人間にはその声は遠すぎて聞こえない。

しかし数十キロ先の潜水艦のエンジン音さえ聞きとれる艦の艦魂である彼女には、耳を澄まさなくてもしっかりと聞こえていた。

レールガンのスペック説明を副長や砲雷長である彼等にある程度し終えた後、久しく話していなかった二人。

人気の無い所で話がしたいと言い出したのは、シユルツの方だった。しかしカイトもそのつもりでいたため、その提案をすんなりと受け入れた。

「まさか、君が中佐になっていたとはな」

「この艦の艦長拝命と同時だった。おかげで少佐の時とあまり違いがよく分からないな。」

少佐の君に、“カイト”と呼ばれるのも一つの原因だろうな

「

「それでは、今度からトライトン中佐とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

「よしてくれ　　気持ち悪い」

軍人らしからぬまるで学生のようなノリで話す二人。

「昔もこうやって話していたな　　シエルドハーフェンの海を見ながら」

「ああ・・・」

「お前や、彼女とも・・・」

カイトが最後に言った言葉の後、二人の間に不気味な沈黙が流れた。その異様な雰囲気を一瞬にしては消した。それ以上に彼女の頭に引つ掛かったのは“彼女”という言葉だった。

「アズナヴール・・・別れたのは確か君が卒業して1年後くらいだったな」

「そうだな・・・別れ際にディアナは言った、『道が違うなら、これで良いんです』と。」

俺も彼女も、考えや道が違ったからな　　俺は彼女に『俺の後ろについて来い』とも言えず、

反対に彼女と足並みをそろえることも出来ず、別れるべくして別

れたようなものだから、後悔はしていない。

そして俺自身、もう逢う事もないと思っていたが 　　しかし太

平洋は思ったより狭いな、三日前逢ったよ」

三日前 　　？

三日前と言えば、ヴィルベルヴィントに急襲された日じゃないか？  
シユルツの頭に、嫌な予感が漂う。

「この艦が傍受した通信をCICの専門家が分析した。

その内容を聞いた時、俺はその声がディアナの物だと判った

そして彼女が乗っている艦の名も」

「カイト・・・」

「フリースベルグ級二番艦ニースヘッグ、それが彼女が乗る艦の名  
前だ。

俺と同じ、艦長としてな・・・」

彼自身にとってそれは信じたくない事だった。

かつての恋人が今は敵として、3日前自分の前に現れたのだ。

「君は大丈夫なのか？ かつて愛した彼女を、君は撃てるのか？」

「もし撃たないで済むのなら、俺は例え軍規に反するとしても間違  
いなくその方法を選ぶだろう。」

だが、撃たなければならぬと・・・撃たなければ世界が危険に  
晒されるといふのであれば、その時は俺が撃つだろう」

覚悟を秘めた彼は、知らず知らずのうちに自分の拳を握り締めてい  
た。

往年の親友は、ただそれを静かに見守るだけで何も口に出す事は無  
かった。

「・・・フリース？ どうしたね？」

フリースが驚愕したように目を見開き、両手で口をおさえて彼女は  
思わず後ずさりをしていた。

そして彼女は何も言わずに急にどこかへと転移して姿を消してしま  
った。

彼女が転移した先はこの艦で最も静かな場所、艦の心臓でもある二基の原子炉を格納している第一機関室。

遠隔操作で原子炉は制御される事が多いため、普段から人が立ち入ることは滅多になく、その為中は深海のように真つ暗であった。

「私だけじゃないんだ・・・艦長は、艦長にとつては・・・」

大切な人が敵として現れたのは、自分だけじゃなくてカイトも同じ。だが、彼は昔愛した彼女を撃てると確かにそう言った。

自分だったら？もし妹に矛先を向けられても、自分は銃口を彼女に向けられるのか？

その時苦しさを吐き出すようにフレーズの口から出たのは、呻きにも似た溜息だった。

南方に艦首を向けたまま停泊し、旗艦であるフレーズベルグを先頭にひし形の紡錘陣を展開する第11近衛艦隊。

艦隊陣形の後方には後部甲板に星のマークがついた数機の艦載機を乗せた艦の姿が見受けられる。

先の戦闘に於いてヴィルベルヴィントに対して多数の主砲を放っていたのはシエルドハーフェンで、

妹のブローズグホーヴィは第一種戦闘配備のまま後方に待機を命じられた。

その間にガス欠寸前の米軍艦載機の殆どを二列あるフライトデッキに着艦させ、收容することに成功していたのだ。

二艦のうちどちらかがやらなければならなかった事だが、全部に9門の方があるシエルドハーフェンと4門のブローズグホーヴィ、素人の司令官でもどちらに後方待機して艦載機收容を命じるべきか、素直に考えれば分かりそうな物である。

さて、今この艦載機の搭乗員達はほとんどが米太平洋第三艦隊所属のアメリカ人パイロットだ。

そんな彼らが自分達の勢力から強大な敵を退けたらやることと言え

ば・・・

『許したのが間違いだった!』と、ブローズグホーヴィの副長はそうぼやいていた。

艦内は彼らの祝勝会の会場となり、彼らの他にもウィルキア人や、そしていつの間にか紛れていた日本人の信哉も加えての国際的な何とも言い難い宴会が開かれていたのだ。

そしてアトランティスの簡易修理が終わらない以上、自分達に仕事が無い事を良い事にそれはどうやら三日ほど続いたようだ。

彼らはいつも飲むようなビール等の感覚で、ふるまわれた種類に手を伸ばしていた。

しかしウィルキアは寒い気候が特徴的な国。

そう言った国には、決まって半分以上がアルコールという濃度の高いスピリッツがある。

船籍がウィルキアのブローズグホーヴィも例外では無く、ふるまわれた種類の大半がそう言う物だ。

ウィルキア産のウォッカはアルコール度数が47度、しかし鼻腔をくすぐる様な涼しげな匂いのする薬草をフレーバーとして

配合しており、度数に比べてスツと入る・・・意外な飲みやすさが現地人には人気だ。

しかしそんなものに不慣れなアメリカ人達は、ピッチコントロールを大半の人間が誤り、次々とダークサイドに墜ちて行った。

別にアメリカ人達が酒に不慣れなわけでは無い。

少し違うが、ウィルキアは質にこだわり、アメリカ人は量に執着するとも言おうか・・・

最終的に飲んだアルコールの総量は、聞いた話ではどうも同じくらいらしいのだが・・・。

「あちゃ〜」

顔を赤らめてぐったりとしている彼らを見て、ローズは思わずため息と苦笑いを向けていた。

「と、とりあえず・・・私の艦内なかでアレをリバーズは絶対に無しッ

！！

ううっ、考えただけでも身の毛がよだつわ・・・」

「う、うん・・・そうだな、実際後処理を船務科の部下に任せるのも気が引けるし・・・」

それらしい奴を見かけたら甲板に連れて行って　　っておい！

！！

目の前で今まさにリバースしようとしていた見つけると、船務長はその青白い顔と化した彼の肩を持つ。

そして持前の腕力で彼をどうにか甲板まで持って行こうと奮闘する。

「絶対に途中で吐かせちゃダメ！　もしあんなおぞましい物を吐かせたら、主砲の前に立たせてひと思いにぶっ飛ばしてあげるからね

！！

「わ、分かったから落ち着け、ローズ！　っっていうか、言ってる事が物騒だぞ！！」

マジ顔で焦るローズに大切な任務を与えられ、困ったような顔になりつつも彼は重い防水扉を開いた。

「おう〜い、俺は・・・お前を愛しているぞ〜。　お前になら・・・

俺の全てをやれるう〜」

「ハア？　やめてくれ、俺にそんな趣味は無い！」

酔ったパイロットから謎の告白を受け、違う意味で青白い顔色になった船務長が、慌てて酔った彼を甲板の端まで引きずって行った。

こういう場に於いては、どうやら酔わない人間というのも不幸な目に遭う物らしい。

それでも彼等に対して救いの手を差し伸べようとしているクルーを見て、ローズはやれやれと

いった表情で安心して胸をなでおろす。

その場を彼等に任せ、いい加減自分も仕事に戻らないと考えると考えた彼女。

一旦甲板に出てエレベーターで機体の格納庫へと向かうため、右舷側の艦載機搬入用の後部エレベーターへと乗った。

「随分と賑やかになったな・・・」

ローズの後ろにはいつの間にかシエルが転移してきており、彼女に對して話しかける。

「うん、とローズはシエルの言葉の返事を考える。

「・・・でもあれじゃ、うるさいだけよ。」

「フフ、今は自由にさせておくといい。」

「もう・・・他人事だと思ってるんだから。あ、わかった・・・戦闘機の艦載機を持った私に嫉妬してるんでしょ!」

「今既に艦載戦闘機を保持したつもりか？ あれは米空母アトランティスの艦載戦闘機部隊というのを、忘れたのか？

第一、彼等に対して軍事作戦の命令権があるのは米海軍司令部だ、我々ではない。

それに遠からず私達はイギリスへ向かい、イギリスの海軍航空団と近衛艦隊本隊の海軍航空団との連合航空団が生まれ、

彼らは私たちにも艦載戦闘航空団として派遣されてくるだろう。子供じゃあるまいし、それくらいで嫉妬するものか」

「うぐうっ!!」

シエルに言いくるめられてしまいうめき声をあげてがっくりとうな垂れるローズ。

時折こういった光景を見た誰もが、本当に二人は一年しか年齢が違わないのか疑いたくなる。

「しかしまあ、あの空母が治るまでは・・・あの超兵器を撃退した奴らだ、労をねぎらってやるがいい」

銀髪を潮風になびかせてシエルが見つめる先には、タンカーのような形の巨大な艦船が浮かんでいる。

舷側に武装は対空機銃くらいで、他に大口径砲のような武装は一切見受けられない。

しかしそれでいて、第11近衛艦隊に居なくてはならない存在であるその艦・・・

大型乾ドック補給補修艦、フリリングホルニ。

全長は400mを超え、先のヴィルベルヴィントよりも若干小さい。しかし艦内には乾ドックがあり、その大きさは全長331mのシエルドハーフェンですら収容できる大きさだ。

出来た経緯には諸説あるが、一番有力なのはウィルキアの洋上活動拠点の少なさであった。

黒海沿岸には漆露戦争でウィルキアが獲得した軍港の町があるが、太平洋などとなるとまた別の話だ。

オホーツク海などとは比べ物にならないくらい広大な太平洋。

もし米海軍などであれば、艦に修繕の必要が生じてもアラスカやハワイ、フィリピンなどという拠点があるため、

太平洋の航海もさして苦ではないだろう。

だがウィルキアは太平洋上にこれと言って洋上補給基地が無い。

ということとは、太平洋上で艦体が損傷しても艦の補修ができないという事になる。

その為ウィルキアは20年ほど前には、洋上での補給補修を実行できる乾ドックを持つ超大型のドック補給艦を計画、

そしてイギリスやアメリカでは出来なかつた発想を実現化させたウィルキアは、移動する軍港を作り出す事に成功したのだ。

今、第11艦隊に配備されているのはスキズブラズニル級ドック補給艦の二番艦フリングホルニ。

その内部に収容されているのが、アルケオプテリクスで甲板を損傷させられた米空母アトランティス。

そしてフリングホルニの艦上から多数伸びているクレーンで洋上に浮かんだまま補修を受ける体制に入っているのも、

同じく甲板を酷く損傷した米戦艦ゲティスバーグである。

フリングホルニの艦内には、人が怪我をするなどと言った場合に使われる治療室などもある。

通常の艦とは違い、大がかりな手術もできるといふかなりの優れモノだ。

しかしこの艦の手術室を人が使った事は今のところ無い。

理由は簡単で、一つ目がフリングホル二自体が戦闘艦でない以上、戦闘で負傷する者がいないという事。

そしてもう一つは、戦闘艦を収容した場合でもその負傷したクルーは、既に治療を受けている場合が多いという事。

この点から、フリングホル二の手術室もとい治療室は“人間には”使われた事は無い。

しかし、彼女達が見えるものなら分かるだろう・・・

今その手術室の中では、一人のまるで医者のような白衣を纏った銀髪の少女が、細い糸のついた弧状の小さな針を操る。

そして上半身を露わにしたまま、うつ伏せで手術台で寝息を上げる少女の血まみれの背中を丁寧な縫い合わせていく。

近くには米海軍の士官服を着た少女達が、その様子を心配そうに見つめている。

やがてピツと手で糸を結び、その糸の残りを切断した。

ガーゼなどで丁寧に彼女の傷口を覆うと、手術で用いる帽子をマスクを外して優しい笑みで少女たちに告げた。

「これでもう大丈夫。目が覚めた頃には、もう修理も終わっているでしょうし、痛む事は無いわよ」

「うわあ、リン先生ありがとうございました！」

「よかった、苦痛をこらえるラン司令なんてこっちが見ていられなかったんですよ〜!!」

喜びをあらわにしたヒューズ達は、手術台で気持ちよさそうに眠るランを見て安堵した。

彼女と同じように広々とした治療室内には20程のベッドがあり、先の戦いで酷い傷を負った艦魂達に一時の安らぎを与えている。

「今までは、艦体が治るまで艦魂は放置つてのが普通だったけど、私はそう言つての見たらちよつと放っておけなくてね・・・

やっぱり可哀想なもの、見ていてこっちが辛くなってくるわ」

そうリンは言いながらランの治療に使つた針や注射針などが、彼女が指を鳴らすと一斉に消えた。

彼女たちの治療に使ったもの全てリンが艦魂としての力で具現化させた物であり、それには実際の補修と違い費用などは掛からない。つまり、リンは艦魂として同じ艦魂達の治療をボランティアでしているようなものだ。

「さてと、次は艦体では左舷甲板・・・つまり左背面の脇腹を・・・

「次の治療をするために、リンが患者である艦魂を外に呼びに行こうとした矢先、治療室の外からちよつとした怒鳴り声が聞こえてきた。艦内の廊下の向こうには数人の少女達があり、中央にいる喧噪の原因の彼女を取り囲み、まるで暴君に使える家来のようにビクビクしている。

「るせえっ！　ちよつと甲板に傷を負ったくらいだ！！　俺は戦艦ゲティスバーク、ランみたいな空母の貧弱者と違うんだよ！」

そう言いながらも、ゲティスの脇腹は血で真っ赤に染まっている。

「し、しかし・・・補修は軍司令部からの命令です。　今後、あのような超兵器が現われなくても限りませんし・・・」

「んだと、コラアツ！　テメエ、俺があんなものに簡単にやられるとでも思ってるのかよ、ええ？」

「そ、そんなこと言ってますん！」

（あの巨大艦の降伏勧告、受け入れたクセに・・・）

横暴なゲティスバークに対して、彼女を諫めていた艦魂達にも不満が募り始める。

これまでもずつと耐えてきた彼女たちだが、その限界は近かった。

「と、とにかく！　補修は受けてもらわないといけないんですっ！！」  
その時、駆逐艦の艦魂の少女が言った言葉が、ゲティスバークの中で燃えていた火にガソリンを注いだ。

「貴様・・・誰に向かって命令してやがる！！」

ゲティスが提げていたサーベルを鞘から抜きはなち、それを見た艦魂達が恐怖に怯える。

「待ちなさい！　事情は知らないけど、艦魂だって艦体を損傷しな



その様子を間近で見聞きしてしまったアトランティス戦闘打撃群艦魂の少女達は、驚愕以外の術が無かった。

そしてその時リンが手に灯した光が形を形成し、それは多数の注射器となる。

それをリンは指と指の間に挟み、両手で計8本を握りしめた。

「こ、こいつめ・・・誰か知らんが、生かしておかねえ!!」

一番言われてはいけないことを言われ、ゲティスは激昂してリンに斬りかかる。

「もらったあああ!!」

全く動かないリンに対してサーベルを振り下ろしたゲティス、しかしその剣先は空を切っていた。

「その程度? だったら、次は私の番かな・・・?」

声が出た先、ゲティスの後方には余裕の表情を浮かべるリンの姿が・・・

「ウソツ、リン先生の動き・・・全然見えなかった!」

「見て・・・ゲティス司令も、信じられないって言う表情になってるわ」

今一瞬の出来事を見て、ヒューズ達はゲティスには聞こえないようにヒソヒソ話をする。

ゲティスの剣術は太平洋艦隊の中でも屈指の物だ。

確かに今、負傷し激昂したゲティスが冷静さを欠いているとしても、その腕はある程度までは発揮されている筈だ。

だが、リンは今その攻撃を易々とかわしてみせたのだった。

そしてその次なる手として、リンは持っていた注射器を構える。

「貴女の運を試してあげるわ・・・」

目の前に出して構えた合計8本の注射器には、それぞれ透明な液体が半分くらいの目盛まで注がれていた。

「この中の6本には、猛毒が入っているわ・・・でも残り2本には、手術で使う普通の麻酔薬が入っている。」

一本だけ、貴女に打ち込むわ・・・そして、そのまま私の処刑をちりょう

受けてもらおう」

まるでジャグラーのように、注射針が出たままの注射器を上に向けて回し始めるリン。

「ま、待てよ！ 猛毒に当たっても艦魂の俺が死ぬことは無いと思うが、じゃあ手術の時は麻酔なしでやるのかよ……！！」

「大丈夫……毒の苦しみで、手術の痛みなんて感じないから」  
リンのその表情を見たゲティスは心の底から震え上がった。

そこには先程の一見か弱そうな医者っぽい少女ではなく、嗜虐的な趣味を楽しむ悪魔のような笑みがあつたからだ。

「ま、待て！ 俺が悪かつた、謝るから……！！」

とつさに生命の危機を感じ取り、ゲティスが思わずリンに謝ろうとする。

その時リンはルーレットのように空中を回していた注射器の一本を掴み、問答無用でゲティスに投げつけた。

ダーツの矢なんていう速さでは無い、まるで銃弾と見間違えるような速さで投擲された注射器は、

避けるすべもなかつたゲティスの首筋に綺麗に突き刺さった。

「ど、ど、ど、どっ、毒があああああつっ………あ  
れ……なんか……眠……く……」

恐怖におびえたようなゲティスの表情がほんの数秒で和らいだと思つたら、次の瞬間には彼女は床に倒れ伏してしまった。

「……zzz……zzz……zzz……zzz……」

気持ち良さそうに眠るゲティスに近寄り、刺さったら薬液が注入される仕組みの注射器を、リンはゲティスの首筋から抜き去った。

様子から見る限り、ゲティスに刺さった注射針の中身は普通の麻酔薬だったようだ。

「ふうん、意外と悪運は強いよね……ところで、君達」

「ハ、ハイイツツ！！」

リンに呼ばれてゲティスに怒鳴られる時にも増して驚いて返事を返す少女たち。

「彼女を運んで頂戴」

すっかり元の優しい女医のような口調に戻ったリン。

彼女の指示通り寝息をたてて不格好に眠るゲティスを抱えると、少女たちは治療室の方へと入って行った。

「それから君・・・これ、塗り薬だけ使って」

そう言うところには取り出した塗り薬を、先程ゲティスから峰打ちを食らった少女へと渡す。

ありがとうございますとお礼の言葉を口にしながらも、その少女は少しばかり怯えていたようだ。

この出来事はすぐに米海軍の艦魂達の間にも広がり、どんどん広がるうちに内容は飛躍し続け、実はフリングホルニは第11艦隊の最終兵器で、

だからリンはあんなに強いのだとか・・・？

または、艦魂を安楽死させるための毒を持っているのだとか・・・？ただ確実なのはただ一つ、後日リンは彼女たちの間で逆らってはいけない人物の5本指に入ったらしいという事だった。

それを聞いてリンとの長い付き合いを経験しているシエルは苦笑し、ローズといえば壁にもたれかかって腹を抱えて笑い転げていた。

彼女達が再び海原を駆ける日は間近に迫っている。

本来は艦魂達もその準備に明け暮れるのが定説だろうが、この日は珍しくシエルが皆に休息を取るよう命じていた。

彼女は気付いていたのだろうか・・・これからさらに激しさを増す海原の波濤を

## 第十七話 暴風一過し名医登場！？（後書き）

はい名（迷？） 医も登場しましたが、今回もまた不思議兵器が登場しました。

でも確か私は非現実兵器はあまり登場させたくない、感想評価欄の返信でそう書いていたと思います。  
心変わり？

いいえ違います（断言）

レールガンって実はもう非現実ではないんです！

米海軍の次期イージス艦、ズムウォルト級にはレールガンの搭載計画がリアルにあるそうですよ。

フリースベルグ級自体が、もともとズムウォルト級をモデルにしたものやこんなものを追加して

JINが脳内で作り上げた架空艦です。

ズムウォルト級には電力があり余るほどあるそうですが、レールガンを搭載すると

足りなくなるんじゃないかとも言われています。

でも、フリースベルグには原子炉があるから大丈夫ですよ（笑）

ところで、レールガンの弾丸の初速を大体ズムウォルト級で見たスペックと同程度にしたんですが・・・

そう言えば射程距離ってどれくらいになるんだろう？

と考えてしまいました・・・

どこかに書いてあるわけでもなく、計画上でまだ実射でテストされたわけではないので、そう言った数値は載って無かったんですね・・・

これはもう、昔懐かしい高校時代の三角関数に頼るしかない!?

というわけで計算してみました。

- ・ レールガンの弾丸として射出する物体にかかる重力加速度は、場所を地球上として  $g = 9.8 \text{ [m/s}^2]$
- ・ 弾丸の初速は  $v_0 = 3500 \text{ [m/s]}$
- ・ レールガンの最大仰角を  $5^\circ$  とし、水平線との間の角は  $\theta = 5^\circ$ 。
- ・ 鉛直（垂直方向）に対しての距離を  $y \text{ [m]}$ 、水平方向に対しての距離を  $x \text{ [m]}$
- ・ 時間を  $t \text{ [s]}$  とすると

式はとりあえずこうなります

ちなみに、\* は  $\times$  (かける) を表しています

また、空気抵抗は考えていないので実際は答えよりも若干低めの数値になると思います

$$x = v_0 * t * \cos \theta$$

1

$$y = v_0 * t * \sin \theta - \frac{1}{2} * g * t^2$$

2

今回は斜めの動き、斜方投射の運動ですから・・・

この運動を鉛直方向と水平方向、つまり縦と横の動きに分解します。

では縦の動きを見ていきます。

縦だけを見ると、毎秒  $3500 \text{ m}$  で約  $5^\circ$  の仰角で放たれた物体

は・・・  
3500 \* sin5° 「m/s」の初速で打ち上げられたと言ふ事  
になります。

では、打ちあげてから地表にもどってくるまでの時間を計算します。  
行って戻って来る運動ですから、打ちあげてから折り返し地点まで  
と、

折り返し地点から地表に落下してくるまでにかかる時間は同じです。  
では、打ちあげてから折り返し地点に達するまでの時間を求めます

式はとりあえず

・速度はVとすると

$$V = V_0 * \sin 5^\circ - g * t$$

折り返し地点の時の、物体の縦の速さは折り返し地点なので当然0  
「m/s」です

そして、sin5°の近似値は0.08715574274766  
です(頭が痛いorz)  
では数値を代入しましょう・・・すると

$$0 = 3500 * 0.08715574274766 - 9.8 * t$$

となります

計算して・・・小数第一位を四捨五入すると

$$0 = 305.9 * t$$

$$t = 3.112$$

つまり、弾丸が射出されて最高点の高さに達するまでは約3.1秒あるという事です

そして、戻って来るまではそのさらに二倍ですから射出から地表に落下までは約6.2秒かかります

ではその間、弾丸は水平距離でどこまで飛んで行くんでしょう？

式は・・・

$$x = v_0 * t * \cos \theta$$

$$x = 3500 * 6.2 * \cos 5^\circ$$

$$x = 217000 * 0.99$$

$$x = 214830 \text{ [m]}$$

つまり、最大射程は214.830kmということになります。  
だいたい距離的にどれくらいかな・・・

宮崎市内から福岡市内くらいまでの直線距離でしょうかね・・・  
そう考えると、かなりの長射程です

といってもミサイルのように誘導が出来ないレールガン。  
使用は、ある程度接近してからがベストかなと思います。  
ちなみに、縦にはどれくらいの高さ上昇するかといいますと・・・

y||305\*31 - \*9 . 8\*31\*31||9455 - 4 . 9\*  
961||9455 - 4708 . 9||4746 . 1「m」

2

最大で4.7kmほど上昇するようですね

さて、区切りがちょっといい加減すぎる気もしますが・・・

フレ「って、どうでも良い計算で何勝手に終わらせようとしてるんですかあっ!!」

JIN 「おわっっ!!!? ど、どこから湧いて来た!!!?」

フレ「人をボウフラみたいに言わないでください(怒)!!」

JIN 「すまないすまない、しかし・・・一つ驚いた事があつたんで、ちよつとびっくりしてしまった」

フレ「・・・驚いたこと?」

JIN 「う、うん・・・あ、ありのままさつき見た話を話すぜ・・・

俺はてつきり2000ちよつとくらいだと思つていたら、いつの間にか3000を越えていた・・・

な、何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何を見たのかわからなかった・・・

(嬉しさで)頭がどうにかなりそうだった・・・歓喜とか、

狂喜とか、

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっっ・・・」

シェ「以下略!!!!!」(拳でぶっ飛ばす!)

JIN 「ゴハッッ!?!?」

シェ「ったく、読者に感謝の言葉の一つも回りくどくしか言えんとは・・・

てめえ（「JIN」に今日を生きる資格はn・・・」

ロー「アンタもネタかああああっ！！！！」（巨大ハリセンでシエルを攻撃！）

シエ「ギャッツ！！！！？」

・・・

・・・

・・・

・・・

フレ「それで・・・結局何だったんですか、今までの？」

JIN「気にするな・・・何でもない。ではこの場で改めて発表しよう。」

鋼鉄の咆哮／＼海原の大鷲／＼が、ユニーク閲覧数で3000を  
超えた！」

フレ「え・・・ええっ！！？ ほ、本当にですか！！！！？」

シエ「これもひとえに読者の方々と、そしてフレース、お前や私たちの活躍あってこそで・・・ん？」

（シエルの視線の先に、自分に対して人差し指を向けるJINの姿が・・・）

シエ「・・・何か言いたい事があるのか？」

（シエル、わざとらしく刀をチラつかせる・・・）

JIN「・・・ゴメンナサイ」

今回はこの辺りで。

次回でまたお会いしましょう。

御感想や評価をお待ちしています！

次回 第十八話「南へ・・・」

第十八話 南へ・・・（前書き）

二週間ぶりくらいになってしまいましたか・・・  
欲を出せば一週間に一回くらいがベスト？  
今回は、サンディエゴ最後の回です

## 第十八話 南へ・・・

1939年5月2日、サンディエゴ沖・・・

本来は気象に於いての話だが・・・

ハリケーンやサイクロンそして台風は進行する際、その性質上針路上の周囲の湿気を多く含んだ雨雲を取り込む。

そのため、それが過ぎ去ったからにはほとんどの場合その翌日には穏やかな晴天が訪れる。

しかしそれはどうやら我々の立場に置き換えての例えでも通用するらしかった。

暴風雨のように激しく打ち付けるような猛攻は過ぎ去り、その爪痕が消える筈もない軍港を今日も晴天が優しく包む。

強い暴風が通過した後ほど晴天が訪れる日も長く、今日で丸10日が経過しようとしていた。

「今日も良い天気だな・・・」

「はい、本当に驚きですよ。クリスター大佐も、こんなにサンディエゴで晴天が続く日は珍しいって仰ってましたから」

「だが副長、我々はこの穏やかな陽気に甘んじていられる身分では無いだろう」

「それは承知しています。しかし私達が今出来る事は、ほとんど終えたようなものですから」

「ふ・・・逆に焦ってもそれは意味の無い事というわけか」  
此処に来る以前、フレーズベルグはウィルキア海軍史でも類を見ないほど短い期間で多くの戦いを経験した。

ああいう風に戦闘状態と言う物が頻繁に発生していた頃を考えると、少しばかり違和感にさいなまれる。

「戦闘の感覚を忘れられなくなったという事か」

「それは・・・！・・・いえ、そうなのかもしれません。しかしそれは必要な事ですが、同時に危険な事です・・・」

「分かっているなら、それで十分だ・・・それさえ忘れなければ、君が狂戦士となる事は無い」

それは兵士が実戦を経験し、始めに襲われる恐怖だ。

戦闘は実銃で相手を撃つたり、剣で斬りつけ、ボタンを押して放たれたミサイルで敵艦を破壊するといった様々な形式がある。

しかしいずれにおいても変わらないのは、自分が敵と認められた者を害する、下手すれば殺しているという事実だ。

戦時下でなければ殺人と変わらない行為、それに対して最初に恐怖を覚えない人間はいないだろう。

だが、人はそれに次第に慣れてしまう。

それは若手の士官よりも、やはり年期を重ねたベテランに多くみられる傾向だ。

（まあ、そうなるかならないかはやはり本人次第と言う事だろうがな・・・）

「艦長！」

自分を呼ぶ声がした後部艦橋を見上げると、若い通信士がカイトを呼んでいるようだ。

「どうした？」

「本日1500時に艦内の第一大会議室で近衛艦隊の幹部を集めて会議を開くとの事です。」

加えて、事前に話し合いをしておきたいので長官室に来られたし、との御命令でした」

「そうか・・・わかった。」

（いよいよ見通しが定まったか）

「それでは、副長・・・しばらく艦を任せる」

「はっ、了解しました艦長」

敬礼をして自分を見送るリナに、カイトは軽く頷きそして背を向けて艦橋内へと姿を消した。

『……それさえ忘れなければ、君が狂戦士となる事は無い』  
舷側の柵に両手を重ね、その上に顎を乗せたりナの脳裏には先程の  
カイトの言葉が浮かぶ。

「私の心配は……それもそうですけど、艦長の方こそ」  
悲しげな表情彼女はそのまま眠るように両目をつぶり、しばらくそ  
のまま海風に身を当たらせていた。

長官室のつくりは艦長室とほとんど変わらない。

枕元に艦内内線の受話器が付いているベッドや、黒檀材の重たそう  
な机、奥には本棚や小さな洗面台付き風呂などがある。

部屋や風呂などもそう広いわけでもなく、広さだけで言うなら貧乏  
人が住むくらいの申し訳程度しかない。

だがプライベートスペースを設ける事は難しい洋上艦の中ならば、  
それでも最高クラスの贅沢である。

殆ど変わらない両者、唯一の違いと言えばやはり部屋のある場所だ  
ろう。

艦長は有事の際はすぐに艦橋に駆け付けることが必要とされるため、  
艦長室は艦橋のすぐ後方に位置している。

一方長官室はCICと同じ階に存在し、CICと同じく艦橋付近に  
ある艦長室より戦闘時の安全性は高いと言える。

「艦長、参りました」

『入りたまえ中佐』

中に入ると、長官は机でデスクワークの真つ最中だった。  
机の両端に数センチくらいの紙の丘を作り、その全てに目を通して  
いた。

「急に呼んですまなかった。 時期が時期だ、本当は私が艦橋にで  
も行くべきところなんだろうが……」

「いえ、副長に委任してきましたので大丈夫です。 それより長官、  
話し合いとは？」

カイトの返答に安堵したように笑みを浮かべると、彼は机の引き出しから一冊のファイルとそれに挿まれていた写真を取りだす。

「既に知つての通り、我々は同盟国イギリスへと航路を取るようになるのだが・・・ここで少し厄介な事態が発生している」

白地図を長官が広げ、その中の一点を指さした。

「太平洋から大西洋へと渡るには三つの方法がある。

まずは、北米大陸を北上し北極海から大西洋へと至るルートだが・

・・・」

お互いの顔を見合わせると、長官は呆れ笑いのような表情を浮かべている。

そしてきつと、自分も同じような表情になっているのだろう。

「説明するのも馬鹿馬鹿しいが、完全にウィルキア帝国の勢力圏だ。向かうのは自殺行為、と言う訳で却下になる」

「先の超兵器の襲撃もありますし、既にこの北米西海岸も安全ではありません。ましてや、ベーリング海峡など敵地そのものです」カイトが補足を加えながら自分達の航跡を思い返す。

確か、シュヴァンブルグの次に襲撃を受けたのはベーリング海峡であつた筈だ。

そんな所に今更向かうなど、撃たれに行きますと言っているようなものである。

「さて、冗談はさておいて有力なのは次の二つだ。

まずは、南米大陸を南下、フォークランド諸島を経て大西洋からイギリスを指すという南方ルート。

そしてもう一つが、パナマ運河を使ってカリブ海から大西洋に出てイギリスへと向かうパナマルート」

「しかし、パナマには敵艦が多数集結していると聞きます。

先の戦闘で弾道ミサイルを放ったニーズヘッグも、情報ではここから来たのだとか・・・」

「この写真はその敵艦隊の様子を撮つたものだ。空母もなく大型艦艇こそ少ないが、水雷艦隊と思われる編成が目立つ」

パナマ運河内には巨大な湖もあるのだが、その中ではやはり機動力に恵まれる中小艦艇のほうが真価を発揮する。

こんなものに大型艦が襲われたら、魚雷によってあちこちに穴をあけられて無残に沈むのがオチだ。

「では、南方ルートはというと・・・これもどうやら好ましくないとはいえな・・・」

かねてより米国の支配下にあつた南米諸国が独立後も、依然と変わらない扱いを米国から受けていたらしい。

そしてそれに反発した南米諸国が今、ウイルクア帝国を解放軍として迎えつつあるという嫌な報せを聞いた

「この写真は、その泊地か何かのものですか？」

カイトが差し出された写真を手に取り、一瞥すると複雑な表情の長官に尋ねる。

「南米コロンビアの湾の様子だ。コロンビアと言えば、パナマ運河も近い。」

もしパナマ攻略最中に、背後から彼らの襲撃を受ければその被害は決して軽くないと思われる。

だが南下するとしても、反米を掲げているのはコロンビアだけでは無いという事を忘れてはいけない

「つまり、イギリスの勢力圏へと到達する前に、多数の襲撃を受ける可能性が高いというわけですか？」

「そう言う事だよ中佐。パナマの猛攻を一点突破、後は楽が待っているであろう運河ルートか、」

激しい戦いは無い可能性が高いが、約一か月ほど襲撃を受ける可能性が高い危険海域をさまよう南下ルート・・・」

「どちらも一長一短ですね」

激しい苦難を一瞬で終わらせるのか、程々の苦労を長々と続けるのか・・・戦力に乏しい身としてはかなり難しい選択だ。

一つでも選択を間違えれば、それは即身の破滅を意味する。

新たに今聞き取った情報だけでなく、それまで既知の情報の全てを

参照するように、カイトは頭をフル回転させて考える。

30秒ほどの沈黙ののち、彼が出した答えは

「長官、フリースベルグ艦長の私としてはパナマ運河の攻略を具申します」

「ほう、その理由は？」

理由を尋ねて来るに於ては、長官の表情には予想通りといったものがうかがえる事にカイトは気付かないまま続けた。

「仮に我々が南へ廻航したとしても、パナマを物にしている彼らには太平洋から大西洋への廻航はそう苦では無い事です。

大西洋であっても、赤道付近にはパナマの敵艦隊が攻勢を仕掛けてくる可能性が大きいとみられます。」

「大西洋に出るまでパナマの敵艦隊と交戦になる可能性は、フォーランド沖へ廻航した方が低いと思うが？」

「パナマに行けば100%、南へ廻航すれば100%以下なのは確かだ・・・それを何故、パナマへと？」

「いえ、言葉を返すようですが廻航しても私は100%パナマの敵艦隊との交戦があると考えます」

「ほう、やけに自信があるようだが・・・」

「南米諸国は反アメリカを唱え、今ウィルキア帝国の傘下に入らんとしています。」

より一層深く彼等に助けを求め、取り入ろうとする南米諸国から見れば我々の近衛艦隊の居場所、

拳句には撃滅したとなればその情報はこの上ない手土産となることでしょうか」

「なるほど 君も着眼点はそこに来たか」

「と言う事は、この説は事前に誰かが長官に話された そうですね事ですか？」

“君も”と言う言葉にカイトは引っかかる。

つまり、その持論を唱えた者が他にもいるのだろうか？

誰だろうか 国王陛下か、ガルトナー司令か、もしかやシュルツ

が？

「ははは、他でもないこの私だよ、艦長」

意外な事に発案者は目の前にいた。

口を開いたまま呆然となるカイトの前で、ケラケラと笑う長官

「しかし、長官も人が悪いですよ……。それならばそうだと、なぜ事前に言わなかったのです？

事前に言われていたならば、私はそれを支持しますと言うだけで良かったのですが」

「すまない艦長。実は少しばかりワケがあつてな」

そういうと長官は立ち上がりカイトの前へと詰め寄ってきた。

「先に言っておくが艦長、これから言う事は別に嫌味で言う訳では無い、気分を害さないでほしい」

長官室が神妙な空気に包まれる中、カイトは彼を直視して黙って頷いた。

「私は第11近衛艦隊の司令長官であり、中将である。一方、君は一軍艦の艦長であり、階級は中佐だ。

もし私が作戦などに於いて“こちらへ廻航するのが絶対だ”と言つたとする。

その作戦工程に、著しいミスがあつたとしても　この艦隊でそれに反対出来る者はいるのだろうか？」

「それで私にそのことを伏せて意見を」

「そうだ、私は臆病なのかもしれない。パナマに向かうのが正しいと思いつつも、その選択にミスは無いだろうかと心配だった。

だが意見を求めようにも、“私はパナマへ向かうのが良いと思うのだが”と始めてしまったら、

反対するべきと判りつつも、反対せずにただ私の説に頷く者も多いと思う

試したようですすまなかつたが、分かってくれ艦長」

「謝らないでください、長官　しかし、一つ申し上げておきたい事があります」

姿勢を正したカイトに、長官が眉をひそめる。

「私はたとえ長官が自分の説を持ち出されても、間違っているという事が明白に判れば反対します」

「そうか、ありがとう艦長。君のおかげで決心がついたよ、

午後の会議にはパナマ攻略を会議で進言する。

君も、来てくれるね？」

「はっ、同行させて頂きます」

その後、敬礼を送り長官室から立ち去ったカイト。

部屋から出てすぐ、CICから出てきたバンとすれ違った。

「にいさ　じゃなくて、艦長」

「バンか・・・今CICに向かつてお前を呼ぼうと考えていたところだった」

「？」

首を傾げるバンの隣へと詰め寄ると、カイトは彼に耳打ちで何かを告げた。

それを聞いた瞬間、バンは思わず後ろへ飛びのいた。

「い、いや、でも　それはまた“あんなの”が出てきた時って・

・・・」

「ワケはいずれ分かる時が来る　とりあえず今は一秒でも時間が惜しい。

分かったならば、工兵達を集めて作業にかかってくれ」

それだけを言うと、カイトは会議への準備へと入るため早足でその場から立ち去った。

その後、しばらく呆然と佇んでいたバンをCICのクルーが発見する。

不審に思い近づいてバンに声をかけると、彼は突然「えらいこつちや！」と何度も叫びながらCICへと消えて行った。

場に居合わせたクルーは、お互いの顔を見合せて首を傾げるしかできなかつた。

「では、パナマ攻略で賛成の者は拳手を」  
一斉と言うほどタイミングは一致していなかったが、バラバラと上がりつつ結局全会一致でそれは決まった。

米海軍のクリスター大佐を始めとした将官達を招いての午後の会議は、殆ど滞りなく進んでいる。

事前に準備を終えていたというのもあるが、やはり一番大きな理由は各将官の意見が一致していたという点だろう。

近衛艦隊としてはイギリスへ向かうためにパナマから最短ルートで大西洋に出たいという希望があったこと。

そして米海軍としては壊滅状態に近い太平洋艦隊の再編のため、一度米大西洋艦隊との合流を果たしたいという目論見があった。

「では次に、その攻略ルートを軽く説明したい・・・」

先程もトライトン中佐が説明した通り、米海軍偵察機の情報では南米のガラパゴス諸島という自然豊かな小さな島々に、南米諸国の艦隊が集結している。

国防省の情報筋では、宣戦布告ともとれる宣言が南米諸国から既に発信されているという情報もある。

南米諸国には旧式の艦がそろっているとはいえ、今の我々の戦力からすれば少なからず脅威である事には変わらない。

そこで後顧の憂いを絶つため、パナマへと向かう以前にココ島に集結する敵性艦隊の脅威を排除する必要があるが出てきた。

では諸君、これまでに質問は無いか？」

長官が全体を見渡し、二往復目の視線を向けていた時右奥の方でまっすぐに手が挙がった。

「・・・ええと、君は・・・」

「ドイツ共和国軍の技術士官、ブラウン大尉です」

良く知らない顔だったのでブラウン大尉の名前を忘れていた長官に、カイトが補足して助ける。

「ああ、ではブラウン大尉どうぞ」

「御質問が一つ・・・その駐留する敵性艦隊の構成はどのようなものでしょうか？」

「ではその質問は私が・・・」  
長官に促されてカイトが立ち上がってブラウン大尉の質問に回答する。

「巡洋艦以下の中小規模の艦艇が十数隻、他魚雷艇等の小型艇が10隻ほど」

「わかりました、ありがとうございます」

静かにゆっくりと礼をして、ブラウン大尉はシユルツの隣席に再度座った。

「では、他には無いようなので続けよう・・・では中佐、ココ島の現状説明を」

「はい。先ほども説明しましたが、ガラパゴス諸島には中小艦艇の多数の集結が見られます。」

それはガラパゴス諸島の入り組んだウルビーナ湾を泊地としているため、金が無いからと言う理由以外にも、

戦艦のような大型艦艇では身動きがとり辛いという理由もあり、彼らは図らずも賢明な選択をしたのでしよう」

軽いブラックユーモアを交えた説明に、周りからは薄い笑い声がある。

「ガラパゴス諸島周辺には哨戒のために2〜3隻で艦隊が島周辺を周回し、潜水艦の接近を防ぐために防潜網らしき

浮遊ブイを映した偵察写真もあり、敵が湾内から出てきたところを叩くのが最も効果的だと思います」

「その事なんですが一つ・・・つまり、ある程度隠密性が高い艦船で接近して致命的な打撃を叩きこむのが

効果的だとおっしゃるのですよね？ ですが、水上艦では隠密性はある程度まで接近すれば無いも同然です」

「その通りだ、だが我が近衛艦隊に潜水艦の配備は無い ステルス艦である本艦が」

「中佐、少し待ってくれ　偶然だが、我々は今一隻の潜水艦を保有している」

「ガ、ガルトナー司令、潜水艦があるんですか!？」  
ガタツと椅子を後方に跳ばすようにカイトは思わず立ち上がって尋ねた。

「そうだ、我々が保有していたものでは無いからデータに無いのは当然だ。

実は日本を經つてすぐ、我々はブラウン大尉が乗艦していた潜水艦を保護している。

幸い我が艦隊の駆逐艦には、その潜水艦と同規格の魚雷が搭載されている」

「ではガルトナー司令、さっそく魚雷の搭載作業を始めて頂きたい。だが・・・そうになると、フリースベルグはどうしたものかな、艦長？」

両手を組んでカイトの方を向いて尋ねる彼に、カイトはある提案を持ちかけようとしていた。

「長官　」

「ん？」

「敵艦船を湾外へとおびき寄せる役目、その第一波を本艦に任せて頂けないでしょうか？」

しばし沈黙の後、長官は再びカイトの方を見つめて告げた。

「何か手があると見えるが、あくまで役目はおびき出すだけだ

勢いあまつて敵艦を余計に刺激してしまえば、

敵が湾内に籠る可能性だつて考えられる」

「それは承知しています　長官、お願いします」

「　良いだろう、第一波攻撃は艦長、君の指示に任せよう。

それでは、以上で今日の会議を終了する。　古の書物によると、

勝利は戦の準備の時点で決まるといふ

諸君らの戦場での働きはもちろん、事前の準備行動に於いての努力を一層期待する、解散！」

会議が終わり誰も居なくなったフリースベルグの会議室、カイトは一人書きとめたメモや海図等を整理している。

その時ふと隣に誰かの気配を感じて振り返ると、そこにシュルツの姿があつた。

「なんだ、君か　　今もそうだが、会議中君は何か腑に落ちないような顔をしていたな」

「その事でカイト、君に一つ訊きたい　　第一波の攻勢で、君は何をするつもりなんだ？」

「　　敵泊地の軍事関連施設を攻撃する。ただそれだけだ」

「だが、軍事関連施設は島の広範囲に展開している　　と言うより島全体が軍港みたいなものだ。」

単艦で誘導弾や砲弾でちまちまと攻撃しては、あまり効果が期待できないことぐらいわかつているだろう？」

「ライナルト　　先日君は見ただろう？」

先日、シュルツはフリースベルグへ最初に乗艦した時の事を思い返して見る。

すると、その時この艦を見た、見慣れない何かの存在を思い出した。

「まさか　　いや、でもあれは超兵器に対抗するためとか・・・」

「事前にやっておかないと、いざという時に出来るものも出来なくなってしまう」

それを聞いてシュルツを手をポンツと叩いて頷いた。

「なるほど、実戦は最良の訓練と言う訳か・・・」

「そう言う事だ　　今、ガラパゴス諸島攻略に間に合うよう準備を進めている」

「ならば頼んだ、カイト　　後は潜水艦の俺たちに任せていてくれ」

自信満々という表情のカイトの背中を叩いて、シュルツは会議室を後に他の士官と同様自艦であるウンディーネへと戻って行った。

これまでに何度か見ているサンディエゴの夕暮れ  
茜色に染まった空が風防越しに見える中、艦橋ではCICクルーま  
でを集めて会議が行われていた。

数人から多い所で数十人を統括する各科の科長の表情には、いよいよ  
よかと覚悟を決めたものがうかがえる。

集まったのを確認すると、カイトは会議でとつたメモ等に軽く目を  
通して話し始める。

「各科、準備はすでに完了していると思う・・・本艦は明朝100  
0時、敵艦隊の泊地へと奇襲を仕掛けるため

このサンディエゴに別れを告げ、南米へと航海に出る・・・作戦  
開始は4日後の米東岸標準時の0200時。

作戦には・・・」

「あの、艦長・・・」

リナが辺りを見回してカイトが続けようとしていた話を遮る。

「どうした副長？」

「砲雷長が見当たりませんが・・・？」

それを聞いて辺りの科長達もお互いの姿を見合わせたりするように、  
バンの姿を探す。

しかし、どこにもあの眼鏡機械オタクの姿は見当たらない。

「こんな会議に、遅刻なんて・・・」

リナが小声で困ったように告げると、カイトはなんだそんな事かと  
涼しげな表情をしていた。

「すまない、副長にみんな。先に言うべきだったが、砲雷長は良  
いんだ。

今、特別な作業に就いてもらっている・・・来れないのは当たり  
前なんだ」

「は？ 特別な作業・・・？」

「その事を含めて、作戦内容を簡単に説明しよう。

今回フリースベルグはたった一発撃つだけで任務を完了する

諸君の中にも知らない者がいるだろう本艦の最終兵器、艦首に搭

載された電磁砲だ」

カイトが告げると、各科長達の間には静かに喧嘩が広がっていく。

「電磁砲!? そんなものがあつたのかよ・・・」

「電池砲? 撃ちこんだら充電できるのか?」

「馬鹿、でん・じ・ほ・う・・・レールガンの事だよ」

辺りが少しがやがやとなつている中、リナはある疑問をカイトに投げかけた。

「しかし、艦長 電磁砲はまだ整備中で使用はできないと砲雷長が あ、だから砲雷長が!」

「正解だ副長。 砲雷長にはこのミーティングに出なくても良いから、今晚までに最終チェックを終えるように言っておいた」  
バンがこの場にはいない理由の詳細はこれでわかった。

しかし、それでももう一つ疑問は残っている

「砲雷長の件は理解できました・・・ですが、予定ではカリブ海に出るまで使用は無いという見通しははずでは?」

「そうだ、本当に使用を考えるのはその辺りになりそうだ、が

如何せん我々は電磁砲に対して経験不足だ。

先の高速戦艦のような超兵器に出くわした時、その経験不足は致命的だろう。

さて、そろそろ静かにしてもらいたい」

カイトが科長達に一声かけると、彼らは最初にこの艦橋に上がった時のように口を噤み、艦長の方へと向き直る。

「要するに今度の電磁砲使用は今後超兵器に出くわした場合を想定して、電磁砲発射を円滑に行うように出来るための訓練を兼ねている。

実戦は最良の訓練だ 各科の全クルーは、この後配布するマニュアルを参照して欲しい」

会議というかほんの顔合わせと言ったミーティングは、僅か30分程度で終わった。

マニュアルと言っても、数枚の紙を綴じたもの それを手にと

つて艦橋に常にいる通信科長以外は全員がいなくなる。

「さて、砲雷長も未だに頑張っている事だ　　我々も電磁砲発射  
シークエンスの手順を見返しておこう」

「はい、了解です艦長」

二人は声に出しながら来るべき時に備えての予習を、周囲のクルー  
や長官は暖かく見守っていた。

一方、今度のフレイスベルグの戦闘で大任を任されることとなっ  
た艦首電磁砲。

通常砲弾と同じ火薬で加速、その速度を電磁誘導によって秒速3・  
5kmという驚異的なスピードにまで加速させる。

そのモジュールの殆どが完成しているが、それらの各部がきちんと  
駆動するかというテストも兼ねて整備が進められていた。

蛍光灯が格納庫全体を照らしているが、細かい作業や砲台底部では  
照明が届きにくい。

そこで移動式の照明が内部には幾つも持ちこまれていた。

あちこちの角度から照らされた白銀の砲身を持つ電磁砲は、一種の  
モニユメントのような神秘さを秘めていた。

　　というのは、機械とも話せると豪語する工兵達の考えだ。

彼らは長時間働いているのだが、それでもまだ作業の手は止まると  
ころを知らなかった。

「砲雷長、これは？」

「それは右・・・そうそう、排熱デフレクターの真横　　互いに  
かみ合わせるように設置してくれ。」

　　「おい、そっちの排莖口はどうだ？」

「この後テストしてみます」

バンと十人ばかりの工兵達は、難題を与えられつつも着々と作業を  
進めていた。

バンを始めとして機械が純粹に好きな者たちを工兵として集めたた

め、文句を言う前に作業を始めている。

「艦長の人選は間違つて無かつたみたいですね」

いつのまにかバンの後ろにはフツツとほほ笑む艦魂フレースの姿があつた。

「ん？ やあフレース 君の最強の剣でも見に来たのかい？」

「それもありますけど・・・砲雷長、私にも手伝わせて下さい」

突然の申し出に、バンは握っていたスパナを落としそうになるほど驚く。

「えっ!?!・・・き、君が？」

「ダメですか？」

途端にシユンと涙目になつてしまふフレースの表情を見て、更にバンは慌ててしまう。

「い、いやいや、そのなんだ・・・ダメとは言つて無いが、しかしどうやって、何を手伝うんだい？」

「砲雷長・・・私は艦魂ですよ。艦かいたの事を一番分かっているのは、私だと思えますよ？」

その提案に、バンの脳内に一条の光が差し込んだ。

「そうか・・・よし分かつた、ならば手伝ってもらおう。現時点で、どこがおかしい所は分かるかい？」

「わかりました!! えーと、うーん・・・砲雷長、あれ逆」

目を輝かせると、静かに目を閉じて自分の艦体からだに異常がないか探る。フレースの指の先には、左右とで上下の方向が逆になっている排熱

デフレクターが

「まったく、流石に皆疲れが溜まってきたのかな・・・こいつは俺がやるよ」

オイルで所々汚れた作業服の腕をまくりあげ、バンはスパナ片手に指摘された個所へと駆け寄る。

「ところで、砲雷長」

「ん？ どうした？ まだ待つてくれ、コイツを直してから」

「いえ、そうじゃなくて　　もしも、ですよ。」

もしも、砲雷長がお兄さんでもある艦長さんと敵同士になったら、砲雷長は戦えますか？」

バンは振り返り何を聞いてるんだと言い返そうとしてやめた。前回の戦いの後すぐに見たフリースの悲しげな表情が、脳裏をよぎったからだ。

きつと今も同じような表情で居るに違いないと、彼女の質問内容や声のトーンから彼はそう判断した。

(そうか、ニーズヘッグの事を言ってるんだらうな )

「戦える」

「そうですか、砲雷長も」

「 と言つてやるのが筋かもしれんが、実際のところ俺は無理だらうな」

少し意地悪気だが意外な答えの翻しに、フリースは驚きボルトを緩め始めた彼の方を見る。

「俺は小さいころから、母親と兄さんに育てられたようなもんだ。そんな人を、俺は撃てないな」

撃つぐらいだったら、臆病だらうと罵られても良い 俺は除隊して逃げるよ、きつと」

軍人が軽々しく逃げると言うのは、厳格なお仕置き係に聴かれてもしたらとんでもない事になることだらう。

だがフリースはこれまで小耳にはさんだ回答とは全く違う回答に、思わず聞き入っていた。

「でもなフリース、俺が逃げると断言したのは単に怖いとか負けるからとか、そんなんじゃない。

言っちゃなんだが、俺は兄さんを兄としてはもちろん上官として尊敬している。

100%同じとは言えないかもしれないが、だいたい俺の護りたものは兄さんが護ろうとしている物なんだ。

それじゃ、フリース・・・君はどうだ？」

正しい方向に組み直した排熱デフレクターを固定させながら、バン

はフレースに尋ね返した。

「私、ですか？」

「大方こんな事を尋ねた理由は君の妹、ニーズヘッグの事なんだろう？」

「はい。 やっぱり、分かっちゃいますよね」

「当たり前だ　それで君に今度は訊きたい、良いか？」

準備はいいかとも、覚悟はいいかともとれるバンの言葉に、フレースは彼の目を見て黙って頷いた。

「フレース、君の護りたいものが君の妹であるのであれば、出来るか分かんが君はその戦闘を中止させるべきだ。

俺たちはものすごく困るがな　それが君の正義ならば仕方ない、と俺は思う」

「はい」

「だがなフレース、お前の護りたい物は本当に妹オンリーか？」

「あっ!？」

これまでフレースの目の前をふさいでいた暗雲が、突然暖かい突風に吹き飛ばされたようだった。

そうだった　自分が戦うべきは、世界に対して侵略の手をのばさんとするウィルキア帝国ではないか？

妹が敵として存在するという事に、とらわれ過ぎていた　戦うべきは妹を捕らわれの身にしたウィルキア帝国。

そして、護るべきは、帝国の支配から逃れようとする自由の世界！

「砲雷長、なんだかスッキリしました。　ありがとうございます！」

砲雷長も、艦長とやっぱり似てるんですね」

「そ、そうか？　それはまあさて置き、とりあえず良かったな　そう言うところっかり元気と笑顔を取り戻した彼女は、どこかへと転移して行った。

「しかし、意外と単純なのか　ってああっ、最終動作テスト軽く終えて貰う筈だったのに!！」

だがバンの表情には苦笑いこそあれ、後悔の表情は微塵もなかった。

「よし、各部最終チェックに入るぞ。電源からの電流流入から排熱・排莢までの動作テストを行う」

「……はいっ！」「」

作業を終えた工兵達を砲塔の下部に集めるバン。

「それにしても、兄さんに似てきたって 伝染って言うんだろ

うな、仕方ないかもしれないが、

勘弁してくれ、トホホだぜ」

ブツブツと男の嘆きが吐き出される中、頼もしき切り札の準備は着々と進行していた。

そしてそれは艦橋でも

「射線軸制御移行！ 射出口オ……ハ、ハクシヨンツツ！！」

「！？ だ、大丈夫ですか？ もしかして、風邪でも？」

シークエンス復唱中、突然盛大にくしゃみをしたカイトに対して、目を丸くしたりナが尋ねる。

「いや 風邪にかかつては無い筈だ。 誰かが噂してるんだろ

うな……良い噂だと良いが」

溜息混じりに呟きつつ、苦笑いの表情のままチェックリストを再び読み返すカイト。

翌日、彼らは再び戦地へと舞い戻る事になる。

休む暇もなく、熾烈な戦いが待ち受ける海 敗者に待っている

のは死のみという過酷な海へと

## 第十八話 南へ・・・（後書き）

ふと昔考えていた企画を思い出しました。

既に完結した《波乱万丈艦魂記》空母フォレストル》と、この大驚とのコラボです。

WSG2をプレイされた事がある方なら、あのエクストラステージを思い浮かべてくれるとありがたいです。

プレイされていない方に、簡単に説明させて頂きますと・・・

登場キャラクターが本編とは全く違うキャラ（性格など）で登場し、プレイヤーの人物像を面白いくらいに粉碎してくれるという、本編とはほとんど関係無いオマケのような要素が大きいものです。

真面目に見た人が馬鹿を見る・・・そんな感じの Comedy 要素の強い内容だと思ってくれば良いかと思えます。

それを・・・

やるのかなと考えています

・・・ハッ、自分に Comedy 能力なんてあったっけ!!?（お

第十九話 「その光を放て！」

## 第十九話 その光を放て！（前書き）

一か月ぶりの更新となってしまいました。

別に就職活動が忙しくなったとか言う事ではありません。

ちよつとしたスランプ気味だったり、私事で酷い目にあつたり（笑）

でも途中で放り出すことはしないと誓っているJINです。

この一か月近く、物語の構成で悩んだりはもちろん、

大学のゼミで嫌な重役を嫌々任されたり、

サークルでのゴタゴタに巻き込まれたり、

この物語の元ネタになっているウォーシップガンナー2のPSP版  
を4週目までハマり込んでやつたり、

とても大学生のリア充と呼ばれるような生活からはほど遠い一ヶ月  
間でした・・・

・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
アレ？

何か変なこと言いました？

## 第十九話 その光を放て！

1939年5月6日、1745時

大西洋に出るために、しばらくまた太平洋で足止めを食らう羽目となった。

当初の予測を裏切り、南米諸国が反ウィルキア帝国を唱えるアメリカと近衛艦隊に対して矛を向けてきたのだ。

限られた戦力で作戦を確実に成功させるには、後顧の憂いである南米艦隊を奇襲によって撃滅する以外に無かった。

ドック艦や今回お留守番となる元来シユルツの艦である巡洋艦ウンディーネも同行し、多国籍の艦隊が太平洋を往く。

今回の奇襲作戦は、攻撃地点が3箇所に分れていた。

第1作戦ポイントは、ドック艦フリングホルニと艦長不在のウンディーネが待機し、そしてカイトが指揮するフリースベルグがそのポイントを受け持つ。

第2作戦ポイントは敵泊地から約35km北西の海域で、大口径の主砲を持つシエルドハーフェン姉妹艦やイージス艦きんぼう、そしてセシリアが指揮する米太平洋艦隊の残存艦が受け持ち、遠距離からの艦砲射撃や航空機による爆撃で打撃を与える。

しかし、前の二つはいずれも殻に籠っている敵艦隊を湾外へと引きずり出すための布陣だ。

今回の作戦の要は、敵が慌てた所に海中から決定打を打ち込む潜水艦。

そしてその第3作戦ポイントを受け持つのは、先の超兵器撃破の立役者であったシユルツだ。

彼は先の戦いでその戦術眼を注目され、また潜水艦の指揮資格も所持していたためウンディーネを降り、今回は潜水艦へと乗艦し指揮を執ることになった。

それは良かったのだが、シユルツが思うに潜水艦というのは洋上艦に比べて視界が開けていない分　どこか華が無い気がするのだ。ウンディーネならば時刻的に艦橋を夕陽が照らしているのだろうが、潜水艦内は飾りつけの無い蛍光灯の輝きが狭くいかにも無機質な船内を照らし出している。

水面下を潜航している潜水艦の中は両側にびっしりと並ぶ棚型コンソールのおかげで狭く、誰も必要最低限以外の事を喋ろうとしない。そんなわけで水上艦と違いチャート以外見つめるところがないシユルツの耳に聞こえてくるのは、ディーゼルモーターの回転音と真上を並行して往く友軍艦艇群の推進音のみ。

腕だがそろそろ忙しくなる頃合いだろうか　時計を見ながらそろそろだなと考えていた時、海上から聞こえてくる音が変わった。

「第1作戦ポイントに到達、フリースベルグ停船しました」

遠距離から電磁砲で開戦の号砲を放つ大役を任されたフリースベルグが、敵泊地から北西100kmの洋上海域で停船した事をソーナーが告げた。

それから程なくしてのこと、副長を兼任しているブラウン博士が一枚の小さな紙を持ってシユルツへと差し出した。

「少佐、フリースベルグより入電です」

「どれどれ・・・『貴艦ノ奮闘ヲ期待シ、武運ヲ祈ル。　ウンディ

ーネ　ガ　首ヲ長クシテ待ツテイル』、なるほどウンディーネは意外とさびしがり屋らしいな」

「・・・少佐の艦が、どうかしたんですか？」

意味深なワードを呟き苦笑いを浮かべるシユルツを疑問に思い、ブラウン博士は思わずそれを問いかける。

「いえいえ、我々船乗りの間で少々有名な話なんです。理系まっしぐらで技術科に所属されていた博士には、少々理解しがたいものかもしれませんか・・・？」

「少佐・・・それは私が頭力チコチで科学や数値で解明できないものは信じない性格だと　　そうおっしゃりたいワケですか？」

ため息を吐いてやれやれと言う表情の博士は、そのままシユルツのいる潜望鏡付近から立ち去ろうとする。

「半分は冗談ですよ博士　お話ししますよ、博士。　博士は、

“艦魂”と言う物をご存知ですか？」

「かんこん　？　初耳ですね、それは一体どのようなものなんですか？」

博士を引きとめたシユルツが告げた言葉に、　またもや博士は首を傾げる。

「簡単に言ってしまうえば、船の魂　　人格を持った船限定の精霊のような物ですよ」

「船に人格が！？　それはまた興味深い現象ですね」  
新発見をしたように驚く博士に、シユルツは話を続ける。

「おそらくさつきフリースベルグから打電して来たのはライトン中佐でしょう。この話はその艦魂が見えるという彼から士官候補生の時に聞いた話なんですよ」

「俄かには信じがたい話ですね　」

「それは、私も最初はそう思いましたが　先日フリースベルグに乗艦した際ライトン中佐と話したんですが、彼はウンディーネから聞いたと言って我が艦のクルーしか知りえないような事を知っていました。国防海軍の手から逃れた時のことや、それに博士が乗艦されていたこの艦と太平洋で遭遇した時のこと　」

「そういえば、良く船は女性形で呼ばれる事がしばしばですね。

英語でも、艦船の代名詞が彼女という意味のshe<sup>シィ</sup>ですし　」

「しかし残念ながら、私には見えませんよ。　きつと、こんな話を聞いている博士もお見えにならないんでしょうね・・・」

「フフ・・・そうなんでしょうね、きつと。　ですが、首を長くさされているのなら早く帰ってあげないと悪いですね」

出航から数時間ぶりに会話らしい会話が響く潜水艦は、目的の戦闘海域へと着々と近づいていた。

他の艦艇よりかなり手前の海域に停船するという予定通り、一足先に船足が止まったフレースベルグ。

だが他艦よりも航行に時間を充てない分、電磁砲の最終調整を行っておく必要がある。

前方を眺めながら、マニュアルにも載らないような細かい段取りをカイトが考えていた時だった。

「艦長、停船作業完了しました」

茜色の水平線の方向へと向かう艦隊の黒影を見つめるカイトに、作業を終えたりナが作業の完了を告げた。

「御苦労さま副長……」

そう言うとカイトは艦長席に備え付けてある受話器を取り、全艦放送のスイッチを入れる。

「総員、警戒態勢を解除する。作戦開始予定時刻まであと……五時間と十五分、それまでマニュアルの見直しと半舷にて二時間交代の休息を取れ」

サンディエゴを経って今日で五日、最後の戦闘から二週間が経過したせいも、どうやらクルーの中には休み慣れしてしまった者もいるらしい。

半舷休息の命令でようやく解放されたクルー達が、戦闘前の最後のコンディションを整えるために休息に入る。

「艦長、いよいよですね。おかげで砲雷長も少しばかり気が立っていると聞きますが」

「かもしれないな……彼らの仕事に、今度は我々が応えなくてはならない。副長、艦橋を任せろ……」

急襲された場合以外かつ戦闘活動がメインとなる際、艦長はCICに籠り戦闘指揮を執ることが多い。

艦長が艦橋とは違う所で何らかの指揮を執るといっものは、旧式戦艦の防空指揮所に似ている。

防空指揮所は対空戦闘の場合に艦長が登り、より広い視界を確保し

最適な戦闘および航行の指揮を執る事が求められる。

一方、C I CはCombat Information Centerという意味　つまり空に限らずあらゆる戦闘を統括し管制することができる戦闘指揮所と言うわけだ。

空以外には地上や水上さらには水中の情報を一括収集でき、艦長だけでは混乱しそうな指揮系統を優秀なコンピューターとC I Cクルーがサポートする。

今回のミッションでは、実力だけが物を言わない。もっと大事なごと、連携　コンビネーション。

一発の砲弾を放つのに、文字通り砲丸のように我々は一丸となる必要があった。

もちろん、これまでに幾度もチュートリアルを重ねている。

サンデイエゴを経て時間を見つけては繰り返し行った電磁砲発射の訓練。

その数日間のノウハウを胸に覚悟を決めて立ち上がったカイトへ、リナが心配そうな表情を向けていた。

「大丈夫ですよ、艦長。　きっと成功しますよ」

「そうだな副長　いや、出来ることしか命令しない。だから出来るに決まってるんだ」

出来なくてはならない、これが出来なければ世界を呑みこもうとする相手に対抗なんて出来はしない　カイトは遙か遠くにある筈の敵地へと視線を向け、その目を細めた。

刻々と迫るカウントダウンに、誰もが緊張の色を隠せないでいる。

分かっていた事だが、少なくとも艦橋とC I Cのクルーには休息を取ろうとする者はいないだろう。

そうまでしないといけないほど、今度の電磁砲使用には極度の慎重さが要求される。

仕組みだけで言うならば、火薬で加速させた砲弾に電磁誘導でさらに爆発的な速度を得させるというだけなのに

せめてその心身的な苦痛の代償として達成して良かったと心から思

えるプロジェクトなら良いのだが、如何せんその暁に支払われるのは人の命だ。

（もう止めだ。割り切らなければな）

「では副長、私はCICへ籠る」

カイトはそう告げると、マニュアルを片手にコートを引っ提げて艦橋の防水扉の向こうに姿を消した。

CICでは電磁砲以外にも他の武装からレーダースクリーンに至るまで、随時情報が多数のスクリーンで表示されている。

ところが、今CICクルーの意識の大半はその電磁砲に傾けられていた。

やがてシュルツの潜水艦以外の艦艇が攻撃ポイントに到達したという報せを受け、その時までのカウントが迫っていることを嫌でも感じざるを得なくなる。

一段上がった位置にあり、大型のスクリーンが真正面に見えるCICで指揮を執るための席　そこに、今カイトは座っていた。

電子機械群のラジエータ　ファンの音に混じって、席の後方に掛けられた時計の秒針が一秒一秒を刻む音が聞こえてくる。

CICの中はまるで葬式でも執り行われているかのようにひたすらに静かだった。

考えている事は一つでも、誰もしゃべる者などいない。

その静寂を破ったのは、他でもないカイトだった。

出港前にシュルツやシエルドハーフェンのブロード艦長達ときちんと合わせた腕時計の長針が、作戦予定時間“ゼロ・アワー”の到来を告げた

バレたらマズイため、シュルツの艦が現場に到達したかどうかの連絡はあらかじめ寄こさない事になっている。

カイトを含めフリースベルグの全クルーはただ、その彼が必ずその海域に無事に到達していることを願って電磁砲を放つのみだ。

「では行こう。軸ブレーキ外せ、主動力ガスタービンへ変更、機開始動急げ」

受話器を拾い上げ真剣な面持ちで艦橋へミッションスタートをカイトが告げると、バンや周囲のクルーにも緊張が走る。

『軸ブレーキ外せ、主動力ガスタービンへ、機開始動』

キィィィンというジェット機のエンジン音のような甲高い音が艦内の金属壁を伝わってくる。

燃料を噴射され点火したガスタービン、その証拠にブワツとフレースベルグの艦橋後部にある排煙口から白煙が舞い上がった。

「機閉前進微速、針路そのまま　　フリースベルグ発進！」

『機閉前進微速、針路そのまま！』

緊張が高まり力んでいるせいか、スピーカーの向こうから聞こえてくるリナの声にも力が入っているようだ。

艦橋で復唱された声と共に、機閉とスクリューが接続され海流を攪拌するように押しつけて回る。

カイトは後方からグイツと押し込まれるような力を感じ、フリースベルグは航行を始めた。

その10ノットにも満たない位の低速で航行を始めたフリースベルグの艦首から、後方に三角の白波が巻き起こる。

これは今まで幾度となく行った艦発進の手順とさして変わらない

問題はこれから。

「艦首電磁砲発射準備　　電磁砲回路、二番原子炉コンタクト」

『電磁砲回路、二番原子炉コンタクト』

今度はバンが復唱し、CICと機閉室原子炉が機閉士たちによって制御され、大量の電力を必要とする電磁砲へと膨大なエネルギーを秘めた原子炉から電力が送られる。

「バッテリー内ブレーキオフ、電力チャージ開始、フレイムサポーター冷却開始　　」

電力の遮断壁が取り払われ電力が集まるにつれて高温になる砲身を、ラジエーターが冷却し始める。

「射線軸制御移行、操艦オートへ、FCS（火器管制システム）コントラクト　海面風速、潮汐データ入力」  
操艦手が手元の青いスイッチを押し、それが青く光ると発射に備えて艦が微妙な調整を行うために自動で操艦される。  
フリースベルグは今、艦尾の舵だけでなく二軸のスクリュウの推力を調整し、さらにバウスラスターまでも駆使して発射への最終態勢を整える。

「目標データ入力、射角算出急げ！」  
「目標データ入力、射角算出　射角3・022°、発射まで二分・・・」

コンピュータを操作しはじき出された発射角度の数値を、今度は電磁砲へと入力して行く。

「電力充填率80%　フレーム温度が、シミュレーション値を約30　上回っています。現在電磁誘導フレーム温度、343」  
天井から吊り下げられたモニターに電磁砲の一部分の異常加熱を知らせる警告灯が点滅している。

だが、これくらいは予測の範囲内　発射に影響のある異常では無い。

「射撃シークエンスを続ける、艦首発射口オープン、電磁砲弾発射口へ展開」

これまで開かれることの無かった刀の切っ先のようなフリースベルグの艦首の壁面がスライドし、電磁砲を発射するための発射口を形成する。

電磁砲も前面へと展開し、発射口から月明かりに照らされた重たそうな砲口が顔を覗かせる。

「電力充填率100%！」

「よし、一番シリンダーより砲弾装填　」

ドラム状になっていた装填機が回転し、指定された砲弾を電磁砲内部へと装填する。

「全システムオールグリーン、最終セーフティー解除　」

全ての準備が整い、カイトはCICの電話機を手にとり全艦放送へ繋ぐ。

「警報、総員発射のショックに備え 発射まであと20秒」

砲弾の直径は30.5cmであり、通常の発射であればフレイスベルグ程の大きさの艦艇ならそこまで艦全体が衝撃を受けるような事は無い。

だが、通常の火薬で飛ばす砲弾はせいぜい秒速700mを上回る程度 だが電磁砲のように秒速3.5kmとなれば話も別だ。

受話器を置くと、彼は主砲とは少し大きめの電磁砲発射用のトリガーを受け取る。

「10 9 8 7 6 5 4 3 2 1」

秒読みを始める管制クルーの声を聞きながら、今一度間違いは無いだろうか素早く全体を見渡しカイトは深呼吸をして自身を落ち着かせる。

先刻僅かに異常を示した値も、今では通常値に戻っている 問題は無さそうだ。 問

「発射！」

読み上げていたクルーと声が重なり、引き金を引いたカイト。

その瞬間、紫電が空中に放電を始めていた電磁砲口からカメラのフラッシュのような閃光がほんの一瞬起こり、続いて至近落雷のような強烈な破裂音が辺りに木霊した。

海面を叩き割り勢いよく砲弾を放った砲口からは火薬の燃えカスが噴出し白銀に発光。

そして衝撃でフレイスベルグの艦全体がドシンツと例えは悪いがまるで座礁したように前方から衝撃を受けた。

赤熱する砲身に早速冷却が開始され、艦首からは立ちのぼる蒸気がリナのいる艦橋からもはつきりと見える。

(速い・・・なんて速さだ！)

カイトは砲弾をリアルタイムで追尾しているレーダーの画面を思わ

ず凝視した。

電磁砲から放った砲弾を表す光点が、これまでみたミサイルや砲弾の速度とは次元が違うスピードで目標へと向かっていく。

誰もしゃべることの無いCICで、光点に記されたカウントダウンがついに一桁になった。

バリイイイッツ！！！！

強烈な雷鳴のような轟音が辺りに響き渡り、シエルドハーフェンに多数ある機銃座に座るクルーが反射的に上空を見上げた。

一等星よりも明るい光を放つ物体が、流星のように高い艦橋の遥か上空を飛びぬけて行った。

「ソニックブーム、来たか・・・！ よし主砲照準、全門湾内の基地施設周囲に合わせ！」

フリースベルグから放たれた砲弾が上空を通過し、数十キロ沖合の洋上から艦砲射撃を行うためシエルドハーフェンの主砲塔が鈍重な機械音をあげて旋回を始める。

僚艦のブローズグ・ホーヴィも同様にウルビーナ湾の敵泊地へ二連装50・8cm主砲四基の照準を合わせた。

シエルドハーフェン級二艦の巨体故、その様子は十分ほど前に敵の骨董品クラスのレーダーにさえ察知されていた。

そのおかげで、反米政府を掲げて集った海の男たちがたくさんいる埠頭ではちよつとしたお祭り騒ぎだ。

しかし、それは意気揚揚と小型水雷艇で出航の準備を始める彼等に限ったことだった。

埠頭を離れると軍事施設などの他に、島の周囲を監視するための見張り台の役割を担う施設も存在した。

高倍率の望遠鏡で海上に浮かぶ二隻の艦を見つめる男、明るい時で

あればウルビーナ湾を一望できる小高い山の山頂に建てられた小屋に彼はいた。

倍率の高い望遠鏡で見えると言っても、シエルドハーフェン級の艦影は本当に小さくしか見えず、増してや今は夜だ。

しかしFARC（コロンビア革命軍）のゲリラ活動で培われた男の眼力は、艦の特徴をすぐに見抜いた。

（かなりの大口径砲だ、あれじゃ再装填にも時間がかかる。接近されればお終いだな）

アメリカの艦隊を赤子のように散らした超兵器を撃退した艦隊と聞いて期待していたが、あれでは説明がつかない。

（期待はずれだな　　快速艇が接近して魚雷を打ち込めばそれで終わりだ。それにしても先頭を行くあの艦影）

「バトルシップ、ヤマト・・・？」

思わず口にした戦艦の名前、それはかつて彼が米海兵隊に所属していた時にハワイの式典で見かけた日本の戦艦。

他の艦には決して無い、戦艦が放つオーラというか威容という物に、言い知れぬ驚きと興奮を覚えた記憶があった。

戦艦にはあまり興味が無いのだが何を思ったのかその時に同僚に尋ね聞いた名前が、確か“ヤマト”と・・・

（いや、見間違いだ。ウィルキア近衛艦隊に“ヤマト”が居るはずねえ。あれは、日本の戦艦だったからな）

何かを振り払うように頭を掻き、もう一度遠くの月明かりに浮かぶシエルドハーフェンを見ようと彼が望遠鏡を覗きこんだ時だった。

一瞬キラリと一条の光が彼の目に映りこんだ。

（何だ？流れ星か・・・？）

そして彼が望遠鏡から目を離れた瞬間、突如麓の港から火の手が上がり、続いて砲弾の着弾音でもないし爆発物を至近距離で炸裂させた音でもない異様な音。

雷鳴を何十倍にも拡大したような轟音が、彼の居た小屋をまるで直下型地震のように大きく揺さぶった。

「どうしたっ!?!?」

あわてて飛び出した男は、その先で見た港の光景に目を疑った。漁船を改造した程度で一人前の水雷艇乗りと吹かしているような奴らの小型艇や、艦艇の燃料タンク、その他諸々の軍事施設の大半が炎をあげていた。

何が起きたのか分からない　　なんとか難を逃れた艦艇が一斉に動き出したが、中には動けるのがやっとならなかつた艦まである。

(近衛艦隊の戦艦、発砲炎が見えなかつて事はまだ撃つてない筈だいや、たとえ撃つてたとしてもこんな事にはならねえ!)

発砲炎は見えなかつたのかとどなり散らす無線を部屋の中に置き去りにし、彼はシヨックでその場にへたり込んでしまった。

(何が起こつたんだ　　俺は夢でも見てるんじゃないのか!)

「着弾を確認!着弾を確認!　敵泊地、炎上!」

「よし分かつた。一番と五番砲塔第一射、撃てえええつ!」

真上の防空指揮所からのその報告を待っていたブロード艦長があげていた右腕を前に振りおろし叫ぶ。

その合図を受けて主砲のトリガーが引かれ、闇夜の海原を発砲炎が一瞬だけ真昼のような明るさに彩つた。

ズシンツという主砲塔が受けた反動と艦の隅々まで響き渡る轟音が、艦橋の風防をビリビリと震わせる。

「予定通りのスタートだな、フリースベルグにも誘導弾で支援の要請を・・・どうしたんだ?」

主砲の発射で気づかなかつたが、艦橋後方の通信士達がやけに騒がしい。

「艦長、フリースベルグからの通信途絶。レーダー画面上からも消えました・・・」

「何が起きたんだ!?!?」

「わかりません、いきなり消えました」

ブロード艦長はさっきまでフリースベルグが映り込んでいた箇所を

見つめる。

通常、艦がレーダーから映らなくなるといっものはその場から消えたという事を意味している。

だがフレースベルグ級はステルス艦だ。

さっきまでレーダー上に映っていたのは、認識用にフレースベルグが発している暗号化されたトランスポンダーだった。

つまり、フレースベルグは自艦の位置を特殊な信号を放つ事によって周囲の友軍艦艇に知らせているのだ。

(そうになると、電気系統のトラブルか・・・！？)

「止むをえまい、シエルドハーフェン、ブローズグ・ホーヴィはそのまま攻撃を続行。シュルツ少佐にも攻撃開始を伝える」

焦りと戸惑いを浮かべた通信士達の表情を一瞥し、ブロード艦長は普段同様の冷静な判断を下した。

「それともう一つ・・・微弱ですが、フレースベルグの近辺でレーダーノイズのようなものが・・・」

ノイズと聞いて踵を返そうとしたブロード艦長の動きがピタリと止まった。

「馬鹿、それはフレースベルグのECMの見間違いだったんだろ？」

「だと思っただんですけど、やっぱりズレてるんですよ艦長。今はフレースベルグから3km西の地点に　　発見したのが偶然な位に

小さい反応です」

顔をしかめてブロード艦長は下士官時代から培ったレーダーから情報を洗い出す目を以て、スクリーン上と睨めっこを始めた。

確かにこの士官の言う通り、フレースベルグが消えたと思われる地点から西に3kmほどの地点に見え隠れする霧のような物がある。

そのブロード艦長の読み通り、フレースベルグでは予期せぬ事態が発生していた。

艦橋では照明や機器類の電源が落ち、CICでは非常用電源に切り

替わり明度は心もとない赤色灯が室内を照らしている。

非常事態を知らせるアラームと外の廊下を走るクルー達の喧噪は、CICのカイトにもよく聞こえていた。

「艦長！FCS（火器管制システム）がダウンしました。再起動まで時間がかかります！」

「電源は確保出来ているな？」

「ガスタービンが発電した電力をシステムの方へ回します」

「よし、ならば回復も・・・」

復旧の見通しが立ち、発射後に突然電気系統がダウンしてからの対処に追われていたカイトがようやく安堵の表情を見せた時だった。

『こちら一番砲塔弾薬室！ 艦首下部につながる通路で火災が発生している！火自体は大したこと無さそうだがここは弾薬庫だ。誰か手を貸してくれ！』

「火災だと！？ 何が・・・」

「おそらく、余剰電力の逆流でショートしたんでしょう。あの電磁砲は、やっぱり諸刃の剣だ」

バンが発射から火災発生までの過程を冷静に分析する。

「ん、ということは原子炉だけで発射から航行まで・・・ん？」  
その時、状況を整理していたバンの肩にカイトの手がポンと置かれた。

そしてバン左手にはいつの間にか消火器が握らされている。

「そう冷静に分析する暇があったら、消火活動を手伝って来い！ついでにエンジニアの端くれを名乗るなら、出火元や火災の原因も探れるだろうな？」

「まったく 人使いが荒くなりやがる・・・」

「艦長命令だ、中尉。それとも、不服か？」

「いいえ！何でもありません！バン・トライトン中尉、火災現場に突撃します！！」

まるでなっていない悪ふざけの敬礼をすると、バンは消火器片手にCICを飛び出して行った。

その飛び出して行った弟の姿を見て、カイトは腕を組み含み笑いを浮かべる。

（分かっているか分かっているかとは分らないが、お前にとってこの消火活動は有意義な筈だ。なぜシステムがダウンしたのか、次はどうすればこうならないか、それを知りたい機会だ）

電力が回復しないまま暗い艦内の対応に追われるフレイスベルグのクルー達。

この時、目を塞がれているフレイスベルグのクルーは3km離れた位置に浮上した鋼鉄の望遠鏡の存在を知る術は無かった。

艦橋上部で双眼鏡で周囲を監視する監視要員も、不測の事態に備え接近する艦隊の発見に全力を注いでいたためにその潜望鏡を発見することはできなかった。

ましてやこの夜闇　発見出来たらその方がおかしい。

「見つけた・・・闇夜の迷い鳥さん」

数日前に敗北を喫した相手を発見し、彼女は久々の高揚感を感じていた。

彼女　そう、サンディエゴ沖で沈んだ筈の超兵器ヴィルベルヴイント、その化身と名乗った彼女と全く同じ顔、同じ声。

だが甲高く伶俐さをうかがわせるような美声は、この潜水艦の乗員には全く聞こえもしなければ、彼女の姿を誰も捉える事は無かった。潜水艦の乗員は通常の潜水艦からすれば有り得ないほど広々とした指令区画、その一角に表示される光学ズーム映像を見つめているだけだ。

「目標は沈黙しているようだな」

「エンジン音もしません　機関停止状態です」

「そうか・・・何かのトラブルが起こったと見るべきか」

この潜水艦の艦長を任されている男は、ウィルキア海軍の制服の袖をめくると腕時計を見つめる。

「しかし艦長、私にはわかりません。この超兵器、ノーチラスを以てして相手をしなければならぬと聞いていたので、てっきり大艦隊に水雷攻撃を仕掛けると思っていたんですが・・・相手は一隻じゃないですか！」

「副長、時間だ。ノーチラス全区画、戦闘態勢へと移行する」

「りよ、了解しました・・・」

一隻でも戦闘だと諭すことなく、ノーチラス艦長は前で留められているコートの立てている襟に鼻より下を埋める。

その視線は、月明かりのもとこの巨大潜水艦ノーチラスを前にしてもなお停泊したままのフレイスベルグへと向けられた。

「全門斉射！」

バシユウウという圧搾空気と海水が入り混じる音が幾重にも重なり、ノーチラスの艦首部から十数もの魚雷が放たれた。

「こ、こちらソーナー！潜水艦らしき圧搾空気排出音と共に、魚雷音聴知！魚雷が接近してきますッ！！ 5時方向、数は10以上、距離3200！」

その一方がソーナーからフレイスベルグ全艦にもたらされた時、異様な静寂が艦内を包み込んだ。

その瞬間は火災を消すバンの手も止まり、状況整理に追われる艦橋のりナもファイルを落とした。

だがCICのフレイスベルグ艦長カイトだけは違い、備え付けのマイクをひったくるように素早く右手に握っていた。

「主機起動せよ！ 対水中戦闘用意！」

それを聞いてCICクルー達も所定シートに反射的に座ったもののある致命的な事に気が付いた。

「艦長、FSCがまだ復旧していません・・・反撃は不可能です！」  
顔面蒼白になりながら訴えかけるクルー。

しかしカイトは砲雷長席の隣に腕を組んだまま佇み

「分かっている」

冷静さを崩さないまま、それだけを告げた。

「こちらCIC、砲雷長、破損箇所の修復はまだか？」

「あと4〜5分はかかりそうです！ それより、魚雷が接近しているなら」

「砲雷長は破損箇所の修復に全力を尽くせ、以上」

それだけを告げると、カイトは連絡を行う先を切り替えて再び息を吸い込んだ。

「艦橋、CIC。CICからですまないが、ここから操艦する。良いか？」

「艦橋、了解しました」

向こうからはリナのなんとか落ちつこうとする息使いが伝わってきた。

「魚雷、あと2800！」

「主機起動異常なし！ 艦長、いつでも大丈夫です！」

「よし、軸ブレーキ外せ！ 全速前進！」

カイトの声が全艦放送で響き、艦橋では推進力の制御のレバーが目一杯前に押し出された。

すると後方に張り出した煙突から白煙を舞いあげ、フレーズベルグが猛然と加速を始める。

艦にとって死をもたらす鎗から逃れるため、未来を奪われないため・

「さて、どこまでモービー・ディックから逃げられるかな？」

悠然さを湛えたまま、ノーチラス艦長は軍帽を深めに被りそう呟くのだった。

## 第十九話 その光を放て！（後書き）

最近、執筆能力の低下のような症状を訴えそうなJINです。  
でもそんなものを診断してくれる病院なんてありませんね（笑）

とかスランプ気味だった折、なんとPV4000人を突破しました。  
これまで見てくださったPV4000人の読者の方々の為にも、  
「やるぞ〜！」とタウリン1000mgを胃に流し込んで頑張りま  
した（笑）

さて、ゲーム本編ではヴァイセンちゃんを輸送するというチヨイ役  
でした出演出来て無かったノーチラスですが、前作との扱いの落差  
があまりにも激しかったのでこちらにお借りしました。

ノーチラス・・・スタッフに嫌われてるよイwww

余談ですが、ドレッドノートに関してブラウン博士の言葉

「敵は尋常でない雷撃能力を持つようです！」

前作ガンナーをやったことある人なら判る筈ですね・・・

これって、ドレッドノートじゃなくてノーチラスのためにある言葉と  
次回の更新は目標は二週間以内です。

本当は一週間以内にしたいんですけど、29日に福岡県築城航空基  
地祭に行くのでそれを考慮しての予想でした。

一年以上前からの願望（BIAク口第一区分を見ること）を叶えに  
行きます！では！

次回

第二十話「モービー・ディック」

第二十話 モービー・ディック（前書き）

新田原基地航空祭に行ってきました

多分今年はもうこれ以外に良いことってないです（笑）

それにしても

年越しまでに、あと二回くらいは更新したいものです。

でないと大学卒業までに物語は終わらない（お

## 第二十話 モービー・ディック

「目標、機開始動・・・ジェット機のようなエンジン音です」  
「ガスタービンか？ ふむ・・・あの艦には原子炉がある筈だ。なぜ使わない？」

動き始めたフレイスベルグの光学映像を見つめ、ノーチラスの艦長ブルーノ・アードラーは腑に落ちない点を呟く。

そのとき、彼は転舵して艦尾をこちらへと向けたフレイスベルグの艦尾の電灯が点灯していない事に気付いた。

(使わないんじゃない・・・使えないのか？)

夜間にかかわらずいかにステルス艦とはいえ灯火の一つも点灯していない。

その点を鑑みると、どうやらフレイスベルグの電力回路の異常はかなり深刻なものようだった。

「魚雷、目標までは？」

「おおよそ、1分です」

「よろしい」

(さあ、フレイスベルグ・・・俺はこの第一射で決まるなんて思っ  
てはいないぞ。見せてみる、このノーチラス相手にどこまで出来る  
かを)

夜の海原の下を悠々と進むノーチラス。

その艦首から再びクジラの鳴き声のような探信音が放たれた。

その探信音に捕捉されたまま、フレイスベルグはノーチラスから直線的に逃げるように艦尾を向けて東の方向へと航行している。

『相対速度約14ノット、接触まで54秒！』

『こちらソーナー、発射地点付近からノイズ。詳細は分かりませんが、先日のサンディエゴ沖で戦った巨大戦艦とそっくりです』

「してやられたな・・・まさか超兵器に背後をつかれるとはな」  
思わずこぶしを握りしめるカイトの背中に、冷や汗が流れる。  
超兵器機関の影響で荒れ狂うソーナー反響。

そして接近してくる魚雷を探知したソーナー音響が、彼等にとっては生命の危機を知らせるサイレンのように聞こえてならない。

『魚雷12本、放射状に広がってきます！ 接触まで48秒！』

「面舵30、右に逃げる！ ただし両舷前進五戦速（＝約30ノット）、魚雷には減速し対処する」

（げ、減速だつて！？）

全速力でこの海域から逃げ出すべきなのに、カイトが指示したのは全速よりも10ノット程の減速。

半信半疑だったものの艦長の命令はクルーにとっては絶対な物。

操艦手は推進力を絞り、魚雷とは二十ノットの相対速度の差が出てしまふ速度まで落とした。

フリースベルグは減速しつつも面舵の方向へと艦首を向け始め、右の方向への突破口を突き進んだ。

「敵艦、面舵を取ります！」

「右を突破するつもりか・・・だが見たところ30ノット程度、それでは右端の魚雷は当たってしまうぞ」

ブルーノの読みは的確だった。

フリースベルグの後方から放射状に放たれた魚雷は、フリースベルグの最大戦速を計算しつくして放ったものだ。

同型艦ニーズヘッグの最大速力の情報が伝わっているお陰で、ブルーノはフリースベルグのスペックをほぼ把握していると言っている。しかし超兵器、ましてやまったく新種の超兵器と遭遇したカイト達が敵のスペックを見抜けるはずがない。

超兵器であるという事実以前に、敵の正体についての知識の有無でさらなる劣勢に立たされるフリースベルグ。

「命中まで20秒！・・・んっ！？なにっ！？」

「どうしたのだ？」

ソーナー索敵士官の驚きようにブルーノは目を細めて尋ねると、その士官は信じられないという表情で振り向いた。

「敵艦、今度は取舵を取ります！ みすみす魚雷の方向に突っ込むつもりか……！」

「いや、違う……」

光学映像に映るフリースベルグの船体がやや右に傾き、逃げる方向とは反対の左方向へと針路を変えていく。

フリースベルグの異常ともいえる動きを、ブルーノ艦長は単なる血迷いではないことに気付いた。

「いける！」

艦橋の右舷側から身を乗り出して魚雷の航跡を見つめるリナは思わず呟いた。

「これなら魚雷は当たらない」

白い航跡を水中に描く魚雷二本が、フリースベルグのすぐ真後ろへと迫る。

その瞬間彼女の思った通り、二本の魚雷はフリースベルグを挟むように両舷側から二メートルほどの距離を突き抜けていった。

『魚雷、回避しました！』

ソーナーからのその吉報にクルーが安堵の表情を浮かべる。

艦長のカイトもその例に漏れることはなかったが、一回目を回避しただけで諸手を挙げて喜ぶことはしない。

「最大戦速でまた直進、最大戦速到達後にマスカーを放出する」

カイトはすかさず次の指示を出し、適度な緊張感を保ったままCIにある水色に白線が引かれたスクリーンを見つめる。

ここにレーダーやソーナーから得た情報をもとに、空や水上そして水中のあらゆる脅威の姿が光点などで記されて表示される。

フリースベルグの後方4000の距離、そこには文字通りノイズのような表示がなされていた。

(フリースベルグのレーダーやソーナーを以てしてもワケの分からないモノ・・・そんなものと今戦っているんだ)

わかっているのは敵はかなりの雷撃能力を持つ潜水型ということだけということに、軽い苛立ちを覚えつつカイトが奥歯を噛みしめる。敵を知れば戦いは勝てるというが、古の戦術家はこの場合はどうしると言うのだろうか？

ふといまだに真っ暗な火器管制装置の画面に目を向け、いまだに武装が使えないという状況を改めて思い出した。

「こちらCIC、砲雷長、消火と修復は終わったか？」

そろそろ修理も終わるころだろうと思ひ、カイトはバン率いる修理班に呼び掛ける。

だがいつもならすぐに通信に出るはずのバンからの応答がない。

カイトが不思議に思っていた時だった・・・

「終わりました・・・FCSの再起動できますよ」

汗びっしょりで疲れましたと表情を露わにするバンが、CICに戻ってきた。

「よくやった、砲雷長。再起動にもまた時間はかかるが、これで本艦の反撃の目処は付いた」

「そうですね・・・って、ええ〜っ！！ あんなのとたった一艦で戦うつもりですか艦長！！」

バンは飛び上がりそうになるくらい驚いた。

カイトはどうやら逃げ切るのではなく、反撃してノーチラスを撃沈する気にいるらしい。

「逃げようとも思ったが、相手は水中にも関わらず本艦の全速に離されることなくついてくる。逃げ切ることは不可能だろう」

「しかし・・・」

「艦長、最大戦速です。それから、9時方向距離5000に例の孤島です」

「よし、マスカー放出。マスカーはこちらの耳も鈍らせる・・・わずかな音も聞き漏らすなよ」

艦橋のリナからの報告を合図とし、カイトはマスカーを放出するよう指示を出した。

『はい!』

ソーナーは威勢よく応答し、音響に集中するため無意識にヘッドセットを両手で押さえていた。

潜水艦に捕捉されにくくするために水上艦がとる対抗策の一つが、マスカーという防御策だ。

多数の気泡を発生させ後方からソーナー反響を頼りに攻撃を仕掛けてくる潜水艦の耳を鈍らせるというもので、水よりも空気の方が音が伝わる速度が遅いという簡単な原理を応用している。

フリースベルグの場合、压榨したため込んだ空気をスクリーンの先端から放出するマスカー装置を装備している。

そして、その効果はすぐに表れた。

ブルーノ艦長がノーチラスのソーナー反響スクリーンに目を向け、その変化にいち早く気づいた。

「反応が小さくなる・・・?」

黄色の光点で記されていたフリースベルグの反応が、どんどん小さくなっていく。

それがマスカーによるものだというのは、放出時の音響でノーチラス艦長ブルーノも気がついた。

『こちらソーナー、敵艦の反応が小さくなります』

「マスカーか・・・だが、なぜこのタイミングで?」

「敵艦、いよいよ追い詰められてパニックにでもなってるんですよ。潜望鏡深度に浮上しているのに、マスカーなど・・・意味のないことを」

部下の副長が腕を組みフリースベルグの行動を分析するが、ブルーノにとっては腑に落ちない疑問点があった。

（違う・・・まだフリースベルグの動きには余裕がある。だから

こそ、マスカーを使う意味がわからない)

『魚雷発射管、注水完了・・・1番と12番には指示通りの魚雷を』

「よし。1番12番は10秒後に発射だ・・・2番から11番、発射!」

士官の一人が赤いスイッチを押した瞬間、点灯していたランプに書いてある番号と同じ魚雷発射管から一斉に魚雷が放たれた。

『・・・!! 魚雷音、聴知! 数10、53ノット、距離3500!』

「ソーナー、CIC。アクティブ・ソーナーは聞こえるか?」

『いえ、聞こえません。先ほどと同様の間隔で、放射状に広がってきます』

(アクティブ・ソーナーが聞こえないということは、今回も非誘導性の魚雷か・・・しかし同じ手を二回も?)

それを聞いた瞬間、カイトは咄嗟に考えてしまった。

得体のしれない相手が、もしか自分が想定できること以上のことを考えているのではないか・・・

その場合自分たちは、フリースベルグは生き残ることができるのか・・・?

そう考えただけでもカイトは身の毛がよだつ思いだった。

「艦長、そろそろマスカーをオフにしては・・・?」

「いや、全て放出する・・・両舷前進五戦速、今度は左に逃げる・・・とりか」

カイトがそう言いかけた時だった、突如ソーナーのあわてたような声がCICに飛び込んできた。

『待つてください! こちらソーナー! 後方距離3800に新手の魚雷出現・・・数2、53ノット! 前方に20度ほどの角度です』  
二回に分けて撃ってきた・・・敵が戦法を変えた!

思わず受話機を握り締めるカイトが、スクリーンを睨んだ。

遅れて出現した魚雷の速度が変わらないということは、敵がわざと

遅らせて発射したのだろう。

（なるほど、先程のように逃げたら遅らせて撃った魚雷が船体のど真ん中にヒットする・・・それを狙つての遅延発射か）

「ならばこちらも変更する・・・取舵20、全速前進、左一本目と左二本目の間をすり抜ける！」

『了解、取舵20、全速前進！』

復唱するリナの横で、操舵士が先程より控えめに舵輪を逆方向へと廻す。

「よし、フリースベルグは罠に嵌った」

取舵を浅い角度でとったフリースベルグの様子を潜望鏡で眺めていたブルーノは、フリースベルグと接敵してからようやくの笑みを浮かべた。

それは安堵の笑み・・・そして、勝利を確信した笑みだった。

その時だった・・・

バギイイツツッ！！！！

僅かな振動と何かが砕けるような破裂音、そして潜望鏡に何も映らなくなった。

「どうした？」

「フリースベルグめ・・・こちらの潜望鏡に砲弾をお見舞いして、せめてもの抵抗というわけか」

副長が腹立たしさを露わにする。

「副長・・・俺は今までフリースベルグを見ていたが、発砲炎などは見えなかったぞ？」

「え？　しかしそれでは、一体誰が？　ソナーには周囲20000の距離に前方のフリースベルグ以外に敵艦は居ないとはつきり出ていますよ」

「うゝむ・・・見間違いか・・・歳かな？」

顎下に手を当てて苦笑いを浮かべるブルーノ。

(まあ心配は無用か・・・フリースベルグの命も、もう終わりだ)

第一射と似たような回避方法を取るフリースベルグ。

左側の一本目と二本目の間を通過すれば、遅らせて放たれた魚雷にも当たらないというカイトの目論見だった。

『距離1000!』

「よし、面舵10度! 魚雷の間を通過しろ!」

カイトがスクリーンを見つめると、魚雷の間が開きちょうどフリースベルグが通り抜けられそうなスペースが空いていく。

「艦長、FCS再起動します!」

CICクルーがそう一声かけた時、CICのスクリーンの全てが明るく彩られた。

イージス・システムが生き返った・・・!

しかしその瞬間、その音は何の前触れもなく聞こえた。

イージスシステムと直結されたFCSを再起動、すなわちそれは艦の頭脳が再び目を覚ましたということであった。

電磁砲の発射の後遺症でFCSがダウンした瞬間、フリースは意識を失っていた。

それから数分が経過していた時だった、ようやくそのFCSが再起動し、フリースは頬にひんやりとした冷たさを感じた。

「う・・・ん・・・あれっ? 私どうしたんだっけ!?!」

艦首にて倒れ伏していたフリースが目を覚まし、その体を起こした。朝に目を覚ました少女のように愛らしい仕草で目を擦るフリース。

(高熱が出て、頭がボーってなって・・・それから先は覚えてないけど)

電磁砲が格納されたおかげか、フリースが持っていたはずの無反動砲のような巨砲のモジュールはすでに見当たらない。

すると、彼女は後方に何かが迫っているのに気づいた。

「何？ これって、潜水艦・・・違う、ただの潜水艦じゃない！！」  
ピコーーーーン！！

その時、彼女の予想に正解と答えるかのように水中から探信音が放たれた。

・・・

「な、なんだと・・・？」

カイトは思わず言葉を漏らした。

その瞬間は、CICのクルーも艦橋にいるリナもその音を聞いて凍りついた。

・・・

ピコーーーーン！！

艦内を伝わってはつきりと聞こえる音。

（これはフレースベルグの探信音じゃない・・・まさか！）  
・・・

『シツCIC、ソーナー！！ アクティブ・ソーナーです！！ 遅れて発射された魚雷がアクティブ・ソーナーを発して本艦を追尾してきます！！』

「ば、馬鹿ッ！！ なぜもっと早く気付かなかった！！？」

「砲雷長、違う・・・敵が魚雷をこのタイミングで追尾モードに入るようにセットしてたんだ」

声を荒げて受話機にとびかかりそうになっていたバンをなだめるカイト。

「やられた・・・」

スクリーン上には放射状に広がってくる魚雷とは別に、二本の魚雷が航跡を変えながらフレースベルグに迫ってくる。

一本はフレースベルグの九時方向から、もう一本は艦尾方向から接近してくる。

「『やられた』じゃなくて艦長、早く回避行動を！！」

「待て！ 先発の魚雷が両舷を挟もうとしている……今動いたらその魚雷に当たる！」

「じゃ、じゃあ……避けられないってことですか!!?」

バンの発した言葉に、CICクルーの間にも動揺が走る。

「完全にはな……だが、最悪の事態だけは回避してやる！ 両舷前進微速！デコイ投射！」

CICクルーの一人が緊張し震える手でデコイ投射のスイッチを押した。

艦尾の投射口からボンツという圧搾空気の排出音とともに、黒い二つの物体が飛び出した。

フリースベルグのエンジン音に似せた音をわざと放つ匣の物体。

「右の魚雷がデコイに食いついた！もう一つは……なツ!!?」

バンは絶句した。左から迫る魚雷はデコイに吸い寄せられることも無く、フリースベルグの後部に吸い寄せられていく。

（左の魚雷は、デコイよりこちらの推進機の方が音を拾いやすいのか……駄目だ、避けられない!!）

「総員、衝撃に備えッ！」

カイトは全艦放送で総員に対しショック姿勢を取らせると、自分もその姿勢を取ったまま前方のスクリーンを注視する。

（もう15秒も無い……負けるのか、これで!!）

カイトの頭に絶望感がよぎる……その時、カイトは魚雷の動きが船体中央を狙うにしては奇妙な動きをしている点に気付いた。

左舷に垂直に向かってきていた魚雷が、フリースベルグの船体中央から徐々に離れていく。

（航跡のカーブが甘い……狙いはエンジンルームのある中央からやや後部じゃないのか？ どこだ、奴の狙いは……）

もう一度冷静になって考え直す時間などない。

だがカイトには、敵の戦法から敵が一撃で致命傷を与えられる場所を狙ってきていることだけはわかっていた。

(エンジンルームではない、もつと後方の急所……)  
一撃で艦を死に追いやる後方の急所……  
(そういえば、ライナルトとそんな話をしたことあったな……)

カイトが思い出したのは、まだ士官学校時代のことだった。

「ライナルト……最近の艦は、速度を犠牲にしてまでも装甲が重厚になりつつあるな」

「そうだなカイト……駆逐艦より戦艦が絶対に強いということまで言われ始めている」

ため息を吐くカイトは別に戦艦が嫌いというわけではないが、攻守のバランスの良い巡洋艦がもっとも好きだった。

理由はいくつもあるが、そのうちの一つがかつて将校だった父親が乗艦し指揮していたのが巡洋艦だったという事もある。

「だが、どんなに頑丈な艦でも……たった一か所だけ駆逐艦一艦だけでも崩せる変わらない弱点はある」

「不変の弱点……やっぱり機関か？」

「まさか 駆逐艦ならいざ知らず、装甲が重厚になっている戦艦で駆逐艦の装備でエンジンルームを破壊することなんて、無理に等しい」

こういう表情を変えずにこういうことを言う奴ほど、心の中では相手を馬鹿にしていたりするものだ。

「こいつめ わかった、俺はわからん。 それじゃ、教えてくれないかライナルト……君の言う、不変の弱点を」

「最初に言っておくがカイト……おそらく君は考えすぎているんだろう。それじゃ、俺のいう艦の弱点、それは……」

……

.....

.....

.....

「そうか・・・それを狙っていたのか！」

避けられない魚雷の恐怖で僅かに震えていたバンの隣でカイトは自分の対シヨック姿勢を解き、すぐさまマイク片手に指示を飛ばす。

「艦橋、CIC！ 取舵一杯、機関後進だ、急げ！」

「えっ・・・あつ、はい！！！」

低速で航行していたフリースベルグが取舵を取り、左に船体は急激に曲がっていく。

スクリューを逆回転させて後進をかける艦の速度は急激に落ちる。

その直後、後方でデコイに引き寄せられていた魚雷が爆発。

一つ目の水柱があがった。

「命中まであと10秒・・・」

超兵器潜水艦ノーチラスの指令区画では、艦長らが魚雷の命中を今か今かと待ちわびていた。

その時、ソーナーはフリースベルグが放つ異常な音をキャッチした。

一本目の魚雷の爆発音とは違う、甲高いモーターの音だった。

「か、艦長！」

「どうした？」

「敵艦、機関後進をかけます！！ 自分から魚雷に突っ込むつもりです！」

（なんだと・・・機関・・・後進?!）

それを聞いて、ブルーノは思わず持っていた懐中時計を落とした。

（私の狙いが・・・100%の自信があった狙いが、読まれたッ！

！？)

だが、そんなブルーノをよそにほかのクルー達は、フリースベルグの動きを自殺行為とみていた。

横から来ている魚雷を回避するのに、全速で避けるというのが一般にはセオリーだろう。

しかしブルーノが追っていた敵艦の艦長は、極限の緊張状態のもとにブルーノを上回る操艦を試みさせた。

「魚雷、命中します！」

「くっ、狙いを外された！！」

クルーがその言葉に驚いて居る中、ブルーノはコンソールに思いっきり拳を叩きつけた。

その直後、ノーチラスの艦内に大きな爆発音が伝わってきた。

ドゴオオオオン！！

フリースベルグの左舷後部から激しい勢いで水柱が立ち上る

フリースベルグが魚雷を受けた瞬間だった。

「ぐうっ……くっ！！ い、痛いッ！！」

フリースが着ていたのはウィルキア海軍の軍服。

その白基調の軍服が、左脇腹から噴き出した血で赤く染まっていた。痛みで涙が自然と溢れ、苦悶の表情を浮かべて倒れ伏す。

さらに浸水も始まり、彼女が感じる苦痛はさらに酷くなっていった。

「くっ……各区、状況を報告せ！」

爆発の衝撃でどこかに飛んで行った軍帽を拾うことなく、カイトは真っ先に損傷箇所を調べた。

「艦後部左舷第二区画で浸水発生！」

「隔壁の閉鎖急げ！」

非常ベルが鳴り響きクルー達が安全な区画に避難した後、水が滝の

ように流れ込んできている区画が閉鎖される。

難を逃れたクルーの中には、びしょ濡れになった武装班の伍長もいた。

「ひいゝ・・・まったく、勘弁してくれよつと！」

最後に閉鎖された防水壁の手動ロックを閉じ、これで浸水が他の区画に及ぶことは無くなった。

「艦傾斜角左に10°！」

浸水で船体が左に僅かに傾いている。

さすがに二桁大の傾斜角となると、立っている人でも普通に気付けてしまうくらいの傾斜になっている。

「機関前進微速、傾斜を調整する・・・右舷後部注排水タンク内に200トン注水！ 機関を原子力からガスタービンに変更！」

「了解っ！」

艦後部に早くも駆けつけていたクルーにダメージコントロールを指示した後、カイトは艦橋へと連絡をとった。

「艦橋、CIC。スクリューは無事か？」

「・・・はい、全て無事です！」

確認のために間が空いた返答だったが、カイトはなんとか最悪の事態だけは回避したことを実感した。

「そうか、なんとか最悪の事態は免れたな・・・もう少し遅ければ、スクリューと舵をやられて航行不能だった」

「危ない所でした・・・私が気付いた時には、艦長が指示した後でしたから」

確かに最悪の事態は免れた、しかしまだ胸を撫で下ろすのは早い。

むしろ、フリースベルグはまだまだ追い詰められている状況と、ノーチラスのクルーは思っているに違いない。

だがカイトの目はすでに罫に嵌めた側の者のソレに切り替わっている。

ここまで耐え忍んだ甲斐があったというものだ。

「副長、今度はこちらのターンが始まる。・・・海戦を左右するのは兵器の強弱ではないということを、あのデカブツに教えてやる」  
CICのスクリーン、前方の光学映像には彼らが待ちわびた反撃の象徴が映っている。

「副長、発光信号で開始の合図を送れ！ 反撃に出るぞ！」

いよいよカイトが、そして被弾し傷つきつつも立ち上がったフレースベルグが攻勢に転じようとしていた・・・

## 第二十話 モービー・ディック（後書き）

ってか、最近“なるう”のサイトに一週間以上ログインしないって  
いうことが増えてきました（え  
となると、当然読者さんからのメッセージに気付くのが一週間以上  
遅れっていうことになってしまおうワケでして・・・

返信できずホント、すいませんでしたあああつ or 2

まあ、一部ネタバレになりそうだったから答えられなかったっての  
もありますが・・・それは理由にならないですね

これからは極力毎日見るように努めます・・・

しかしなんか最近・・・

毎日見ないといけないものが増えてきたような・・・？

第二十一話「フリースベルグ消滅!？」

## 第二十一話 フリースベルグ消滅！？（前書き）

あけましておめでとございます（遅）

今年も、私JINと“鋼鉄の咆哮〜海原の大鷲〜”をどうぞよろしくお願いいたします。

さて、読者の皆さまや作家の先生方には大学入試センター試験を受けられた方も多いかと思えます。

センター試験・・・そういえばそんなのもあったなと思ってしまった私は、もう十分なお年寄り（？）なんでしょうかね・・・まだ数年しか経ってないのにorz

そういえば、こんな思い出が・・・

センター試験を受ける数日前、ふと電子辞書でポーズしながら“だいがくにゆうしせんたーしけん”と打ったら、なんとジーニアス和英辞書にヒットしました。

そして奇行というか、アホというか、若気の至りというか・・・なんか嬉しくなって友人に電話をしました。

JIN「ねえねえ、大学入試センター試験って英語で“the National Center Test for University Admissions”って言うんだよ！」  
友人「いや出ねーだろWWW」  
ハッサー

とにかく、センター試験お疲れ様でした！

次に控えている私立一般入試や、国公立大学前期試験に合格される  
ことをお祈りしています。

## 第二十一話 フレーズベルグ消滅！？

勝ったと確信したものの、それが予想外に覆された瞬間ほど優勢に立つ者にシヨックを与える時は無い。

しかもそれはタチの悪いことに、結構ずるずると尾を引いてしまうものである。

次なる手を、次なる手を、と考えているうちにいつの間にか追い詰められていた筈の相手に追い詰められているという逆転劇が起きる。これがオセロやトランプのようなゲームなら良い。

しかしこれは戦闘 負けと死はイコールでは無いものの限りなくイコールに近い、ニアリーイコールだ。

そうならないためにも、こうなった場合に戦闘の指揮官に要求される事は、ずるずると相手にペースを掴まれたままにしないことだった。

そのためノーチラスの指令区画では、次なる手をブルーノが打とうとしていたところだった。

決め手となった魚雷の使い分け攻撃は、フレーズベルグに命中したものの致命傷を与えるには傷が浅すぎた。

どんな頑強な艦でもスクリューを破壊されれば航行不能は免れない。  
・だがブルーノは先の攻撃の際にスクリューという狙いを読まれ、かなりの焦りを覚えていた。

「だがこちらが有利な事には変わり無い筈だ・・・」

回りにも聞こえるように呟いたものの、その言葉は紛れもなくブルーノが彼自身に宛てた言葉だった。

その時、フレーズベルグのエンジンから発生する音が変わる。

「敵艦のエンジン音が変わりました・・・これは？」

「慌てるな、同型艦のスペックを把握しているならわかる。おそらく、動力をガスタービンに変更したのだろう」

（さっきの水柱・・・魚雷は間違いなくヒットしているだろうが、

それでも傷は浅かったようだ。　だが、今度はそうはいかんど（ブルーノはマイクを手に取り、魚雷発射管室と連絡を取る。

「魚雷全門装填・・・1番と2番、11番と12番はホーミングだ。放射の範囲を絞り込んで今度こそ仕留める！」

「艦長、敵艦が速度を上げます！」

ノーチラスの殺気でも感じたのだろうか、フリースベルグが急激に加速していく。

先程の原子力航行とは違い、キイイインというジェットエンジンのような音をソーナーがキャッチする。

「こちらも増速だ。　敵艦と同じ速度に上げる」

いまだにノーチラスはフリースベルグの後方4000の距離にぴつたりとくつついている。

4000という数字がブルーノが敵艦を畏にはめるのに最適な距離と判断しているため、これ以上接近してもダメだが離れてもダメなのだ。

水の抵抗が大きい水中を航行しているにも関わらず、水上艦であるフリースベルグの速度についてくれる。

やはり化け物じみたエネルギーを発揮できる超兵器機関しか為せないものだ。

「よし、発射10秒前・・・8・・・7・・・」

第三波の攻撃に出ようとした時だった、ソーナーの音響を気泡の音一つ聞き逃さず、音紋や位置などが映し出されるスクリーンを注視していたクルーが異変に気付いた。

「か、艦長！！　敵艦の針路が変わっています！！」

「何、どつちだ！？」

「そ、それが・・・180度反転してこちらへ向かってきます！」  
前方スクリーンに記された光点が、ノーチラスの方向へと向かってくる。

先程までノーチラスの進行方向と同じ方向へ逃げていたフリースベルグが、一瞬で反転しこちらへ向かってくるのだ。

「どついつことだ！？　あり得ないぞ・・・なぜ35ノットで進んでいた艦が、一瞬で反転できるんだ！！？」

「敵艦、本艦の真上を通過します！！！」

クルーがそう告げた直後、真上を通過する甲高いガスタービン機関の音がブルーノの耳にはつきりと聞こえた。

「まさか、ダミーか？」

「いえ・・・音響反応の大きさから、デコイ魚雷等のダミーではありません。おそらく、巡洋艦クラスの艦艇です」

「よし、我々も反転するぞ！　奴をここで逃がしてはならん！」

操艦士が航空機の操縦桿に似たノーチラスの操艦レバーを左に切り、巨体をゆっくりと反転させる。

速度は早くても、巨体ゆえに舵が実際に効き始めるまでに相当な時間を要する。

完全に曲がり切るまでの時間となれば、さらに遅くなる。

その時間こそ、カイトが狙っていたものだった。

『敵超兵器潜水艦、反転します！』

フリースベルグのソーナーが、ノーチラスの反転を感知したのはブルーノが反転の指示を出してから間もない時だった。

「よし、こちらで合図をする。　それまで機関停止」

マイクを置いてノーチラスから発生するノイズを映し出したスクリーンを注視するカイト。

すると、ノイズがどんどんフリースベルグとは反対方向に遠ざかっていく。

「艦長、敵艦はまだ“二艦”居ることを知らないんですか？」

「そうだ、そうなるように幾つかの手を打った。　敵超兵器がこの罠に気付くまでが我々のターンだ」

ノーチラスの拳動を疑問に思ったバンに、カイトが艦長として頷き淡々と答える。

「しかし・・・なんで教えてくれなかつたんです？それなら、あんなに驚いたりする必要は無かつたんですがね」

「お前には、大事な仕事があつただらう？お前は見事にやり遂げてくれた」

電磁砲の事を言っているのだとバンは直感的に気付き、少し照れてしまった。

「だから次は、こちらの腕の見せ所だ。 といつても、このトリックは単純明快・・・目があればすぐに気付くが、視覚を得る方法が潜望鏡以外に無い潜水艦だと・・・」

「なるほど・・・視覚を完全に奪う、だから潜望鏡を攻撃させたんですね、きんぼう じ」

静かに頷くカイトの向こう側にあるスクリーンの光点が移動していく。

巨大なノイズを通過し、フレーズベルグとは反対方向の南西へと向かう光点には友軍艦艇を示す青いマークと“DDG Kinbo”とあつた。

それは、ガラパゴス諸島へと出航するほんの数時間前の出来事だつた。

カイトが艦橋で最終調整のために何度も見直したチャート等に再び目を通していた。

特に工兵達は大忙しだが、それを統括する艦長であるカイトも一応多忙である。

その時最初から忙しかったフレーズベルグのクルーは、僚艦もちよつとした喧噪に包まれている事を知らなかつた。

シエルドハーフェン級の二艦と行動を共にする予定だったイージス艦きんぼうが、秘匿回線で興味深い情報を入手したとのことである。

「日本のレジスタンスからの情報？」

既に、その情報が第11艦隊にもたらされてから三十分は経過していた。

「はい。暗号を入手したきんぼうはもちろん、今回長官が乗艦されるシエルドハーフェンでも大騒ぎになっているんです」

大騒ぎと聞いて、カイトのチャートをめくる手が止まり、彼はゆっくりとリナの方を向いた。

「・・・詳しく教えてくれ、副長」

「情報によると先月十日に日本の東京湾に超兵器が現れたそうです」「超兵器・・・もしかサンディエゴ沖で戦った高速艦か？」

「いえ、入手した情報によると敵超兵器は潜水型・・・それもかなりの大型艦とのことです」

「やはり帝国は、異なるタイプの超兵器を既に複数持っていたか」「カイトもその事を全く予想していなかったわけではないが、そうではないことを祈っていた身ではある。」

その祈りは無情にも外れた・・・そうになると、きつと先日の高速艦とその情報にある潜水型の二艦だけではあるまい。

狡猾かつ冷静なヴァイセンベルガー大将のこと、本国や世界中の海に我々の知らない未知なる兵器を展開させているかもしれない。

普段冷静な人物があそこまで大胆に事を起こすという事は、その戦力は単体で国家レベルの戦力とでさえ互角かそれ以上に戦えるものなのだろうか・・・

「しかし何物かは分からないが、その情報・・・私は信用に値すると思うな」

「つまり、罫では無い・・・と？」

「・・・副長、きんぼうの艦長と副長と話がしたい。少しこの場を預けるぞ」

「え、ちよつと艦長!!?」

“はい、わかりました”の“は”の字も言っていないリナの腕に、数センチの書類の束がドサツと預けられる。

そのままカイトは何も言わずに艦橋を飛び出していった。

・・・

そしてそれから小一時間もたたないうちに、艦橋にいなければならぬ重要人物は再び戻ってきたのだった。

“これで、よし”と言わんばかりの満足げな笑みとともに・・・  
そう、彼の頭の中ではすでに出航前から事が始まっていたのだ。

・・・

・・・

・・・

「終わったか？」

「あと3秒・・・・・・終わりました！」

「ふう・・・そうか・・・助かった」

それを聞いて幸樹は自身に課せられた重要な課題の第2段階が終了したことに安堵した。

ノーチラスは今度は“きんぼう”の追跡を始めている。

海面下に隠れてその姿こそ見えないが、ノーチラスが放つ殺気は海面を刺し貫いてこの艦橋にもビリビリと伝わってくるようだ。

「あと二分はそのまま進むんだ」

幸樹が腕時計を確認しながら、カイトが出航前に指示したこととフレースベルグからの発光信号の指令通りに事を進める。

「でも、もし撃ってきたら？」

宏史の一言で、こそこそ話さえも聞こえなくなった艦橋は静まり返った。

彼の空気の読めなさっぷりは、一応親友と呼ばれても差し支えない間柄の幸樹さえも呆れさせる。

「お前はさあ・・・」

あきれ笑いを浮かべ幸樹はグイッと宏史の肩を掴んだ。

「言つて欲しいのか！？ ああそうだよ、沈むよ！ そうなったら間違ひなくな！」

無意識のままにとうか為すがまま、自身の中にある死に対する恐怖を吐き出すように幸樹は怒鳴り散らした。

しかし結果として自分の前の宏史が驚いてギョツとしているだけで、恐怖心はちつとも減つた気がしない。

艦橋のクルーの意識も、この一見ムチャクチャな作戦に対して半信半疑だ。

それもそうだ。いくら友好国とは言え、ウィルキアから見れば自分たちは外国人。

自国を取り戻すために必死になっている軍隊が、他国の亡命者まで面倒を見てくれるのか？

それも圧倒的に不利な情勢というこの状況で。

そんな中に唐突に頼まれた囷のような役割。

もしや自分たちは捨て駒として扱われているのか？ もしや超兵器がきんぼう撃沈に夢中になっている隙に逃げる作戦なのか？

いくら幸樹がカイトに無線で尋ねても、説明して欲しければ作戦が終わってから幾らでもすると言っただけだ。

そういつた状況で艦橋クルーが、どうやったらこの作戦に前向きになつてくれるだろうか？

作戦遂行には説明はつきものなのに、既にその作戦は始まっている！  
「それでも・・・」

絞り出すように言葉を口にする幸樹。

「生き残るため、今は信じるしかない」

「距離4200に接近。 射程内です！」

「よし、今しかない！ 魚雷発射管開け！」

ブルーノの指示により再びノーチラスの魚雷発射管が開け放たれる。奥には艦に致命傷を与えるべく、鋼鉄の槍が発射の時を待っている。その発射口の開閉で生じた音を、フレイスベルグのソーナーは逃さなかつた。

「敵超兵器、魚雷発射管を開いた模様！」

「きんぼう」に発光信号！ 今だ！」

カイトが前もつて伝えていた合図を、発光信号にて“きんぼう”へと送らせた。

「発射5秒前・・・3・・・2・・・」

今度こそ沈めなければならぬ。

ここである艦を・・・いや、あの艦の艦長を逃がしては後々に少々厄介な事だけでは済まされない事態になりそうだ。

士官の魚雷発射までの秒読みをブルーノが懐中時計を握り締めつつ見守っていた時だった。

その時、異常な警告音が指令区画内に響いた。

何度か訓練の時に聞いたことがあった。これは確か・・・！原因に思い当たりがあつたブルーノが中央のスクリーン・・・さっきまでフレイスベルグとそれを追いかけるノーチラスの位置を表示していたスクリーン。

その中央部にでかかど、Target Lost、目標消失の表示が赤文字で表示されたのだ。

「き、消えた?!」

ブルーノだけでは無い。指令区画にいたクルーがそのスクリーンを見つめる中、敵性艦艇の表示が回復した。

だが、その再出現は彼らをまたもや驚かせた。

「て、敵艦・・・後方距離9200に出現?!! 馬鹿な・・・」

音響やそれをモニタリングしたスクリーンを見て、正確な敵の情報  
を艦長へと伝達する音響水測士。

しかしそんな彼でさえ、自らの得た情報を疑わずには居られなかった。

そして次の瞬間赤くマークされた光点が二つ、フリースベルグの反応が消滅した海域から出現する。

危険を示すそのマークの正体がなんであるのか、ノーチラスのクルーは警告音と共にそれがなんであるのかの大よその察しはついていた。

「魚雷です！ おそらくアスロツクが発射されていた模様！」

「馬鹿者！ なぜ気付かなかったんだ！！」

「そ、それが反応が全く・・・」

「ええい、反転しろ！ 射程まで近づくと同時に、魚雷を全門斉射だ！」

さては今までの反応はデコイだったのか？

いや、確か今まで自分たちが追尾していた物体は巡洋艦クラスの大さきの艦艇だったはずだ。

今や必死で原因を探ろうとするブルーノの頭は、パンク状態だった。

「着弾！」

ズゴゴゴツツ！！

巨体故か激しい衝撃というには程遠いような、まるで小規模の地震のような衝撃がノーチラスを襲った。

「アスロツク、艦尾付近に二発命中！二番推進機、被弾！浸水は無し！」

「二番を閉鎖しろ！ まだ動ける、問題無い！」

それでも一発お見舞いされたという事実が、クルー達から余裕を奪っていた。

出せる最大の速度でフリースベルグへと接近しようと試みるノーチラス。

「敵艦遠ざかります、本艦との距離9500！」

「魚雷は引きつけず、最大射程の距離5500で撃て！ それから、なるだけ次弾の装填も急がせろ！」

「アイ、サー！」

次弾の装填を迅速にせよとクルーの一人が、魚雷発射管室と無線通信を取る。

すると思ってもよらない返答が、魚雷発射管室から返ってきた。

「艦長！ 発射管室から返答、発射管内に軟質の異物が大量に浸入除去に10分ほど時間がかかるとの事です！」

「何？ 軟質の異物・・・だと？・・・そうだったか・・・！」

いきなりブルーノは立ち上がると、自分の顔面を押さえて大声で哄笑をあげた。

その様子に驚き、周りのクルー達は思わずブルーノ艦長を凝視する。「クククツ、アツハツハツハツ！！ どうやら、我々はフレースベルグにしてやられたぞ・・・副長」

「は？」

「撤退だ。このまま本国へ引き上げるぞ」

「艦長、それは本気で言ってるのですか！？ 仮にもこの艦は超兵器ですよ！？ 大艦隊相手でも戦えるこの艦が、たった一隻の艦に背を向けて逃げるなど！？」

割と従順だったノーチラスの副長も、突然のブルーノの判断に対して若干憤りをあらわにする。

「副長・・・」

それに対して、ブルーノはなだめるような口調で語りだした。

「もし貴官が責任を恐れるという理由で撤退に反対しているのであれば、これ以上私に意見をするな。それ以外の理由があるのなら、まだ質問や意見を許そう」

「確かに責任もそうですが・・・この艦は致命傷を受けたわけでもなく、なによりまだ戦えます！」

「いや、この艦は戦闘不能だ、魚雷発射管が10分ほど使えない状況だからな。それに相手がレーダーによる追尾を受け付けないステルス艦なら、USM（潜水艦発射対艦ミサイル）での攻撃も無意味

だ。」

その間にたとえノーチラスといえども推進機を集中的に狙われてしまえば、航行不能にならないとも限らない。

「しかし！」

「まだ分からないかな、副長！？ マスカーから・・・いや、ノーチラスの潜望鏡が砲撃で折られた時から我々はすでに敵の術中に嵌っていたのだ」

この期に及んでもまだ副長は自分たちが優勢なのだと思信していたようだ。

「敵艦は途中で二艦に増えていたんだ。潜望鏡深度で航行を続けていたノーチラスの艦首が、敵艦のマスカーやポリマーに覆われたお陰で前面のソーナーは従来の性能を封じられていた。反転した際、まるで敵艦が消えたように見えたのはそれが原因だったんだ」

その超兵器という超常識的兵器への妄信を、ブルーノのその一言が打ち砕いた。

「彼らが数枚上手だったな・・・ノーチラス、急速潜航」

（また戻るぞ、フリースベルグ・・・その時まで、沈むのはこの俺が許さん）

残念そうな声で命令を出し、ブルーノは未だに表示されている光点を見つめ宿敵にしばしの別れを告げた。

まださらに続くと思われていた攻防戦は、意外な形で幕引きとなった。

フリースベルグから後方の海中で、突然ボゴボゴと大量の気泡が海面に噴出した。

『タンクからのブロー音を確認・・・敵超兵器潜水艦、急速潜航します。まさか、逃げたのか？』

ソーナーでさえ自分でそう言いつつも、今自分が言ったことが信じられないという表情で何度も音響スクリーンを見直した。

いや、やっぱり間違いない　　敵艦は攻撃不可能深度へと潜っていく。

『敵超兵器潜水艦、深々度へと逃亡しました!』

そしてCICや艦橋の音響スクリーン上からも、そのノーチラスの姿が完全に消え去った瞬間、艦内はクルーの拍手と歓声に包まれた。「ソーナー、戦闘記録の保存を忘れるな。皆、本当に良くやってくれた」

その後30分ほどは歓声やお互いを賞賛しあう声が途絶えることは無かったが、その30分が過ぎたくらいに途端に静かになった。

思えばほぼ丸々一日、クルーのほとんどは何も食べていなかったお陰で、元気がそんなに長く続くことはなかったのだ。

きんぼうと共に、ガラパゴス諸島攻略中の本隊と合流を果たそうとフリースベルグは針路を変える。

真昼過ぎ　警戒態勢の解除から一時間もすれば、クルーも自ずと緊張が解けてしまう。

そうなるまで感じなかった空腹感というのが、より一層激しさを増す。

しかしこの時すでに調理班に昼食の調理を命じるには遅すぎる時間。何か無いかとカイトが模索していた時、彼はふとパンが食糧庫に保管されていたのを思い出した。

それをリナに頼もうとカイトが艦長席から後ろへ振り返ると、他のクルーとは違いまったく憔悴した様子を見せない彼女と目があった。

「ああ副長……」

「何でしょうか?」

「確かこの艦の食糧庫には大量のパンが搬入されていた筈だ。今更昼食の調理を始めるには遅すぎる、この際各科に昼食として出すよう手配を頼む」

するとリナの表情が途端に“なんだそんなことか”と言っているような表情になった。

昼食を取るように命令を出すのに、何か不服な点でもあるのだろうか

か？

「艦長、お忘れですか？ 本艦が魚雷を一発被雷し、内部に浸水が発生している事を・・・」

「それは分かつている。しかし浸水した区画は隔壁で閉鎖している・・・何か問題でもあるのか？」

「ですから、浸水したのは左舷第二区画のCですよ」

「・・・副長、まさか」

「はい、食糧庫は絶望的です」

すました顔でリナが言い放つと、カイトも周りの艦橋クルー達はガツクリとうなだれる。

どうやら艦体のフリングホルニでの修理と待望の腹ごしらえは、本隊に合流してからという事になりそうだ。

しかしそれでも大丈夫だ 絶対に負けれないこの哀しき戦争

で負けることや、フリースの痛みに比べれば

そもそも比べること自体が馬鹿馬鹿しいと思えるくらいに、空腹感など我慢できるのだから。

## 第二十一話 フレーズベルグ消滅！？（後書き）

ブルーノ艦長が、しゃべってたからカイトがしかけたトリックは分かったような微妙なような気がします……

「残念だったな、トリックだよ」といつて麻酔弾を放ち、結局最後まで一体どんなトリックだったのか……そもそも何がトリックだったのかの説明がないB級アクション映画よりは、説明は出来ないと自負します（え

まあ、もし不十分かな？っていう事になれば、後日加筆修正をしようかと思っています。

次回 第二十二話「大洋の関門へ」

いよいよパナマへと向かう第11艦隊。

そこには、万全の態勢で待ち構える防衛艦隊の姿があった……

## 第二十二話 大洋の関門へ（前書き）

なんか一カ月に一回更新という超ユルユルな筈の目標は、いつのまにか自分にとってかなりタイトな目標へと変貌していました（- - ;）

しかしこの二カ月近く・・・いろいろとありました。

ご存知の方もいるかとは思いますが、先月の初旬には呉へと足を運びましたし、そこで呉という都市がいかに海と付き合ってきた都市なのかというのを、紙面の上で無く初めて現地に行っただけで感じ取ることが出来ました。

そしてついこの間、私は大学内に新設する新たなサークルの会長という大役を仰せつかりました。

また多忙フラグですね、わかります・・・（；。；）

（以下は二か月近く経過して、前回までのあらすじを忘れられた方専用）

《前回までのあらすじ》

極東の海洋国家、ウィルキア王国は突如軍部の筆頭であるヴァイセンベルガー將軍のクーデターによって占拠された。その憂慮すべき状況を打破すべく、諸外国に救いの手を求めるウィルキア王国近衛海軍の艦隊群。第11近衛艦隊に所属していたカイト・A・トライトン中佐は、ヴァイセンベルガー將軍によるクーデターを、艦長として拜命を受けていた最新鋭艦“フリースベルグ”と仲間たちにより、脱出に成功する。

しかしヴァイセンベルガー將軍はあらかじめ用意していた超兵器と

呼ばれる想像を絶する破壊力や性能を持つ兵器を用いて、彼らを撃滅させようと目論んでいた。

次なる目的地はイギリス・・・

太平洋から大西洋へと向かうには、南アメリカ大陸の南端へ迂回するか、敵軍が防衛体制を整えているパナマ運河を攻略する以外に無かった。

そして艦隊司令長官らが出した結論は、最短距離のパナマ運河を目指すことだった。

## 第二十二話 大洋の関門へ

全ての海がつながっている大洋にも、一応それらを隔てる境界の  
ようなものがある。

そして今自分たちがいる太平洋と目的地のイギリスのある大西洋を  
隔てるのがパナマ運河であり、それが我々としては次に突破しなけ  
ればならない関門だ。

また艦船の大型化にも対応するように、運河の大改修が行われたの  
はほんの十年ほど前の出来事だった。

とにかく、赤道近くのムンムンする気候に不慣れなカイト達はパナ  
マ運河をすぐにも通過したいのだが、そうは問屋ならぬウィルキ  
ア帝国が卸さなかった。

偵察部隊の情報ではパナマ運河周辺はおよそ二個艦隊に相当する大  
艦隊が嚴重に封鎖し、それが目下の第11艦隊の次の対戦相手とい  
う事になる。

しかしそこで癢に障るのが、その大艦隊を指揮するバーゼル提督が  
ここ一週間毎日のように行っている降伏勧告だ。

彼はもはや「売国奴め！」という罵声さえも、まるで涼風のように  
感じているようだ、バクスター長官は残念そうに言っていた。

ガラパゴス諸島制圧戦は、フリースベルグの電磁散弾砲ととシユル  
ツ率いる潜水艦による洋上艦撃滅により、近衛艦隊の勝利という事  
で一応の決着はついた。

どうやら今回はその作戦には参加しなかったアメリカ太平洋艦隊も、  
パナマ運河攻略にはどうやら乗り気らしいのだ。

もともと国土の広い国家アメリカが実質属国だったパナマに運河を  
作らせ、戦略的海洋移動手段として開発したのがこのパナマ運河。

しかしその戦略的アドバンテージを目論んで建設した運河が、今で  
はアメリカ海軍の戦略的障害になっているというのは何とも皮肉な  
話だ。

そんなアイロニーな現実をこそばゆいと思ったのだろうか・・・とにかく、次の作戦では米太平洋第三艦隊の支援が受けられるという事になった。

しかしそれももちろん、彼女が万全のコンディションを取り戻せてからの話だ。

「あとどれくらいかかりそうか？」

カイトはドック艦フリングホル二の艦内で、太い鋼鉄の支柱で下から持ち上げられた状態のフレイスベルグを見つめるリナに問いかけた。

「突貫作業で修理をして貰っていますが、早くてもあと丸1日はこの状態でしょう」

「そうか・・・もう少し早くホーミング魚雷という事に気付いていたらならば、こういう事にはならなかったかもしれないがな」

先の戦闘でフレイスベルグが魚雷を受けたことで、カイトは未だに自身の過失を悔やんでいた。

「損傷を受けた舷側の外装甲板を交換し、浸水で損傷した内部の機器類も取り替えます。しかし艦長・・・」

「ん？ どうしたんだ？」

「私はむしろ、良かったと思いますよ。　まず普通なら・・・」  
リナが続けようとした時

ピタッ・・・

温かさを感じる何かが、リナの額に当てられていた。

そしてそれがカイトの右手であることはリナは見開いた目で確認したのだが、途端に彼女の頭は限りなく真っ白に近づいた。

「な、なな・・・ッ！！？」

「熱は無いみたいだな・・・」

「な、何やってるんですか艦長ッ！！」

リナの甲高い汽笛にも勝るとも劣らないような叫び声が、フリングホル二の艦内に木霊した。

「何って・・・それは君が突然変な事を言い出すから、熱でもあるんじゃないかと心配しただけだ、他意は無い」

「私の体調管理は万全です！　っていうか、私が言いだした変な事ってなんですか？」

「副長・・・一体どこの世界に、艦にあんな大穴あけられて嬉しい気分になる艦長がいるんだ？」

「艦長、私はそうは言ってます。私はただ、これくらいの被害で済んで良かったと言っているのです」

「それを最初に言わないか・・・」

それを聞いて半ば安心したようにカイトは苦笑し、そして呟いた。

二人のいる場所から少し離れた艦橋前部の右舷に設けられた緩やかなタラップからは、機材の搬入を工兵達がせつせと行っている。

それよりもリナが興味のあるのは、フリングホルニの大きなクレーンで吊り下げられ、フレーズベルグの艦橋前部から少し浮いた位置で止まっている細長い物体。

大きさは7mほどとかなり細長い物体だが、それが収容される位置を考えるとその正体はたった一つだ。

「SM-3（弾道弾迎撃ミサイルの一種）ですか？　今度の戦闘で弾道弾が使用されると？」

「既にサンディエゴで使用されているからな・・・次の戦闘で敵側が使用してこないという保証はどこにもない」

敵側に空母や陸上の航空基地から多数の航空機が出現することが考えられている中、リナは敢えてESSMのブロックを2つもSM-3に換装する事に疑問を感じていた。

もつとも、シュヴァンブルグを脱した最初のころに比べればカイトに対してよく抱きたくなる疑問の数は大分減っているのだが・・・。（トライトン艦長がやることには、必ず理由がある・・・弾道弾？　まさか！）

「艦長、もしか・・・次の戦いにおいて、本艦の二番艦ニーズヘッグが戦線に投入される可能性があるかと？」

「そつだ。というより、俺はその確率は100%とみている。だからこそ、弾道弾迎撃の兵装へと換装させているんだ」

自信満々に語るカイト、彼は数時間前の作戦会議で手に入れたパナマ運河の全体図を広げた。

「このパナマ運河だが・・・拡張工事が行われたと言っても、喫水が17m以上の船舶は通過できない。よって、あんな大排水量の超兵器が通過できるとは思えない、もし先日のような航空超兵器なら可能だが・・・」

「しかし、だからと言って必ずしもニーズヘッグが待機していると・・・」

「なんだろうな・・・艦長として、憶測だけで艦の戦闘計画をしてはいけない事は十分承知している。だが、こればかりは・・・なんとなくだ、としか言いようがないんだ」

これまでとは明らかに違うカイトの言動を見て、リナは言い知れぬ不安を覚えた。

それはカイトに対してでは無い、彼がそうならざるを得ない次の対戦相手に対してだ。

「副長、もしニーズヘッグが仕掛けてくるなら・・・それは遙かに高い壁だ。だが、運河同様にこれは本艦が必ずパスしなければならぬ重要なポイントだ。忘れるなよ」

「はい、肝に銘じます!」

リナの返事に軽く頷くと、カイトはファイル等を挟んだフォルダを抱えてその場を後にした。

ブローズグ・ホーヴィの艦内・・・前艦橋のすぐ真下にあるのが、航空戦闘要員のブリーフィングルームだ。

隣はパイロット達の待機室にもなっており、スクランブル時はそこから横の扉を通り抜けて、そのまま真っすぐに行くところはすぐに航空機の格納庫だ。

その、本来は白い壁の筈の戦闘航空要員ブリーフィングルームは、所々内装が剥がれたりと新設されている筈の部屋だが妙に古めかしい。

それもその筈、航空戦艦へと改装される前の特装戦艦だった頃のは、こは、暇な艦橋クルーの娯楽の場にもなっていた。

ブリーフィングが始まる前に、信哉が新設の割に古いという事を今6名のパイロット達を前に説明を続ける、四角い顔を取り囲むように髭を生やしたまるでライオンみたいな男に尋ねた。

彼はヴィクター・ガイドストック少佐、これまでは優秀な航空作戦指揮能力を発揮する機会など無かったが、戦艦から一転して航空戦艦へと変わったこの艦。

航空要員の配属が決まったとヴィルベルヴィントを撃沈した数日後に聞いた時に、航空部隊指揮官として配属されたヴィクターは大喜びだったとか・・・

そんな裏話を小声でパイロットの皆に囁いて回ったのが、ヴィクターの隣に佇むまだ若手の航空作戦指揮要員のクリストファー・エイムス大尉だ。

「・・・とりあえず、今回は敵のテリトリー内への威力偵察と、私とエイムス大尉が乗りこむ空中管制機センチリオンの慣熟飛行を兼ねている。それは分かっただろうか？」

信哉を始め、他にウィルキア人のパイロットで編成されたクレイン隊の面々も同様に頷く。

「よお、戦闘機を米軍から貰った奴ってお前か？」

「え？ いやぁ・・・返そうと思っていたら、いきなり米軍が俺にアレをやるって言いだして・・・俺だって、ワケわかんねえけど」  
米軍から近衛艦隊が高値で借りた戦闘機に乗るパイロットの一人が、ぼんやりと前を眺めていた信哉に話しかけてきたので、信哉は咄嗟に答えた。

「本来なら、慣熟飛行と威力偵察を同時に行うなど、正気の沙汰ではないと思う。だが、我々には片方ずつを行うような時間的余裕は

無い。おしゃべりをする暇もだ」

口元を緩ませたまま、ジロリと両目で信哉ともう一人のパイロットがヴィクターに見つめられた。

ドツキリとした二人は顔を見合わせて素早く軽く頭を下げ謝る。

「そして、こんな事で説教をする暇も無い！」

途端に他のパイロット達からはドツと笑い声上がり、信哉は答えなければ良かったと心の底から思った。

ふと後ろを振り向くと、同じように恥ずかしそうな顔をしながら両手を合わせてすまないと謝る彼の姿があった。

「よおし、では行くぞッ！」

その掛け声とともに信哉は席を立つとブリーフィングルームから出る、するとそこには艦魂ローズがこちらへと歩いてきていた。

最初は「あら？」という表情をした彼女だが、これから作戦に赴くパイロット達だと気付くと笑顔で「いつてらっしやくい」と手を振った。

向こうからすれ違う者たちの中に、自分に目線を合わせる人はいないようだ。

きっと自分が見えていないのだろうとローズが考え、彼らとすれ違おうとした矢先だった・・・

「おう、ありがとう」

すれ違いざまに信哉は彼女にささやかな声援への返答を送った。

（若い士官だな・・・こつちから来たってことは、航空要員か？）足を止め驚いて振り返るローズ、しかし信哉は彼女が見えていたにも関わらず、この艦のクルーだろうと思っていたようだ。

場合によっては前哨戦になりかねない偵察作戦開始時間になり、ブローズグ・ホーヴィのカタパルトからは、ブリーフィングルームで一緒に仲間達の機体が雲の多い大空へ弾き飛ばされていく。

左舷前方のエレベーターから姿を現した機体に搭乗する信哉は、陽光が真上から差し込み明るくなった手許の計器やスクリーンの最終チェックを行う。

最終チェックも終わり、ふと左を見つめるとブリーフィング中に信哉に話しかけてきたパイロットの機体が、後ろから豪快に炎を吐きながら飛び立っていった。

そして右には上部にレドームを載せたC-130輸送機、つまりE-130センチュリオンが4発のプロペラを高速で回転させて信哉が飛び立つのを待っている。

耳あてをしたデスククルーが、手信号でグレーのフライトデッキ上の信哉機を誘導していく。

その手信号に従い進んでいくと、ガクンツというノーズギアが何かに嵌り込んだように前のめりに震えた。

所定位置についたノーズギアをカタパルトに固定し、いよいよ後方にジェットブラストデフレクターがせり上がる。

緊張感でやや乱れつつある呼吸を整え意識を集中させると、ザザツという一瞬の雑音後にブローズグ・ホーヴィC A T C C（空母航空管制センター）から発艦の許可が下りた。

「さて、行くか！」

自らを奮い立たせるようにアフターバーナーON、エアブレーキOFF！

デスククルーがゴーサインを出した次の瞬間、ガクンツという後ろから座席が押し上げるような衝撃を受けながら機体は大空へと舞い上がった。

舞い上がるとそこは上は青、すぐ下は白、そしてその下はまた青という見事な色彩の世界。

先に上がった5機のF-14Dスーパートムキャットはトライアングルを組んで編隊を組んで飛行している。

しかし僚機の居ない信哉は、そのすぐ真下を一人彼らと同じ速度で飛んでいた。

そこへ、後方の低高度から重たいターボプロップ音を響かせながら近づく鈍重な機体。

ブローズグ・ホーヴィのフライトデッキを目一杯使って離陸したE-130センチュリオンが、彼らの後ろへとつく。

『全機へ、本機のコールサインはストラト・アイ。以後呼び出しには、こちらを用いるように』

「了解」

意味は“成層圏の目”か、とぼんやりと考えた時、彼は自分にはそのコールサインが無かった事を思い出した。

先程も、離陸の際にはCATCCがしばらく黙りこんだ後、「松原大尉、離陸を許可する」としか言っていない。

『松原大尉、貴官は僚機も無ければTACネームも無かったな……んー、それじゃあ』

一体どんな名前を付けられるのだろうか、確かウィルキアとの合同演習でも多数の判定撃墜を出していた覚えがあった。

仲間内からは“護国の白鷹”なんて呼ばれた事もある、さぞかしガイドストック少佐は良い名前でもくれるんだろうと信哉が踏んでいた矢先……

『よし、お前のTACネームはチャッターだ』

「んなツ！チャッター（おしゃべり）?!?!」

『良いな、分かったな？嫌ですは受け付けんぞ、上官命令だ』

「ぐぐつ……チャッター、了解です」

怒りというよりはこれは恥ずかしさに近い。

一瞬、自分に喋りかけてきたクレイン隊の五番機……アレを今後遭遇するであろうドッグファイト中にも敵機にまぎれて撃墜してやろうかとさえ思った。

もちろんそれは冗談だが、こんな恥ずかしいTACネームを授けられた事は冗談ではない。

(こうなったら、あの獅子っ面に“チャッター”なんて不相応って思わせるまでだ！)

気持ちを切り替えた信哉が過信するわけでもなくかといって卑下するワケでもない自身の技量で、彼らを見返してやるうと心の中で決意した。

『チャッター、貴機は万が一の時には単独でクレイン隊のカバーや遊撃に当たれ』

「チャッター了解」

変なTACネームを変に意識しないように軽く返事をし、信哉はふとマップが映されたスクリーンを見つめる。

この機体なら巡航速度で10分で行けそうな距離を、今はもう25分くらい経過している。

ブリーフィング通りなら、そろそろ成層圏の目には見えてもいい頃だ。

そう考えていた矢先、彼の考えは的中した。

『こちらストラトス・アイ、水上にコンタクト、こんなところに味方は居ない』

素直に敵だと言わない辺りがガイドストック少佐のちよっぴりの優しさというか、おかげでやんわりと向こうの海上にいる奴らの正体を悟る事が出来るというものだ。

敵地へと乗り込むんだという事を、改めて覚悟する時間が取れた。

まだ向こうが何かを仕掛けてくる感じは無い、7機はエネミーライオンへと悠然と飛行を続ける。

その時、信哉は何か不思議な違和感のような物に気付いた。

彼は咄嗟に無線のスイッチを入れる。

「チャッターよりストラト・アイ。・・・あ、いや・・・」

『どうしたチャッター？ おしゃべりでもしたくなかったか？』

「いや、気のせいです。 オーバー」

『なんだ、冗談で言ったつもりだと思ったが、本当にお喋りしたくなってたのか？』

周りの奴らがマスクの下で出来る限りの大口を開けて笑っているのが分かる。

しかし、ガイドストック少佐は茶化した張本人にも関わらず、信哉が言いかけた内容が気になり始めていた。

敵の艦隊上空を通過することなく、ストラト・アイの巨大なレドームによってあらかたの情報を集めると偵察飛行は終了した。

敵の襲撃も無く、ただ編隊から離れないように飛んでいただけだ。着艦後、信哉は何故かガイドストック少佐の士官室へと呼ばれた。コンコンという軽いノックの後に、防水扉より薄い厚さの扉の向こうから「どうぞ」の返答がある。

「松原特務大尉、参りました」

「そこに掛けてくれ」

ぼうぼうと髭が生えている風貌を見る限りさぞかし部屋は散らかっていたりするんだろうと踏んでいたが、これまた信哉の予想は外れ彼の部屋はとてもきれいだっただ。

机の上には先程の偵察飛行で得た資料等が机の上に広がっている。

「用件はただ一つだ、特務大尉。折り返す10分ほど手前だ、俺に話しかけようとした事、あれは何だったんだ？」

「あ、いえ、大した事ではないんです。」

「それを言えって言うてんだよ。本当にお喋りしたかったワケでは無いんだろう？」

「参ったなあ、まあ上官命令なら仕方ないですね。最初に断っておきますけど、これは単に自分の勘違いかしれませんし・・・ていうか、きつとそうですよ」

「つたく、じれつたい奴だな。ほら、早く言え」

ガイドストック少佐はリーダースクリーンのコピーを一枚、手に取るとそれを裏返してメモをとる準備を整えた。

「なんとなく何ですけど、リーダー照射を最長距離まで伸ばした時、

敵機の数異常に多いような気がしたんです」

「ふん、なるほど。お前の機体のレーダー性能はクレイン隊の奴らのソレを遙かに上回るからな・・・当然、彼らには見えない物も見えたってワケだな。っていうか、何でそれをもっと早く言わなかったんだ？」

「いえ、実は言おうとも思ったんですけど・・・」

強面のガイドストック少佐に問い詰められ、信哉は思わず姿勢を後ろに反らし気味になる。

「それ以前に少佐が何も言われなかったんで、きつと自分の思い違いだろうと思いついで途中で取り消した次第です」

「ふん、上官の心を突かないようにしようという心遣いは有り難いがよお・・・大尉、そいつぁ間違いだ」

「え？」

「大尉、いくらAWACSの目が遠くまで見えていてもな、それが一つの目でしかない事には変わりないんだ・・・俺の言わんとしている事が分かるか？」

信哉は首をかしげ、ガイドストック少佐が言おうとしている内容を推測する。

しかしどうも、精神的な内容で物事を言われるのはあまり好きじゃないせいか、よく理解できない。

しばらくした後、信哉が顎に手を当てたのをギブアップのサインと見たガイドストック少佐は、机の上にあつた飴玉を口の中へと放り込んで続ける。

「あの時、実は俺も最初に敵の数が多いように見えた。だがそれは、今存在を報告されている敵基地や空母の数を考えると、レーダーに映った哨戒機の数には別にありえなくはなかったな」

「ええ、ならば・・・」

「ところがだ、大尉。もしあの時、お前が敵の数の多さを報告していたなら、俺はもう一度あらゆる最新鋭機の機器を駆使してそれを調べ直す事も出来た。それでももしかしたら、何か分かったかもし

れないんだぞ？」

その途端、ガイドストック少佐の指摘に信哉はハツとなった。もちろん後の祭りだ。

「まあ、他力本願のように聞こえるかもしれないからこれ以上は言わねえが・・・しかしな、俺はお前さんに期待している事が一つあるんだよ」

「期待・・・ですか？」

立ち上がり肩をポンポンと叩かれ、信哉は不思議そうな表情で首をかしげる。

「ああ、お前の事はどつかで耳に挟んだ事があつた。操縦技術は半端ない・・・エース級のベテランと互角に渡り合える日本海軍航空隊のルーキーってな」

「は、はあ・・・」

突然ほめられたのかそれともそれ以外か・・・信哉はとりあえずの生返事を返すだけだった。

「そして、童顔の癖して馬鹿みたいに上官に突っかかって意見したりなんだりと、やたらと熱い頑固な扱いづらい飛行機乗りってな」

(うっわ・・・俺そんな風に伝わってたのかよ)

悪い噂は伝わるのは早いとは言うが、そんな風に伝わっていたとは

・  
唯一の救いは、その前にちょっとだけ自分を好評価する一文があつたくらいだろう。

「だがな、大尉。俺が期待していたのは、お前の操縦技術もそうだが、むしろお前が指揮官に対していろいろと突っかかって来ることだった」

「えっ?!」

信哉はワケが分からなかった。

これまで散々自分の上についた上司に苦虫を噛み潰したような表情をさせていた自分の悪い癖が、期待されるなんて事があるのか・・・  
というかあつて良いのか？

「あんなにドでかいリーダーから得た情報を見れば、確かにお前たちよりはたくさんの事が見えるかもしれん。だがそれは、同時に大事な物が見えなくなる可能性につながる。」

「大事な物？」

「そうだ。俺は戦闘中お前たちと見ている画面は同じようで全く違う。俺が気付かない事、それをお前に教えて欲しいんだ。」

信哉は黙り込む以外の術が無い。言い返す事も出来ないというか、自分も納得できるために言い返す気にならないのだ。

「気付いた事は何でもいいから報告だ。それから分かる重要な事だつてあるんだ。まあ、頑張ってくれよお喋り小僧。期待しているぜ」茫然としている信哉だったが、そんな彼でもガイドストック少佐の話が終わった事は理解できた。

それからもう一つ、しばらく時間がたって彼が思い出したように行きついた結論は、もう少しチャッターという名前に甘んじてみようという事だった。

そして束の間の何とやら・・・艦隊全体に警戒態勢が敷かれたのはそれから十数時間後の翌日明朝のことだった。

大洋の関門、その門番でありバーゼル提督が率いる艦隊を、フレースベルグの水平レーダーが捉えた。

それが意味する事・・・それはあちらに存在する筈のフレースベルグの妹艦、ニーズヘッグのレーダーには此方が捉えられたという事。そして後に引くことが出来ない我々の戦いの、一つ目の峠にさしかかったというカウントダウンだった。

間もなく旗艦フレースベルグより、第一種警戒態勢が発令されるだろう。哀しき戦いが、また始まる。

## 第二十二話 大洋の関門へ（後書き）

実はこの小説、何回か書き直しています。

でもこの出来も自分的にはイマイチかなと思っていました。加筆修正とかを出来れば良いなとも考えていますが、前書きの内容を読んでいただければ分かりますが、何とも言い難い状況です。

相変わらず不定期更新の疎い小説が平常運転ですが、読者のみなさんの気分転換や知識の一助、暇つぶしとかの助けになれば幸いです。

それからもう一つ・・・

この小説はそうでもないですが、最近この小説を書いているパソコンのキーボードの「D」が何故か効きづらくなっています。なので・・・

えすよね ですよね（Dを打っているがタイプを認識出来ていないため）

といった感じにすみやかな脳内変換にご協力ください（笑）

・・・もちろん、アップ前に一回は読み返していますが

ご意見・ご感想、ございましたら是非ともよろしく願います。私の活力になったり、反省点になったりしますので！

第二十三話 南洋に鷲は悠々と(前書き)

どうにか一カ月程度(?)で更新が出来たかなと思います。  
それにしても、他の先生方更新早いよ)

どうみても自分が遅いだけです、どうもありがとございました)  
笑)

## 第二十三話 南洋に鷲は悠々と

前置きとなるウルビーナ湾での戦闘に勝利し、傷ついた船体の修理も終え機は熟した。

思い返せばこれまで防戦一方だった近衛艦隊の攻勢に出る戦闘は、帝国正規艦隊に対してはこれが初となる。

巡航速度で航行する艦隊の先頭には、修理を終えたフレースベルグ。その後方に控えるシエルドハーフェン級数隻に、米艦隊空母打撃群艦隊が後方に大きな三角波を蒼海に描いて進む。

物量では完全に押し切られているという不利な戦いである事は分かっている。

しかし、それでも過日にカリフォルニアを襲撃したあの巨大艦を沈めたんだという一種の誇りが、クルー全体の士気を二倍にも三倍にも高めていた。

無論、これが避けられない戦いであるがため、自ずと船首が戦地の方を向く理由にもあるのだが……

既に警戒態勢に入っているフレースベルグの艦橋には、緊張のためか話し声などは無い。

だがその艦橋から見える海原は穏やかで、この先に戦場があるのかという事を疑いたくなるくらいだ。

『艦橋、CIC。 定時報告、現在もレーダーに変化なし』

「艦橋、了解。 引き続き警戒、特に対空哨戒を厳となせ」

CICからの報告を聞いて、カイトは一抹の不安を覚えていた。

艦隊の配置とレーダーの性能から考えて、敵が航空機を出してきた際に真っ先に捕捉できるのはフレースベルグだろう。

CICクルーの青一色のレーダー画面を見つめる表情に、余裕などはない。

一瞬の気も抜けない監視体制が、360度数百キロの範囲をカバー

しているのだ。

そのレーダーに、敵機の姿が一切無いのだ。

既に前日の威力偵察で報告があった空域が、フリースベルグのレーダー探知圏内となつて30分が経過している。

「変だな……。向こうにこちらの攻勢が露呈していることを考えても、敵機の一機も捕捉できないとは……」

「もうじき、敵艦隊が待ち構えていると思われる海域が水上レーダーの探知圏内に入ります。確かに、これは不自然ですね」  
髪をかきわけてリナもレーダースクリーンに目を通す。

その時だつた……

艦橋に響いたポーンという警告音と共にレーダースクリーン上に小型の飛行物体が一度に五つ、赤い光点として出現した。

（来たか……。しかし、なぜそこに！？）

レーダースクリーンを覗きこんだカイトが一瞬我が目を疑う。

既に20機以上で構成された敵の航空大隊が、後方から回り込んだように出現した。

それも後方のレーダー圏内である200km地点に突如出現するかのよう……

「い、一体なぜ後方に！？ いつの間に関り込まれたの！」

「分析は後だ、大尉！ 全艦に通達！」

途端に慌ただしくなつた艦橋、通信士が艦隊全体に敵機の接近を知らせる。

『未確認航空物体捕捉！ SIF 応答無し！ 数18、六時方向、410ノット、3000フィートからなおも上昇中！』

「接近は探知できなかったのか！？」

『突然現れました。おそらく若干のステルス性能を持つ機体かと思われませう！』

レーダー圏内に突然出現した事を考えても、ステルス性のある機体で接近してきたと考えるのが自然だ。

「ステルス艦がステルス機に一本取られたな」

思わず皮肉を漏らすカイト。

しかしこのままでは後方に控えさせていた艦が容赦ない攻撃に晒される。

「艦長、本艦隊後方にはアトランティス旗下の米艦隊が・・・」

「分かっている。シエルドハーフェンに針路反転を指示し・・・」

切迫した状況の打破をリナが迫り、カイトは先行する艦の反転を指示しようとした時だ。

「それはならん」

先程からずっと前方を見据えていたバクスター長官が、カイトを制止した。

「なぜです、長官？ このままでは、米艦隊に被害がでる可能性があります。万が一アトランティスが大破すれば、友軍の正規空母は無くなります」

「艦長、我々を反転させるのが敵の狙いだ。たとえば、考え直してくれるかな？」

「な、何ですって？」

カイトの驚いた返答を聞くや、長官は窓の向こうを指さす。

「今、水上レーダーに映る敵艦隊を見ても、全く動きなし。とすると、何かを待ち構えていると考えるべきだ・・・そうは思わないかね？」

「待ち構えている・・・我々の反転を、ですか？」

「そうだ。厳密に言えば、反転後に被害状況を聞いて本艦隊の指揮官が焦る事、とでも言おうか・・・つまり艦長、これは君をターゲットにした作戦だ。それに、今更反転しようと敵機の数に足自慢のこの艦でも間に合うまい」

長官が言い放った推測。確かにそれはかなりの的を得ている。

現にカイトは長官に制止されなければ、艦を反転させようとしていたし、航空機の数に艦が追いつけないのは必至。

フレースベルグ搭載SAMの有効射程に入る前に、敵航空機による

攻撃が行われるのは明白だった。

「しかし長官・・・このまま手を打たないでいるのも、敵の思いつきばであると考えます」

リナの反論に、長官はそれももつともだと頷いた。

「艦長に副長、私は何も全く手を打たずこのまま進めとは言っていない」

「しかし、艦隊の中で最も速いこの艦でも間に合わない状況を、他の艦が打破できるとは思えませんし・・・」

カイトが頭を悩ませる。おそらく対空戦闘に最も秀でているであろうフレースベルグや きんぼう、その二艦を向かわせても間に合わないのに他にどういう手段が？

相手は航空機・・・アトランティスは航空隊で迎撃するだろうが、その数は先のサンデイエゴでの戦闘で半数以下にまで減っている。

こちらにも空母や戦闘機があれば、増援として出せるのだが・・・  
・・・あるじゃないか！

「あー！」

カイトが思わず手を叩き、リナに方を向く。

「副長！ 急ぎブローズグ・ホーヴィへと打電！ 艦載機を迎撃に向かわせる！」

「りよ、了解しました！」

通信士のもとへと走り去るリナ。

「これで、宜しかったでしょうか長官？」

「もう少し早く気付いて欲しかった物だがね。まあこればかりは経験だよ艦長。私は空母の艦長もしていた事があって、今回のような状況にも何度か遭遇したことがある。しかし君は、私の記憶が正しければ空母の幹部になった事も無ければ、こういう状況の実戦に遭遇したのは初めてだろう」

「申し訳ありません、長官。危うく、本艦・・・いえ近衛艦隊全体を危険に晒す所でした」

カイトが浅はかな判断を下そうとした事を反省し謝罪する。

「これ以上失敗を悔やんでもしょうがない。艦長、これを経験として次に生かせれば良い」

「はい。ありがとうございます、長官」

長官が笑顔でそう囁き、カイトは再び前方はるか遠くに控える敵艦隊との戦闘に備えるのであった。

パナマ運河を背後に、フリースベルグ二番艦ニーズヘッグはカイト達の反転をリーダー上で監視しながら待ち構えていた。

『艦橋、CIC。敵艦隊に動きあり!』

CICからの一方を聞くや否や、艦長のディアナは回線をCICへと開く。

「CIC、敵艦隊は反転したか？ それとも・・・」

『いえ、シエルドハーフェン級と思われる艦から航空機多数発艦。』

近衛艦隊の全艦、針路変更無し!』

「そう・・・。やっぱり、以前シエルドハーフェン級二艦が雲隠れしたのはそのためだったのね」

CICからの報告を聞いて、ディアナは毒づくよりむしろ喜んだ。  
(予想が当たった・・・これで互いの勝率は五分と五分と言ったところかしら)

「艦長、一体どういうことですか？ シエルドハーフェン級は戦艦ですよね？ そこから航空機など・・・?」

「もともとあの艦は部品さえあれば、航空戦艦にたった一週間前後で改装できるようにつくられた戦艦。つまり、今はもうシエルドハーフェン級航空戦艦ってところね」

情報部の予想は正しかったようだ。

航空戦艦へと改装されたシエルドハーフェン級は、帝国にとって奪取し損ねたフリースベルグ並みに脅威となりうる。

「艦長、ならば我々も提督の艦隊に随伴し、少しでも敵同型艦の脅威から同胞たちを守るべきでは？ 運河口付近にずっと停泊してい

るおつもりですか？」

「残念だけど副長、これは提督の指示なの。バーゼル提督は、我々の手出しは無用と仰られているわ」

口惜しそくに顔を伏せる副長の気持ちは、ディアナとて嫌というほど分かった。

彼女に出来るのは、とりあえずレーダーでかつての恋人であり今は敵となった人の戦いを見守る事だった。

米艦隊が後方に控えるその上空には、疎らな雲に交じって黒煙の雲がそこらじゅうに立ち込めていた。

アトランティスの艦上では数少ない戦闘機で第一波を空に上げ、戦闘攻撃機の全ペイロードをAAM（空対空ミサイル）に換装しての第二波の発艦が今か今かと迫っていた。

「やってるな・・・！」

「ああ。俺たちを守ってくれよ！もうすぐ、応援を空に上げてやるからな！」

時折聞こえる爆音や発射されるシースパローの爆風音にも怖じるとこなく、デッキクルーが着々と発艦の準備を整えている。

一瞬空の一角が煌めいたと思えば、その煌めきが高速で動いてその先で一段と大きな煌めきを引き起こして消える。

ミサイルでの攻防戦は、双方に徐々に被害を出しつつあった。

当然そうなれば物量で不利な米海軍側が徐々に押され始めるというわけだ。

『アトランティス！増援はまだ上がらんのか！？』

『こちらアトランティスCDC！全速でやっている！もう少しだ！』

『へッ、やけに長い“もう少し”だな』

時折聞こえる無線にも、友軍パイロットの疲弊が徐々に表れ始める。アトランティスのシースパローや随伴するタイコンデロガ級数隻からも、AAMが白線を靡かせて猛スピードで上空へと飛翔する。

しかしそれでも敵の増援が現れ、おかげで防衛ラインが後退するばかりだ。

そしてとうとう一機の攻撃機が防衛ラインの合間を縫うように突破した。

『爆弾を抱えた奴が一機、アトランティスに向かった!』

『なんだと!? 何処だ!? 何処にいやがる!?!』

『俺から見て4時方向だ!』

『その前にフォーカー7、お前は何処に居るんだよ!?!』

反転したトムキャットがアフターバーナー全開で爆弾を抱えた敵機に迫る。

鈍足の攻撃機に対してトムキャットは猛然と加速し、その距離を詰めて射程に入った。

『アトランティスをやらせるか! 今すぐそのケツをぶち抜いてやる!』

ロック音のアームがコクピット内に響き、パイロットはトリガーを引いた。

しかしどうしたわけか、ミサイルが出ない?

『ジーザス!!! ちくしょう! 誰か奴を止めるおおッ!』

愕然となる中、彼はモニターに残弾数が“0”となっているのに気が付き思わず狼狽し叫んだ。

その時、11時方向から一条の煌めきが今まさに爆弾を投下せんとアトランティスに迫るA-10に飛び込むと炸裂した。

『うおっ!? な。なんだ? 誰だ!? 誰がやった?』

米軍パイロットの眼前に捉えていた敵機が、左翼をもがれて回転し飛び散った燃料に引火して火達磨となりながら墜落していく様を見詰めながら、彼は何か飛び込んできたその方角を凝視した。

『チャッター、<sup>エンゲージ</sup>交戦!』

『クレインチーム、エンゲージだ! マスターアーム点火!』

『空中管制機ストラト・アイより全機。米艦隊は今のところ無事だ! 全艦守りきれ! 武運を祈る!』

ブローズグ・ホーヴィから飛び立った航空隊が、ロールしながら高空から急降下。

彼らの雄姿を目視でも確認した米軍兵士たちは湧きかえった。

信哉はまず状況の把握を始めた。

どうやら米軍機の7割無いし半分以上が、既にミサイルの残弾が尽きかけていた。

普段なら自前の機体数で事足りる筈だが、出せる戦闘機の数も激減したアトランティスではこれが精一杯だった。

その綻びを綺麗に突かれ、防衛ラインの後退を招いていたのだ。

『ストラト・アイよりチャッター。艦隊針路左舷に攻撃機が集中している、纏めて来られると厄介だ、叩き落とせ！』

『あいよッ！』

『クレイン隊は散開し、爆撃機と攻撃機の撃墜に集中しろ！戦闘機からの攻撃は可能な限り回避に専念しろ』

『クレイン・リーダー了解。腕の見せどころだ！』

ガイドストック少佐の指示を聞いて、各機がそれぞれの方向へと散開していった。

信哉達の航空隊が交戦を始めた頃、フリースベルグのレーダーにも待ち構える敵艦隊の全容が映し出され始めていた。

『敵艦隊捕捉！ 戦艦6、空母2、巡洋艦8、小型艦12！』

CICに移動したカイトが、下士官が読み上げる敵艦隊の内訳を把握する。

ライトブルーのレーダースクリーンには敵の艦隊が綺麗な陣形を描いて布陣する様子が映っていた。

「敵の戦力は脅威だが、我々は祖国のために生き残らなければならぬ。そのため、今回は先手を打つ」

カイトは艦長としてCICクルーに確固たる意思を示すと、隣に立つ砲雷長バンを横目で見る。

「突出した大型艦三隻に、T A S Mトマホークによる攻撃を敢行する！」  
「トマホーク攻撃用意！ 目標入力急げ！発射弾数3発！」  
カイトの後にバンが復唱し、火器管制のコンピュータを士官たちが操作する。

艦橋の更に前方の大型ミサイル発射V L Sのセルが3つ開き、鋼鉄製の開いた蓋が上へと向く。

「トマホーク攻撃準備良しッ！！」

「トマホーク、攻撃始めえ！」

ブワアアツツというオレンジ色の炎が壁のように巻き起こり、そこから3発のトマホークが尾部から炎を噴き出しながら立て続けに空へと舞い上がる。

強引に捻じ曲げられるように弧を描いて飛翔したトマホークはロケット部分を切り離して翼が出現、ジェット飛行に移り瞬く間に艦橋から見つめるリナの有視界から消え去った。

フリースベルグがミサイルを発射したのを、シエルは自艦の船首部分から見つめていた。

「始まったか・・・」

左舷前方に白煙をあげて舞い上がった巡航ミサイルは、そのまま白煙とブースターを切り離して遙か遠方へと飛び去って行く。

立ち上る白煙は開戦の狼煙のようにも見え、それを見据えたシエルの表情がいよいよ合戦場へ赴く武士のものへと変わった。

（哀れな事だ。実の妹と戦わねばならないとは・・・彼女だけではない、近衛の兵の中にも少なからず・・・）

シエルにはフリースベルグや自艦に乗り組んでいる近衛艦隊士官たちの、怒りと悲哀に満ちた心情が痛いほど理解できた。

それでも、前に進まねばならない。

邪魔になるのであれば同国人でも討ち払わねばならない。

「これが私たちの戦いなのだ。先人たちよ、こうなったことをお許

し願いたい。そして、今は彼らの勝利を願って欲しい」  
艦首にて刀の柄を掴む彼女は瞳を閉じ、世に在らずの先達たちに祈りをささげた。

「小型目標探知！ 方位340、速度470ノット、高度200  
！」

その一報はニーズヘッグの薄暗いCICにて、長時間の警戒態勢で疲れていたディアナの脳を呼び起こした。

「・・・それは幾つ？目標の特定は出来る？」

「三つです！ 目標は針路からおそらく、バーゼル提督旗下の戦艦隊の先頭と思われませう」

レーダーには三つの未確認の飛行物体が低高度かつ高速で、バーゼル提督率いる戦艦隊へと迫りつつあった。

「バーゼル提督に警告を！」

「しかし・・・」

「分かってるわ。でも、一応・・・」

「ん？ これは？ 艦長！」

その時レーダーを見はっていた士官が慌てたような声をあげる。

「どうしたの？」

「後方に新たな小型目標を捕捉。一つです」

（これはまさか・・・いえ、それならばもう遅いわね）

「ああいうのにはもう、諦めも肝心よ。それより、私たちは本来の責務を全うするだけ」

クルーの中にまぎれるニーズを見つめ、ディアナは静かに囁いた。

トマホークは命中まで二分を切っていた。

だが戦艦隊もただ自らにトマホークが命中するのを黙って見ているワケが無い。

舷側の構造物から白煙が舞い上がり、迎撃のための対空ミサイルが

打ち出された。

「艦長、敵艦隊より小型目標分離を捕捉！3発、おそらく迎撃弾です！」

「やはりか。向こうにもこちらと同等の目があるということだ」  
「ニーズヘッグの存在を確信したカイト。」

だがそれも計算済み・・・SM-3への換装だけでなく、今回のアタックに關してもだ。

「敵の迎撃弾の命中3秒前に、こちらの第一弾を自爆させる」

敵が放った迎撃弾の命中までのカウントが二ケタから一ケタになる。コンソールの前にてバンは、その時を固唾をのんで待つ。

そしてカウントが3秒となった時、パネルのボタンを彼は作戦の成功を祈りつつ押した。

まもなく迎撃弾がフレースベルグの放ったトマホークへと命中しようとした時だ。

戦闘の一発がレーダーから消え、同時に激しい電波障害が巻き起こった。

「で、電波障害だと！？ ミサイルは？」

「命中せず！迷走した模様！」

士官の間に混乱が広がる。次弾を発射しようにも、トマホークは電波障害に隠れて上手く捉えられない。

「退避しろ！退避だあッ！」

甲板でクルーが声を張り上げて味方を誘導する。

その時ふいに彼らのすぐ上空を、何かが通過した。

それは遠くから放たれた矢ようにも見え、また有翼の航空機のようにも見えた。

艦橋に命中したトマホークは、その運動エネルギーで戦艦艦橋の装甲を僅かに砕いた瞬間炸裂し、周囲に爆炎と海面に円形に広がる爆風を生み出した。

爆風で一時的に聞こえなくなった彼らの耳に、鋼鉄が軋む音が足に

振動として伝わる。

その音源は破壊された艦橋が真ん中付近から真っ二つに折れる音だった。

主砲級の直撃でも傷つけども簡単に壊れる事はないと思われていた艦橋が折れ、多くのクルーが茫然となる中、崩落した鉄の天守閣は衝撃で木甲板を巻き上げた。

艦橋が無くなつては指揮系統が無くなったも同然、更にはクルーの間には追加攻撃がもう一発来るといふ憶測まで飛び交い急ぎ海へ飛び込み脱出を始める。

瞬く間に戦艦二隻が、続いて同様にトマホークを捉えられなかった中央の一隻にも遅発の一発が命中、瞬く間に三隻が航行不能となった。

尖兵として出した戦艦三隻との連絡が取れなくなったことと遠くで見えた爆炎は、嫌でもバーゼルの脳裏に三隻が大破した事を悟らせた。

艦橋のクルーの中にはまだ必死で三隻を呼び出す通信士もいたが、いくら呼ぼうと結果は同じだ。

彼らの間に冷や汗が流れる。

極秘で建造されたフレイスベルグ級……その艦が一瞬で三隻を葬り去るほどの力があるとは、少なくともバーゼル提督とその周辺の人物には理解が及ばなかったらしい。

ダンツという音が響き、数人のクルーがビクツとなり振り向けば、バーゼルが木製の台に拳を叩きつけていた。

「ぬぬぬ、近衛の奴ら……国王の腰巾着供め！」

「提督、敵艦の対艦攻撃火力は我々想像を超えています！」

「分かつておる！だがあの女に助けを求めるのは癪だ……よし、サイレントレイスから飛び立った航空隊と連絡を取れ！」

「はっ！」

（予定では、今はもう敵の後方艦隊を撃滅して上空待機に入ってい

る頃だ。残弾のある奴を、その腰巾着供へ差し向けてくれるわ！）  
後方で米海軍を襲った友軍機に、バーゼル提督は西進して近衛艦隊  
への攻撃を命じるつもりだった。

ところが、そこで予想外の事態が発生していた。

先程から慌ただしかった通信士席が、まだ一段と騒がしさを増した。

「提督！」

「どうした！」

「超兵器サイレントレイスより入電！ 第一次攻撃隊は壊滅、貴艦  
隊への援護は不可能！」

その知らせを聞き、提督の顔色はますます悪くなる。

副官ですら数日前に余裕綽々で近衛艦隊に降伏勧告を行っていた人  
物と、今その表情に焦りしかない人物とが同一とは思えなかった。  
いや、むしろ降伏勧告を行っていた時の表情は最早浮かぶまい。

「敵艦、速力低下、航行不能に陥った模様！」

どよめきがあがり、作戦の第一陣はどうやら此方に軍配が上がった  
ようだった。

ついでに嬉しいニュースも舞い込んできた。

米艦隊の防衛に成功したと、AWACSからフレーズベルグへと入  
電があったのだ。

こちらの戦力に犠牲を殆ど出さず帝国の戦力を一方的に削いだ事は、  
戦力に憂いを抱える我が軍にとってかなり喜ばしい事だ。

「皆、よくやった。だがまだ気をぬかず、次の一手を・・・」

カイトが言いかけた途端、不審な物体の出現を露わすボーンという  
アラームとレーダーにそれが赤く表示された。

「目標、敵艦隊後方から出現。 数1、高度急激に上昇中・・・こ  
れはまさか！？」

レーダーを監視していた士官の表情が凍りつく。

数週間前に同じ光景を見た彼には、それが何であるのかという大方

の予想がついていた。

「弾道ミサイル!?!」

「なんだって!?! それじゃあ!」

「ついに現れたか、フリースベルグ級ニーズヘッグ。直ちにミサイルの軌道を計算しろ、SM-3かESSMのどちらかで対応する」  
カイトはレーダースクリーンを睨むように目を細め、周囲へと指示を出した。

## 第二十三話 南洋に鷲は悠々と（後書き）

危うくまたエスコンになりかけましたが、都合上カット（笑）です。またそろそろ描いてみても良いかもと思いつつ、今回は自粛です。

次回

飛来した弾道ミサイルの危機に見舞われる近衛艦隊。

戦場は西へと移動し、ついにガドウン湖内での砲雷戦へと発展する。

第二十四話 「同型VS同型」

5月2日追記

ユニークアクセスが1万を突破しておりました！

拙い物書きではございますが、これからも中盤へと物語は突入し、非才の身であります。読者の皆様のために頑張らせていただきたいと思います。

これからも《鋼鉄の咆哮〜海原の大鷲〜》をよろしくお願いいたします。

J I N

## 第二十四話 同型V S 同型(前書き)

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは。

どうにか五月病から抜け出したJINです。

阿蘇とかに行く機会があったので、それでどうにか気分転換出来ました(笑)

皆さんも、大自然の中でゆで卵を食べてみてはいかがでしょう(え

## 第二十四話 同型VS同型

弾道ミサイルとは、飛翔はロケット等で推力を得て加速し、最高点に達したのちに落下。

地球の大气と重力で放物線を描いて落下し、地上や海上の目標へと命中させる事を目的とする。

成層圏の遙か上空を飛行し、最高点域ではほぼ大气による減速効果は受けない。

そのため巡航ミサイルでも届かない遙か遠方の敵を、発射から十分以内で殲滅することが可能だった。

秒速数キロという音速を遙かに通り越した速度域で迫る弾頭の迎撃は、言い表せないほど難しい。

それが今、自分達の頭上に落ちてきそうなのだ。

飛翔体の飛来をフリースベルグの目が捉え、ブリッジとCICは緊迫による静寂に包まれた。

それが出現した方向はフリースベルグのほぼ真正面の遙か遠方、敵艦隊の後方からであった。

その飛翔体が友軍の物ではない事は明らかだった。

飛翔体発見から二十秒ほど経過した時だ、目標の変化をレーダーは捉えた。

「目標、二つに分離！ 飛翔体は弾道ミサイルで間違いなし！」  
「フェースト・アレイ  
一つで約120°をカバーし、フリースベルグには3つ備わるPA  
レーダー  
Rは、飛翔体が二つに分離して片方は更に上昇を始めたその一部始終を捉えた。

やはりと思うと同時に、カイトは今回の海戦がより熾烈を極める事を覚悟する。

「イルミネーターレーダー、スタンバイ」

ミサイル誘導のためのレーダーが準備完了となり、後はミサイルを

撃っただけだ。

「弾道ミサイルを迎撃する」

「弾道ミサイル迎撃、SM-3 攻撃始め。目標入力、発射弾数1発」

「目標入力良しッ！」

「SM-3 発射用意・・・撃てーッ！」

艦橋の高さに達するほどの炎壁が舞い上がり、弾道ミサイルを迎撃するために飛び出したSM-3 が雲ひとつない青空に白煙を伸ばして行く。

弾道ミサイルと同様に第一段と第二段が切り離され、それからあつという間に迎撃弾は成層圏を飛び出した。

CICクルーが当たってくれよと祈るようにレーダースクリーンを見つめ、カイトも同じ気持ちでCICの艦長席から周囲を見守る。

彼はSM-3 が外れた場合に備え、弾道ミサイルの照準がフレースベルグの周囲数十キロ圏内だった場合に備えESSMによる第二弾迎撃準備も指示した。

徐々に弾道ミサイルへと距離を詰めていくSM-3。

第三段目に点火し、先端に装着されていたノーズコーンも切り離す。慣性飛行を始めた弾道ミサイルは高度160kmを飛行し、その軌跡をフレースベルグの目は捉えて離さない。

命中まで30秒・・・第三弾目と弾道ミサイルへと命中させ破壊するキネティック弾頭が分離した。

上下左右の様々な方向にブースターを噴射し、正確に命中させるための最終微調整を弾頭が行う。

果てない大空に高速で飛行する物体に物体をぶつけるとするのは、まさに僅かな狂いも許されない命がけの綱渡り。

「スタンバイ・・・マーク・インターセプト！」

クルーが着弾の瞬間が来た事を告げる。

弾道ミサイルは・・・まだレーダーに映っている！？

「外れたか！？」

バンが思わず歯ぎしりが響きそうになるほど、口を噛みしめる。

「いや・・・待て！」

弾道ミサイルを示す表示が点滅を数回繰り返し、カイトの視線の先でそれはやがて画面から消失した。

「・・・ターゲット・デストロイ、目標を撃墜！」

その瞬間その場にいた全員が手を叩き、迎撃成功に安堵の笑みを浮かべた。

だがそれは単に相手の攻撃を防いだけだに過ぎない。

前進すれば弾道ミサイルの特性上、射程内ではあるが命中精度は複雑に吹き荒れる大気の影響で格段に悪くなる

「艦橋、CIC。長官、このままの前進を進言します。そうすれば少なくとも、弾道ミサイルの脅威からは逃れることができます」

『うむ、許可する。艦長、任せたぞ』

「はっ。機関両舷原速前進、針路010」

原子炉から供給されたパワーを受け取り、スクリューがより高速に回転する。

後方から接近していた艦との合流も済み、全艦が増速し敵艦隊へと向かう。

「旗艦フレイスベルグより本艦旗下の全艦へ、これより展開を開始する」

カイトの号令と共に艦隊の各艦が左右へと海上を航行しながら広がる。

中央を往くフレイスベルグの左舷には近衛艦隊本隊のシウルツ率いるウンディーネとシエルドハーフェンの近衛艦隊群が、右舷にはブローズグ・ホーヴィと米海軍空母アトランティスを筆頭とする空母打撃群が展開する。

展開してようやく陣形が整った時、敵にもようやく動きがあった。

「敵中型艦および小型艦、八隻、12時方向、距離52,000（ヤード）、こちらへ来ます！」

「2時方向、未確認飛行物体多数、敵の航空機です！」  
リーダーに映ったのは敵の第二次攻撃部隊。

おそらく巡洋艦と駆逐艦クラスの水雷攻撃部隊と、航空機は対艦攻撃を仕掛けてくるに違いない。

更に距離が縮まる。およそ三十キロくらいまで接近したその時・・・それに真つ先に攻撃を仕掛けたのは、シエルドハーフェンとブローグ・ホーヴィの二隻の姉妹艦だった。

シエルドハーフェンの46cm砲とブローグ・ホーヴィの50・8cm砲が重低音を艦体に響かせながら前方の砲塔を回転させ、僅かに艦首より傾いたところで固定。

目視ではなくレーダーから算出し計算した角度まで仰角を上げ、ジリリリという主砲斉射の合図のベルが鳴り響く。

「撃ち方始め！」

「撃てーッ！！」

ズズウウンツ！！ズズウウンツ！！

艦長の号令と共に山吹色の爆風が海面をベコツとへこませ、爆音が艦体をビリビリと振動させる。

耳栓代わりのインカムを付けていたブロード艦長は、主砲の着弾点付近であたふたする敵艦を双眼鏡で凝視する。

その上空から、キラリと光る砲弾が一直線に敵艦へと飛び込んで行った。

重さ1トン以上の重量がある主砲弾、ブローグ・ホーヴィのに至っては一発2トン近くある。

それが音速の二倍程の超高速でぶつかつたのでは、その運動エネルギーは言葉では言い表せないほどの破壊力になる。

バーゼル旗下の12cm砲を主砲とする駆逐艦の一隻は、飛び込んできたシエルドハーフェンの主砲弾に艦橋を叩き折られた。

その左舷約200mを航行していた主砲と魚雷を多数持つ巡洋艦に二隻に、シエルドハーフェンより低角度で放たれたブローグ・ホーヴィの主砲弾が飛び込む。

僅かに離れた場所にそれは着弾し、衝撃で数十メートルの白く高い水柱を噴き上げた。

舷側の銃座で構えていたクルー達は、一瞬ブローズグ・ホーヴィの攻撃が外れたと思った。

しかし海中に潜り込んだ主砲弾は、魚雷以上のスピードで巡洋艦の左舷の喫水線以下の舷側に命中し高い水中を巻き上げた。

衝撃で銃座に居たクルー達は真後ろに吹き飛ばされ、艦体には致命傷の長い亀裂が付けられた。

「駆逐艦と巡洋艦二隻に命中！」

「艦橋大破に舷側に命中か・・・おそらく持つまい」

ブローズグ・ホーヴィのアンデルセン艦長は双眼鏡の先の敵艦隊を憐れむような表情で見つめる。

「アンデルセン艦長、航空隊の第二陣がドック内で準備完了との事です。主砲の発射はこれより十五分、不可能になります。」

「了解。ストラト・アイはそのまま上空待機、米海軍の救援へ向けた第一陣は第二陣と入れ替わりに着艦、補給後再度出撃だ」

アンデルセン艦長が指示を出す傍ら、シエルドハーフェンの猛攻は続く。

瞬く間に九時方向から寄ってきた敵艦群に主砲を放ち、アリの子を散らすように散開する敵艦隊。

「目標位置、8度51分32秒22ノース、79度31分57秒13ウエスト。」

「ハーブーン発射準備よし！」

「一番発射用意・・・撃てーッ！」

避けきれずに命中し傾斜していく艦から遠ざかる敵艦に、フリースベルグのAGSやハーブーン対艦ミサイルによる追い討ちが加わる。すると、末期の一発とでも言うかのように傾斜する敵艦から魚雷が放たれた。

フリースベルグが巧みな回避行動とデコイで魚雷の脅威から完全にのがれた時には、既に敵艦の姿は海上には無かった。

「提督、既に我が艦隊の半数が沈没ないし大破した模様です」

「ぬぬぬ・・・全てサイレントレイスの航空機が壊滅したのが原因だ。あれさえなければ、今頃は！」

ワナワナと体を震わせながら、怒り心頭のバーゼル提督は自身の展開方法に間違いは無かった事を釈明しつつ水平線の向こうを見つめる。

「提督！ ニーズヘッグが航行を開始、本艦隊の前方へと出ます！」  
「何だと！？ 通信開け！ あの女、何を考えている！？」

提督の重たい図体が通信士の元へと迫り、彼は通信士から通信機をひったくるように掴む。

「アズナヴール！ 一体何を考えている！ 貴様艦隊行動を乱す気か！？」

『いいえ、我々はウィルキア帝国親衛艦隊としての任務があります。よつてもとから提督とは別の指揮に従って行動しています。』

「何だ帝国親衛艦隊とは！？ 聞いたことないわ、そんな艦隊！」  
『我々には任務がありますのでこれで』

ブツツという一方的に通信は切断され、提督は怒号で呼び掛けるもディアナからの反応は全くなかった。

「この艦隊で、この提督の命令を拒む事は許さん！ こうなれば撃沈も辞さんぞ！」

「し、しかし提督！」  
突拍子もない提督の命令を聞きクルーの間に動揺が広がる。

その時、通信士は再びニーズヘッグからの通信が入った事に気付いた。

「提督！ 再びニーズヘッグからです・・・ん？ この通信は、中継されています」

「貸せッ！」  
先程よりも乱暴に奪うように通信機を受け取った提督。

「貴様！ このバーゼルの命令が聞けんと言つのか！？」  
通信士が中継されていると言つたにも関わらず、相手は当然ディアナだろうとバーゼルは考えていた。

しかし当然、その相手はディアナでは無かった。

『誰に物を言っておるつもりだ？バーゼル？ 私はブラン・ハイレット、海軍大将である』

「んなつ、は、ハイレット大将！！？」

『貴様の醜態はアズナヴールの乗る艦から逐一知らされておる。』

「し、しかし大将閣下……この失態は、サイレントレイスの航空隊の壊滅が引き金となり……」

『たかが戦術の一つが失敗しただけで、貴様の戦略は塵芥と成り果てるのか？』

しわがれた声にバーゼルの精神を問い詰める凄みが増す。

「も、申し訳ございません。か、返す言葉も……」

『まあ良い。私もヴァイセンベルガー閣下も、たった一回の失敗で貴官を処断する程心は狭くない。ガドウン湖内からキューバ沖の好きな所まで進め。我々の許可あるまで、そこから退却することは許さん。良いな？』

「ははっ、御命令のとおりに致します！ あ、いえ、しかし閣下……敵艦隊の進撃は早く、キューバ沖に出るまでに攻撃を受ける可能性が……」

『心配するな。そのためにアズナヴールを向かわせた……殿は貴艦隊の誰よりも上手く務めてくれる』

ディアナの時と同様、唐突に無線が切られる。

怒りと羞恥心、そして軍人として死に場所を定められたという絶望感など複雑な心情が入り乱れる中、提督は反転とキューバ沖までの航行を指示した。

その様子をフレイスベルグの水平レーダーが捉えた。

「敵艦多数、撤退していきます！」

「勝ったの……ですか？」

リナが水平の向こうまだ見えぬ敵艦隊が撤退している様子をレーダ

ーで知り、艦橋の長官と顔を見合わせて思わずそう呟いた。クルーの中には勝利を確信した者までいた。

だが、最後の伏兵がその時レーダーに捉えられた。

『未確認飛行物体！これは・・・砲弾です！』

カイトは咄嗟にその砲弾の迎撃を命じようとしたが、それよりも早くブローズグ・ホーヴィの艦橋の根元に爆炎が舞い上がった。

「ブローズグ・ホーヴィに着弾！」

「どこからの攻撃だ！？」

バンがレーダーを凝視するが、発射点となりそうな地上砲台や海上に艦の姿は見えない。

「小型空中目標、二つ出現！」

「E S M探知！対艦ミサイルです！目標は両方ともブローズグ・ホーヴィ！」

「・・・まさか！ R A M、57mm砲で迎撃！」

艦首から白煙を横方向に噴射し小型対空ミサイルのR A Mがミサイルへと向かい、艦首の57mm砲が目標至近空中で爆散する砲弾を連射する。

立て続けに二つの火球が海上低空で膨れ上がり、黒煙が舞い上がった。

「迎撃成功！」

「一体どこから！？ まさかレーダーに映らない超兵器か！？」  
バンが必死にレーダーで何か映っていないかを探す。

友軍艦隊の他には帰還体制に入っていた友軍機の姿が付近にあるだけで、対艦ミサイルが出現した付近の海上空中には光点の欠片も無い。

ただ一人、カイトはその攻撃が何であるのかをいち早く悟った。

艦橋へと連絡するため彼は艦内放送の受話機を飛び出すように掴んだ。

「艦橋！ニーズヘッグだ！ レーダーでは捉えられない、そちらの目視で確認できないか？」

カイトは艦橋へと連絡し、ステルス艦二スヘッグの目視による発見を期待する。

『ネガティブ、こちらでは発見できません。それどころか、海域の天候悪化・・・西から濃霧が押し寄せてきます。』

「何だと？ レーダーに映らないのに、目でも探せないのか!？」  
バンが思わず落胆した、レーダーでも実際の目でも確認できない相手にどうやって挑むのか・・・。

大西洋方面で発生した低気圧により湿気が多くなった大気がパナマへと流れ込み、北からの冷たい海流と反応して濃霧を生み出していた。

今、それがカイト達の視界から二スヘッグを覆う迷彩服となっているのだ。

「こうなつては目視での砲撃も無理か・・・総員、対空警戒を厳と成せ！友軍艦艇に向かう砲弾、ミサイルは全弾叩き落とせ！副砲、短SAM攻撃に備え！」

「了解です、艦長！」

幸いにもブローズグ・ホーヴィの装甲は厚い。

先程のAGS砲撃も艦橋に傷を付けただけで、大事には至っていないようだ。

それは上空を飛びまわり、今はその艦が母艦となっている信哉にも分かつていた。

燃料も半分を切り残弾数も残り少ない中そろそろ着陸の許可が欲しいところだが、状況が状況なだけになかなかそうはいかない。

『どうしたチャッター？ 母艦なら大丈夫だ、被害も大したことはない』

「ああ、分かってる」

左に旋回しながら左舷に巨体を呈するブローズグ・ホーヴィの上空を飛びまわりながら、信哉はふと一昨日見かけた士官らしき少女を思い出した。

士官にしては若造と揶揄される自分よりもはるかに若く、軍務に就

く身としては可憐な少女。

被害は大したことないし、今のところ砲塔付近にいたクルーに怪我人が出たというくらいで死者が出たという報告はAWACSも確認して無い。

(多分、あの子は大丈夫だろう・・・)

あの少女の身を案じながら、ふと信哉がブローズグ・ホーヴィのずつと前方に目を向けた時、彼は思わず目を見開いた。

群青近い色の海に数本の白線が引かれていくように、何か海中を進んでいく・・・魚雷だ！

「ストラト・アイ！こちらチャッター！母艦の前方2キロに魚雷が2・・・3・・・4本だ！ターンしながら進んでいく！」

「なんだと！？どっちに行っている？」

「母艦の針路に対してほぼ垂直に横切る・・・その先には！」

信哉が魚雷を追う目線の先に、今まさに霧の中に突入せんとするフレースベルグの姿があった。

『CIC、ソーナー！魚雷です！4本、三時方向からまっすぐ来ます！距離3300！』

「魚雷？なぜこちらの位置が？」

「・・・陣形だ」

「え？」

「敵はおそらく陣形から本艦の位置を割り出して、コース入力で魚雷を撃つたんだ。取舵一杯、魚雷と平行になるように針路を変えよ！」

大きく右へ傾きフレースベルグは左へと回頭、魚雷を回避できる体勢に入った。

距離が詰まる・・・その時カイトは向かってくる魚雷が、自分たちが普段使う物より僅かに遅い事に気付いた。

「全速前進！魚雷が炸裂する！」

カイトの咄嗟の指示に急加速したフレースベルグ。

魚雷が後方へとすり抜けてほんの数秒後、四つの白い水中が炸裂音と共に巻き起こった。

押し上げられた水流でフリースベルグも鋼鉄の艦体を軋ませながらも、何とかダメージを負わずに攻撃を凌いだ。

『ふう……危なかった。しかし艦長、なぜ魚雷が爆発すると？』

「そうだな……私が魚雷を撃つてたとしても、同じ事をしていたという事だ。ソナー、魚雷発射ポイントの特定は出来ないか？」  
カイトは艦橋のリナに質問を返しつつ、気を新たに攻撃への糸口を見つけ出そうと模索する。

『先刻の戦闘の沈没艦の気泡が付近で発生中、水質の状況も悪いです……最低でも目標に20マイル以内には接近する必要があると思われませう』

「了解した。目が役に立たない以上、耳が頼りだ……引き続き警戒を」

『了解しました』

レーダーも役に立たない上に霧が出ているのであれば、ソナーで敵艦の位置を察知する以外に方法はない。

砲撃など遠距離から攻撃をすることが主流だった近年の海戦で稀に見る、高性能艦同士の間撃戦が展開されるだろう。

『魚雷、全弾爆発しました……しかし、爆発の音波が一部何かに阻まれています。おそらくフリースベルグかと……』

「回避されたってことね……良いわ、一筋縄じゃ行かない相手っていう事くらいは分かってる。今の攻撃でどうにかならたら、こっちが拍子抜けよ」

振り出しに戻った状況にもかかわらず、ディアナは落ち着いていた。それどころか、むしろ周りのクルーには彼女がこの海戦を楽しんでいるようにも見えた。

「機関、前進微速。音を絞るわ……向こうは必死にこちらを探す、

その隙を突く。艦首魚雷発射管、全門発射！」  
二ーズヘッグの艦首から6発の魚雷が白い気泡の尾を曳きながら水中に弾き出された。

「本艦以外の艦は濃霧の海域外に待機せよ。」

カイトは視界が悪くなる海域への自艦以外の進入を拒んだ。  
理由はそのほうが二ーズヘッグの攻撃に、シエルドハーフェンなどの他艦が攻撃に晒されないからである。

単艦突撃とは猪武者のようで聞こえは悪いが、向こうも単艦であると予測される以上これはむしろリーダー同士の一騎討ちだ。

『こちらソナー！ 魚雷音聴知！距離6800、針路310から130へ、目標はシエルドハーフェンです！』

「言っている傍からかよ！」

「艦首魚雷発射管、マイクロフィッシュ発射！」

カイトがフリースベルグに装備されている対魚雷用の小型魚雷“マイクロフィッシュ”の発射を命じ、艦首方向に飛び出したマイクロフィッシュは軌道を変えて魚雷が迫りくる方向へと針路を変える。

『あと5秒……命中！』

ソナーの耳にマイクロフィッシュの音と魚雷音がクロスしたのを聞きとった瞬間、フリースベルグの左舷遠方で大きな水中が立て続けに起こった。

水中は濃霧に包まれているフリースベルグからは見えないが、標的にされていたシエルドハーフェンからはハッキリと見えた。

『魚雷、全弾迎撃しました！』

「よし、この調子で迎撃態勢を崩すな！」

『か、艦長！また魚雷です！ 今度は針路310から……コースを変え……目標は……？』

「どうした、ソナー！？あらたな魚雷はどっちに向かっている？」

『魚雷の目標は本艦です！ 距離5400！』  
今度はフリースベルグに第二波となる雷撃が迫る。

しかし今度はやけに距離が開き過ぎている・・・これなら余裕で回避が間に合う。

だが余裕をかましていると先程のように狙って自爆させるタイプなら、その余裕もあつて無いような物だ。

この魚雷は同様に急ぎ回避する必要がある。

「面舵20、針路020に向ける。このまま二ーズヘッグの後方を取る。ソーナー、まだ探知は出来ないか？」

『おそらく二ーズヘッグはかなりの微速航行をしている模様です。

魚雷探知のポイントから、大まかな位置は特定できますが・・・』

フレースベルグが魚雷をなんなく回避し、カイトが二ーズヘッグを先制する次なる手を考えていた。

おそらくどつちが先に倒れるかの熾烈な雷撃戦になるやもしれない・・・彼の胸中に不安が募る。

その時、今度はレーダーに反応が現れた。

「レーダーにコンタクト！小型の目標、本艦に近づく・・・本艦到達まであと20秒」

「ミサイルか？なぜ気付かなかった!？」

「かなりの低高度です・・・ですが目標の針路は僅かに本艦から反れます」

レーダーの針路計算では対艦ミサイルらしき目標の針路は、フレースベルグの後方約100mを通過する軌道らしい。

ここは無暗にチャフを放つと、逆に本艦の場所を悟られかねない。

このままやり過ぎそう・・・カイトがそう考えたその時、敵の電子支援装置の作動を監視するクルーは凍りついた。

ほんのわずか数秒前までなにも無かった画面上に、敵のESM（電子支援装置）の反応を示す表示が出た。

「イ、ESM探知！ 目標は対艦ミサイルです！」

「落ちつけ、本艦はステルス艦だ！ 敵の対艦ミサイルのESMでも捉えられない筈！」

近くにいたバンが彼に良い放つ、しかしそのバンもその向いた方向

で同じように凍りついた。

ミサイルが針路を変える・・・フレースベルグの土手っ腹その方向へと!!!

（何故だ!? ステルス艦にレーダー波での追尾は不可能な筈・・・）

しかし彼の目の前のレーダースクリーンは、その不可能を現実として映し出している。

バンは途端に頭が真っ白になった。

敵のレーダー波に捉えられた事はミサイルの針路から確かだった。

ならばカイトが取るべき手段はただ一つ・・・それを迎撃せねばなるまい!

しかし既にカウントダウンは一桁、それも“5”となっている。

（RAMも57mm砲もチャフも間に合わない!）

「・・・駄目か!？」

覚悟を決め、激しく毒づくカイトが全艦放送へ繋ぐ。

「総員、着弾の衝撃に備え!」

「着弾!!!」

顔面蒼白のクルーがそう告げた刹那、大地震にも匹敵する激震が艦橋やCICを揺さぶった。

遠方のシールドハーフェンからも、濃い霧の中で煌めいた火球が見て取れた。

「まさか・・・フレース!!!」

この時ばかりはシエルも落ち着きなど無く、防空指揮所からフレースの元へと飛び出して行った。

ミサイルの反応が消えると同時に、ECCMである程度まで凌いでいたECCM妨害電波が消えたのを、ディアナはレーダー上で確認した。

『艦橋、CIC。着弾地点にコンタクト・・・ステルス能力を喪失

したフレースベルグでしょう。おそらく、かなりのダメージです」  
「フレースベルグECMの沈黙を、こちらでも確認しているわ。．．  
・とどめを刺すわ」

『了解。ハーブーン第二弾発射準備、目標フレースベルグ!』  
(残念だわ．．．トライトン中佐、もう少し粘ると思っていました  
けど．．．)

着々とフレースベルグに致命傷を負わせる準備が整う中、ディアナ  
だけは浮かない表情をしていた。

体のあちこちが痛い．．．だがどうやら全身どうにか動く。

衝撃で倒れていたカイトが起き上がると、他のクルー達も対シヨック  
姿勢から起き上がっているところだった。

「く．．．各区、被害を報告せよ!」

生きている艦内放送で全体に被害の状況を集めさせる。

「左舷中央、対艦ミサイル発射管付近に着弾した模様です。同区で  
火災発生中!」

「艦長、ECM装置破損です!それにこの被害では、ニーズヘッグ  
に本艦の位置がレーダー探知されます!」

「それは分かっている、火災の消火作業急げ!RAMと57mm砲  
は!?!」

「左舷前方RAMはイルミネーターの破損、それ以外は全て無事で  
す」

ECMがやられた事は痛い、それにもまして痛いのはステルス効  
果のある装甲が剥がされたことだ。

「レーダーコンタクト、対艦ミサイルです艦長!」

「ぐっ．．．このままではただの良的だ! RAM発射!」

カイトは必死にこの状況を打開する方法を見つけ出そうと必死にな  
る。

だが相手の位置もつかめずAGS砲撃は不可、雷撃戦に持ち込もう  
にもこれ以上距離を詰めると対艦ミサイルの飽和攻撃を食らうリス

クが現地点より格段に高くなる。

オマケに左舷対艦ミサイル発射管は使用不可。

そしてここぞとばかりにニアズヘッグから対艦ミサイルが飛来する。  
まさに万事休すと思われた・・・。

## 第二十四話 同型VS同型(後書き)

本当に話を長くしてしまう癖がありまして・・・

今回もそうですけど、本当は最後の戦闘終了までをこの一話に収めるつもりでしたが・・・都合により飛び出してしまうましたorz

自分ほだいたいメモ帳で書いておりました、だいたい20kbくらいが一話程度の長さかなと考えています(まあ過去にはゴニョゴニョゴニョ・・・)

感想やご意見をお待ちしています。

## 第二十五話「その名は解放軍」

## 第二十五話 その名は解放軍（前書き）

俺を起こさないでくれ、死ぬほど疲れている

自分でも驚きの速さでの更新・・・こんな初投稿辺り以来だと思  
います。

もちろん、前話をアップした時に既に半分以上が出来上がっていた  
という理由があるのですが・・・。

## 第二十五話 その名は解放軍

「フレース！フレース！！しっかりしろ！」

もうもうと艦体から黒煙が上がる中、シエルは艦橋後部のAGS付近で血まみれで倒れているフレースを発見した。

抱きかかえると苦痛で身悶えするフレースの口からは血雫がこぼれおちた。

「ね・・・シエル・・・姉さま？ 私・・・もう・・・」

フレースの苦痛にうめく表情が痛々しい上に、火災は自動消火装置で間に合うくらい物ではない。

『対艦ミサイル、第二波接近！ 着弾まで20秒！』

『RAM、発射！』

現れた第二波を迎撃するため、白煙と閃光が巻き起こり矢が放たれる。

そして着弾まで15秒と迫った時、遠方で爆炎が散り、遅れる事数秒後に雷鳴のような轟音が鳴り響く。

「フレース・・・人間たちはまだ諦めていない。なのに、お前が先に諦めてどうする！」

シエルがフレースを叱咤し、彼女に希望を持ってと促す。

『対艦ミサイル、第三波！ その数4！ 着弾まで30秒を切りました！』

『飽和攻撃を狙うつもりか・・・RAM発射用意！』

だが現在稼働しているRAMだけでは残り2発を防げない。57m砲の迎撃能力もRAMには劣る、いよいよもってこの攻撃でやられるのか・・・！

不吉な予感がカイト達の脳裏をよぎる。

「艦長、命中まであと20秒です」

クルーの言葉も聞こえないように、ディアナはレーダーに映るフレ

「イスベルグと自分たちが放ったミサイルの行方を凝視する。だがそのレーダーに新たな目標が出現した。

小型の高速飛行目標が二つ、フリースベルグとニーズヘッグを結んだ延長線上に出現した。

それはそのままフリースベルグを通過し、ニーズヘッグが放ったハーブーンへと命中し爆散した。

「・・・今のは？」

「艦長！水上に新たな目標！ウィルキア海軍のデータベースに照合しましたが、該当する艦なし・・・ですがその艦がミサイルでこちらの対艦ミサイルを迎撃しました！」

「不明艦速度32ノット、レーダー反応の大きさから駆逐艦クラスと思われるです」

「敵のDDG（ミサイル駆逐艦）？でもこっちの位置はつかめていない筈・・・最優先目標フリースベルグへの攻撃を続行しなさい！」

「イエス、ママ！ハーブーン第四波、攻撃用意！目標フリースベルグ、発射弾数4発！」

ニーズヘッグ砲雷長が対艦ミサイルの照準を再度フリースベルグへと定める。

装甲の一部が破壊されたフリースベルグは、ステルス能力が大きく減少しニーズヘッグのレーダーで十分捉えられてしまっている。

大まかな位置が分かれば良い・・・あとはその大体の位置まで接近したハーブーンが電波でフリースベルグの急所を見つけ出す。

最初の一撃を加える時点で、ディアナはステルス艦であるフリースベルグの位置を特定する事は最初から諦めていた。

ではどうすれば良いか 答えは単純。

嫌でもその位置に来るように仕向け、その位置にミサイルを撃ち込んでやればそれで良いのだ。

ハーブーン直撃前に放たれた二段階の魚雷が、ディアナの仕組んだ罠だった。

だがその魚雷に誘導された事に気付いたところで、今更もう遅い。

「アズナヴァール艦長！」

「何？」

「軍本部より入電です・・・不明艦の情報に関する事だそうです」  
クルーから差し出された受話機をディアナが受け取るうとした時、  
雷鳴のような爆音が上空を通り過ぎて行った。

「敵機接近！本艦の真上を通過しました！」

そのとき甲板で周囲を警戒していたクルーが上空から接近する戦闘機を発見した。

「見つけた！こちらチャッター、敵ステルス艦を発見した！」

F-22NATFを駆る信哉は通り過ぎた眼下を再び見つめるが、  
一瞬見えた青灰の艦体は濃霧の中に隠れてもどこにも見えない。

「ストラト・アイ了解。お前の周辺だな・・・だが大まかな位置し  
かわからん。それから、フレイスベルグにはきんぼうが支援体勢  
に入った」

「了解、しばらくは安心だな・・・」

『何を言っている、この状況で安心などできるか！』

「そうだなって、言ってるそばからか！？」

信哉の耳にもそして彼の通信を聴いているガイドストック少佐の耳  
にも、信哉機のコクピットに響くミサイルアラートがハッキリと聞  
こえた。

ニーズヘッグが放った小型対空ミサイルRAMが信哉機の熱源反応  
を追いかける。

「・・・仕方ない！」

やむを得ず信哉は高熱を発する金属体フレアを後方にまき散らし、  
RAMの追尾を攪乱する。

追うべき対象をフレアの影響で見失ったRAMは、そのまま空中を  
迷走し、やがて爆発した。

『チャッター！そこは危険だ！ニーズヘッグには赤外線追尾のRA

Mがある・・・ステルス機でも極度な接近は困難だ！」

「だが、それはフレースベルグを見捨てる事になる！」

「一体何を考えているんだ？ チャッター、何を・・・ん？ 複合周波チャンネル、誰が？」

ガイドストック少佐が言いかけた時、彼は複合周波チャンネルの通信が入っている事を発見した。

その通信相手にガイドストック少佐は一時茫然となった。

「こ、こちらストラト・アイ！ 敵艦ニーズヘッグから通信だ！ 今、全艦および全機に中継する！」

ザザツという雑音の後に聞こえてきたのは、凜としつつ威圧を含んだような女性の声だった。

「ニーズヘッグ艦長、ディアナ・アズナヴールです。解放軍を語る反乱軍につき従う、日本軍の全兵士に勧告します。」

彼女が通信を宛てたのはカイトら近衛艦隊ではなく、信哉やきんぼうのクルーら日本軍の兵たち宛てであった。

「現在日本国は、そこにいる反乱軍ではなく我々と共にあります。」

貴方がたも国へ忠誠を誓った筈・・・今からでも遅くありませんし、我々に加勢するよう要請するつもりもありません。速やかに、

我々の管理下の軍港へと入港し、補給後祖国へと帰国されたし！」

きつと我々の仲を裂くつもりなのだろう、ディアナはそういう策略面でも秀でた才能がある。

仮に彼らが離反するとして、加勢せよと言わない辺りが、今まで共に行動した我々近衛艦隊への罪悪感を減らす一助になっている。

「ディアナ！？ まさか、艦長！」

「そつだ・・・副長。ニーズヘッグの艦長は、アズナヴールなんだ・・・」

士官学校の同級生であったディアナが敵対する艦の艦長とカイトから聞き、リナは驚愕する。

ディアナの通信を聞いて、きんぼうクルー達の間で動揺が走る。

離反するつもりは無いが、それをどう答えれば良いのかわからない。もし下手に答えようなら、ディアナにまんまと出し抜かれかねない。その時、スピーカーから幸樹たちと同じ日本人である信哉の声が聞こえてきた。

『悪いがそれはできないな、美声の艦長さん』

航空機の雑音等で詳細は分からないが、どうやら信哉は笑いを浮かべているようだ。

『何故ですか？ 国家への忠誠を、裏切るのですか？』

『いや違うな。忠誠を尽くしているからこそ、アンタ達と敵対する。聞いたぜ・・・頼みもしないのに人の国勝手に乗っ取りやがって・・・俺とアンタら、どっちが不忠者だ？』

『ですが、それは国を動かす政府というシステムが変化したに過ぎません。日本国は、今も変わらず存在する・・・違いますか？』

『違う！ 今の日本は、僕らが国のために尽くすと誓った国では無い。その国を取り戻す・・・そのために、僕らはここにいる！』

今度は幸樹が信哉を助けんと割って入ってきた。

『では、あなた方が忠誠を尽くすに足る国とは何ですか？ 綺麗な土地か、勤勉で活発な人々か・・・しかしそのいずれとも、離別しているのは明白です。あなた方の行動理念に私は疑問を抱かざるを得ません』

『そ、それはっ・・・!!』

『そろそろ時間です。勧告した内容の受諾か拒否かを、日本軍の代表者にお答えいただきたい。言うまでも無いと思いますが、拒否の場合は・・・』

すると火災の影響で煙が一部入り込みだしたCICの中で、バンはカイトが覚悟を決めた表情でマイクを掴んだのを見た。

そして目が合うと、カイトはバンに全艦放送と通信へと割り込みと指示を出す。

「こちらフレイスベルグ艦長、カイト・トライトンだ。アズナヴァー艦長へ告ぐ、貴官の誤りを訂正したい」

『誤り？ 何でしょう、トライトン艦長』

数年ぶりに彼女に名前を呼ばれた、おそらく士官学校を卒業し三年前の大演習以来だろうか……

だが、久しぶりの会話がシリアスに満ちたものであるというのが残念だ。

挨拶も省略してカイトは本題へと突入する。

「彼らは、国を守っている。そして我々も、ウィルキアを守っている」

『仰る意味が、理解しかねますが……？』

「国とはある限定された土地に存在する全て……それも人や建物等の具体的な物体だけではなく、法や文化や風習、倫理観や思想という無形物の総集合体……それが国だ。我々軍人は、そのどれか一つにも叛く事は許されない……アズナヴァール艦長、お分かりか？」

アズナヴァールが黙り込んだ……カイトが一呼吸をおいて、さらに続ける。

「あなた方は政府首脳よりももっと重大な、国のあるべき道に叛いた。反逆者は、貴方がただ」

「それは綺麗ごと、詭弁です！」

その時声を荒げたディアナの声が飛び込んできた。

「国を想うからこそ、血が滴っても変革が必要なんです！ トライトン艦長……貴方ぐらいなら、分かっているでしょう！？ 国民や私たちが抱える不安を、的確かつ論理的に將軍は答えてくださり、その解決もしてくださいと……確かに血はこれからも流れるでしょう。しかし最後には……最後には必ずッ！！」

ディアナが泣いている……表じゃなく、心で……。

なぜ分らないの、分かってくれないの！ そう必死に訴えかけられているようだった。

きつと將軍とはヴァイセンベルガーの事なのだろう。

そしてカイトは彼女が彼に与した理由が、なんとなく理解できる気

がした。

だがそれは到底、自分には受け入れる事ができない。腹をくくり、カイトはマイクの送話スイッチを入れた。

「・・・アズナヴール艦長、矛盾に気がつかないだろうか？」

『矛盾？』

「そう、矛盾だ。貴方が大国に影響を受ける祖国を憂うのは、私も同じだ。しかし間違つてはならない・・・国を興隆させるために、貴方はヴァイセンベルガーに自身の忠を売った。国を裏切り、個人に忠誠を誓つたんだ！」

『まるで他人事のように・・・トライトン艦長、あなただつて今は我々に従う国民から見れば売国奴、敵なのですよ？ その理論なら、貴方だつて国を裏切つたことになる！』

「いや違う。我々の行動理念は今も昔も変わらない、ウイルキアに存在する全てに忠誠を尽くしている。だが今、そのウイルキアを内部から脅かす存在が現れた！ならばそれを敵と認め、あらゆる手段をもって排除する・・・それが我々の国への忠義だ。やむを得ず国を離れたのは、その排除手段の一つに過ぎない。これも詭弁と思つたら、最後に一つ決定的な違いをお伝えする」

カイトの放送を聞く艦橋のリナは実感していた。

今、この艦だけでなく行動を共にする全ての兵士たちの心がまとまっている。

そして、自分も・・・

「なかなか良い事を言うな、あの艦長。まあついて行くに値すると思つたから、ここに居るわけで・・・」

『今度は一人でお喋りか？ 楽しそうだなチャッター』

「やべッ！？ 通信スイッチ入れたまんまだった」

『安心しろ、向こうには繋いでいない。俺には丸聞こえだつたがな』

信哉が勘弁してくれよと呆れていた時だ、コクピット内にビューウという特有の電子音が鳴り響いた。

それが何だと考える前に、その音は瞬時に消え去った。ところが信哉はその音に聞き覚えはあった。

（IRST（赤外線追尾装置）が反応した？ 何でだ？）

操縦桿を引き起こし反転させた機体を、もう一度反応が現れた場所へと持っていく。

だがその時、突如ミサイルアラートが鳴り響いた。

接近を警戒してニアズヘッグが信哉機へRAMを放ったのだ。

「畜生！そう簡単に接近させてはくれないか！」

「当たり前だ！逃げろ！」

「・・・だったらコイツはどうだ！」

信哉はロールさせた機体からフレアを全放出する。

しかし連続で放たれたミサイルの二発目はまだ信哉機をとらえ続けている。

「何をやっている！？ 直進したままフレアを出しても、効果は薄

い！ 反転か上昇するんだ！」

「・・・そうか、わかった！」

信哉の視界にニアズヘッグの巨体が見え信哉はIRSTが作動したワケを理解した。

しかしその瞬間、自機の左側に白く細長い物体が高速で飛び込んだ。ズンツという左からの衝撃の影響で、信哉は頭をキャノピーに打ち付けた。

「ぐぐつ・・・食らった！」

ヘルメットをしていたが、それでも痛みが頭の芯に響いてくるようだ。

「チャッター！どうした！？ 応答しろ！ 何処をやられた！？」

ガイドストック少佐が必死に呼びかける中、信哉はデジタル化された計器盤などを一瞥して被害を把握した。

「ちっ、第一エンジン推力喪失・・・左翼の一部油圧系統もダウン、

左水平尾翼も脱落した。それよりストラト・アイ、わかったぞ！」

「何がだ？」

「IRSTが反応したのは、ニーズヘッグのミサイル発射機付近だ！」

「なに・・・？　そうか・・・内部に格納するタイプの発射機は風に晒されない分、熱が発射機室内部にこもりやすい。増してや、あんなに連射した後ならば・・・！」

「ああ、だが反応はすぐに消えちまった。　サイドワインダーも誘導出来そうにないくらいの反応だったが・・・」

「そうか・・・！　でかしたチャッター！　なんとか出来るかもしれん、後は任せろ！　それよりお前は、友軍艦艇の付近でベイルアウトしろ！」

新発見を喜ぶより少佐は信哉の身を案じ、ベイルアウトを指示した。しかし彼に聞こえてきたのは、やや自嘲気味に聞こえる感情のこもっていない笑い声だった。

「・・・ハハハッ、そうしたいのは山々なんだ。ところが、電気系統に一部にトラブル、脱出出来そうにない・・・ホント、ツイテナいよな俺」

「何だつて！？　それじゃあ！」

「大丈夫だ・・・こうなりや、なんとか降りてみるさ」

信哉はそう言いながら機首を黒煙を吐く機体を母艦であるブローズグホーヴィの方へと向ける。

「・・・はあ、わかった。　そればかりはお前を信じる以外なさそうだ。ブローズグホーヴィC A T C C、チャッターが機体にダメージ！　緊急着艦の用意を頼む！」

「ブローズグホーヴィC A T C C、緊急着艦用意をする。　しばらく待て」

「頼む、出来るだけ早くしてくれ・・・十五分と持ちそうにない！　祈るような気持ちで少佐は、次にこの海戦を左右するであろう存在、きんぼうへと通信を繋いだ。

「決定的な違い。それは善意にせよ悪意にせよ、自発にせよ影響されたにせよ、自らの意思で裏切ったかどうかだ……」

「……ッ!?!? どうしてそこまで……」

カイトに言い咎められてディアナが悲しみと怒りで打ち震えているのが、直接見えなくてもカイトには分かっていた。

その時、フリースベルグとニーズヘッグの通信にしばらくお隠れ状態だった きんぼう が再度割り込んできた。

「ニーズヘッグの艦長へ、我々は我々の意思で、日本を取り戻すと決めている。トライトン艦長の意見に、賛同する」

幸樹がディアナの勧告を拒否すると通告し、再びニーズヘッグは近衛艦隊の明白な敵へと舞い戻ったのだ。

「なぜ……!」

「アズナヴール艦長、彼らは今は日本軍ではない。我々は国と民族を超え、一つの意味に従って集う軍隊。目的は、専横によって失われた国と全てを、篡奪者から奪還する」

「それでは、貴方たちは一体何軍?」

ディアナへ自身の意思を示すべく、カイトはスピーカーの先にいるであろう彼女を思い浮かべた。

そしてしばらくの後、カイトは口を開く……。

「我々は 解放軍だ」

カイトはディアナだけでなく、この先に待ち構えているであろう敵へ向けてそう言い放った。

この時、彼はこれがのちに対ウィルキア帝国軍の正式名称になるとは、予想していなかったのだが……。

「そうですね……そこまで言うなら、私たちに抗いなさい。貴方たちに愛国者を名乗る資格があるか、この戦闘でハッキリさせます!」

「ニーズヘッグとの通信が切れました! 艦長!」

「ああ。 攻撃が来る、対空警戒を再度厳となせ！」  
再びＣＩＣクルーの間に緊張が走る。

装甲が傷つき、対艦ミサイルが今度はESSMの効力を発揮してフレールスベルグを追尾してくる。

万が一損傷個所に飛びこまれたら、今度こそ……！

その時、誘導装置に損傷を加えられていた左舷のRAMが再度稼働した。

「RAM、回復しました！ 信じられません……！」

「これは……フレース、君の力か……。」

カイトは確信した……フレースも、自分の主張に賛同してくれたのだと。

彼女は今度は自らの意思で、妹と戦おうとしている。

（君の意思、確かに受け取った。 ならば私は、その期待を背負い任務を全うするだけ）

カイトがレーダースクリーンを見つめ、その表情は再び海の戦士のものになる。

「出ました！ 対艦ミサイルです、数4！」

「迎撃だ！ ESSM、攻撃始め！ 撃てーッ！」

バンがクルーへと威勢のいい号令をかけ、フレールスベルグは白煙と共にニーズヘッグの放った対艦ミサイルに対して対空ミサイルを空中に放った。

その頃、きんぼうの艦内でも緊張が高まっていた。

万が一フレールスベルグが第一弾の迎撃に失敗した場合に備えて、ESSMの準備を整えていた。

そして更に、ガイドストック少佐の意見により彼らはニーズヘッグへの効果的な攻撃手段を整えつつあった。

「よし、捉えている……誘導には問題ない筈だ！」

「71式対艦誘導弾、発射準備よし！」

「発射用意……撃てーッ……！」

砲雷長宏史の号令に合わせ、きんぼうの対艦ミサイルキャニスターの防護膜を突き破りミサイルがオレンジ色の火炎を吹き出しながら霧の彼方へと消えて行った。

フリースベルグのESSMとは違う小型目標が出現したのを、ニーズヘッグのレーダーは捉えた。

『きんぼう と思しき艦から、小型目標分離！ 高速で向かってきます！』

「対艦ミサイル？ ESSMは？」

『確認できません・・・目標、ロストコンタクト反応喪失！』

まるで先程のミサイル直撃前のフリースベルグの状況が、そのままニーズヘッグへと移ったようだった。

その間にもフリースベルグのESSMはニーズヘッグが放った対艦ミサイルの3発を撃墜し、残る1発もRAMで迎撃された。

その時と時を同じくして、再びレーダーに反応があった。

小型目標の再出現、それもニーズヘッグに距離をさらに詰めてまっすぐ向かってくる。

『目標、再度出現！ 本艦まで10秒！』

「対艦ミサイルのようね！ チャフ、発射！」

甲板に埋め込まれた装置から、レーダー攪乱の金属片チャフが空中にばらまかれる。

対艦ミサイルが追尾の頼りとするESSMは、これで防がれたも同然だった。

ところがミサイルが全くコースを変えない。

チャフが全然効いていないのだ。

「どういうこと！？」

『艦長！まだESSMが来ません！ですが、着弾まであと3秒！』

「くっ！ 衝撃に・・・！」

咄嗟にディアナが言いかけた時、横から殴り飛ばされるような衝撃が彼女やクルーを襲った。

ニーズヘッグは霧に隠れて見えないため、直接どうなったかを確認する事は出来ない。

しかし遅れて聞こえた爆発音と、フレースベルグときんぼうの両艦のレーダーから消えたECM反応がミサイルの命中を物語っていた。同時にステルス能力を喪失したニーズヘッグも、レーダー上に映るようになっていた。

「命中だぜ、ざまあみる！」

「よかった・・・」

幸樹がホツと胸をなでおろした。

きんぼうがフレースベルグの支援体勢に入って防戦一方だった状況が、ここにきて急展開を迎えた。

フレースベルグも左舷対艦ミサイル発射機が稼働しないものの、反転すれば右舷側が使用できる。

レーダーロックが可能になった現在、対艦ミサイルを撃てる艦が多い近衛艦隊が圧倒的に立っていた。

ところが追加攻撃をきんぼうが加えようと準備を進めていると、突然レーダーがホワイトアウトした。

「どうした！？」

「水平レーダー、SPYレーダー、ホワイトアウト！ これは一体！？」

「艦長、通信機器にも影響が出ています！」

幸樹やクルーも突然の異常事態に困惑する。

まるで目と鼻の先で強力な電子妨害を食らっているような、一見そんな感じであった。

「電磁パルス、現在最大・・・」

元凶はニーズヘッグだった。

搭載されていた電磁パルス発生装置が、原子炉の余剰分の電力を使い作動を始めたのだ。

「こつちも攻撃出来なくなるのは痛いけど、こうなつてしまえば使  
う以外ないわね・・・今のうちに大西洋へ抜け、修理が受けられそ  
うな最寄りの軍港へ入港するわ」

「しかし、敵に背を向ける事に・・・」

「それじゃ、死にたいの？」

「い、いえ・・・失礼しました！ 運航科と戦闘科以外の乗組員は、  
被害区の消火作業と負傷者の手当てに全力を尽くせ！」

艦中央部では、対艦ミサイル発射機付近に着弾したミサイルで発生  
した火災の消火作業が開始され始めていた。

「電磁パルスが連続で稼働できるのは最大30分・・・その間に運  
河に入るわよ。 針路070、全速前進！」

ニーズヘッグのモーターが唸りを上げて加速して転針し、その姿は  
霧の中へと消えた。

ブローズグホーヴィはフレースベルグから二十キロ以上外洋へ後退  
していたため、ニーズヘッグの電磁パルスの影響はさほどでもなか  
った。

時折通信の一部に雑音が入る程度だが、ブローズグホーヴィのCA  
TCC管制官たちの関心はそんな事よりも信哉機の命運に向けられ  
ていた。

フラップを損傷しているため、通常よりもかなりの速度での着艦し  
なければならぬ。

下手すれば死にかねない、激しいハードランディングが予想された。  
なんとか信哉を救おうと、デッキクルー達は急ぎ甲板の緊急着艦装  
置を作動させた。

スタンションと呼ばれるこの装置は、デッキからせり上がり繋がっ  
ているワイヤーやナイロン製のバリケードで強制的に機体を制止さ  
せるものだ。

重たい音を響かせながらせり上がり、展開するバリケードを見つめ

るデッキクルーの間に緊張が走る。

上空では黒煙を曳きながら信哉機がその時を今か今かと待つ。

そしてデッキクルーからいつでも来いとの連絡があったと、CAT  
CCから信哉へと告げられた。

『今準備が整った！　しっかりやれよ、絶対に受け止めてやるから  
な！』

「了解！」

操縦桿を倒し低高度に機体を持っていき、300ノットを切ったと  
ころでギアダウン。

海に浮かぶ巨大な平面が徐々に目の前に近づいて来る。

それに合わせるかのように、緊張で信哉の心臓の鼓動はどんどん高  
まる。

このまま行けるか？

信哉は出来るだけ速度を落とし、少しでも安全な着艦が出来るよう  
スロットルを絞って行く。

ところが速度が180ノットを切り、やがて170ノットになろう  
とした時だ・・・

突如機体が揺れだし、機体が左へと傾く。

「なっ、くそっ！！」

操縦桿を右へと倒し、スロットルを少し開けるとどうにか機体の暴  
れは落ち着いた。

損傷した左翼の気流が悪く、170ノット以下ではどうやら必要な  
揚力を保てなくなるようだ。

170ノット以上での着艦は、普通なら機体が飛行甲板を通り過ぎ  
て海へ飛び出してもおかしくない。

だがこれ以上速度を落とすものなら、機体はたちまち操縦不能に  
陥って海へドボンだ。

『速度が速すぎる・・・チャッター、減速できないのか！？』

「これ以上は無理だ！機体が暴れる！」

170ノットと180ノットの間を信哉は唯一動いている第二エン

ジンのスロットルを必死に操作しながら、右手で操縦桿を懸命に操作する。

もう時間が無い・・・このまま行くしかない！

「タッチダウン！」

着艦のコールの後、ふらつきながら通常よりも鋭角に飛び込んだ機体のレフトギアが飛行甲板に接触。

そのままドスンという音を立てた機体の左翼が甲板に擦れて火花を散らし、機首のノーズギアが折れ前につんのめる体勢で機体は右方向へ傾きながらバリケードへ飛び込んだ。

なんとか静止した機体に、第一エンジンからの延焼を防ぐために消火作業が開始される。

「おい！大丈夫か！？　なんとか言え！？」

「寝るな！寝たら死ぬぞ！！」

二人のクルーがキャノピーを必死に叩き、信哉に無事かと呼び掛ける。

普通ならタラップを使わないと手が届かないコクピットだがノーズギアが折れている今、彼らの身長より低い位置にコクピットはあった。

車で正面衝突をしたような衝撃に、信哉はしばらく視界がボーンとなっている。

ようやく視界が元に戻り始めた時、信哉は外からキャノピーを叩いているクルーの一人に気が付いた。

「・・・だ、大丈夫だ。それに雪山じゃないんだぜ、ここ」

大丈夫と手でアピールすると、信哉は手動開閉装置でキャノピーをこじ開けた。

「頭は働くようだな・・・俺の名前は何だ？」

「知らねえよ・・・教えてもらってないんだ」

「その通り、頭は大丈夫そうだな・・・ゲッ！」

ヘルメットをクルーが脱がせると、彼らは思わず息をのんだ。

RAMの命中時にキャノピーに頭を打ち付けた時の衝撃で、額の部

分から出血していた信哉。

彼の顔半分が血まみれだった。

必死になって操縦桿を握っていたため、信哉は気付いていなかった。  
「救護班急げ！パイロットが怪我している！早くしろ！」

白衣を着た軍医達が担架を持って機体へ近づく。

「良かった・・・なんとか怪我しているけど、なんとか大丈夫みたいね」

その様子を離れた場所から見ていたローズは、信哉の無事に安堵して笑みを浮かべた。

彼女の頭には、先刻ニーズヘッグからお見舞いされたAGSの影響で包帯が巻かれている。

そして甲板では応急処置を始めた軍医達が、信哉の頭に包帯を巻いているところだった。

「ある意味、お揃い？」

まだ痛む額を摩りながら、ローズは思わず苦笑し艦内に姿を消した。

「妨害範囲が遠ざかって行く・・・ニーズヘッグが撤退していく」

バンがリーダースクリーンを見つめ、徐々に妨害域が北東へ移動していくのに気付いた。

それはつまり、ニーズヘッグがフレースベルグ撃沈を諦めたという事を意味していた。

その様子をカイトが静観していると、黒い煤のような汚れを制服に付けた士官がCICのカイトのもとへと駆けつけた。

「艦長、消火作業完了しました」

「御苦労。負傷者は？」

「負傷者は五名・・・うち一名は重体です」

恐らく対艦ミサイルの装填に関わっていたクルー達なのだと、カイトは察しがついた。

「了解した。この戦闘後、重症者を後送できるよう手配を頼めるか

？」

「はっ、了解しました！」

よろしく頼むとカイトは言うと、今度はCICクルーの一人が通信が舞い込んでいると報せてきた。

「はい・・・そうか・・・良かった。」

そういうとカイトは安心した表情を浮かべ、通信を切った。

「対空、対水上戦闘、兵装格納」

「兵装、格納します」

バンの復唱を受けてクルーがコンソールを操作すると、AGSも57mm砲やRAM等の武装が格納された。

そして矛を収め戦いが終わったという宣言がなされたフリースベルグ艦内は、クルー達の安堵で満たされる。

ハーブーンと同程度の威力を持つきんぼうの対艦ミサイルが直撃したならば、ニーズヘッグの損害は自分たちとあまり変わらないものだろう。

となるとしばらくは修理に時間を要する事になる・・・だがそれはつまり、フリースベルグも一時戦列を離れるという事を意味していた。

カイトを唐突に疲れがドツと襲ったように、彼は椅子へと倒れるように座り込んだ。

艦の損傷、今や敵同士になったディアナとの確執・・・これからどうやって、敵と認められた存在と戦っていくべきなのか・・・考える事は山ほどある。

しかしそれでも、この時ばかりはカイトもこの後の事を考えるより、一時の安堵にありつきたかった。

## 第二十五話 その名は解放軍（後書き）

しかし、突然起きた執筆速度の覚醒に自分でもびっくり！

いつもなら早いと言っても二週間はかかりそうだったのに・・・！

しかし・・・

それもこれもいつも読んでくださったたり、感想を書いてくださる読者のみなさんからエネルギーを貰った結果です。

どうもありがとうございます。

次回

第二十六話「未知なる海へ」

## 第二十六話 未知なる海へ（前書き）

残念ながら、今回はカイト達の出番はあんまり有りません。

理由は前回は参照されてください。

あと感想を永い間返信できておりませんが、すいませんがもう少しお待ちください。後日必ず返信しますので！

挿絵に初挑戦・・・と言ってもどうみてもただの地図です。

あ、私JINには人とかを描く才能なんて全くないので（笑）

〓 前回までのあらすじ 〓

ウイルクア王国で勃発したウイルクア帝国樹立のためのクーデターにより、祖国を追われたウイルクア近衛艦隊は座乗する国王と共に同盟国イギリスへと向かう。

だが、イギリスへ向かうには敵の大艦隊が待ち構えるパナマ運河をどうしても通過する必要があった。

> i9806 — 1438 <

激戦の末、どうか敵艦隊の本隊を退ける事には成功したが、海戦の最中に敵であるウイルクア帝国所属のフリースベルグ級二番艦二―ズヘッグの猛攻によりフリースベルグは損傷。補修の為一時戦線離脱を余儀なくされる。

しかし時間を空けては敵に好機を与えるのみと判断した近衛艦隊上層部は、まだパナマ運河に残る残存戦力掃討並びにパナマ運河通過を最終目標とした海戦を、フリースベルグ無しで挑む事を決定した。

> i9807 — 1438 <

## 第二十六話 未知なる海へ

パナマ運河河口付近での前哨戦は、辛くも近衛艦隊と米海軍の連合海軍の勝利に終わった。

勝利を祝いたたいのは山々だが、彼らはまだ最も重要な事を終えていなかった。

パナマ運河の中間地点たるガドウン湖には、おそらくパナマの反米組織から供与されたであろう航空戦力や、門番として水門付近に設けられた戦力が最後の抵抗を試みていた。

また偵察隊が持ち帰った情報によれば、湖内には戦艦に率いられた小規模艦隊が最低でも3、そこに現われるであろう自分たちを待ち構えているらしいとのことだ。

だが運河の完全攻略を尻込みすれば、それは弱体化した運河内の防衛戦力を立て直す時間を敵に与える事になる。

バクスター長官ら参謀達の意見は、ここで一気に決着を付ける事で一致したようだ。

ニーズヘッグとの熾烈な戦闘を終えたその日の夜には、参謀部が作戦立案の作成を完了していた。

これが自分を年寄りと自嘲している人物の仕事の早さかと、カイトは改めて驚かされた。

そしてそういうことなら、第一線でその作戦成功のために尽力したい筈のカイトおよびフリースベルグだが・・・

当然のことながら、ニーズヘッグの攻撃で艦体が傷ついたフリースベルグやクルーの彼らは、長官にお留守番を命じられたのは言うまでも無い。

その時長官はカイトに「君たちに待機を命じるのは、結構勇気がいる事だ。今回は休め、中佐」と言っていた。

フリースベルグが修理のために一時的に艦隊を離脱するため、艦隊旗艦は再びシエルドハーフェンとなった。

カイトはその艦上にて作戦会議へ参加していたシュルツともあった。「大変だったな、トライトン艦長・・・しかし無事で良かった」「心配有り難いが、今度はフロントラインに出る自分の心配をした方がいいぞ。明日は我が身と言うだろうか？」

旗艦へ長官を送り届けシエルドハーフェンを去るカイトが、シュルツに言いかけると彼は軽く笑みを浮かべ大丈夫さと答えた。

カイトがシエルドハーフェンからフリングホルニへと乗艦すれば、艦後方ではフリングホルニの開いたハッチからフリースベルグが収容されようとしていた所だった。

フリングホルニから伸びた数本のワイヤーが、フリースベルグの船首をガツチリつかむと彼女を病床である艦内ドックへと搬送していく。

かなり長い時間をかけて、ゆっくりとフリースベルグはフリングホルニへと収容された。

既に一時間以上が経過していた。

フリングホルニの甲板上には、ほんのわずかな対空砲の他に空調設備や排気のダクトがあるだけで、酷く殺風景なものだった。

カイトはそこから作業の様子を見ているふりをして、その実彼はずっと海を眺めながら考え事をしていた。

それはディアナの事だった・・・

彼女とカイトの関係を、ある人は先輩後輩といい、ある人は過去の恋人とも言う。

どれも正解かもしれない・・・しかしカイトに言わせればそれは少し違う。

親友であるシュルツにも増して持ち前の考えに共感できた相手、それがディアナだった。

それが彼女と別れてからのこの6年。

この6年の間に、彼女に一体何があったのだ・・・？  
今や彼女は既に大勢の血を流した独裁者に加担する将校になっている。

最初に聞いた時には、俄かには信じがたい情報だった。

だが彼女は敵として、見えなくとも確かに敵としてカイトの前に現れた。

（情けない・・・国の全てを解放するなど言っておきながら、たった一人の人物が敵に回った程度で・・・この有様か）

カイトが水平線の向こうを見つめながら、思わず拳を握りしめていた。

彼女の存在が大きかったのか、それともそれくらいも許容できないでいる自分が小さいのか・・・カイトには分からなかった。

「艦長」

ふいに後ろから呼びかけられた。

振り返ると数枚の紙を挟んだボードを手にリナが立っていた。

「副長、どうしてのこと？」

「通りすがりの技官に聞いたものですから。それより、今回の修理箇所をリストアップしました」

受け取ったボードを見てカイトは、被害の大きさに思わずため息をついた。

「酷いな・・・一週間は軽くなるんじゃないか？」

「技官達も出来る限りの工兵を招集して徹夜の突貫作業でやってくれるそうですが、それでも早くて4日くらいはかかると思われます」

「工兵部隊も出てくれるとは、本当に頭が下がる思いだ。これじゃあ、急いでくれなんてとても言えないな」

自嘲を交えた言葉に、二人は思わず苦笑した。

「しかし・・・本当に驚きました」

少し間をおいてリナが物哀しい表情でカイトへ言いかけた。

「アズナヴールの事を言っているのか？」

カイトの返しにリナが黙って頷いた。

「はい。まさか彼女がニーズヘッグの艦長になっていたなんて・・・

」  
リナはそう言うものの、秀逸な指揮でこれまで超兵器二艦を撃退してきたカイトやフレーズベルグをここまで追い込める人物を考えると、納得できない事も無いと内心気づいてはいた。

カイトが士官学校を卒業して二年後、多くの男子を差し置いて首席で卒業したのがディアナだ。

優秀な人材を求める国防海軍が、目を付けない筈が無かった。

「・・・現実を信じられないか？」

「いえ、あれは紛れも無く彼女です。それは分かっているんですが、いまだに信じたくないという気持ちがあるんです」

そうか・・・自分と同じかと、カイトは心の中で少しばかり安堵した。

傷ついた心を持っているのは、自分だけじゃなかったんだと・・・  
「それは私も同じだ、スワロー大尉。だが次にこの海のどこかで会う時までには、覚悟を決めるさ・・・」

そういつとカイトは少し修理作業の様子を見て来ると言い残し、ドックへ繋がる階段を下りフリングホル二の甲板から去って行った。

戦場へ赴いた者たちに対して失礼だが暇、という気持ちを抱え込んでいるのはカイトらフレーズベルグのクルーだけでは無かった。  
パナマ運河を突破せんと近衛艦隊が攻勢を仕掛けるため、ガドウン湖へとつながる運河を続々と通過していた。

一直線に並び艦隊が行軍する。

そんな中、ブローズグホーヴィの格納庫では中破した信哉のF-22 NATFへの修理が行われている。

おかげで、搭乗する機体を失っている信哉は暇でしようが無い。

信哉が人目に付かないような格納庫隅にあったパイプ椅子を広げて

座ると、がたいの良い整備士の一人が信哉を発見した。

「よお、チャッター。そんなとこ居たって、どうせ今日中には無理だ・・・お前の出番は無い、今日は休め」

「分かってる。でも他に行く宛が無くてな。他の区は実戦配備で忙しくなるだろ？ 航空補給班の連中は上で働いてるし、ここぐらいいしが無いだよ」

「お喋りの相手が欲しいのか？ そうかい・・・暇そうで悪かったな！」

「そうは言ってないだろ・・・」

信哉が不機嫌そうな顔で言い返すと、整備班の技官達からは笑い声が上がった。

「怪我は良いのか？」

「ああ」

「本当か？ 甲板作業班の奴から顔面血まみれだったって聞いたぜ？」

細身の若い技官が機体の左パイロード付近から顔を覗かせて尋ねた。

「見かけ倒しだ、大したことない」

平気だぞと信哉は笑って答えた。

自分でも言うとおおり、頭の痛みはかなり収まった。

結構酷そうに見えた怪我だったが、船医によると額の表面を広く切っていただけで内部にはダメージはほぼ皆無と来たもんだ。

数日間医務室にお泊りという事態は避けられたが、そんな信哉よりむしろ機体の方がダメージは深刻だった。

左の第一エンジンはRAMの近接爆発の影響でターボファンのタービンブレードはバラバラ、一部の電気系統配線や燃料パイプの配管も寸断されているという完全なお釈迦状態。

さらに左水平尾翼は跡形も無く脱落しており、左主翼はフラップの部分の至る所が傷ついていた。

しかし翼面を剥がし内部を調べると、フラップを作動させる油圧の配管が飛び込んできたRAMの破片によって切断され、これも交換

を迫られていた。

もう一つの損傷箇所ノーズギアの取り換えは昨晚のうちに終わっていたらしく、早朝ここを訪ねた時には既に機体は三本の足でしっかりと立っている。

確かに立つてはいるが航空機、特に戦闘機は飛んで戦ってこそ価値があるものだ。

飛べない戦闘機など、ただの一分の一スケールのプラモデルにすぎなかった。

「予備のエンジンは米軍から供与されたアレで最後だ・・・もう壊すなよ」

格納庫のクレーンで天井に吊り下げられた円筒形のエンジンを指さして、老齢の整備班長が信哉に言った。

「わかった。しかし予備のパーツがなかったら、どうしようかと思つてたよ・・・」

「まったくそうだな。なにしろ代えがきかないパーツならあるさ・・・たとえば」

そういうと班長は持っていたスパナで信哉を指さした。

「俺？」

「そうだよ、パイロットだ。パイロットは壊れても修理できんからな・・・ガイドストックの旦那から聞いたぞ、無茶ぶりかましたそうだな？」

「よしてくれ、もうこりこりだ。昨日の晩に少佐には、医務室でしこたま怒られたよ」

信哉の脳内には昨日、大声で信哉を怒鳴りつけて医務官の制止も完全無視状態だった少佐のボイスが再生された。

恥ずかしいやら精神的に痛いやらで、思わず顔をうずめ頭を抱える信哉。

「だが勘違いするなよ。別にお前の功績を認めないでもない。確かに戦場で功績を上げる事は、どの兵士にも課せられた義務だ。だが同時に生還することも、功績云々よりもっと大事な義務だぞ」

忘れんなよという整備班長。

(気のせいだと思ってたけど、やっぱり何か似てんな・・・)

そんな現役引退間近な彼の仕草や言動に、信哉は知らず知らずのうちに自分の父親の影を重ねていた。

パナマ運河では近衛艦隊と帝国海軍の激しい攻防戦が展開されようとしている中、時差にして8時間早い地中海は既に夜だ。

数日前にささやかな就役の式典の後、慣熟航行と艦船の実技的な訓練を兼ねて新造艦レーヴァティンはクレタ島沖合に展開。

数隻の駆逐艦や巡洋艦が展開する中、その中央に取り囲まれるようにレーヴァティンは投錨し停泊していた。

就役前は夜間に下士官たちが士官室で色恋沙汰のトークやジョークを飛ばしあう光景が見られたが、ここ数日それが見られない。

訓練で疲れたのもあるのだろうが、一番の要因はこの艦では副長率いる帝国派の士官による見回りが行われるようになったからだろう。そしてその副長が最も警戒し最重要の監視対象にしている男

彼は前甲板から辺り一面真っ暗な中、唯一その存在を誇示するように光り輝く月を見つめていた。

ところが、綺麗な弧を描く三日月が今宵は妙に赤い。

「赤き三日月・・・まるで血曇ったショーテルのように禍々しいが、同時に美しい」

夜空に浮かぶ三日月をエーベルハルトは見上げていると、スタッという後方で誰かが着地したような音が聞こえた。

「艦長・・・ここにいたのね」

「どうしましたかレティ？」

エーベルハルトの振り返りざまにレティはある重要な事を告げようとしていたのだが、エーベルハルトが持っていたある物が目に入り、言葉を発するのを忘れてしまった。

月光に反射する瑠璃色に紋様のガラス細工、小さめの花瓶の上には

金属製の蓋つきお椀のような物が付いている。

何より普通のガラス細工では無いとレティが思ったのは、そのガラス細工から伸びたチューブの先からモクモクと煙が出ていた点だった。

「何それ？ たしか艦長室にあつた・・・」

「ええ。エジプトのシーシャ、つまり水タバコです」

「またタバコ！？ せっかくあの毒煙地獄から解放されると思ったのに！！」

レティは二日前に紙タバコも葉巻も切れてしまい、独り言で残念がるイーベルハルトを見ていた。

しかし今思えば、その時の彼の表情が心底困った様子では無かった事を警戒するべきだったか・・・警戒しても仕方が無いのだが・・・。

「毒煙とは失礼な・・・このシーシャの煙草は、私のお手製ですよ？」

「あなたが、作ったの？」

「ええ。誰だつて自分が心をこめて作った料理はおいしいでしょう？ それと同様・・・糖蜜を溶かして固め、ミントフレーバを加えて手間暇かけて作った私の煙草、この美味しさは私にしか分かりません」

「だからって、そうモクモクと吸わないでよね」

ため息混じりにレティが呟くと、イーベルハルトはわずかに一吸いしてからパイプから口を離した。

「フーツ・・・では、本題に入りましょうか？」

「ええ・・・本国からウिल्キア帝国黒海沿岸駐留部隊に、中佐階級の幹部士官が異動で赴任するそうよ」

「ほう。良い人だと良いですね」

「そんなわけないわよ。だつて今の時期に本国からこんな辺境の駐留部隊に派遣されてくる幹部よ？きつと、ヴァイセンベルガーの息がかかった奴に決まってるわ！」

「それもそうですね……。それで、その士官とやらがどうしたんですか？」

「イーベルハルトはそう言うと、再び愛しそうにシーシャのパイプを口にくわえる。」

「その士官の異動予定先、黒海駐留部隊に配備中の最新鋭艦の艦長とあったわ。多分、それって私のこと……。」

「そうですね……。」

眉ひとつ動かさずにイーベルハルトは紫煙を吐き出して、レティにそう返した。

黒海駐留部隊の最新鋭艦は、彼の知る限り確かに一つだ。

このAPAR搭載艦、レーヴァティンを置いて他に無かった。

世界へと侵略の魔の手を広げ始めた帝国派のこの動きは、彼にとつてある意味意外だった。

もはや何をやっても帝国に裁きを下す事は出来ないかもしれない……。たとえ世界が束になるうとも。

おかげでヴァイセンベルガーの腰巾着ではない自分は、もう少し過激と言うかかなり暴力的なやり方で艦長職を解かれると思っていた。

「なるほど、私はお払い箱と言うワケですね。私は連中がやっている事を考えると、かなり平和的なやり方ですが……。」

「なんかヘンよね……。手段を選ばないアイツらにしては、あまりに綺麗すぎる。」

「あなたもそう思いますか？多分、いきなりやってきて本国からの辞令を突き付けておさらばさせるつもりでしょう。ですが、その後はどうなることやら……。」

殺されるかもと言う事をイーベルハルトは口に出さなかったが、レティはそれを悟って内心焦っていた。

どうすればイーベルハルトが異動させられずに済むの……。どうすれば、ずっと自分と一緒に居てくれるの？

「ひよつとしたら、私は軍法会議にかけられ……。」

「やめて！ それ以上、言わないで！」

悲しみの表情を浮かべてレティはエーベルハルトの言葉をさえぎる。そんな彼女の気持ちを悟ったのだろう・・・エーベルハルトは心配してくれて嬉しい気持ちを表に出すことなく、彼女の方を振り向いた。

「・・・実はですね、もうそろそろ何かあってもおかしくないんですよ・・・」

「そろそろって、何が起るっていつの？」

「もうじき、バレてもおかしくないですよ」

「バレるって、もしかして・・・」

レティがエーベルハルトのいうバレてもおかしくないものが何か考えつきかけた時、彼は軽く含み笑いを浮かべて振り返った。

「レティ、アンネリスを呼んでもらえますか？ 少し彼女と貴女に話しておきたい事があります」

レティに耳打ちするようにエーベルハルトはそう囁いた。

その表情に追い詰められているという様子を微塵も感じさせないような、策士さながらの悠然さのこもった笑みで。

一筋の砲火がガドウン湖の水面に舞った時、それに応戦するように近衛艦隊へ砲火が多数放たれた。

ガドウン湖内に到達した近衛艦隊の軍勢は、一斉に待ち構える敵艦隊へと砲撃を開始した。

しかし負けじと敵軍は、予め設けてあった数か所の空軍基地からわんさかと敵機を送り出し、空からと水上の中小規模の艦艇から砲撃や雷撃を浴びせる。

今回の敵の戦力は撤退したバーゼルの艦隊が居ない事もあって、米ウィルキアの連合艦隊に比べ互角かそれ以下だ。

ところが決定的な違いが、空中の最前線で戦うパイロット達には簡単に見て取れた。

空中戦力が、帝国軍の方がはるかに下回っていた。

というのも彼らは元々大艦隊の打撃力に花を添えるように、いわば補助的な戦力として存在した攻撃隊だった。

ところが彼らが対峙しているのは彼らが最も得意とするであろう軍艦でなく、機銃やミサイルをぎらつかせる戦闘機だ。

中には抜けがけで近衛艦隊の艦艇に攻撃を敢行しようとする敵機もいるが、それは例外なく戦闘機の餌食となっていた。

『オラオラアーツ！ 死にたくなければベイルアウトしやがれ！』  
『おうおう・・・調子いいな、クレイン3』

『今日はチャッターが居ないからな・・・悪いが今日のMVPは俺が貰うぜ！クレイン2』

『どうかな？ お喋りに時間を使う暇あったら・・・』  
するとクレイン2のコクピットでアラームが鳴る。

F-14Dを駆る彼らが、どこからかレーダー照射を受けている。  
『げっ、レーダーロックだ！』

『言わんこっちゃねえ！ どこだ？どこからだ？』  
『上には敵機は居ないぞ？』

クレインチームが必死にレーダーで攻撃態勢に入っている敵機を探る。

『どこ見てるの！下よ！』

その時無線に凜とした女性の声が割り込み、咄嗟に後ろの下方へ目を向けた彼らの視線の先で機体から紅蓮の炎を上げるハリアーが地面に激突する所だった。

そして彼らの前を下から上へ、ハリアーを撃墜した機体が反転して後方へと抜ける。

『あの機体・・・！』

『チャッターのと同じじゃねえか！？』

ウィルキアのパイロット達からは思わず驚嘆の声が上がる。

クレイン隊の目の前をフライパスした機体は、彼らも見覚えのある信哉の機体F-22NATFと同じだった。

ただ違うのは、機体の胴体に米軍機を現す五芒星の国籍マークがついていた事、そしてパイロットが女性のようであった事だ。

それを例えているかのように、尾翼には悪戯っぽい笑みを浮かべて“Q”という文字を描く魔女が描かれていた。

『こちらアトランティスCDC。クイツクシルヴァー、作戦行動空域を方位0-8-0のセクターに変更せよ』

『了解』

颯爽と現れたその機体はインメルマントーンを決め、鋭い切り返しで180度のターンをしてきた時と同様にまるで疾風のように去って行く。

『なんてハイGターンしやがる・・・軽く8Gは行ってるぜ』

コールサイン、クイツクシルヴァーの機体は北東の飛行場へと流れるように進んでいく。

敵は彼女の機体をレーダーでは確認できないため接近は容易だった。ようやく接近に気付いた対空火器車両が目視で弾丸をばら撒くが、命中精度の低下は致命的だった。

目標の管制塔をHUDの照準に捉えるとマスクの下で軽く微笑んだ彼女。

トリガーを引くと機体下の開いていたウェポンベイから軽量小型爆弾SDBがアームの束縛から解き放たれ、弧を描いて管制塔へと突っ込んでいった。

小型とはいえ、トーチカのように特別な防備もしていない管制塔にはそれで十分だった

爆発してすぐに建物が爆炎に包まれ、さっきまで威勢よく檄を飛ばしていた管制塔の声は沈黙したようだ。

頼るべき頭を失い、滑走路に出ていた敵機や対空車両も右往左往している。

そこをアトランティスから発進した戦闘攻撃機や戦闘ヘリが、爆弾やミサイルで徹底的に叩いた。

『敵空軍基地沈黙！ 繰り返し、敵空軍基地を制圧した！』

やがて前線部隊からもたらされた敵空軍基地制圧の一報に、近衛艦隊や米艦隊の戦意は湧きあがった。

流れに乗るようにシエルドハーフェンやブローズグホーヴィから放たれた砲弾が、航空支援を受けられなくなった敵艦隊を次々と沈めていく。

もはや勝利は時間の問題だった。

最早艦隊が散り散りになり敵が反撃できなくなった頃合いを見計らい、アトランティスからは特殊部隊シルズを乗せたブラックホークヘリコプターが飛び立つ。

アトランティス艦長セシリアの読みは当たり、まだわずかに敵艦は残ってはいるが、もはや上空を飛んでいくヘリに砲火を浴びせるような余力は残っていないかった。

むしろブラックホークから魚雷艇めがけて、サイドの砲手がミニガン掃射を食らわせている。

「ヒヤッフウー！ 死にたくなければ今すぐ海に飛び込みやがれええっ！！」

「ホプキンス！ 無駄弾は使うなよ」

「わかってますよミラー隊長！ でも俺は、グランマ（おばあちゃん）の故郷をメチャメチャにしゃがった奴らに、ひと泡吹かせるのがちよつとした夢だったんですよ！」

「海に落ちた奴は撃つなよ！ 後々面倒な事になる！」

「イエッサー！」

ブワアアアアンという唸りを上げるミニガンが、薙ぎ払うように敵艦隊の最後の抵抗力を奪っていく。

しかし海での抵抗を諦めかけていた敵は、最後の関門を死守すべく対空火器や砲台を多数並べていた。

「見えてきたぞホプキンス、水門だ。 あれを越えれば大西洋だ」

「ええ、でもずいぶん冴えないリフォームをしたもんです」

そこから対空砲が火を噴き、やむを得ずヘリは低空へと逃げる。

「Damn it！（くそつたれ！）バルカンシャワーじゃトーチ

力はキツイか!？」

敵地の防御陣地はコンクリートや金属板で覆われ、ミニガン程度じやとても効果的なダメージを与えられなかった。

しかしそこへ雷鳴のような音が轟き、攻めに四苦八苦していたトーチカが紅蓮の炎を上げて吹き飛んだ。

要塞のような姿を呈している水門だが、武装は水門の手前までしか間に合わなかったらしい。

その証拠に水門の手前にはシヨベルカー等の建設用の重機が、上空からでも散見された。

こうなれば敵の本丸まで一気に突撃するのが、これまでお互いに下品はジョークを並べて士気を高めていた彼らの出番だ。

彼らの前をクイツクシルヴァーらの米軍機にウिल्キア軍機がフライパスし、強固な敵陣地を吹き飛ばして行く度にヘリのシールズ隊員達からも歓声があがった。

「いよーっし! やったぞー! 自由の国万歳だ!」

「近衛も良い仕事してるぜ、ハハッ!」

歓声をあげて間もなく、ヘリが水門コントロール施設を制圧するために付近へと着陸する。

まだ動いている敵の対空兵器砲台やトーチカの一部にミニガンを上空から撃ちまくるヘリが囂となり、その間に施設内に侵入しようという試みだ。

『こちらクイツクシルヴァー、水門をお願いします』

『ウिल्キア近衛海軍航空隊、クレインチームリーダーだ。あんたらが水門を制圧してくれないと、俺たちは大西洋に抜けられない。頼んだぜ』

友軍からの励ましは、突入を控えて緊張が高まっているシールズ隊員達には何よりの戦意高揚になった。

「聞いたかお前たち!! 今回の作戦の大トリは俺たちだ! 立派にやれよ! これでヘマをやらかしてみろ・・・これからずっと、銃を持つ手にモップを握らせてやるぞ!」

「コッイエツサー！！」  
そしてヘリが軽いショックを受けて地面に接地した。

「よし行くぞ！ アルファチーム、ゴーゴーゴー！！」  
隊長が先頭に他のヘリからも次々にシールズの隊員達が地面に降り立ち、異なる場所から侵入を試みる。

一人がドアを開けると他の隊員達が低姿勢の構えのままぞろぞろと内部に潜入する。

『ベータチームはアルファチームの反対側から突入した』

『デルタは敵残存戦力の集結を阻止し、各個撃破せよ』  
シールズの侵入は的確だった。

それぞれ施設の中枢部を制圧するグループに、周辺警戒のために待機するグループ、残っていたトーチカから突撃してくる陸戦隊に応戦するグループに分かれている。

おかげで施設中枢の制圧を命じられたアルファチームは、他のチームを信頼することで自分たちの任務に100%の能力を注ぎ込む事が出来た。

彼らの侵入に抵抗を試みた者もいるが、施設占拠のスペシャリスト対して技官らに突撃銃を持たせた程度の即席の戦力では火を見るより明らかだった。

「銃つてのはなあ・・・こうやって撃つんだ！！」

ローリングで飛び出したアルファリーダーが、コントロールルーム前で抵抗していた兵の肩を撃ち抜いた。

好機をみた他の隊員達が、彼らを拘束し完全に抵抗能力を完全に奪う。

「行くぞ、最後の砦だ！」

閃光手榴弾を投げ入れその炸裂と同時に隊員達が、一気にコントロールルームへとなだれ込む。

フラッシュライトに照らし出された光景を見て、ほんの一瞬隊員たちは戦慄を覚えた。

中に居た男は一人、ウィルキア帝国の中年士官だった。

だが彼が顔面を覆って閃光を防いだ腕の先の手には、手の平に収まらないくらいの大さの見慣れないスイッチ。

そして水門を開閉する油圧装置を制御する機械に、過剰な量のC4爆弾が仕掛けられていた。

何より彼の顔色は赤みを帯びており、今まさに自爆してしまいかねないような気迫を放っていた。

「よせえええッ!!」

隊長ミラーが叫びながらM4を撃つと、士官は5.56mmの小口径高速弾を受けた部分に赤い花を咲かせて後ろに倒れた。

吹き飛ばされた士官の手から離れた起爆スイッチがくるくると宙を舞う。

「うおおオオオッ!!」

絶対に落としてはいけない!思考よりも先に体が動いて走りだした隊員ホプキンスが、M4を投げだしヘッドスライディング。

「届けえーっ!!」

限界を超えて脱臼しても良いくらいに伸ばした手がスイッチを間髪、地面の数センチ上でキャッチした。

『どうした!? アルファチーム、応答しろ!』

『アトランティス作戦本部、アルファチーム応答せよ!』

叫び声や銃声を聞いた仲間が、無線で呼び掛けて来る。

それまでの数秒間、静寂がコントロールルームを支配していた。

「アルファチーム・・・作戦は成功だ。施設を制圧したぞ!」

喜びに満ちたミラーの雄たけびに、海上の友軍からも歓声が上がった。

だが彼らはその歓声に応えるよりも早く、次の作業に取り掛かる。

「・・・喜ぶのはまだ早い。やることをやっってしまうぞ」

「「イエッサー!」」

とりあえず全部で10以上はあるC4爆弾を完全に解体していたら時間がかかりすぎるので、起爆装置をロックして彼らは水門を開放するスイッチを見つけ出した。

二つの海を分断していた水門が、重たい音を立ててゆっくりと沈み込んでいく。

やがて見えた。色も見た目も殆ど変わらない……しかしそこは近衛艦隊のクルーにとつては未知なる海、大西洋。

既に欧州の大半は帝国の魔の手によって占領されていた。

今でもまともに抵抗しているのは、イギリスとフランス、そして領土の半分を失つてもなお抵抗を諦めていないドイツくらいだ。

この海の間隙には、想像を絶する何か待ち構えているだろう。

『見ろよ……海だぜ』

『わかつてる』

『これから厳しくなるぜ……みんな』

『それが分かかってるって言うてるんだ』

クレインチームリーダーも、完全に開け放たれた水門の間隙から大洋を越えて伝わってくる異様な気配に表情を強張らせた。

『クレインチーム、RTB。着艦のルートへ向かえ。ブローズ

グホーヴィCATCC（空母航空管制センター）とコンタクト』

F-14の機体が殺気が伝わってくる大西洋に背を向け、彼らを待つ母艦の帰路へと就く。

これから何と戦うのかなど、誰にも分からない。

しかしこれだけは言える……今後の戦いは一つでも選択を間違えれば即全滅の綱渡りのようなものである事。

そしてこれから先もずっと、敵は同国人であるという哀しい運命が自分たちを待ってるのだと。

その頃、レーヴァティンの前甲板にはエーベルハルトとレティ、そして彼が呼ぶように言ったドイツ軍の女性士官アンネリスの姿があった。

しかし今の彼女たちの表情は、何かに頭を悩ませているようなものだった。

「艦長……どうしても分かりません。 ウィルキア帝国は、世界中の海を支配下に置くと宣言してるのですよ？ 私たちに逃げ場など……」

先週にブロンドの髪を肩のラインで切りそろえたアンネリスが、文字通り首をひねる仕草でエーベルハルトが出した問題をレティと一緒に考え込む。

「私も意味分かんないわ！ 海じゃなきゃどこに逃げるつもり？

船は陸には上がれないわ！」

「……そんな事くらい、分かっています。 仮に海を逃げまわるとしても、その都度燃料を補給しに戻ることなんてできませんから燃料は限られています。 動き回らずにずっと隠れていられる場所を、私なりに絞り込んだ結果です。 私と共に来ていただけますか？

文明を生みだした、そう……人類のゆりかごへ」

軍帽をそつと優美な手つきでそつとずらして頭上の月を見上げ、エーベルハルトはすつと南東の方角を指差した。

## 第二十六話 未知なる海へ（後書き）

途中からシールズを書いているのか、海兵隊を書いているのか分からなくなりました（笑）

次回もこれくらいの期間が空くと思われませう。

本当に申し訳ないですが、どうかご了承ください。

にも関わらず、感想や評価をお待ちしております（笑）

次回

第二十七話「白鯨再び!？」

## 第二十七話 白鯨再び！？（前書き）

挿絵とかを描いてたら遅れました。

登場人物紹介の所にフリースベルグやシエルドハーフェン級の画像をアップしました。シエルドハーフェン級はどう見ても鋼鉄シリーズの巨大航空戦艦です。どうもあり（ry

下手な絵ですが、よかつたらどうぞ。

〓前回までのあらすじ〓

ウィルキア帝国に姿を変えてしまった祖国を救うべく、まずは同盟国のイギリスへの廻航を目指す近衛艦隊。フリースベルグが被弾し戦列を離れるも、近衛艦隊各艦の活躍でパナマ運河を突破する事に成功した。

また同盟国イギリスからはバミューダ艦隊が派遣され、カリブ海の外で合流するべく修理を終えたフリースベルグを先頭に艦隊は往く。

> i 1 0 0 5 8 | 1 4 3 8 <

> i 1 0 0 5 7 | 1 4 3 8 <

## 第二十七話 白鯨再び！？

“ハッチ解放”の合図で艦橋から前方を見つめるカイト達の視線の先に、縦筋の眩い光が飛び込んでくる。

鋼鉄の大きな扉の向こうから差し込む外からの光だ。

ようやく修理を終え、フリースベルグが再び波濤の元へと舞い戻る時が来た。

「機関前進微速、フリースベルグ発進」

「了解。機関前進微速」

ゆっくりと開くハッチが完全に開放された事を確認すると、カイトはドック艦フリングホルニから離脱するように指示を送る。

原子炉からエネルギー供給を受けるフリースベルグは煙を吐かずに出渠できるため、世話になった技官達はせき込むことなく笑顔でカイト達を見送れた。

お互いに敬礼を以て別れの挨拶とし、艦は数日ぶりにその巨体を海へと飛び込ませる。

ガドウン湖を抜けた先、水門から数百メートル離れた場所でフリースベルグはフリングホルニから出渠すると、大西洋の広い海原には自分たちを出迎えるように友軍艦艇が多数待機していた。

先頭に立つ事が多かったせいか後方からこうやって見てみると、少ないだの劣勢だの言いながら味方はこんなに居たんだなと改めて感じさせられた。

もともと米海軍はカリブ海を越えたこの先のキューバ沖で、北東に針路を取り大西洋艦隊と合流を図るためイギリスを目指す近衛艦隊とはそこで惜別となってしまう。

周囲に敵の姿は今のところ見当たらない。

米海軍大西洋艦隊所属の偵察機からの情報では、バーゼル率いる残存艦隊はカリブ海を北西へと抜けて行ったとの事だ。

帝国が地中海に覇を唱え始めた今、おそらくその最前線基地であるドイツのキール軍港へと向かったのだらうというのが近衛艦隊参謀部の読みだった。

しかし当然油断は禁物であって、艦隊の外周には常に駆逐艦などの小型艦が哨戒のため周回していた。

「各区、異常ないかチェックを報告せよ」

「ソーナー、異常なし」

「CIC、SPYレーダーおよび水平レーダー、ならびに全武装正常に作動可能」

「よし。方位0-2-0、機関前進半速」

艦は増速して二十ノット強のスピードで海洋を往く。

本当はもう少し新しく入れ替えた機器のチェックや全兵装の正常作動を目視で確認しておきたかったが、今回は敵とは違うある事に追われていた。

今からちょうど丸一日後にはイギリスの大西洋方面艦隊、通称バミューダ艦隊とキューバを抜けたカリブ海の外、つまり大西洋上で合流する事になっている。

米艦隊と別れた後に少数の近衛艦隊だけで海を渡るのは心細いだろうという事で、かの伝統ある海洋帝国が好意で一個艦隊を差し向けてくれるそうだ。

イギリスはウイルクアとも数えきれないくらいの交流がある国だけに、これまでお世話になっていた米艦隊より増して頼もしく思えた。だがいかに友好国とはいえど、いつ敵が襲ってくるかも分からない海域にずっとバミューダ艦隊を留まらせるワケにも行かないため、航行の遅延は望ましくないという参謀部の判断だ。

出渠前、中には戦闘艦だけにいざという時の信頼性が重要だと主張するクルーもいた。

しかしカイトとしては修理をしてくれたフリングホル二の技官達の腕を信頼している事もあって、最低限のチェックだけ済ませるといふ参謀部の意見には賛成の立場であった。

その事を説明すれば彼らを宥めるのにも大した時間は要らなかった。

出渠から一時間と少し経った頃には、フリースベルグを先頭とする艦隊陣形が構築された。

これまで通りのポジジョンにフリースベルグはつき、カイトはこれで本当にあるべき場所に帰ってきたような気がした。

もともと長官が乗艦しておらず、未だに旗艦はシエルドハーフェンという先の戦いからの臨時対応のままだ。

おかげでこれまではカイトの後ろで聞こえていた長官の指示は、無線を通じてシエルドハーフェンから送られてくる。

『艦橋、CIC。定時報告。現在、対空、対水上、対水中目標無し。リーダーおよびソナー、共にクリーン』

「了解した」  
ステルスという例外を除けば、どうやら半径数百キロ以内に敵は居ないようだ。

カイトの推測ではパナマから離脱したバーゼル提督の敵艦隊が待機していると考えていたため、彼らは水門を出てすぐに戦闘という事も覚悟していた。

しかし艦橋外の監視要員の報告では望遠鏡でも周囲に敵艦が視認できないうらしく、どうやら本当に敵は居ないようだ。

「艦長、周囲に敵性艦隊および敵性航空部隊共に見当たりません」

「そう・・・だな。俺の考えすぎか・・・？」

「え？」

「いや、何でもない。副長、警戒態勢を解除、半舷にて休息を取るようにと総員に通達。私も休む」

「了解です」

カイトへと敬礼を向けるリナに軽く頷き、彼は艦橋すぐ後方の艦長室へと向かう。

上着を脱いで無造作に椅子にかけ、そしてカイトはベッドに横になる。

ここ最近ずっと緊張状態が続いており、気が休まったのは本当に久々だったりする。

おかげで睡魔に襲われてほんの数分で、彼は寝息を立てていた。

それから一体何時間は経っただろうか・・・

真っ暗の艦長室の中、突然耳に飛び込んできた爆音がカイトを思わず跳び起きさせた。

まるで雷鳴のような轟音・・・これはジェット機か!?

舷窓から見える景色は黒一色で、辺りは既に夜間の闇に支配されていた。

最初のジェット機の轟音から遅れる事十秒ほど、今度は艦長室の内線が鳴り、暗いのでカイトは手探りで受話機を掴んだ。

「何事だ?」

「艦長、今すぐ艦橋へ来てください!」

緊迫したりナの声聞くのはもうこれで何度目か・・・。

とにかく、これでまた気が抜けない状態にこの身が置かれる事は明白だった。

椅子にかけていた筈の軍服の上着を掴むと、艦長室を飛び出しながらそれをはおる。

その時、また何かが聞こえ始めた。

その音はだんだんと大きくなり、カイトはそれが数機のヘリローターの音だと言うのが分かった。

開きかけていた艦橋の防水扉を開くと、集まっていたクルーが皆でカイトを緊張の面持ちで見つめた。

「何があったんだ?」

「艦長、イギリス海軍バミューダ艦隊からSOS信号をキャッチ、僚艦ブローズグ・ホーヴィから戦闘攻撃機数機と救助ヘリ二機がスクランブル発進しました」

「なんだと、しまった・・・奴らの狙いは我々ではなく、そっちだ

「たか！」

これでカイトはようやくカリブ海に敵の姿が無い本当の理由に気付いた。

「・・・それで、救助ヘリが行ったということは、既にイギリス海軍に被害が出たのか？」

「はい。SOSと同時に発せられた入電によると、バミューダ艦隊旗艦インフレキシブル級戦艦三番艦インデストラクティブルの他、三隻の巡洋艦が雷撃により航行不能に陥っている模様です」

「雷撃だと・・・雷撃での航行不能なら、おそらくもう長くはもつまい。バーゼル提督旗下に、まだ強力な水雷艦隊がいたのか・・・？」

バミューダ艦隊は全く予期できなかった奇襲を受けたのだろうか・・・確かにバミューダ艦隊がいたであろう海域は島陰が多く、レーダーの索敵能力は下がる。

しかしそうだとしても、バミューダ艦隊の錬度の高さは世界でも有数の物だ。そう一方的かつ簡単にやられる筈が無い・・・ましてや、あんな愚かな指揮しか出来なかった提督旗下の艦隊に劣る筈が無い！もう一つ、確かパナマを脱出した艦隊は提督の旗艦も含めて数隻だった筈だ。

百歩、いや千歩譲って仮にバーゼル提督が奇襲に成功したとしよう。だとしてもそんなに戦況を覆せるような戦力が残っていたとは到底思えない。

（可能性があるとしたら、帝国本土からの増援が彼の旗下に入ったという事か・・・？）

それならばカリブ海の外、大西洋には大艦隊が潜んでいると言う事になる。

「我が艦隊にも危険が迫る可能性は十分考えられる・・・総員警戒態勢」

「了解しました！ 総員、警戒態勢！」

戦闘態勢への移行を告げる大音量のアラームが艦内の全てに響き渡

り、クルーがあちこちを忙しく駆け回る。  
カイトも艦橋右の艦長席に座り、艦の指揮を執るための準備を始めた。

艦橋やその他の区画と同様に、CICもまた戦闘態勢へと移行する。

レーダー画面や火器管制のコンソールを操作するクルーの表情が、また一段と緊張に染まる。

「総員に告ぐ……」

その時カイトの声が全艦放送を通じてCICにも流れてきた。

「先程、合流予定の英国海軍バミューダ艦隊から敵襲撃の一報を受けた。外洋に強力な敵艦隊が待ち伏せしている可能性が高い、対水上ならびに対空警戒を厳となせ」

（対空警戒？ 敵に航空戦力があるということは、空母か！？）

カイトの放送を聞いてバンは敵艦隊に空母があることを推測し、水上索敵のレーダースクリーンに目を向ける。

「大型艦の反応は無いか？」

「いえ、ありません」

「島陰になっっているかもしれない。とにかく、敵戦力の発見に全力を尽くせ」

レーダー索敵要員に声をかけバンはふとCICの大型スクリーンに目を向ける。

水色の画面上には友軍では無い存在を現す赤い表示は、今のところない。

あるのは、外洋へと飛んでいく友軍航空部隊を示すマークだけだった。

バミューダ艦隊の予想位置を前もって知らせられていた信哉達は、そこが敵の待ち構える空域かもしれないと分かっていたながら、構わずその空域へ進入して行った。

発艦してからあと十分で一時間経とうとしていた時だった。

「この付近だ。しかし・・・」

「バミューダ艦隊はどこだ？」

この海域に居る筈のバミューダ艦隊の姿が見えない。

月も新月となり本当に真つ暗な海なので視認する事は難しいが、リーダーにさえまったく映らないのだ。

無線の応答は三十分前に途絶え、いくら呼びだしても応答が無い。

『まさか・・・いや、でも』

『そうとしか考えられん・・・バミューダ艦隊は、全滅した』

恐れていた事態を告げる言葉が、震えるような声でクレイン4から発せられた。

『馬鹿を言つなよクレイン4。十数隻の艦隊がたった30分で壊滅するなんて、そんなことあるわけないだろう！』

『じゃあバミューダ艦隊は何処に行つたつていうんだクレイン3？』

ネバーランドにでも行つて、今頃フック船長の海賊船と海戦中か、ええ？』

常軌を逸した状況に、パイロット達の頭まで混乱し始める。

とりあえず、バミューダ艦隊の姿が見えないという旨を本隊に伝え、彼らはしばしその空域にとどまる。

それからしばらくし、遅れて到着した救助ヘリ部隊とともに周辺捜索を行っていた時だ。

夜の黒い海面の一角に、オレンジ色の明りが見えた。

ヘリがそこへ接近して確認すると、その明りはどうやら炎のようだった。

乗組員が間近で見て確認しようとした時、開け放ったドアから流れしてきた潮風に異質な臭いが混ざっていた。

「・・・オイル（＝重油）の臭いだ。それもまだ燃える前の」

鼻にムワツと来る独特の臭いを感じ、乗組員は探索用のフラッシュライトで海面を照らした。

その瞬間、彼らは思わず息をのんだ。

「おい、どうした？」

後ろの乗組員達の異常に機長も気づき、彼らに声をかけた。

だが彼らの中にそれにこたえようとする者は居なかった。というより、出来なかった。

「どうしたんだ？ 一体何があつたんだ！？」

その時、ようやく一人がその質問に答えた。

「・・・とても、言えません。 こんなの、あんまりです・・・」  
絶望的な光景を凝視して思わず首を振る隊員。

彼らの眼下には、黒い重油にまみれた無数の人間の遺体が浮かんでいた。

死屍累々とはまさにこの事だ。

辺り一面に沈没艦から流れ出たであろう重油が広がり、

しかしこの状況下で、たった一隻生き延びていた艦があつた。

その艦は今、全身黒っぽい色の艦体を海底に一部埋めていた。

「艦長」

赤い赤色灯が彩っている指令区画にて、ソナースクリーンを眺める貧相な男に低い声で声をかける士官が入ってきた。

「全区画、異常はありません。着底時の衝撃も、大したこと無かつたようです」

このイギリス海軍初の実用的原潜、フィニステレ級一番艦フィニステレの副長、レオン・ハルバート大尉がそう告げた。

それに対して振り返った男、このフィニステレの艦長レジック・アーマルド中佐は思わずニヤける。

「そういう報告が来ると思ってたぜ。 いつも言ってるんだろ？ 女のケツつてのはものすごくソフトなんだ。 艦だって同じだ、ケツ（艦尾）からタッチすれば大丈夫さ。 お前も彼女を作つて、さつさと・・・」

「・・・では仕事があるのでこれで失礼します」

まるで呆れたような顔でそう告げると、副長のレオンは艦後部の方

へと踵を返して姿を消した。

「あの野郎、女の話をするといつもコレだ。あいつは女に興味が無いのか？」

「アンタがありすぎるだけじゃないのか？」

自分より幾つも階級が下のクルーの一人がタメ口でレジックに噛みついた。

「なんだって？ 変態じゃない、俺は普通だ」

普通ならタメ口に一喝するべきなのだろうが、レジックはそれに構わず軽く受け流す。

「はいはい、そうですかつと・・・ところで艦長、さっきから変な音が聞こえるんですがね？」

「どんな音だ？」

「バタバタと・・・これはへりかな？ 時折、ジェット機のような音も聞こえます」

それを聞いてレジックは自分の腕時計を見てその音の正体を推測する。

「最初の打電から3時間半つてところか・・・だとしたら、近衛艦隊からの助け船かな？」

「かもしれない。しかし確証は・・・」

「まあとりあえず、潜望鏡深度まで上げてくれ。それで判断するさ」

そう言うとレジックはそれまでの悪ふざけでもする子供のような表情から一変、軍帽をかぶり直し深海の男の顔へと変わった。

最初の一報が届いたのは、東側の水平線の向こうが徐々に白み始めたところだった。

駆け寄ったりナガ、フィニステレに接近した友軍へりからの入電内容を記したメモをカイトへと渡す。

その内容を見た時、カイトは悲惨な状況に思わず頭を抱えた。バミューダ艦隊は壊滅・・・生き残りは一隻のみという有様。おまけに海上には無数の英海軍士官の遺体が浮かんでいるという。

「もう少し早く気づいていれば・・・」

「いえ、艦長は悪くありません！ それより、その続きを・・・！」  
リナに諭されてカイトは再び紙面を読み、記してあった内容に戦慄を覚えた。

「巨大な潜水艦により攻撃を受けた！？ まさか！！」

「ええ、そうです。おそらく、我々がガラパゴスで戦った相手です！」

「馬鹿な・・・あの超兵器巨大潜水艦がキューバ沖に？ くっ、ダメージは浅かったというわけか！」

カイトは思わず毒づくが、いくつかの疑問は残る。

あの時刺し違いのような覚悟で叩きこんだアスロツクは、そんなに浅い傷ではなかったはずという事。

それともう一つあの巨体がとてもパナマ運河を通過できるはずもなく、だとしたら南米を迂回してきたのかとも思うが、それにしても早すぎる。

しかしそれでもどうやらバミューダ艦隊を葬ったらしい敵の姿がある程度までは特定できた。

「総員、対潜戦闘用意！ ソナー、艦橋、ガラパゴスで戦闘した超兵器潜水艦の音紋やノイズデータを元に、周囲を可能な限りくまなく探せ」

『ソ、ソナー了解、です』

ガラパゴスで接敵した超兵器潜水艦がまた来ていると知ったソナーの声が慌てていた。

緊張の余りだろう。仕方ない、これまでの海戦でも緊張の瞬間はあった。

しかし中でも超兵器という未知の兵器を対峙する時には、“緊張”の一言では表せないなんとも言い難い難い空気が艦内に漂う。

例えて言うならば生きるか死ぬか・・・決闘の瞬間に互いの間に漂う空気だろうか。

もちろん超兵器以外との海戦でも死ぬ可能性だって当然ある。ところが何故だろうか・・・あの超兵器と対峙した時には、露骨に自分の死という物を感じさせられた。

『・・・おい、コレ!』  
音響の探索から三十分ほどした時だ、ソナーの一人が何かを発見した。

必死に指さすソナースクリーンには、ガラパゴスで戦った時の超兵器潜水艦と類似するノイズ波形が表れていた。

その場にいた数人が、指さししていたクルーに向けて頷いた。間違いないコレだ、と。

『艦橋、ソナー! ノイズを発見しました!』

それを聞いてカイトはやはり来たかと覚悟を決めマイクを握った。

「良くやった! 場所はどこだ?」

『まだ正確な位置はつかめていませんが・・・方位0-6-3、本艦との距離はおよそ100マイルから150マイルと推定。尚も接近中です!』

だとしたらフレースベルグから結構近いなとカイトは思った。

「やはりあの時の?」

「バミューダ艦隊との合流予定海域、それからガラパゴス沖での超兵器潜水艦の速度を考えても、可能性は高いですね」

「よし、近衛本隊は一時米艦隊とともに北西に離脱するよう進言してみよう。それから、超兵器迎撃の臨時戦隊の編成も忘れるな」  
記憶だと確か、バミューダ艦隊には高機動の艦は配備されていないかった。

おそらくあの超兵器潜水艦は、大艦隊を圧倒的な雷撃能力で撃滅す

るといふコンセプトで開発された超兵器だろう。  
それならば、こっちには付け入る隙は一つしかない。

鈍重なシェルドハーフェン級や機動力の劣る艦は敵の雷撃範囲から撤退させ、高機動の数隻で戦闘を行う事。

「了解しました」

リナは敬礼を向けるとすぐさま通信の為に奥へ引つ込む。

「すると、バミューダ艦隊はその超兵器に？」

心配そうに見つめるナギやブラウン博士を横目に、シュルツはフレースベルグからの通信を受け取る。

『その可能性が高い。 そうすると高機動な艦が迎撃にはうってつけだ。 ウンディーネ、来てくれるか？』

「もちろんだ。 このままでは本隊が被害に遭う。 我々が盾となつてそれを防がねばならない」

シュルツがカイトへそう受け答えしていた時だった。 博士が艦橋の計器盤に何かを発見した。

「艦長、こちらのソナーにも異常反応です！」

「いよいよお出ましか。 総員、対潜戦闘準備！ 各砲座、魚雷を本隊へ向かわせるな！」

シュルツは艦内にいよいよ戦闘態勢に突入すると言つ旨を告げ、艦長席に座つた。

シュルツの艦“ウンディーネ”と更には“きんぼう”も加えて、合計三隻の臨時戦隊を編成しようとしていた時だ。

ノイズが混じりだしたレーダー上に、はっきりと大きな光点が表示された。

水上の大きな反応、島陰から突出し隊列を組んでゆつくりと、しかし確実に迫ってくる。

『こちらCIC！ レーダーに水上の反応、数7、うち3つが戦艦

クラスの大型の反応！』

「間違いない、それはバーゼル提督の艦隊だ！」

虎の威を駆るキツネというか・・・パナマで受けた屈辱を晴らすためか、まっすぐに此方の方へと向かってくる。

「艦長！ 超兵器だけならまだしも、同時に戦艦隊を相手にするのは不利です！」

「分かっている！ だが、本隊を呼びもどせばそれこそ大惨事だ！ 必死に訴えるリナをカイトは落ち着かせるが、それでも彼女の言う事は正しい。」

雷撃だけならまだしも砲撃まで加われば回避行動は複雑化する。

もし以前のような洗練された雷撃ならば、それだけの回避行動で手一杯になりそうだ。

雷撃を避ければ砲撃に当たり、砲撃を避ければ雷撃に当たるという場合も考えられた。

どうすればいいか・・・しかしもう時間が無い！ 敵超兵器はもうすぐそこまで来ている！

『おいおい、誰かを忘れちゃないか？』

その時艦橋のスピーカーから流れてきた声。

同時に真上を轟音を轟かせて数機の戦闘機や対潜装備を備えたヘリがフライパスしていった。

『俺たちの存在を忘れないでくれ。 シェルドハーフェン対潜ヘリ部隊、ホエールハウンドが助太刀する！』

その光景を見て、カイトら艦橋のクルーは心強い味方の出現に一樣に安堵を浮かべた。

「艦長！ 敵超兵器潜水艦、アスロツクの射程に捉えました！」

「よし、行くぞ！ アスロツク発射！ 各艦散開、武運を祈る！」

艦尾から白い航跡を描く三艦、それが三又の矛のように別れる。バシユウウツとフレーズベルグが放ったアスロツクが、ロケットの猛火から出る白線の弧を青空に描いた。

「アクティブソナー検知、魚雷来ます！」

三隻は海神ポセイドンの三叉矛“トライデント”として今、迫りくる海の怪物へと戦いを挑む。

## 第二十七話 白鯨再び！？（後書き）

短めですが、このあたりでひとくくり。

もちろん、この話の最終話はアレと戦うまでですが・・・  
もう30話近いのに未だにパナマです（笑）

最終話って、一体第何話になるんでしょうか・・・？  
自分でも分からなくなってきました（え

次回

第二十八話「海神の審判」

|||||

ご意見・ご感想等をお待ちしています。

あ、今回から絵の方もご意見やご感想を頂ければ幸いです。

まあ、もともと大したことない画力なんで多大な期待はされぬよう、  
また超辛口コメントはお控え願いたいです（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2293g/>

---

鋼鉄の咆哮～海原の大鷲～

2010年10月13日04時56分発行